

SD

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第399号 1997年12月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

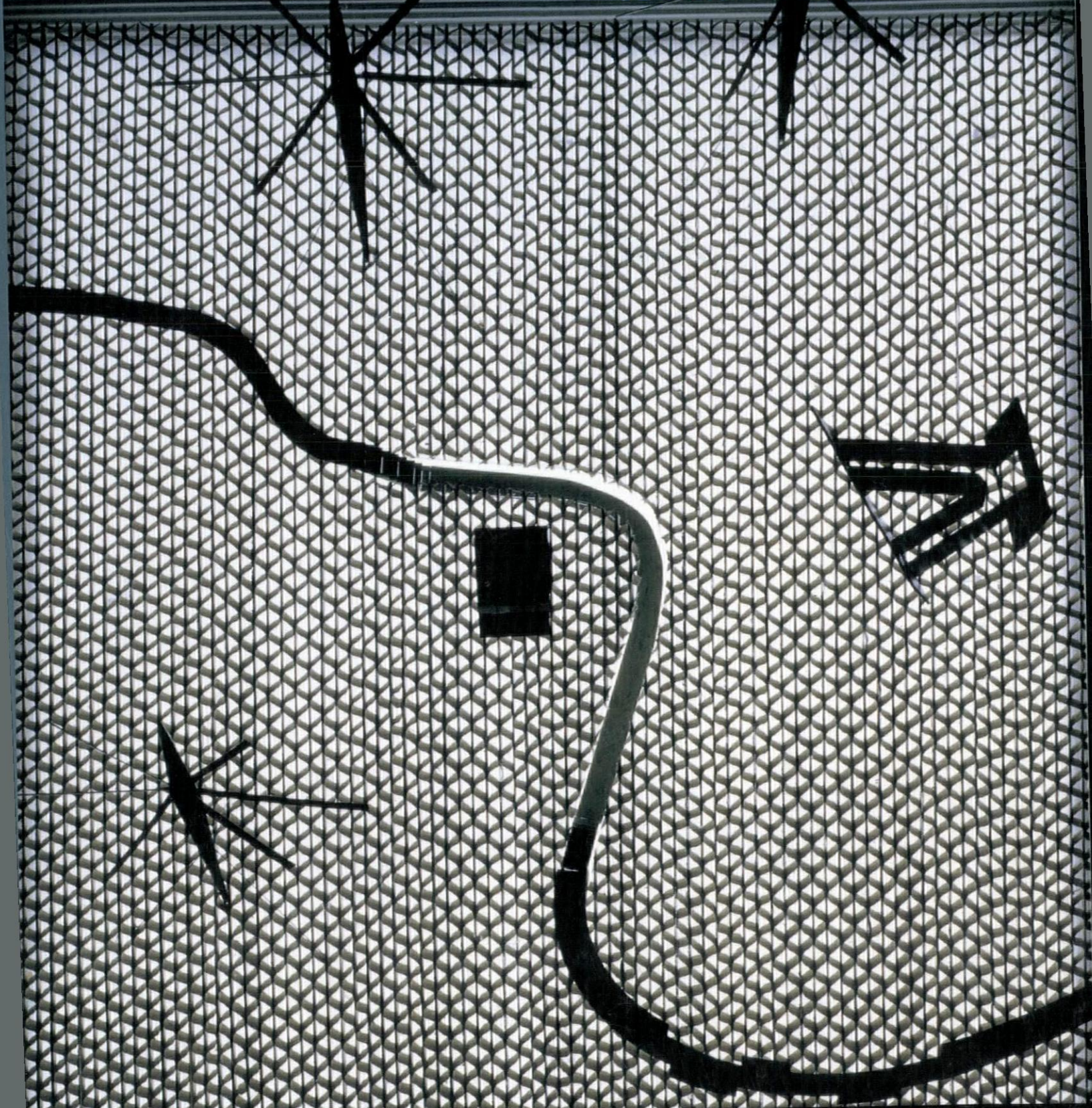
9712 | space
Design

SDレビュー1997

SD Review 1997

光と色彩の空間

チェコのガラス・アーティスト



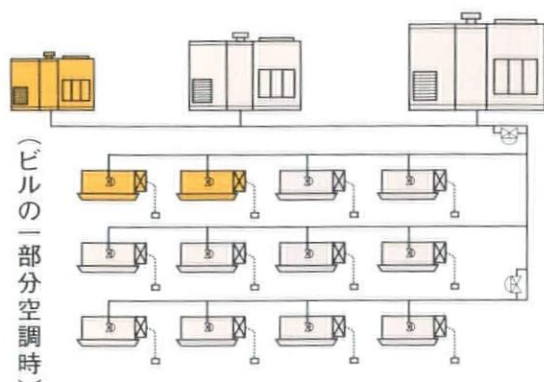
Monthly Journal of Art and Architecture

あつ
もつた
ない。



ひと部屋だけの空調に
全てのアロエースが
稼働するのは

必要な台数しか稼働しません。



矢崎のスーパーアロエース、アロエース・タフはともに高効率COP1.02。この高効率をいかに発揮するのが異容量アロエースの組み合わせによる集中設置です。デジタルコントロールパネル【DCP】のご利用により部分空調時には小さな「アロエース」が運転。建物全体を空調すれば自動的に全ての「アロエース」が運転、経済性の優れた空調が実現。

20%負荷運転でもCOP1.02を維持。



デジタルコントロール
パネル



スーパーアロエース



アロエース・タフ

矢崎総業株式会社

本社：〒108 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル17F TEL.03-3455-8812
空調機器事業部：〒435 静岡県浜松市子安町1370 TEL.053-461-5112

札幌支社	TEL.011-852-2914	名古屋支社	TEL.052-833-8415	中国支社	TEL.0829-23-2115
仙台支社	TEL.022-284-9115	大阪支社	TEL.06-458-4825	四国支社	TEL.0878-33-3336
東京支社	TEL.03-3298-3140	北陸支社	TEL.0764-41-6516	九州支社	TEL.092-411-4835

1日24時間、
いつでもおしりを
ささえてくれる。



福祉機器コンテスト'96
「優秀賞」受賞

便座が動いて、座ったり立ったりを
やさしくサポート。

「簡易昇降便座」新発売。

お年寄りや足腰の弱い人にとっては、座ったり立ったりする
動作がいちばんツライ。せめてトイレくらいはツライ思いを
しなくてすむようにできないか。TOTOのそんな発想が、
電動で便座を斜め方向に上下させて、座ったり立ったりを
やさしく手助けする「簡易昇降便座」をつくりました。

※お問い合わせは、TOTOレブリス推進部フリーダイヤル
0120-54-1210まで。(10:00~17:00 土日・祝日を除く)

◎ご家庭にも手軽に導入できる新価格。

EWC120 本体価格78,000円(税別)

※便座用接続品が必要です。※ウォシュレット、便器等は含みません。

TOTO
簡易昇降便座



新しい視点で、高齢社会の快適を考える、レブリス商品群

REVLIS

カタログご希望の方は、〒154 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TOTO広告宣伝部「昇降便座」係まで住所・氏名・電話番号を記入のうえご請求ください。

National/Panasonic

AV&C FLAPS

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム

COMPUTER
コンピュータシステム

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR & AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

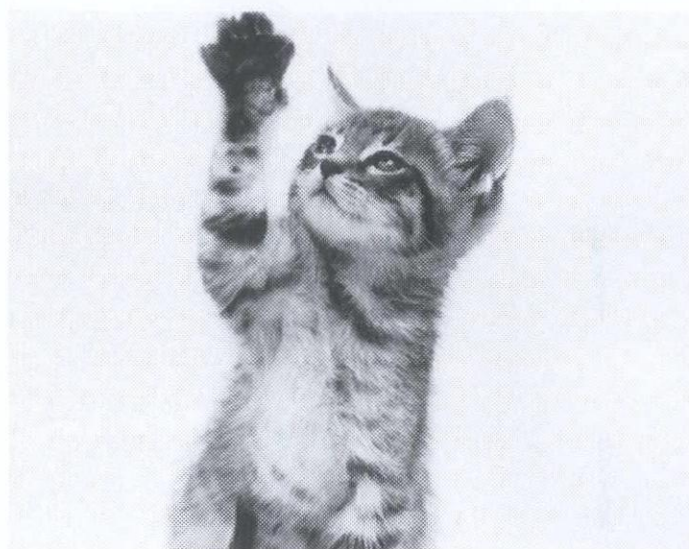
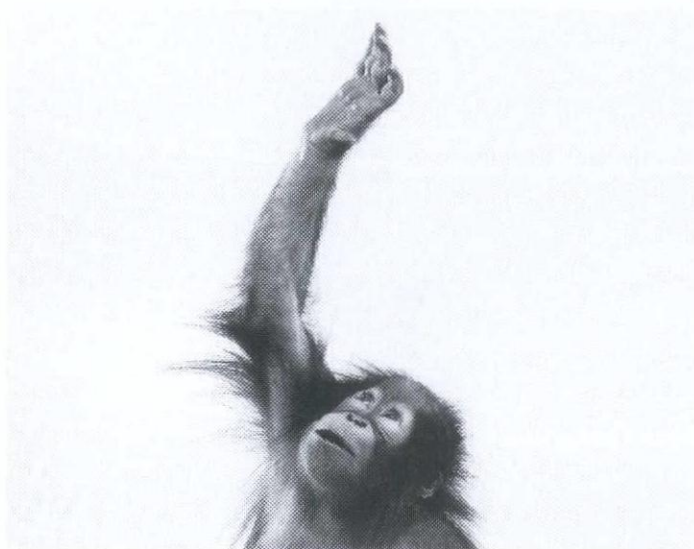
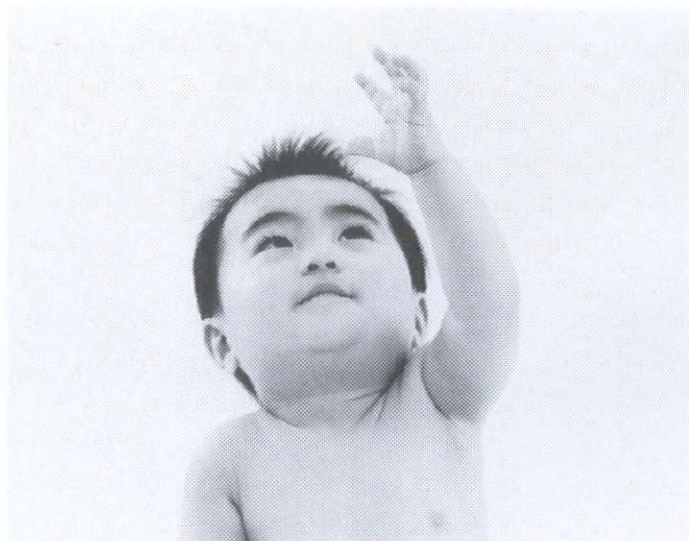
SOFTWARE &
SYSTEM
ソフトウェア・
システム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5500-7504
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926



大切なのは、 何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TNet 03(4431)2111

広告についてのお問合せの際は＜SDを見て＞と御明記願います

SとLを兼ねたMです。



大きなアリーナ。いいですねえ。夢がありますよね。世界大会、大コンサート、何万人もの観衆、沸き上がる歓声…。大空間はやっぱり建築の醍醐味です。でも、最近、空間の巨大さが気になることが、ときどきあるんですね。というのは、大きな空間になればなるほど、「本来の目的」以外の使い方が、必ず増えてくることははっきりしてきたからなんです。（プロ野球の本拠地になっているところさえ、ほかの目的で利用される回数の方が圧倒的に多いそうです。）ところが、いままでのやり方だと、たとえばアリーナ全面を使う必要のない場合でも、無理して全面使ってしまったら、あるいは仮設スタンドを入れても、実は天井から跳ね返ってくる音のことを我慢していたり。人が気持ち良く過ごすことを目指した場所で、結果としてまずその気持ち良さが犠牲にされている。おかしいことだと思いませんか。

長野に世界一のスピードスケートリンクをつくろう、ということになったときは、だから、大イベントだけでなく、他の目的で空間を小さく使うこともほんとに真剣に考えたらどうなるか、初めてやってみたいと思ったわけです。全世界に向け、日本をアピールできる大空間であることと、その後何十年も何百年にも渡り、少しでも多くの地元の方に気持ち良く使っていただけることの両立…。いわば、ほんとの意味で「大は小を兼ねる」といったところでしょうか。

この建物の愛称『M wave（エムウェーブ）』の由来になっている、ドームとは逆に真ん中の下がった「木造吊り屋根構造」は、そんなわけで、「前代未聞の形」とか「日本らしさ」とかそういうこと以上に、アリーナの大きさをいろいろ変えても、気持ちいい空間規模をつくれることが狙いなんです。スタンドだけでなく、照明も音響も含めた全体を可変式にしたのも同じ意図です。その結果、アメフトとママさんバレーが、一流の大コンサートと一流の小コンサートが、じっさい両方できるようになりました。（もちろん、この空間、空調がしやすいので氷の状態がベストに保てるし、木だと結露しにくいのでリンクに露がたれてこないし…と、世界一のスピードスケート競技を実現するたくさんのメリットが集約されているのは、いうまでもありません。ご心配なく。）

ところで、いろいろな仕事で、このようにいろいろな疑問にぶつかり、答えを探していくうち、わたしたちは、こんな考えを持つようになりました。「技術やスケールだけで建築を語る時代は、そろそろ終わりにしよう」。どんなにすごい建物でも、できただけでは、まだ未完成。これからの建築は、そこで人間が様々なドラマを繰り広げて、初めて完成したというべきなんじゃないかな。そう思うんです。

以上、わたしたち鹿島は、そんな視点で、新しい仕事に取り組んでいることを、ここにご報告いたします。

ある日、
その発想に
人は集まる。

in 鹿島

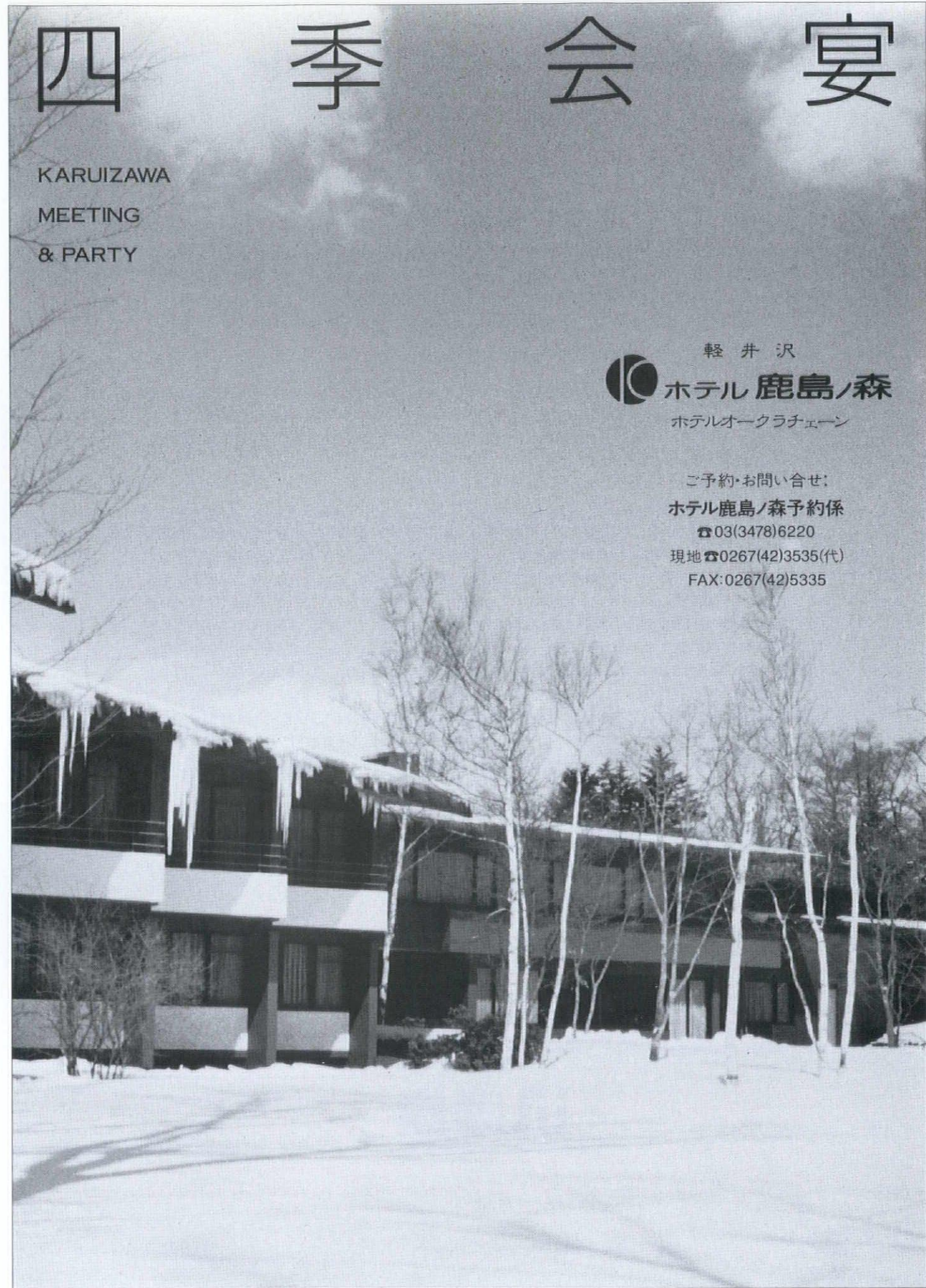
〒107東京都港区元赤坂1-2-7 tel.03-3404-3311（代表）
<http://www.kajima.co.jp>

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY

軽井沢
 **ホテル 鹿島ノ森**
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ：
ホテル 鹿島ノ森 予約係
☎ 03(3478)6220
現地 ☎ 0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335





Classical Elegance in Tokyo

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩足を踏み込めば、あなたの新しい物語がはじまります。

モダンを楽しみ、ヨーロッパを憩う 東京都現代美術館宿泊プラン

■期間 1998年3月31日まで

※ただし12月28日～1月4日を除く※美術館の休館日は、毎週月曜日（祝日の場合は翌日）となっております。

ホテルから東京都現代美術館へ、徒歩10分。現代美術をゆったりと楽しみホテルで優雅に憩う、そんな心の贅沢を十分に満喫できるプランです。

お一人様料金

1室1名様利用（シングル）	¥16,500
1室2名様利用（ツイン）	¥13,000
1室3名様利用（トリプル）	¥11,500

※一泊朝食付・美術館入場券（常設展）・お土産・サービス料込み、税別。



株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3 TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興夢科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。

〒107 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL03-5474-6054 FAX03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

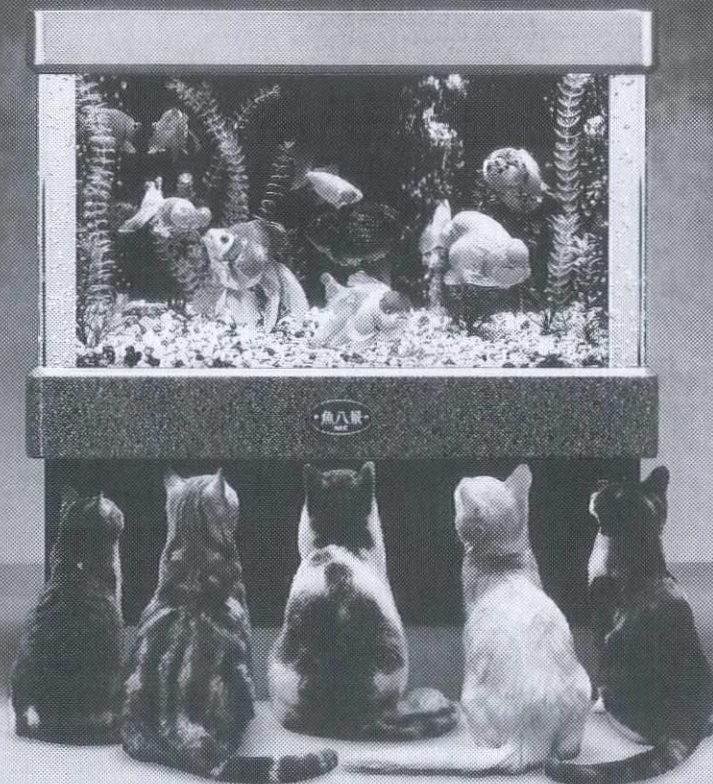
大興物産株式会社

本社 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本社 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
 東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
 横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
 名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
 大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
 東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
 関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
 北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-6248
 広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
 九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
 シンガポール
 オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714



その美しさ、本物。
ハイビジョンモニターの中を泳ぐ、実物大の魚たち。
うるこの二枚二枚までリアルな美しさを、「魚八景」が実現します。

ホテル、病院、店舗、レストラン、ショールーム…

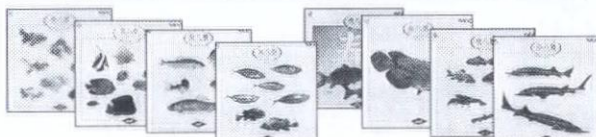
NECのバーチャル水槽「魚八景」は、

人々の集う空間にくつろぎを演出します。

- LDを挿入するだけで、魚たちが、32インチのハイビジョンモニターの中を泳ぎます。
- エサも水の取り替えも不要。メンテナンスフリーで、いつまでも清潔で美しいままです。
- 自動リピート、オートON/OFFなど、便利なタイマー設定機能で面倒な操作がありません。
- 映像の合間には、カラー静止画のお知らせ画面を、販促や情報の告知にご活用ください。

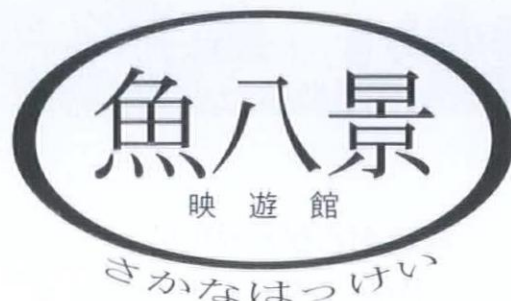
(オブション)

魚八景なら、32種類の魚たちが、楽しめる！
ハイビジョンソフトを豊富にラインアップ。



- | | | | | | | |
|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|
| ●金魚1 | ●海水魚5 | ●海水魚10 | ●川魚1 | ●海の幸3 | ●熱帯魚1 | ●小川3 |
| ●金魚2 | ●海水魚6 | ●海水魚11 | ●川魚2 | ●海の幸4 | ●熱帯魚2 | ●湖沼1 |
| ●海水魚1 | ●海水魚7 | ●海水魚12 | ●川魚3 | ●海の幸5 | ●熱帯魚3 | |
| ●海水魚2 | ●海水魚8 | ●海水魚13 | ●川魚7 | ●寿1紅白 | ●小川1 | |
| ●海水魚3 | ●海水魚9 | ●海水魚14 | ●海の幸2 | ●寿2金銀 | ●小川2 | 全32種類 |

リースで「魚八景」を月々 39,600円(税別)(60ヵ月リースの場合)から





快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、 豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事 ■ 外線工事

東光電気工事株式会社

本社 〒101 東京都千代田区西神田1-4-5 TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

繊細な色柄とソフトな質感で 空間をやさしく彩る、 ビニル床シートです。

学校や病院、公共施設などのパブリックスペースでは、よりソフトで温もりの感じられる空間づくりが求められています。こうしたトレンドにお応えし、ロンシールでは幅広い用途で活躍する汎用性の高いビニル床材として、ロンリウムナチュラルを開発。雲柄をベースに数種のチップを散りばめたソフトなデザインが、空間にやさしい表情を与えます。また重歩行にも耐える耐久性も備えながら、価格を抑えることによってコストパフォーマンスも追求したビニル床シートです。



ビニル床シート

ロンリウム ナチュラル

用途

学校・幼稚園等文教施設、病院・養護老人ホーム等 医療福祉施設、庁舎等公共施設の一般室・廊下・通路・階段、レストラン・喫茶店・デパート・ショッピングセンター・オフィスなどのロビー・エレベーターホール・湯沸室など。

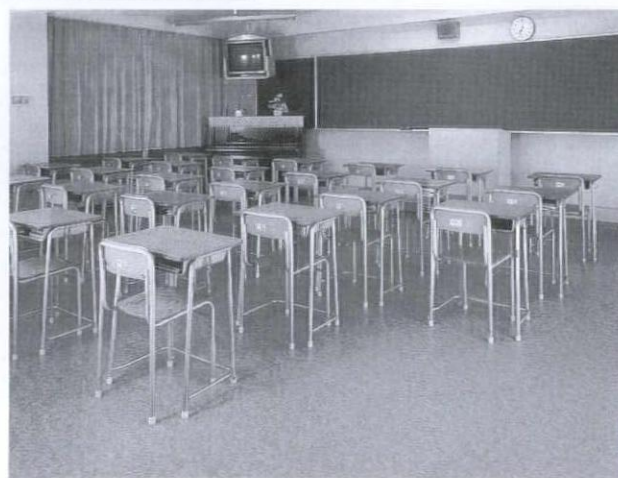
規格

- 12色
 - 2.0mm(2.5mm)厚さ×1820mm 幅×9m長さ
- ※受注生産品



特長

- 雲柄に加え、微細な繊維状・粒状など数種のチップが深みのあるデザインと温もりを醸しだしています。また、ピーチを思わせるソフトでやさしい質感を備えています。カラーは12色。さまざまな空間イメージにお応えできる多彩なラインアップです。
- 歩行時のショックをやわらげる適度な柔軟性・弾力性、さらには適度な防滑性を備えているため、快適な歩行感が得られます。
- 継ぎ目はスーパーシームシーラーによる液溶着ですから接合部が目立たず、一枚フロアのような美しい仕上がりで、かつ十分な強度を実現しています。また、下地によくなじむうえにカットिंगも軽く、細部の施工が容易です。
- 重歩行に耐える、すぐれた耐久性を備えていますから、仕上がり時の美しさを保ちます。
- 酸、アルカリ、アルコール類、塩類などへの耐薬品性にすぐれています。
- 一体化した床面をつくることのできるため、汚れが取れやすく日常のメンテナンスが容易です。



ときめきの生活空間をサイエンスする

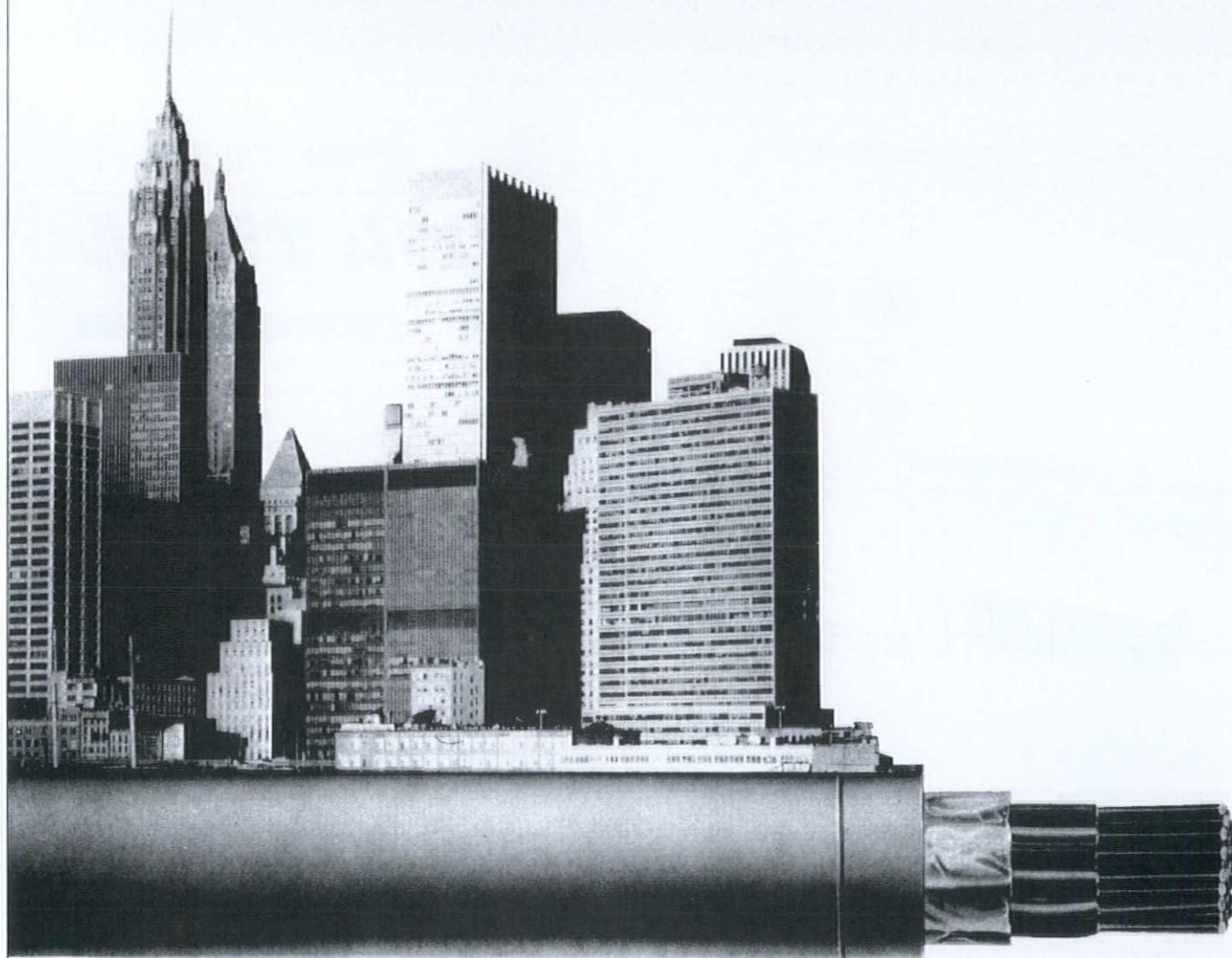
ロンシール工業株式会社

●本社/〒130 東京都墨田区緑4-15-3 ☎03(5600)1821
●大阪支店/〒532 大阪府淀川区西中島3-9-13 大北ビル ☎06(304)2700

営業所

札幌 ☎011(271)0411	大宮 ☎048(664)1511	静岡 ☎054(251)3712	広島 ☎082(211)2700
盛岡 ☎019(624)6925	土浦 ☎0298(32)8813	名古屋 ☎052(935)7063	高松 ☎0878(31)4177
仙台 ☎022(265)4771	千葉 ☎043(246)5851	金沢 ☎076(292)1161	福岡 ☎092(472)5857
新潟 ☎025(243)3791	横浜 ☎045(662)7370	岡山 ☎086(231)6011	鹿児島 ☎099(258)6571

ビルにも神経があります。



古いビルも最新のビルも確実な電気工事で支えています

ビルにとって電気系統の働きは、人体にはりめぐらされた神経の働きに似ています。外部の情報を収集したり、整理して送るなど、まさにコントローラーの役目をもっているからです。とくにこれからの高層ビルは、複雑な建築技術が必要なだけに、ビルの中核神経といわれる電気系統の安全性、合理性、経済性などは、ビルがより良く機能するうえで欠かすことのできない条件です。私ども弘電社は1本の配線にも、細心の注意を払って確実な設計、施工を行なっています。

電気工事のバイオニア

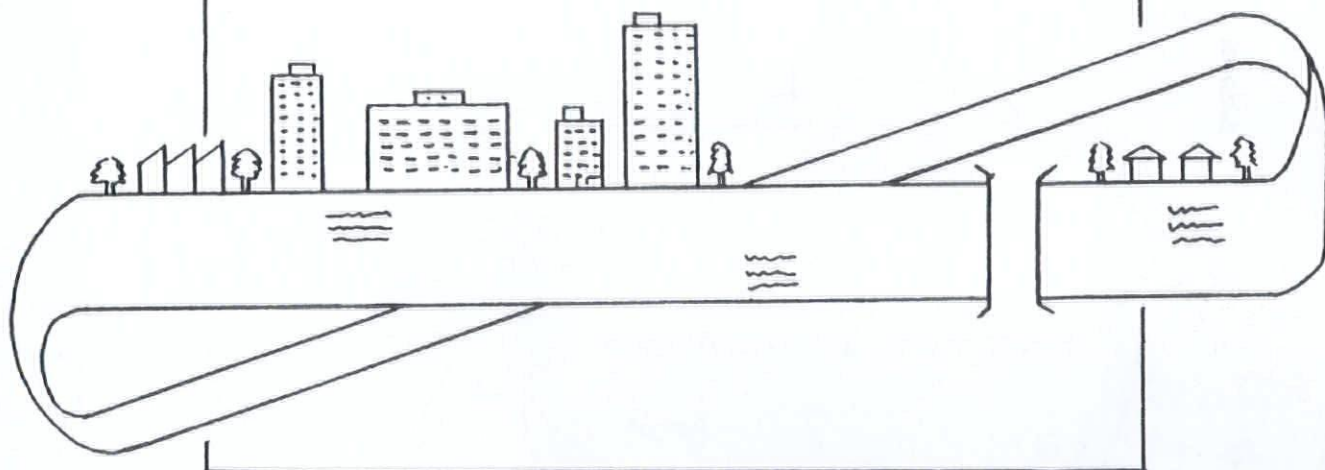


株式会社 弘電社

取締役社長 浅野 俊郎
〒104東京都中央区銀座5-11-10
TEL.03(3542)5111

水環境を

クリエイトする



株式会社
西原
衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18
TEL.(03) 3452-7441 大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋

人や光を感じて 明るさをコントロールする 省エネ照明。

National 松下電工

照明器具とセンサ・制御システムを一体化し、器具単独で明るさコントロール。だから、約44%も省エネ。

※セルフコントロールAN

(明るさセンサ・熱線センサ付連続調光タイプ)と当社従来器具(フリーF426CY)との比較の場合

明るさセンサ

- 初期光出力の調整による省エネ:約15%
- 外光利用による省エネ:約10%

熱線センサ

- 不在時調光による省エネ:約15%
(当社シミュレーション条件による比較)



HfフリーコンフォートOA CLASS II Hf蛍光灯32W2灯
フリーF4257HDY 標準価格71,500円(税・工事別)

熱線センサ

人の動きを検知します。
※照明のON・OFFは手動で行います。

明るさセンサ

外光などの明るさに応じて調光。しかも初期照度を補正するので、使い始めから快適な設定照度に保ちます。

人がいなくなると自動的に照度を下げます。

ナショナル **Hf** セルフコントロール照明器具

●お問い合わせは、
〒571 大阪府門真市門真1048
松下電工・電機マーケティング部 TEL.06(908)1131へ。

A&I
快適を科学します



いろいろな技術を結んで、トータルに考える。
トータル エンジニアリング

先端技術で、システムする。
TOENEC

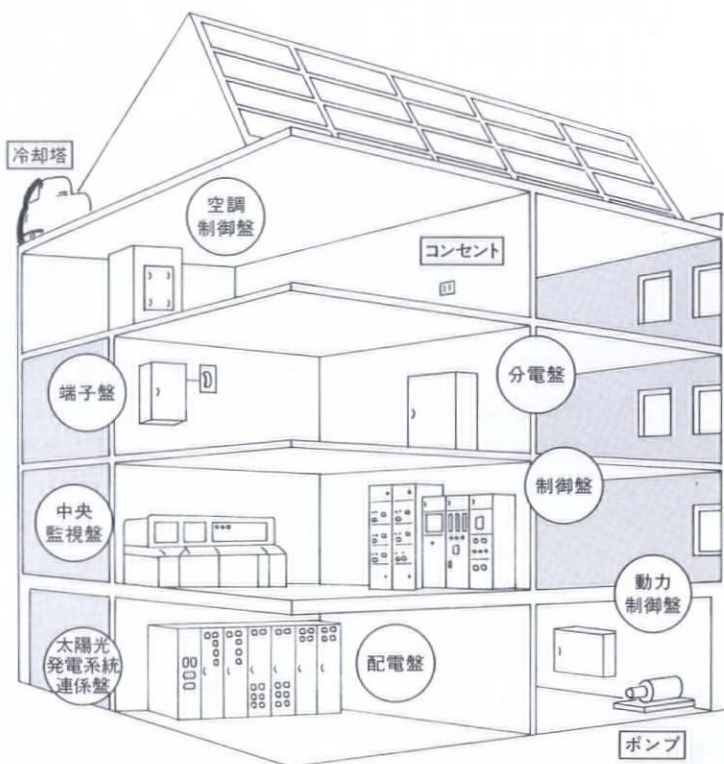
株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎(052)221-1111
東京本部/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170 ☎(03)5395-7111
大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532 ☎(06)305-2181

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

見えない電気を交通整理 それは**盤**



川崎電気株式会社

- 本社／山形県南陽市小岩沢225
- 東京本社／東京都港区芝浦3-7-4

夢×技=無限大

YUME  TRONICS

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が交会う時
私たちのフィールドは
無限大です。

何時もあなたの街で、
お会いしている
クリハラ。
私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。



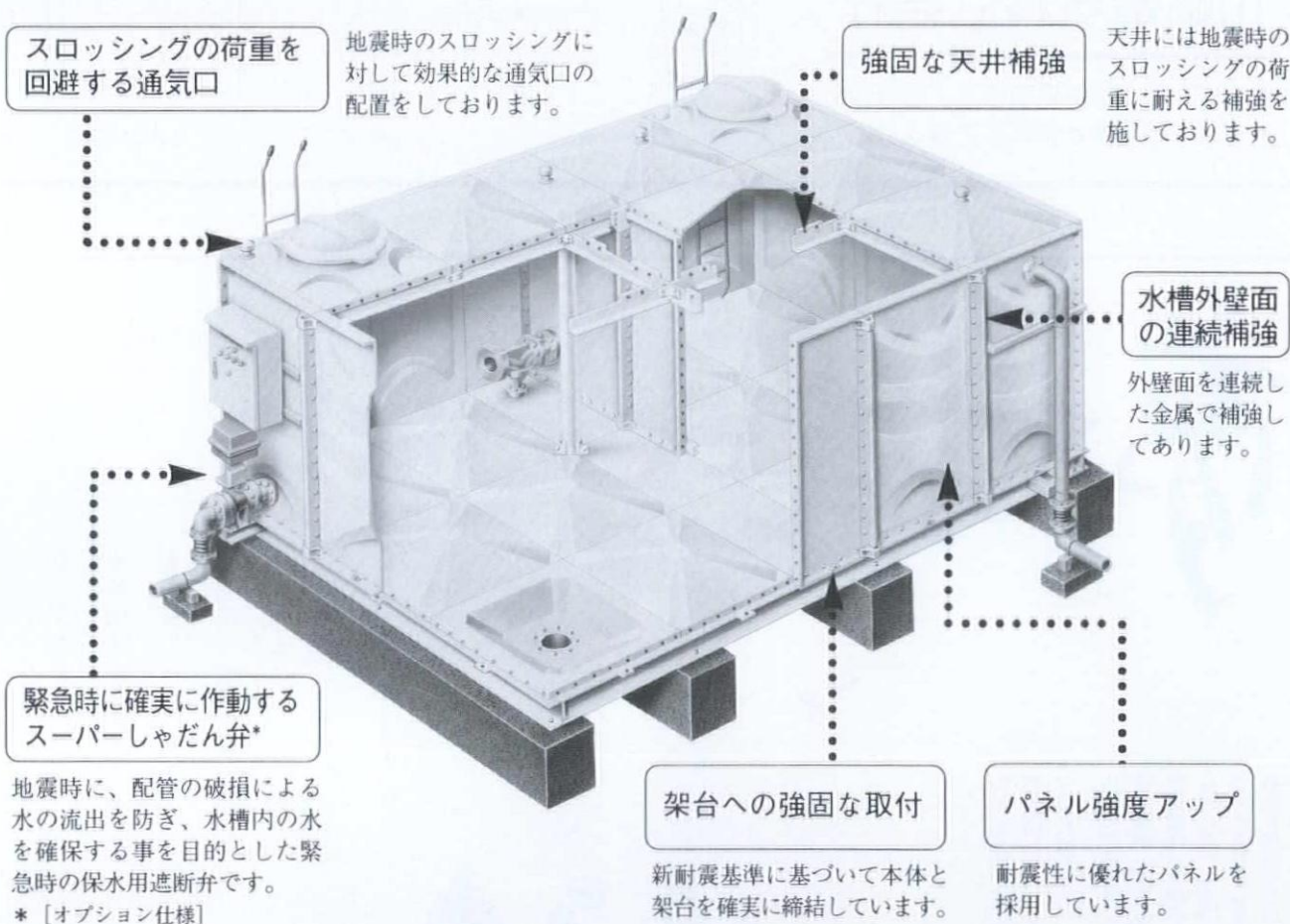
創業1919 あなたの街でお会いしています

K 栗原工業株式会社

本社／〒530 大阪市北区角田町1-1 (東阪急ビル) TEL.06 (313) 1101
東京本店／〒105 東京都港区芝大門1-4-8 (浜松町清和ビル) TEL.03 (3432) 1901

新・耐震基準 優れた耐震性でひとつ上をいく 安心をお届けします。

ブリヂストンパネル水槽は、衛生性、保温性、配管仕様、止水性といった独自の技術により高い評価を頂いております。そして、この度、求められる耐震基準に適合させ、緊急時には水槽内の水確保のために作動する緊急遮断弁も品揃えさせる等、皆様により安心してお使いいただける商品として生まれ変わりました。



スーパーウォータータンクH型 1.0G/1.5G/2.0G

ス ロ ッ シ ン グ 対 策 適 合 品

株式会社ブリヂストン 建築用品販売部 東京都中央区日本橋3-5-15同和ビル 〒103 TEL. (03) 5202-6864 FAX (03) 5202-6869

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2111(代)
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/kajima_mail/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円(特別定価号十消費税、送料込み)

SDバックナンバー常備店
[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
[大阪]
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167
[札幌]
旭屋書店 011-241-3007
[横浜]
有隣堂本店 045-261-1231
[京都]
大龍堂書店 075-231-3036
[大学生協内書店]
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学理
工学部 関東学院大学

9512 SDレビュー1995

1988円

第14回SDレビュー誌上発表。由田徳十岡本美樹、季謙男、トム・ヘネガン+アーキテクチャ・ファクトリー [Villa Romana: ローマのヴィラと庭園] [水戸岡鋭治のトランスポート・デザイン]

9601 都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践

2854円

地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ネットワーク、白石メディア・ポリス。

9602 建築のメモリア：イタリアの合理主義の流れ

1988円

イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネステローリ、フランコ・ステラ、他。

9603 ベトナム建築大博覧

2548円

ベトナムの都市と建築：ハノイ、フエ、ホイアン、チャンパ遺跡、ホーチミン。ベトナムの工業団地、ベトナム現代建築事情、他。文＝重枝豊、中沢信一郎、村松伸、他。

9604 大地と光の変様 オーストラリア建築1788-1988円

1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。[ネクストジェネレーション in New York: スミス=ミラー+ホーキンソンとジョエル・サンダース]

9605 多様性と調和の建築 ゲルカン+マルクの最新作

1988円

コンペの委作で知られる大規模設計事務所の'90年代の新作を紹介。[海と建築——鈴木二の最新作] 物質試行：佐木島プロジェクト、佐木島の住宅

9606 建築家の椅子111脚

3059円

19世紀後半から現在に至るまでの建築家がデザインした椅子を111脚紹介。C.R.マッキントッシュ、A. ガウディ、O. ワグナー、ル・コルビュジエ、M.van D.ロエ、C. イームズ、A. ロッシ、他。

9607 再考 建築家土浦亀城

1988円

戦前、戦後の作品を紹介しながら、昭和初期モダニズムにおける土浦の再評価を試みる。作品：土浦邸(第1、2) [スタジオ建築計画の集住者] 最新作 FH-HOYA-IIを取りあげながら彼らの設計思想を紹介

9608 マイケル・ホブキンス

2447円

「構造上の表現がクリアな」主要作品を紹介。ホブキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、ブラックマン・ハウス、他 [光と空間の夢を訪ねて：ドナルド・ジャッドとウォルター・デ・マリア] 文＝南條史生

9609 デンマーク・モダンハウスの最盛期

1988円

デンマークの50-60年代の住宅を紹介。キンゴール・ハウス、ヨーン・ウツソン、他 [山上の都市と塔の家——イエメン：都市と住居の形態学] 文＋写真＝芦川研究室

9610 中世の光と空間

1988円

フランス中南部のロマネスク建築を紹介。ル・トロネ修道院、他。写真＝堀内広治、文＝羽生修二、他 [ふたつの都市考(近代都市と芸術展)〈未来都市の考古学展〉] [97の椅子プロジェクト]

9611 栗生明

2548円

彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎美術館、植村直己冒険館、カーニバル・ショーケース、他。[田窪泰治のサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト3]



9612

SDレビュー1996

第15回SDレビュー誌上発表。ユスト・ビザール+ペーター・ルゲ(Pysall Ruge Architekten)、高橋昌巳(シテイ環境建築設計)、城戸崎和佐建築設計事務所 [伊丹潤の近作より：石彩の教会、木の教会、土の教会]

1988円

9701

葉祥栄：カリステニクス

柔らかい建築のための12の柔軟体操

キーワード「柔軟体操」をもとに12のカテゴリーに分けて、全主要作品を紹介。老人保健施設サンダイヤル、他。

3059円

9702

木を生かした架構と空間

木の性質を生かした国内外の25例を紹介。全山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝山口清、今川憲英 [アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議より] アジアの都市・建築の現在、未来を問う。

1988円

9703

ミニマル・スペース・アーキテクチャ

ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ボーソン、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他 [東京国際フォーラム] 写真＝堀内広治

1988円

9704

拡張するデジタル・デザイン

コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を造り出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂英史、マイケル・ベネディクト、藤嶋正樹、久保田晃弘、坂村健、奥出直人、両角光男、他

3059円

9705 アフラトピア・スカルハと「ベネトン」

アフラトピア・スカルハによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文＋インタビュー＋写真＝豊田博之 [都市ピサとカルマッシの仕事] カーサ・ムーティ、ヴェルディ劇場修復計画など

2000円



9706

柳澤孝彦：劇場の空間構成

新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三 対談＝川向正人×柳澤孝彦 [装飾を排したフォルムデザイン——スウェーデンのグッドデザイン展より]

2000円

9707

加速都市・香港

「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクングラフィックス、浅川敏、江頭慎、他 監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光 文＝松田直則

2000円

9708

R.ヴェンチュリ+D.スコット・ブラウン：90年代の仕事

日本での処女作(メルバルク日光露降)を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他 [岐阜県営北方住宅プロジェクト] 談＝磯崎新

2400円

9709

駅空間の新曲面

コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文＝宮林敬幸、賀庭孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司 写真＝大野繁

2000円

9710

ガラス建築

光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川憲英、他

3000円

9711

隈研吾

ポストモダン以降の建築における言説を続ける隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。慰霊公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝横文彦×隈研吾

2800円



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



高松 伸

高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキンブラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、延ぎ込まれた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。建築I、III、他。

3800円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館 (TEPIA) というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタポリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンベスまで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に掲載した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城文庫点の家、アトリウム、他。

4300円



磯崎新③ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れて分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井昇一

孤高の建築家・白井昇一の珠玉の作品集。懐賢館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、辰野山寮、虚白庵、他。論文=磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井昇一。座談=大江宏+藤井正一郎+宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを所帯した表現主義の風。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



磯崎新④ 1985-1991 part 2

part 1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム・ディズニー・ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、バラディアム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文=荒保宏、宇佐美圭司、他。

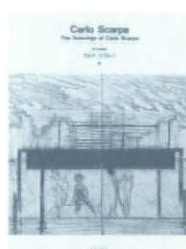
4000円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲美 X 安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

プリオン家墓地进行を始める主要作品のドローイング約150点を収める。プリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



横文彦②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品=熱海の家、ボスボラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



安藤忠雄③アンビル・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビル作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトI II、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で育まれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

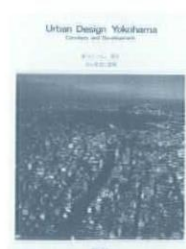
3914円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高橋秀爾、ボザール—その歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレンコの形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面に向けて、横文彦×表原敬×小澤恵一、他。

5000円

5 特集 SDレビュー1997		6 審査員総評＝ 香山壽夫 渡辺邦夫 岸 和郎 園 紀彦	52 クールとホット 木村博昭	53 講評	56 経過報告	編集長：相川幸二 編集スタッフ： 寺田真理子 高木伸哉 大野由美 飯塚りえ 高森和志 制作協力：久世 健 助使河原馨／guild アドバイザー：伊藤公文 発行人：平田翰那 編集人：長谷川愛子
10 金井謙介+西田勇人 法事の家		12 今村雅樹+佐久間菜穂子／今村雅樹アーキテクツ T-H (奈良の家)		15 東日本旅客鉄道株式会社+JRE設計+ 鈴木エドワード建築設計事務所 さいたま新都心駅 (仮称)		
18 佐藤孝秋／フォレストシップ 台北市迪化街歴史地区のまちづくりデザイン		20 タカマスヨシコ 考えごとの家		23 建築研究室高安重一事務所+佐久間達也+橋爪宏直+ 重富博之 海上ばなな (UNAKAMI BANANA)		
26 浅野 静／エトスアソシエイツ+ 新井清一／アライアーキテクツ 徳島の家 (林邸)		28 藤本杜介 D-HOSPITAL		31 松本 明 I・HOUSE		
34 大野 勝+境 静也+鈴岩 崇／佐藤総合計画 佐賀県立宇宙科学館 (仮称)		37 金子泰洋 M邸		40 松澤 稔 衛の家		
43 川入洋志 Triplet		46 西沢立衛 ウィークエンドハウス		48 三浦明彦+安田幸一+神成 健+北川啓一／日建設計 ポーラ箱根美術館		
57 光と色彩の空間 チェコのガラスアーティスト		63 チェコのガラス芸術 水田順子	79 建築におけるガラス マリアン・カレル R=平野清美	80 空間とガラスの コラボレーション 鈴木崇英		印刷・製本： 凸版印刷株式会社 〒174 東京都板橋区 志村1丁目11番1号 電話： (03) 3968-5111 案内 取次店：トーハン・日販・ 大阪屋・大洋社・ 栗田出版販売・誠光堂・ 鈴木書店・西村書店・中央社 定価：2,000円 [本体1,905円] 年間直接購読料：26,000円 特別定価号+送料込み
表紙：海上ばなな／ 建築研究室高安重一事務所+ 佐久間達也+橋爪宏直+重富博之 表紙写真： 堀内広治／新写真工房 表紙デザイン：小泉均						
58 ヴァーツラフ・チグレル	64 スタニスラフ・リベンスキー& ヤロスラヴァ・プリフトヴァ	70 ヤロミール・リパーク	71 ギゼラ・シャボーコヴァ	76 ダナ・ザメチニコヴァ	77 マリアン・カレル	
83	隔月連載：(最終回) マックス・ベルクの〈世紀のホール〉の誕生とその背景／長谷川 章 ポーランドのアヴァンギャルド 5 表現者マックス・ベルクのインスピレーション／イエジ・イルコシュ				構成＝長谷川 章	
93	隔月連載：ネットワークの極意 その4。(最終回) 建物保存・活用のネットワーク					
97	連載：世界の現代美術館探訪——美術館は生まれ変わる 6. 情報と文化と工場の20年				太田泰人	
105	お知らせ					
105	新刊紹介					
106	書評					
109	ニュース 第5回ジャパン・アーツスカラシップ グランプリ作品発表展覧会				松永英伸	
110	ニュース KAS NET——京都建築大学ネットワークのシンポジウムとワークショップ				池上俊郎 新井清一	
112	ニュース 「風景」の溶解へ——モイセン・モスタファヴィ氏との対話をめぐって				花田和幸	
114	ニュース ゴリー・メモリアル・コンペ					
117	海外建築情報リミックス：12 Architects 12。(最終回) Mies van der Rohe					

5 Special Feature: SD Review 1997		6 Comments from the Screening Committee Hisao Kohyama Kunio Watanabe Waro Kishi Norihiko Dan	52 Cool and Hot Hiroaki Kimura	53 Comments on the Entries	56 SD review 1997 Progress Report
10 Kensuke Kanai+Hayato Nishida	12 Masaki Imamura+Nahoko Sakuma/ Imamura Masaki Architects		15 East Japan Rail way Company Tokyo Construction Office+JR East Design Corporation+ Edward Suzuki Associates Inc.		
18 Takaaki Sato/ Forest-ship Group	20 Yoshiko Takamasu		23 Shigekazu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+ Hirotsada Hashizume+Hiroyuki Shigetomi		
26 Shizuka Asano/Ethos Associates+ Kiyokazu Arai/Arai Architects	28 Sosuke Fujimoto		31 Akira Matsumoto		
34 Masaru Ohno+Shizuya Sakai+Takashi Hokoiva/ AXS Satow Inc.	37 Yasuhiro Kaneko		40 Minoru Matsuzawa		
43 Hiroshi Kawahito	46 Ryue Nishizawa		48 Akihiko Miura+Koichi Yasuda+Ken Kannari Keiichi Kitagawa/Nikken Sekkei Ltd.		
57 Spaces of Light and Color: Glass Artists of Czecho		63 The Glass Technology of Czecho Yoriko Mizuta	79 Glass in Architecture Marian Karel	80 Collaboration of Space and Glass Takahide Suzuki	
58 Vaclav Cigler	64 Stanislav Libensky & Jaroslava Brychtova	70 Jaromir Rybak	71 Gyzer Sabokova	76 Dana Zamecnikova	77 Marian Karel
83	Bimonthly series: The Birth and Background of Max Berg's "Century Hall"/A. Hasegawa Poland's Avant Garde 5 The Inspiration of Artist Max Berg/Jerzy Illkosz				Presentation by Akira Hasegawa
93	Bimonthly series: The Ultimate in Networking 4. Networking for Conservation and Reuse of Residential Building				
97	"Museums of the World" Series: The Museum Transforms 6. Information and Culture Factory for Twenty Years: Pompidou Center				Yasuto Ohta
105	Announcements				
105	Book Information				
106	Book Review				
109	News Fifth Japan Art Scholarship Prize Winning Works: Announcement and Exhibition				Eishin Matsunaga
110	News Kyoto Architecture School Net Work Symposiums and Workshops				Toshiro Ikegami Kiyokazu Arai
112	News Melting into the Landscape				Kazuyuki Hanada
114	News Goree Memorial Competition				
117	Eminent Works Abroad: 12 Architects 12. Mies van der Rohe				

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Meriko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Kaoru Tashigahara/guild
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Kanna Hirata
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan

TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
[http://www.kajima.co.jp/
kajima_mail/publish/
index.htm](http://www.kajima.co.jp/kajima_mail/publish/index.htm)

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page132

Cover: Unakami Banana/
Shigekazu Takayasu Archi/
Tatsuya Sakuma+
Hirotsada Hashizume+
Hiroyuki Shigetomi
Cover Photo: Koji Horiuchi
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

SD REVIEW 1997

特集

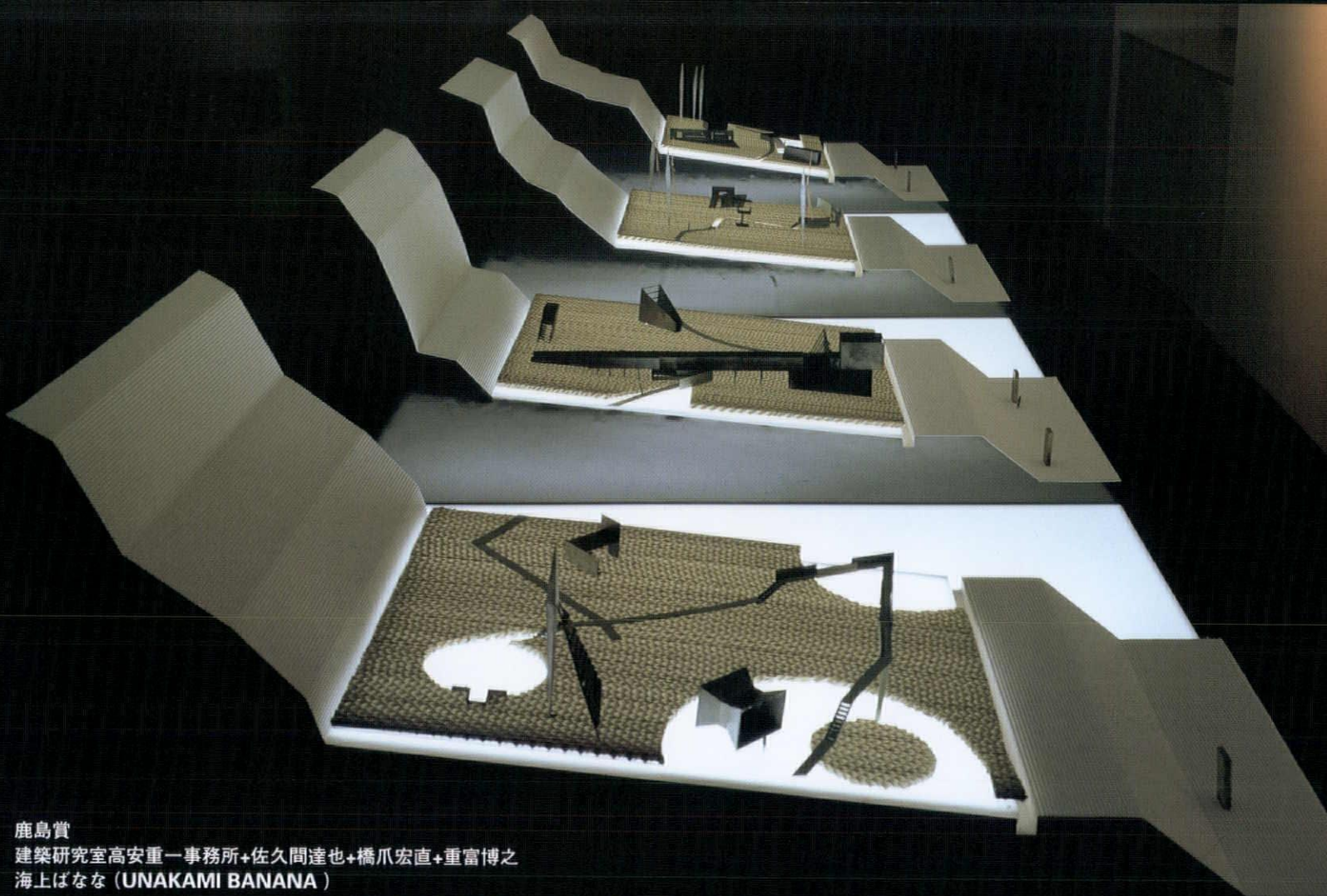
SDレビュー1997

第16回建築・環境・インテリアの
ドローイングと模型の入選展

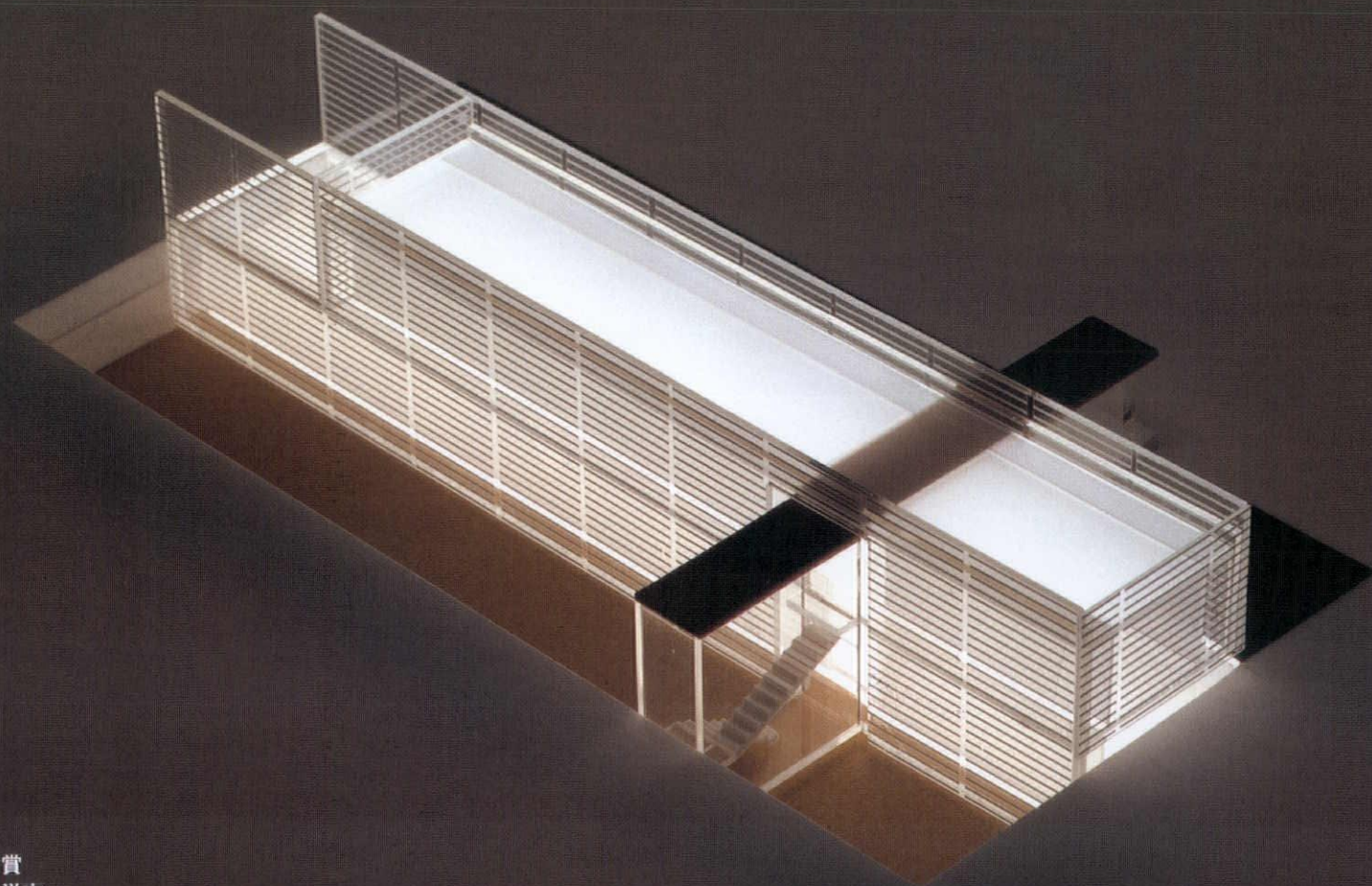
SD Review 1997

The 16th Exhibition of Winning Architectural Models
and Drawings





鹿島賞
建築研究室高安重一事務所+佐久間達也+橋爪宏直+重富博之
海上ばなな (UNAKAMI BANANA)



朝倉賞
川人洋志
Triplet

SDレビューの魅力はプロジェクトの規模や内容ではなく、ただそのプロジェクトが実現を前提としていることという、たったひとつの条件だけを満たしていることを求められている点にあります。それは全てのプロジェクトが同じ土俵の上に乗ることができる数少ない場でもあり、そこで問われているのはそれらのプロジェクトが実現された時に魅力的な空間となるであろう可能性を持っているのかどうか、という点でしょう。

ただ美術館や科学館といった大規模な建物からたったひとりで住まうことを想定して設計された住宅まで、あるいは、ランドスケープ・デザインや地域計画のような外部空間を対象としたプロジェクトから閉じた空間、ほとんどインテリア・デザインか家具のデザインに近いものまで、その計画内容の差異は大変なものがあります。はじめて審査する側に廻った私としては、それらのプロジェクトを同列に評価することの難しさをいやという程感じさせられました。しかも実現した姿を想像することも同時にやらなければならない訳ですから。しかしSDレビューという企画そのものの魅力が前述したように、全てのプロジェクトが同列に並び得るという点にある訳ですから、結果として審査員としての自分の建築に対する考え方や評価の尺度がここでは逆に問われているのだということに気付き、あせりや恥ずかしさに近い気持ちを感じたことも一度や二度ではありませんでした。

しかし同時に審査員をやらせていただいた喜びもありました。何故なら目の前にあるのはアイデア・コンペのエントリー案ではなく、全てが実現されるべく構想されているプロジェクトな訳ですから、我々は1997年の秋にいながら1998年や99年に立ち現れてくるはずの建築と対面している訳です。それはほとんど未来をのぞき見るに等しい快楽といえるでしょう。そんな視点から言うと、総じて小さなプロジェクトの方が興味深いものが多くありました。それはそうした小さなプロジェクトの方が社会や時代の変容に敏感に反応する類いの建築だということだけが理由なのではなく、むしろ逆に大規模なプロジェクトがリアリティを持ち得ない状況、そして時代に我々は現在居ることかもしれない。結果として入賞作品は住宅がふたつ、病院はひとつ、そして残りのひとつはランドスケープの計画という結果になったのも、そうした時代の気分の反映と言えるのではないのでしょうか。くり返しますが、審査全体を通じて印象的だったのは、このSDレビューは通常のコンペより以上に時代や状況を敏感に反映しているのではないか、という点でした。審査が終わった現在、タイムマシンに乗って近未来を体験し得たかのような気分なのですが、それはともよりも直さずSDレビューが実現を前提にした計画案だけに限定されているという、そのことに抱えるのだということを強く実感しています。

●きし・わろう／建築家、京都工芸繊維大学助教授

地図を見ていると砂漠の周辺の川がいくすじもの涸れ川（ワジ）に分かれて消失して、また再び、ひとつの川になってゆくような場面がありますが、まさにそういった保守本流のようなものが、必ずしもひとつに見定める事が困難な多様化した時代を反映したSD REVIEWではなかったかと思います。良くも悪くも保守本流なるものが、明確に存在する時代には、それを強力に推進したり、あるいは強力にそれに異議を唱えて、新しい流れを作り出したりする意志が感じられるものですが、そうしたものが明確でないだけに、すべてが等しくインディヴィデュアルに見えてしまっ、矛盾した言い方ですが、かえって多様化したというイメージすらも消失しつつあるかに見えます。

どの案が保守的でどの案が革新的であるかという問いかけ自体が、無意味になってしまうような状況が現れて来ているように思います。したがって審査そのものも、かなり難しいものになったように感じましたが、流れにたとえとすれば、その流れ方や流れて行く方向性に共感もてるものが選ばれる事になったように思います。保守的なものよりも、より革新的なもの、洗練度が足りないものよりは洗練されたもの、オリジナリティーの少ないものよりはオリジナルなものが、評価の対象になった事は、間違いのない事です。洗練度に関しては、特に第一次審査の過程で、比較的審査員の間に共通する認識があったように思われましたが、革新性とオリジナリティーについては、個々の作品からそれを読み取る事が大変困難であったように思いました。

オリジナリティーに関して言えば、例えば西沢立衛さんの案は、第一次審査で見たとたんすぐれた案であると確信しましたが、それと同時に、現代のひとつの重要な傾向を如実に示していたために、これが妹島和世さんか西沢さんの案でなければ、(幸いにもこれは西沢立衛さんの案でしたが……) それに対する追従者の案として、そのオリジナリティーに疑問を持たざるを得ませんでした。また、そういったデザインの出自の痕跡が見あたらない案、いわば、流れの源流のにおいを意図的に消去したかどうかは別として、それが感じられない計画にも、オリジナリティーの源泉となりうる可能性を秘めているという点で、例えば金井謙介+西田勇人さんの案と、金子泰洋さんの案などに期待を持っていました。

しかし、本来、オリジナルなものが生まれる時に、それほど無臭な状況を保てるものかどうかは大いに疑問で、とにかく、第一次審査はともかく、第二次審査までその確認を待とうという事になったわけです。いずれにしても、SDレビューは、つねに次の時代の流れの源流を見出すコンクールとして定着してきたわけですが、それを特定する事が一層困難な状況に入りつつあるという印象を持ちました。

●だん・のりひこ／建築家

法事の家

設計要請

- 01 既存の母屋が改築されるまで(未定)、法事やお盆の期間中使用するための仏事スペースと小宿泊施設の設計
- 02 第一期の主要スペースは仏間であるが、いずれは(母屋が改築されてからは)仏間に付随した宿泊スペースを主要スペースとして使用できること
- 03 置場所のない故人の遺品を収納する「棚」としての機能をなるべく有すること
- 04 限られた建築面積のなかでなるべく開放感のある間取りをとること
- 05 敷地を分断する川に架ける「橋」としての機能を有すること

設計要請に対するひとつの解答の提示

さらに近い将来この家において仏事が消失した後も故人の記憶をこの家に宿らせるための、逆説性を含んだ基本モジュールを設定する(仏壇の寸法4300×8600mmからとった基本モジュール4300×4300)。この基本モジュール4300×4300によって構成された「棚」のもと、あらゆる行為に付随する機能は等価に扱われる。

用途：専用住宅

所在地：群馬県北群馬郡子持村

主要構造：木造一部鉄骨造

主要仕上材：屋根＝ガルバニウム銅板、ABS樹脂板、フロストガラス、外壁＝杉板張りキシラデコール塗り、ポリカーボネード(単層・複層)、鉄、木製可動ルーバー、亜鉛メッキ可動ルーバー、内部＝杉板張りOSCL塗り、ポリカーボネード、エキスパンドメタル

敷地面積：865.2㎡

建築面積：64.26㎡

延床面積：74.61㎡

工事予定期間：1998年8月～1999年12月

金井謙介

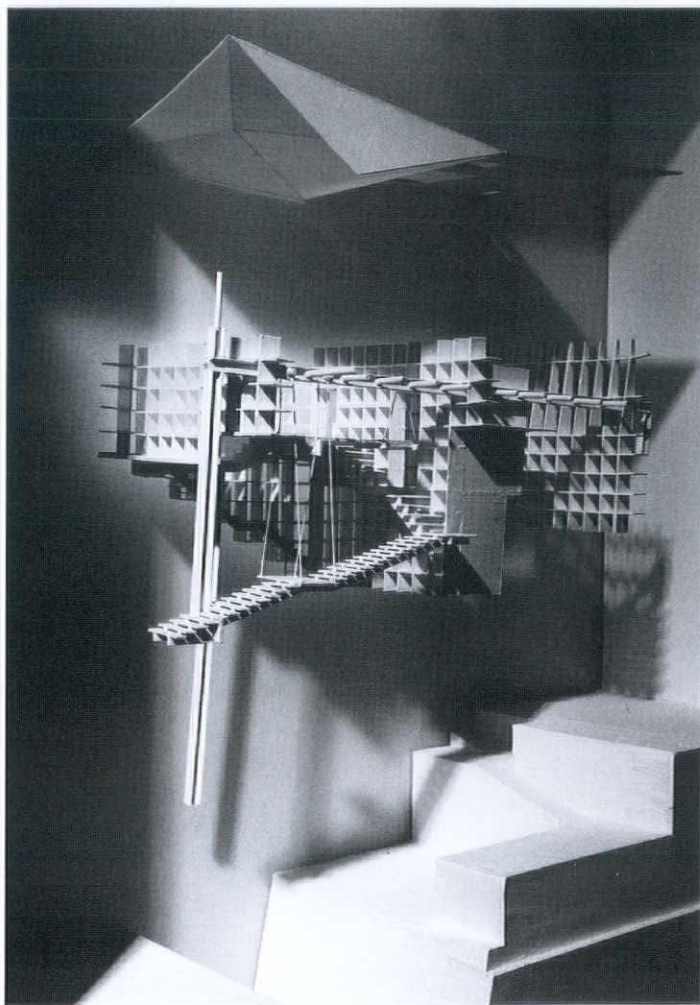
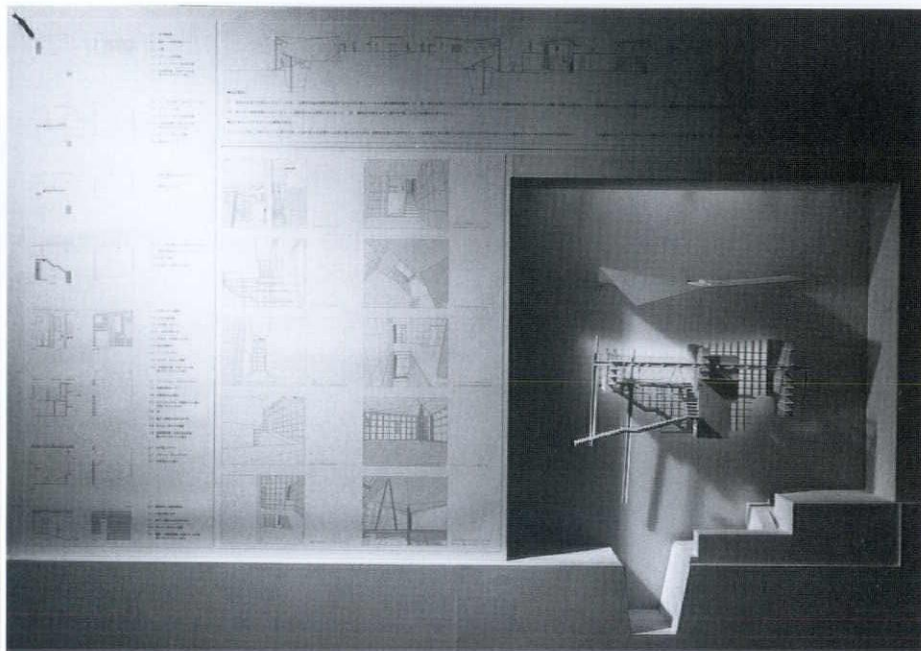
1973年 東京都生まれ

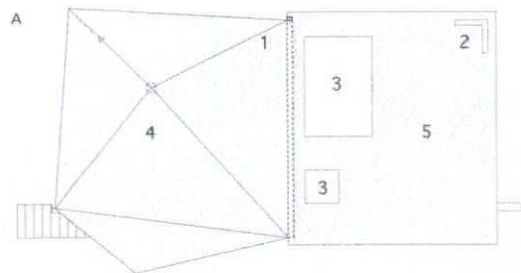
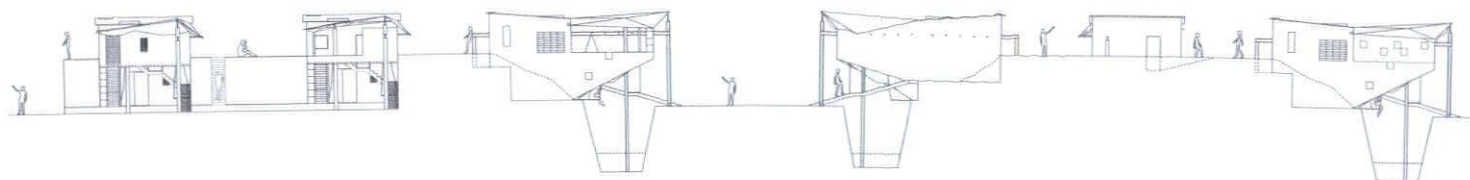
1997年 早稲田大学大学院古谷研究室修士2年在籍

西田勇人

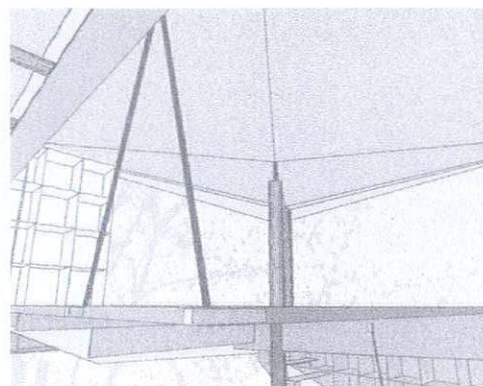
1970年 京都府生まれ

1997年 早稲田大学大学院古谷研究室修士2年在籍

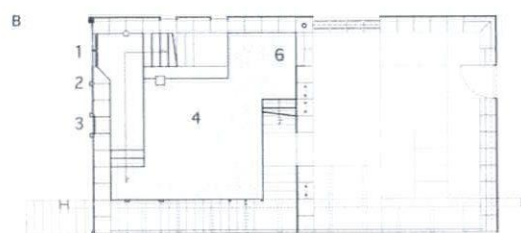




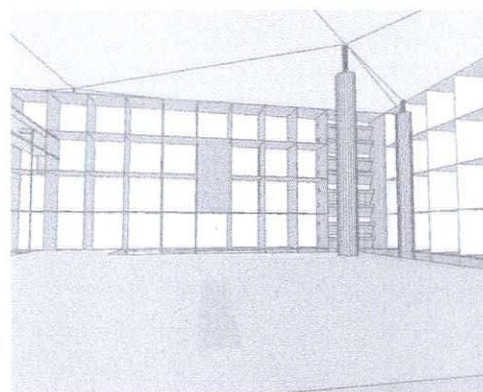
- A1: 雨樋
- A2: 端部押さえ構造鉄材
- A3: トップライト
- A4: 仏間屋根
- A5: function box 屋根



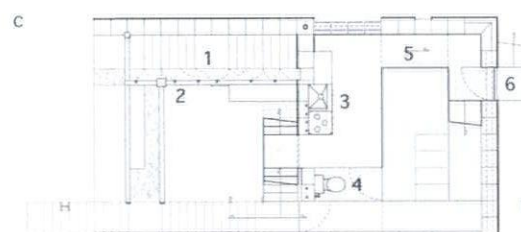
法事の機能が失われたとき仏壇を含んだ「櫃」は取り外される



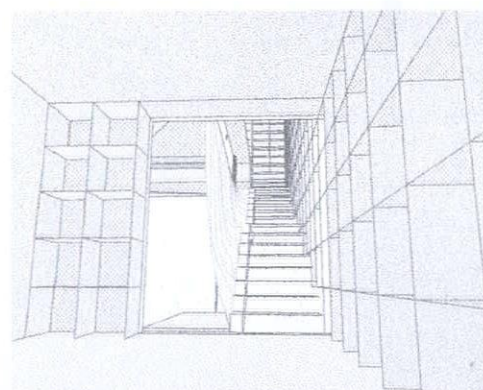
- B1: アルミ製可動ルーバー
- B2: 着脱式屋根防水シート押さえ
- B3: アルミ板
- B4: 仏間
- B5: 雨水用パイプ用
- B6: のぞき窓



光で目線以上に浮かび上がる仏壇の「櫃」



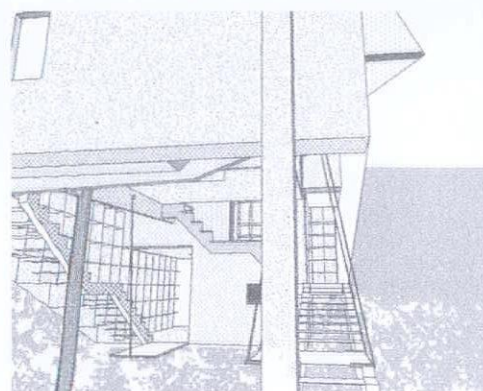
- C1: 着脱式ポリエステルカーテン
- C2: カーテンレール兼スラブ梁
- C3: キッチン
- C4: トイレボックス
- C5: プリッジ
- C6: 外部スロープ



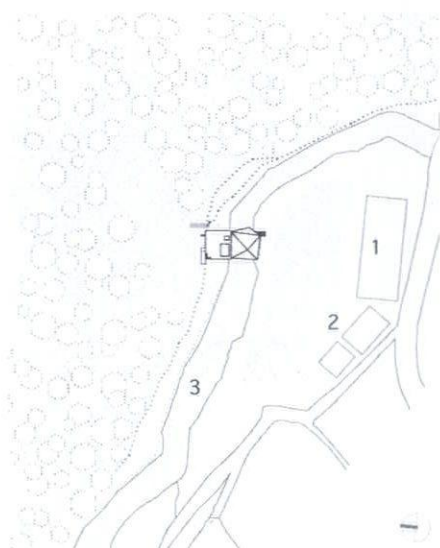
仏間に上る階段にそそぐアルミ製可動ルーバーからの光



- D1: 花見台
- D2: 寝室
- D3: 手洗い場
- D4: 風呂



母屋からのアプローチ



- 1: 既存母屋
- 2: 既存納屋
- 3: 川

配置図

T-H(奈良の家)

奈良市郊外に建設中のこの家は、震災があった神戸から移住してくる若夫婦のためのものである。主人は高校の生物の教師で、この家にいる時はパソコンと音楽鑑賞に時間を費やしたいというおもいがある。また婦人の方は趣味で奏でるバイオリンをファナティックなほどに練習するため、夜中でも無性に弾きたくなるという。そしてその部屋が欲しいと願っている。T-H(奈良の家)はこの夫婦の時間と空間の使われ方をプログラム化し構成されている。

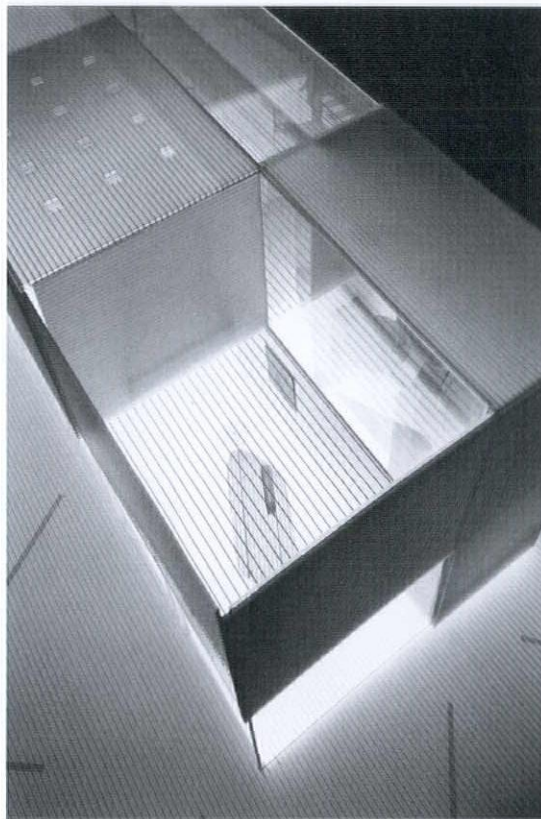
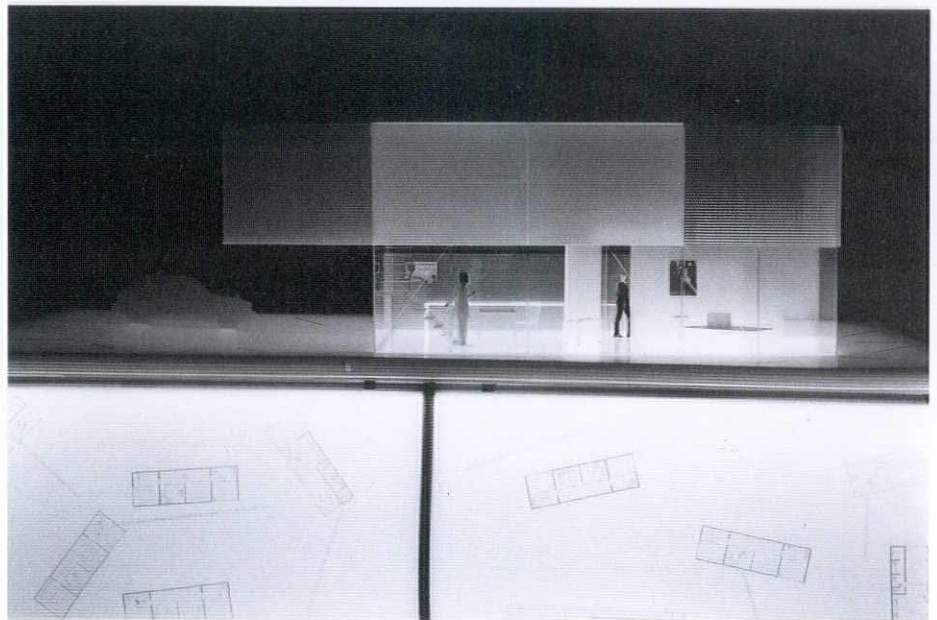
「庭の部屋」は東側の庭と一体となるように解放されたふたり共通のオープンな空間であり、食事や音楽鑑賞をする部屋である。が、主人不在の昼光さす時間帯は婦人のバイオリンの練習場所となる。

「男の部屋」「女の部屋」はそれぞれの私的な活動の場であり、それぞれに屋外デッキを持ったひとつの家的な落ちついたセミオープン空間である。

「光の部屋」は12個の小さなトップライトを持ち、路地化された外廊下と「庭の部屋」の吹き抜けに面した時を楽しむふたり共通のクローズ空間である。

「パブリック／プライベート」な場は「オープン／クローズ」な空間にバラバラに置換され、ふたりの生活の「シーン」として風景化されている。

建築2階部分の個人生活空間のマッスは、空中に放り出され都市を浮遊する。

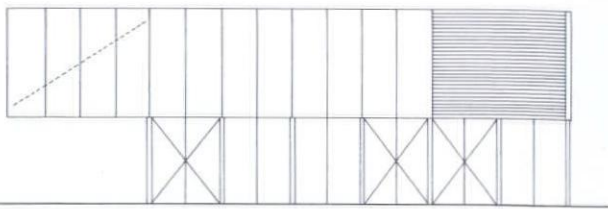


今村雅樹

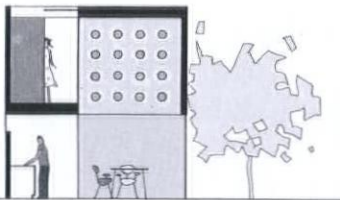
1953年 長崎市生まれ
1979年 日本大学大学院理工学研究科博士課程前期修了
今村雅樹＋TSCA設立
1992年 今村雅樹アーキテクト設立
現在、日本大学理工学部非常勤講師

佐久間菜穂子

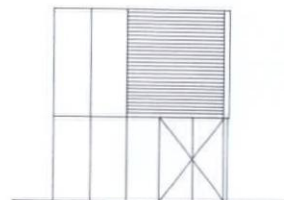
横須賀市生まれ
武蔵野美術短期大学生活デザイン学科卒業
今村雅樹＋TSCA勤務
1992年 今村雅樹アーキテクト入所



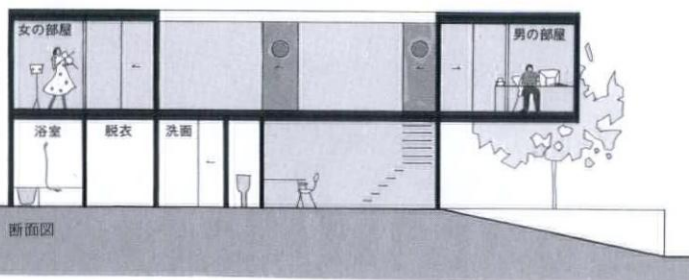
東側立面図



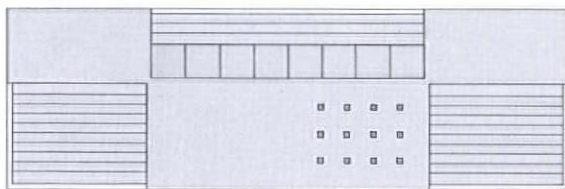
断面図



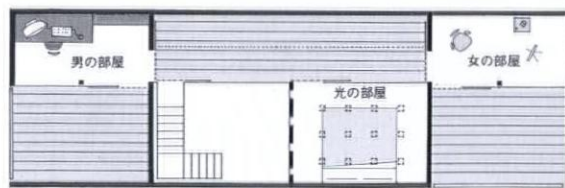
南側立面図



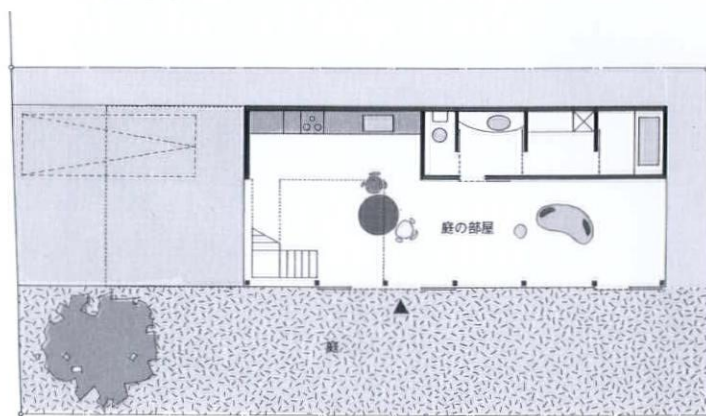
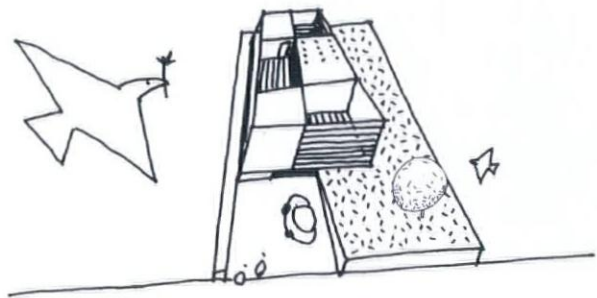
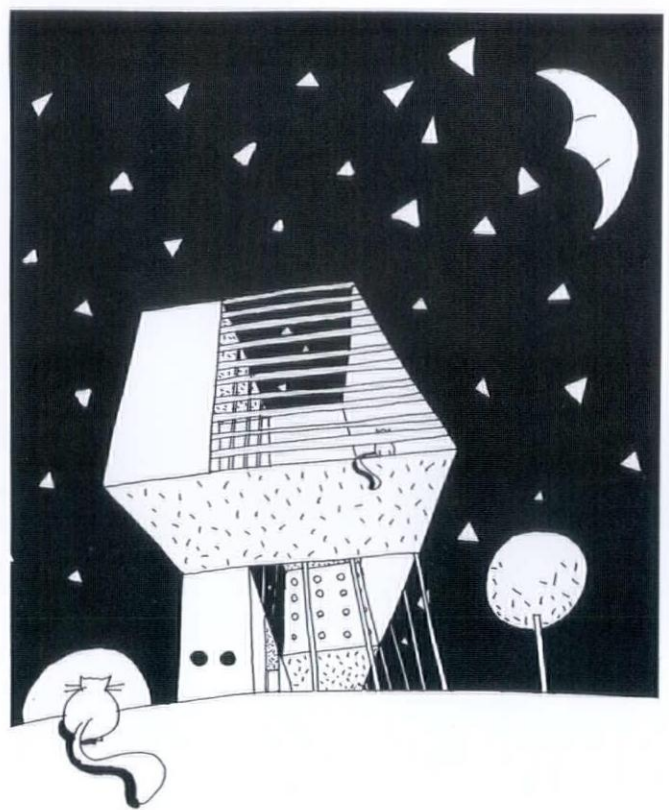
断面図



屋根伏図



2階平面図



1階平面図 S=1:200

用途：専用住宅

所在地：奈良県奈良市西登美ヶ丘

主要構造：木造一部鉄骨造

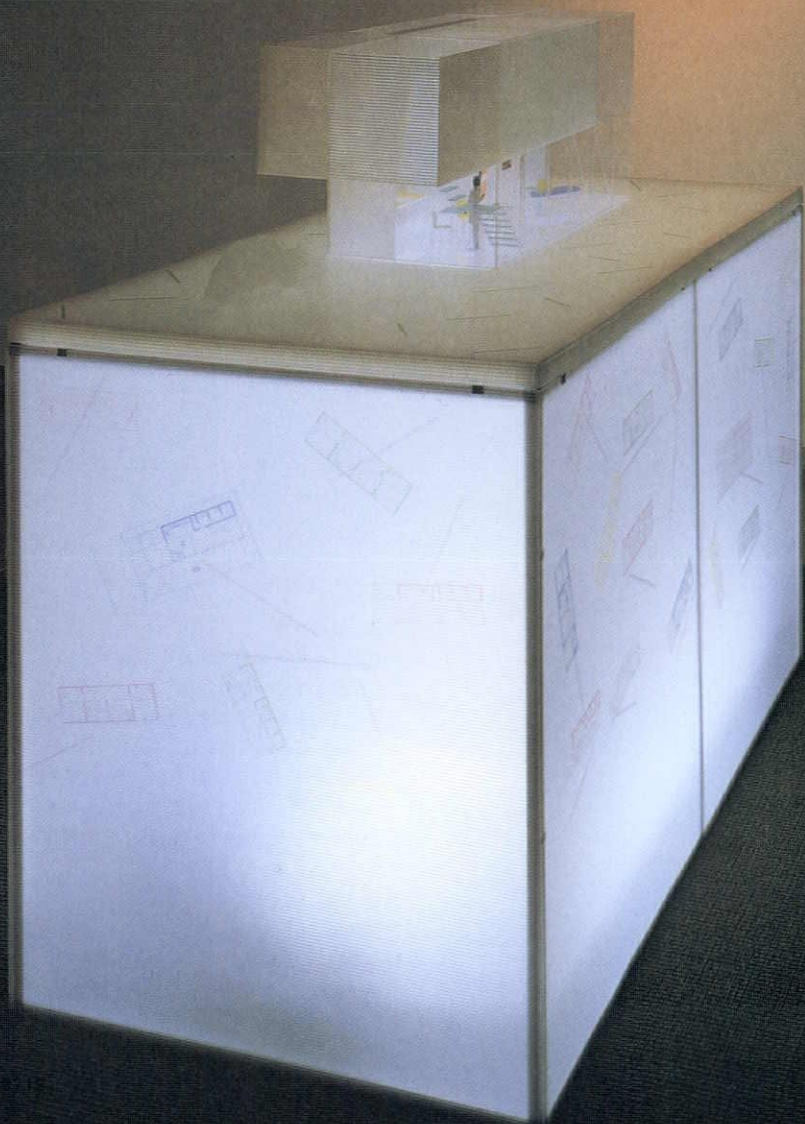
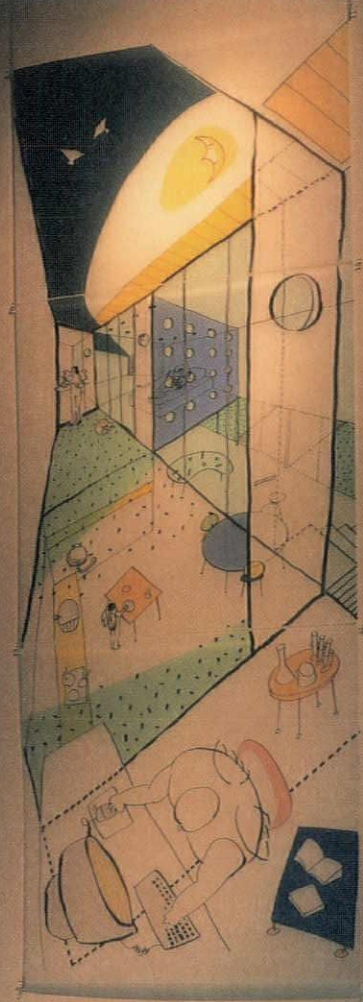
主要仕上材：外部：屋根＝金属屋根一部トップライト、外壁＝セメント成型板-ペイント、一部アルミ及びホルバー、開口＝アルミサッシ、内部一般：床＝フローリング+土間、壁・天井＝PB-ペイント一部OSBボード、水まわり：床・壁＝100角白タイル、天井＝アルミスパンドレル

敷地面積：164.98㎡

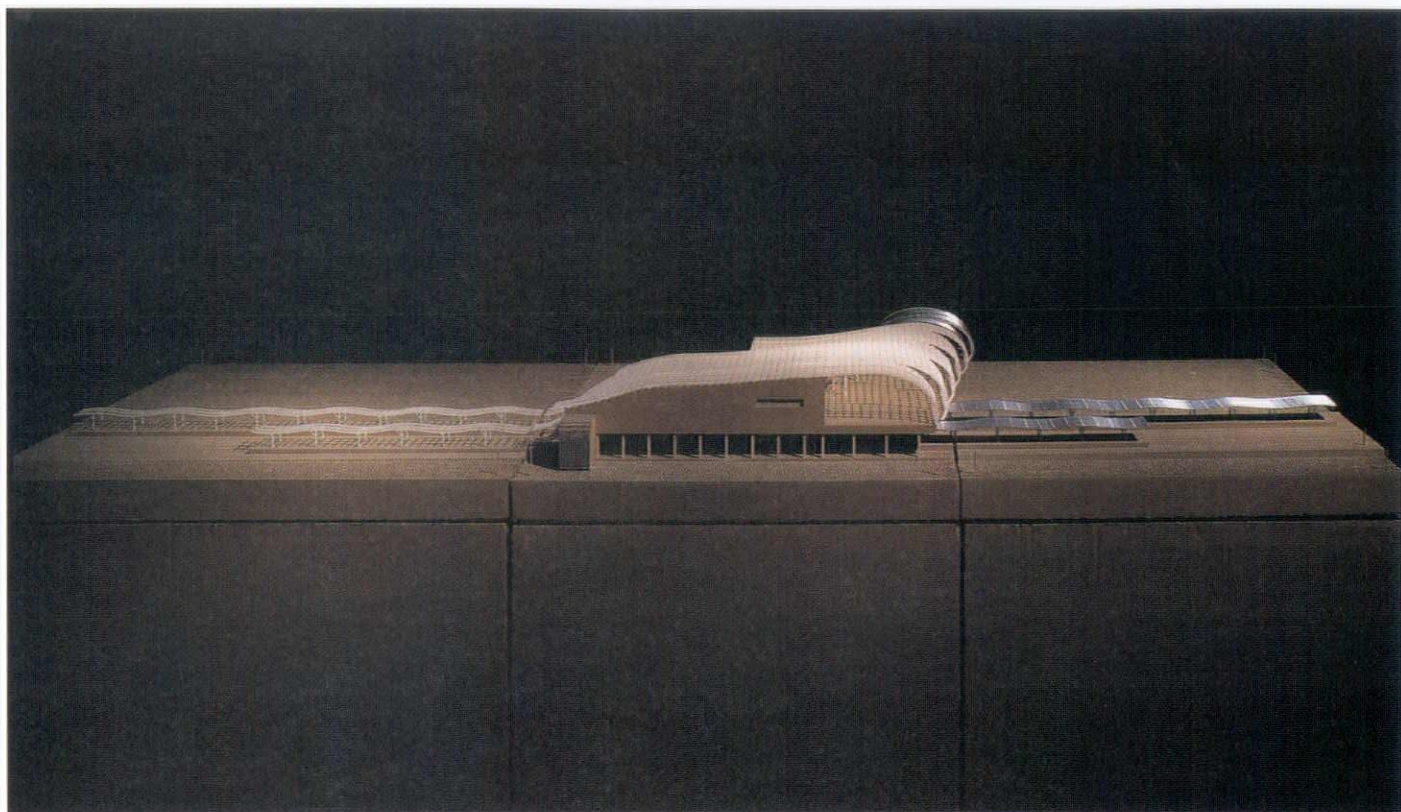
建築面積：66.24㎡

延床面積：78.82㎡

工事予定期間：1997年7月～1997年12月

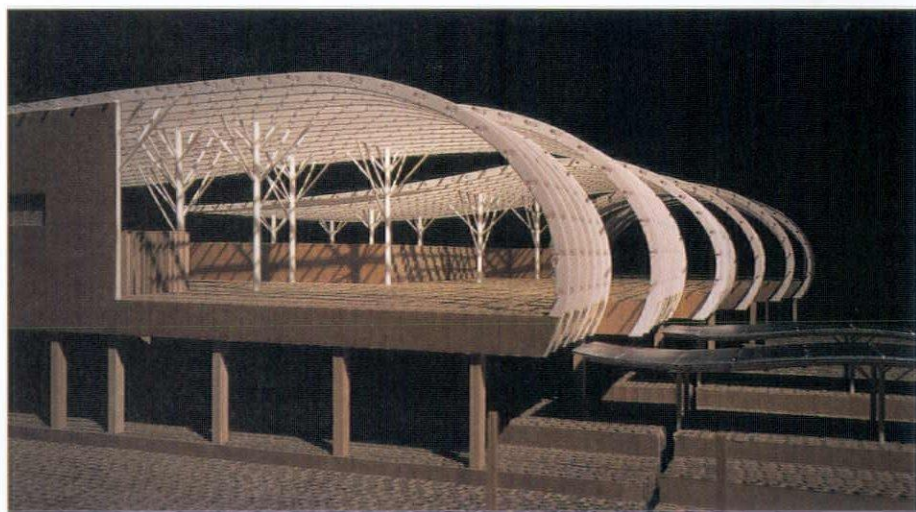


さいたま新都心駅(仮称)



新駅周辺では、すでに計画中の建築群が、ある環境を作る事が予想される。新駅はこれらに自然な形で融合していきたい。この考えを進めていく中、建築が「雲」や「空気」のような存在であつたらと考へた。したがって、外部に向かって造詣的な存在感を与えることより、駅そのものの機能、利用者の目的をしっかりサポートしながら、人を包みこむような温かさと心地好さをもたらすシェルターとしての空間作りを心掛けた。

全体でとらえるよりも、部分部分の快適さ、またそこにいる事が楽しいと感じられるようなハードとして、例えば構造のディテールや、緑、水、または光や影の遊びを巧みに演出できるように考へたい。自由通路では導線を妨げず、行き交うなかにも「ホッ」とできるレストスペースや、人が集まりちょっとしたイベントができる広場などを考へていきたい。暗くなりがちな駅構内を、自然光を取り入れることにより、時間帯によって床を変化させる光と影を楽しむことができることを考へたい。「波のシェルター」はこれらの条件を満足させる。それは、雲のように無形的な存在であ



り、時間に追われる人達をやさしく受け入れ、朝に夕に、光の効果とあいまって、駅の新しい役割を見出すことが出来る事と確信する。

こうして「ハード」が駅の機能のみならず、人の「心」に「やさしさ」を発進することが「人にやさしい駅づくり」の原点であると考え

用途：駅舎および自由通路

所在地：埼玉県大宮市吉敷町4丁目、埼玉県と野市上落合高谷橋

主要構造：鉄骨ラーメン構造

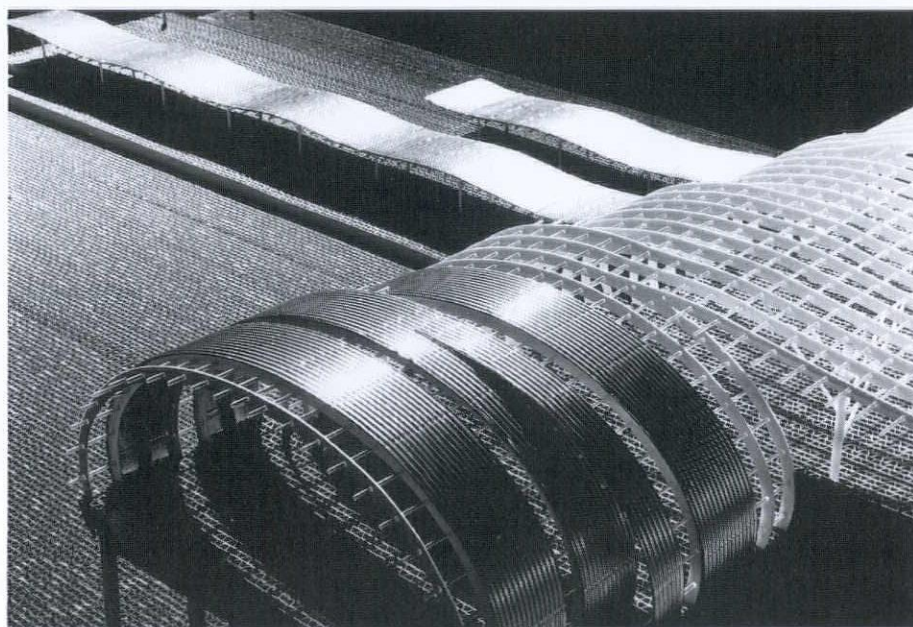
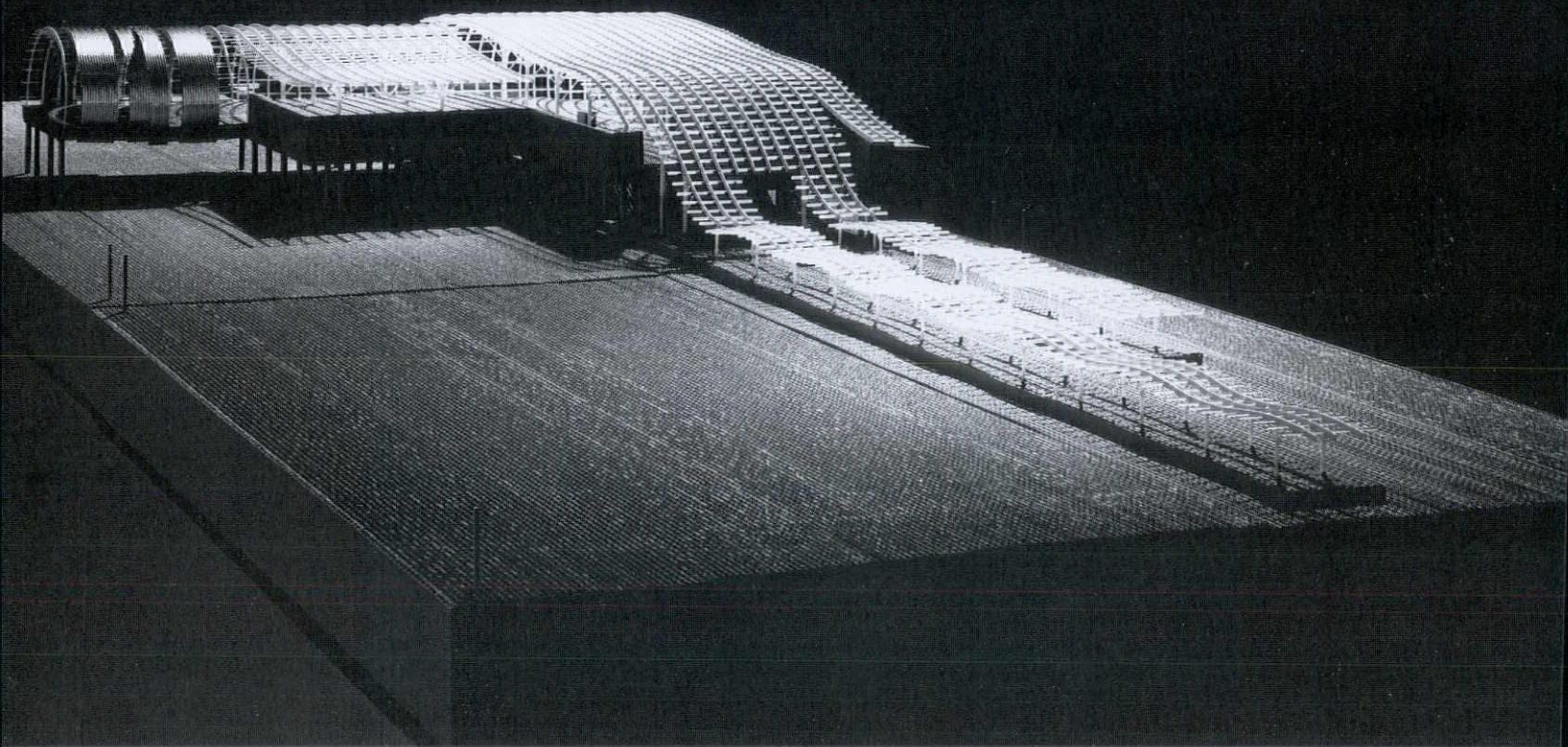
主要仕上材：フッ素樹脂鋼板折版・中空セメント板

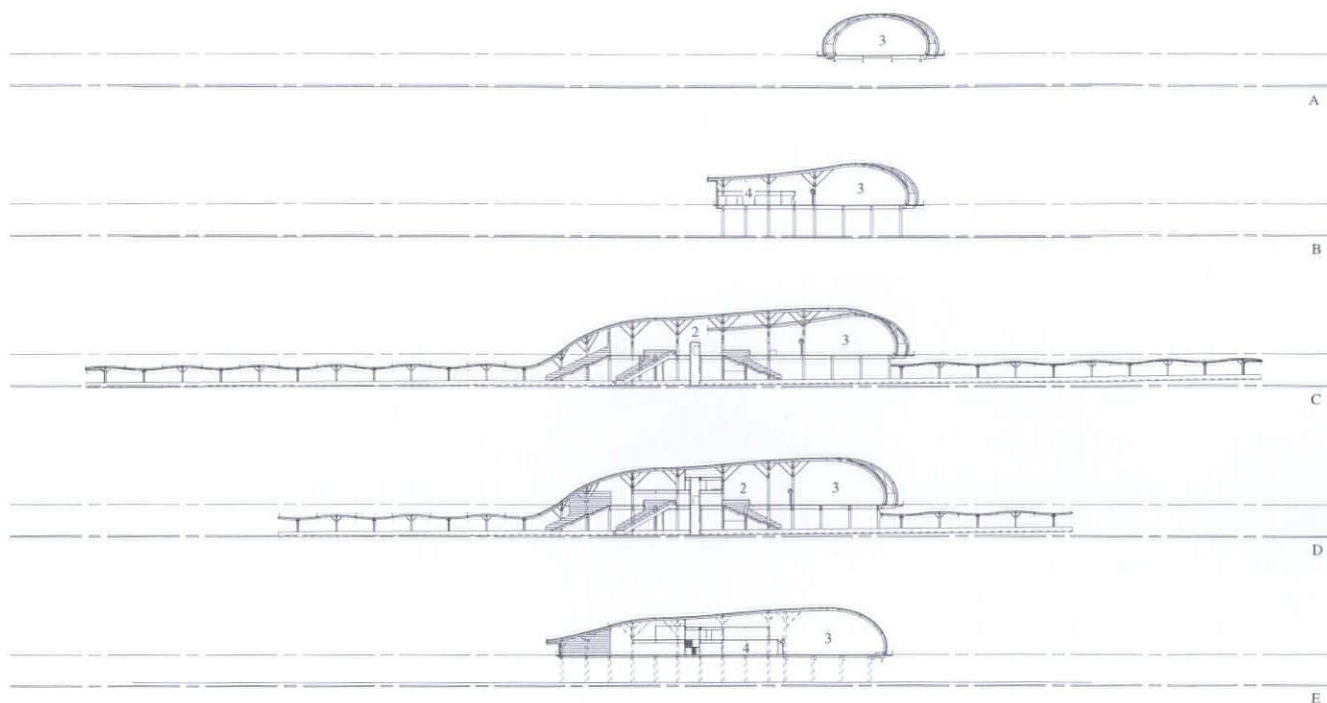
敷地面積：約7,100㎡

建築面積：約4,700㎡

延床面積：約5,500㎡

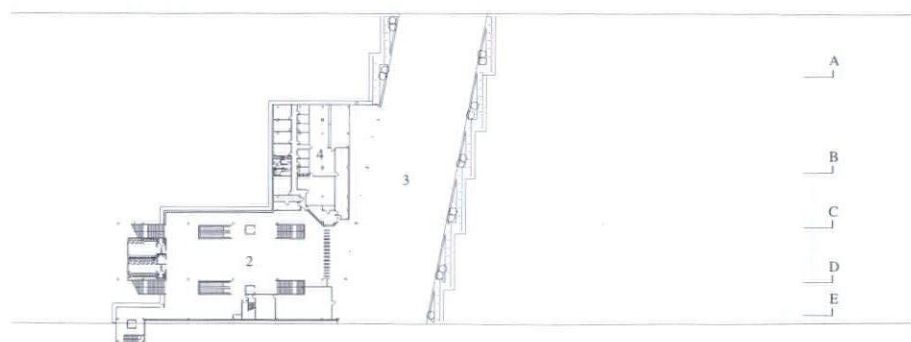
工事予定期間：1997年6月～2000年3月



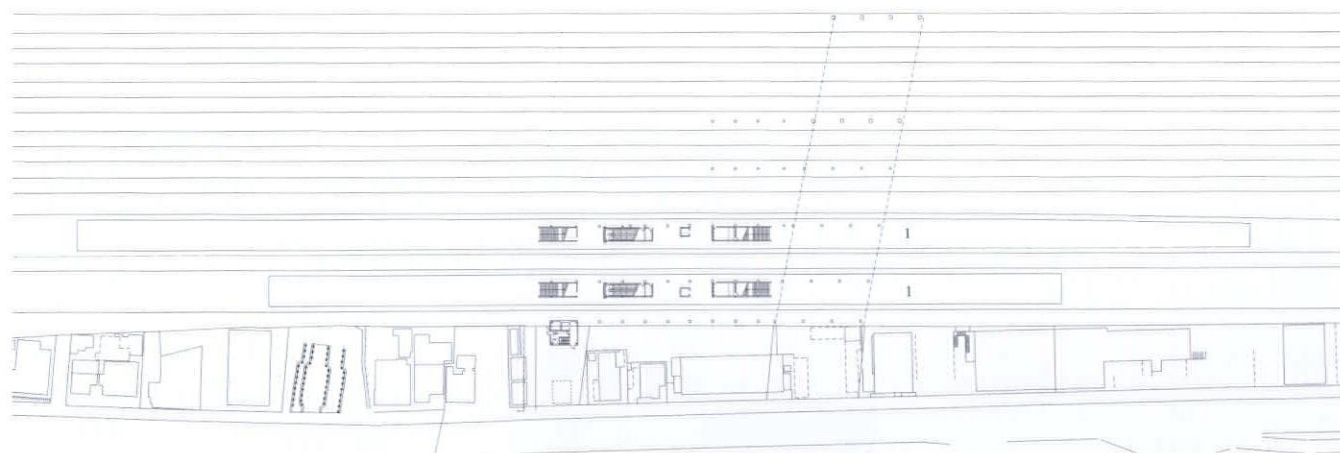


断面図 S=1:2000

- 1: プラットフォーム
- 2: コンコース
- 3: 東西自由通路
- 4: 駅務室



2階平面図 S=1:2000



1階平面図 S=1:2000

鈴木エドワード

- 1947年 埼玉県狭山市生まれ
- 1966-71年 ノートルダム大学建築学士
- 1973-75年 ハーバード大学大学院アーバンデザイン建築学修士
- 1975-76年 丹下健三都市建築設計研究所勤務
- 1977年 鈴木エドワード建築設計事務所設立
- 1995年 ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン客員教授

台北市迪化街歴史地区のまちづくりデザイン

迪化街は台北北西部淡水河という、かつて台北の大動脈だった川の沿岸近くに位置し、清代末期から急速に発展していった最も伝統のある商業地区である。特に日本統治時代には、台湾の人々の経済、文化、社会活動の中心的役割を担ってきた。

近年、台北市政府は都市再開発と地区の環境改善を推進しており、この地区も「迪化街特定専用区」として地区指定を行い、歴史的町並みの保存を推進している。

しかし台北駅より1kmと都心にあるため、これからの商業活動を重視する必要がある、単なる文化財的保存型のまちづくりではなく、都市計画において特定区とした上で、建物の一部を保存し、他に容積加算するBOT方式を採用し、歴史性を生かした個性ある商業地区としてのまちづくりが進められている。

さらに今回の計画では、地区住民による計画段階からの参加が進められている。町並みのファサード部分の付属物規制および修景や看板デザインのガイドライン作りといった、旧来の優れた町並みの価値を生かしつつ、住民の意思が反映されたデザインをするという、他の大都市では真似のできないまちづくりである。さらに、近代的なスケールを持つ市場に低層の建物『街の情報館』を貼り付けることで、町並みの連続性を出すとともに、利用性の高い空間を考えることで、ひとの回遊性を高めようとした。

共同設計者：横矢吉弘、山川尚

協力：廖慧明、陳永興、江重宜、曾美恵、山崎高志、矢尾雅哉

用途：道・広場および情報館

所在地：台北市 迪化街一段 民生西路～南京西路

主要構造：建築部分：鉄筋コンクリート造

主要仕上材：建築部分＝煉瓦、洗い出し等、都市設計部分＝煉瓦ブロック、洗い出し等

敷地面積：都市設計部分：約1ha

建築面積：167㎡

延床面積：361㎡

工事予定期間：1997年8月～1998年6月

佐藤孝秋

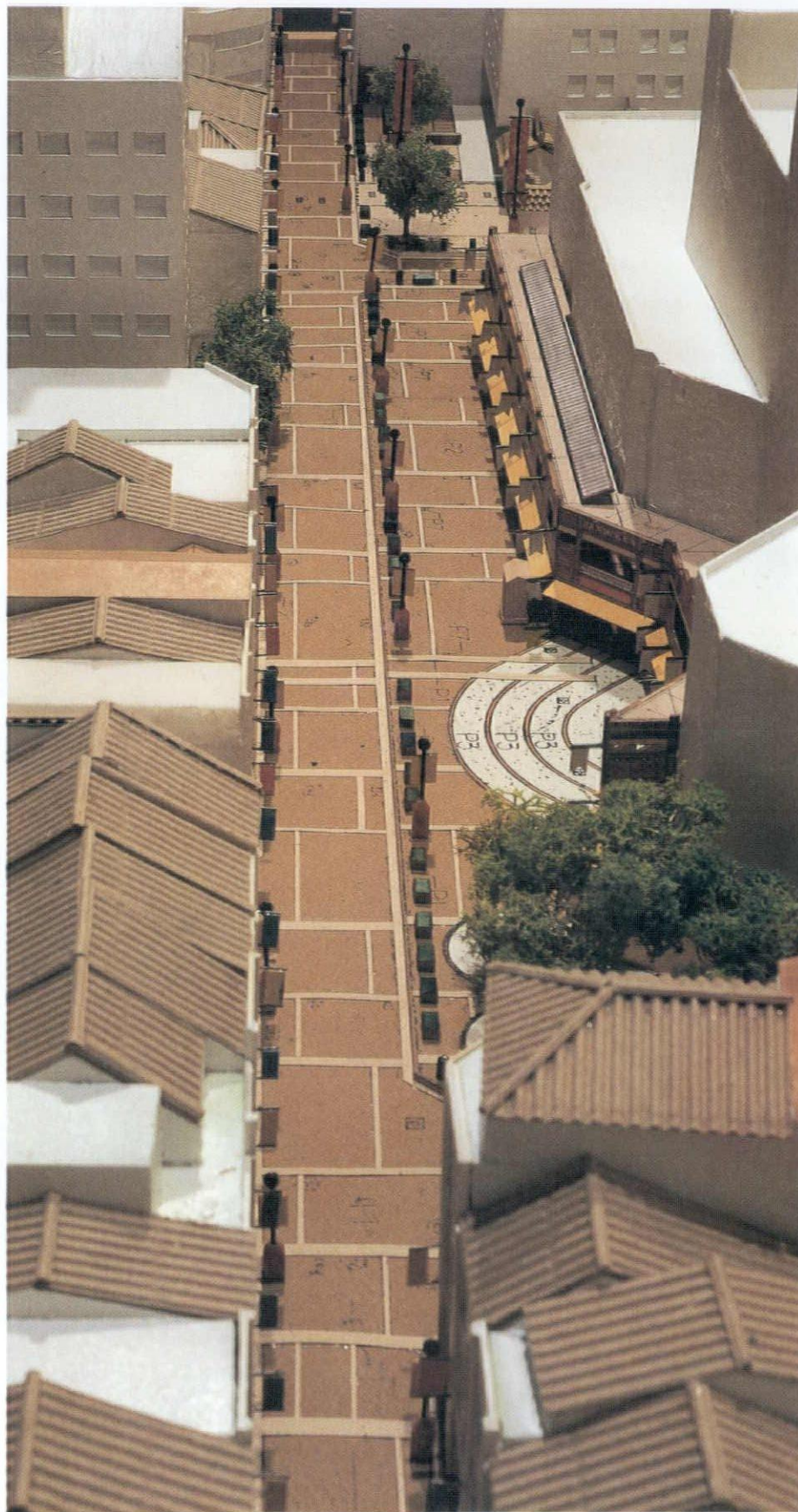
1957年 東京都生まれ

1980年 日本大学理工学部建築学科(都市計画研究室)

卒業

1980年 象設計集団

1996年 株式会社フォレストシップ代表取締役



タカマスヨシコ

Yoshiko Takamasu

考えごとの家

この住宅は、わたし自身が住むためのものである。この米子に来て2年目、その間ずーっと考えごとをしていたように感じる。夕食を食べながら、次のコンペのこと、夜寝る前、来週からの予定のこと、コンピュータの画面に向かって、明日の授業のこと、車を運転しながら、夕食のメニューのこと。

好きで考えごとをしているのか、くせになったのか、それしかすることがないのか、そうせざるを得ないのか、とにかく、考えごとをするにふさわしい住宅にしたいと思った。この小さな土地で、限られた予算の中で、最大限の可能性を引き出したい。そんな住宅。

協力：設計＝秋山美和（田中正夫建築設計事務所）、三原征夫（三原征夫設計室）、構造＝石倉保富（石倉保富建築構造設計）、川端康洋（米子高専建築学科教授・構造）、模型＝松下正富、谷本明逸（米子高専実習係）、石原雄峰、松本康夫、原田直樹、岩本義英（米子高専建築学科4年）、矢野留美子

用途：専用住宅

所在地：鳥取県米子市旗ヶ崎

主要構造：木造

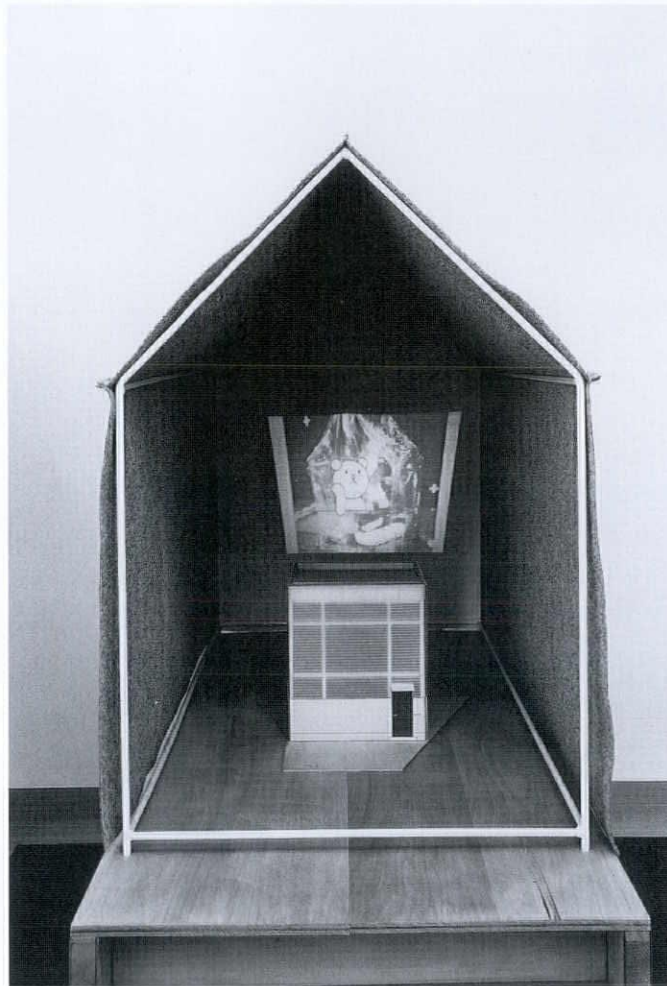
主要仕上材：木材、ポリカーボネイト、ガルバリウム鋼板

敷地面積：56㎡

建築面積：29.16㎡

延床面積：58.32㎡

工事予定期間：1997年12月～1998年3月

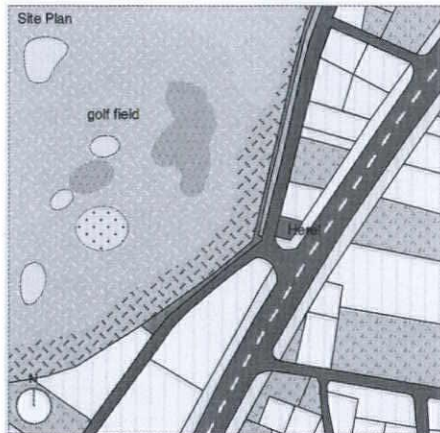


タカマスヨシコ

1968年 大阪府生まれ

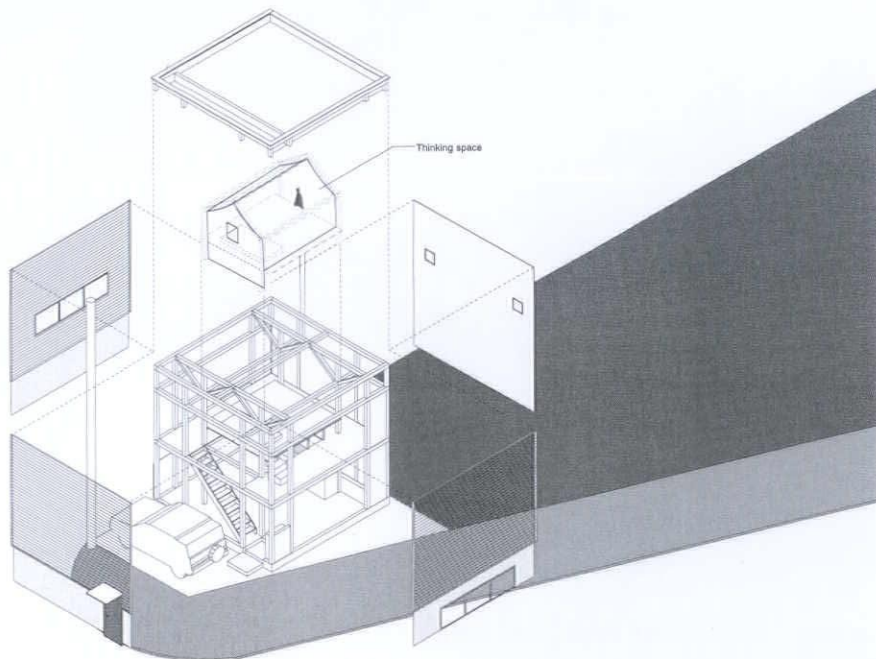
1993年 京都府立大学大学院住環境科学専攻修了

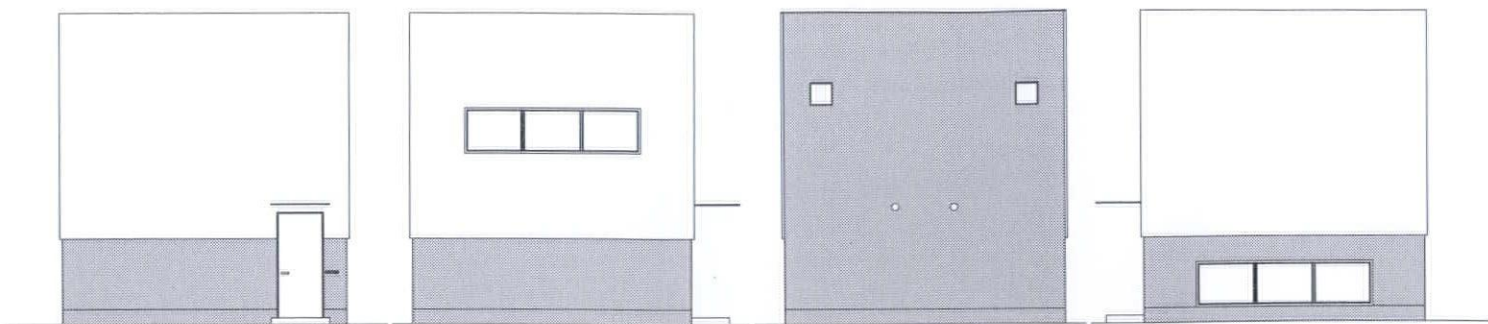
1996年 米子工業高等専門学校建築学科助手



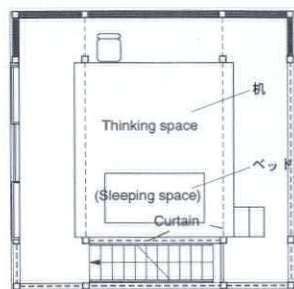
配置図

SD9712
20

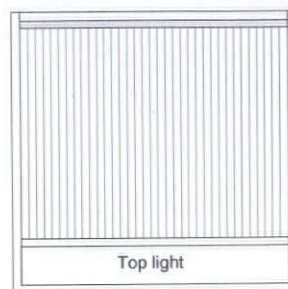




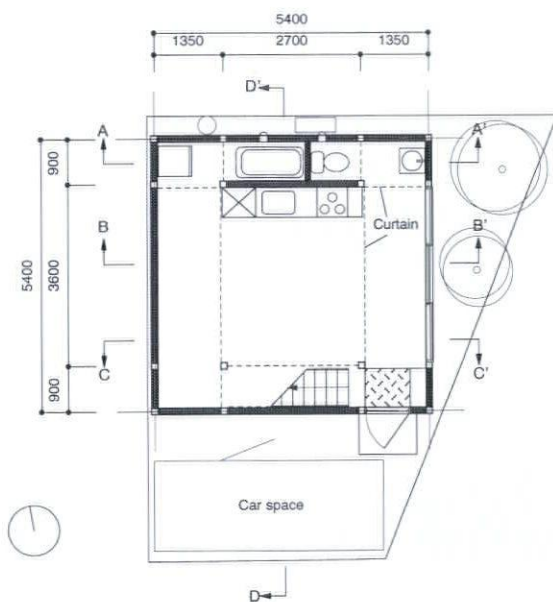
立面図 S=1:150



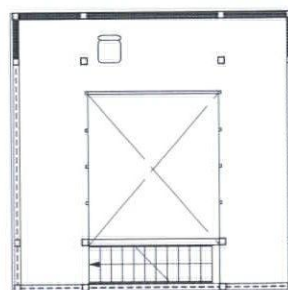
2階平面図



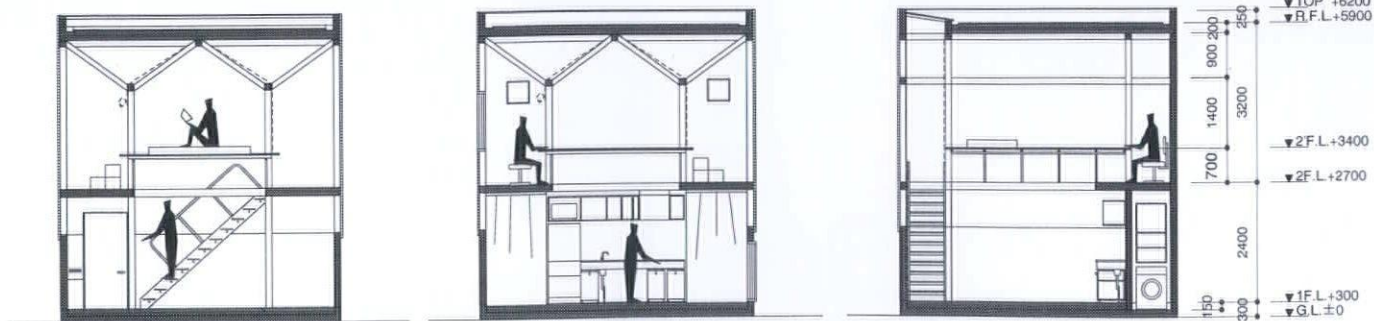
屋根伏図



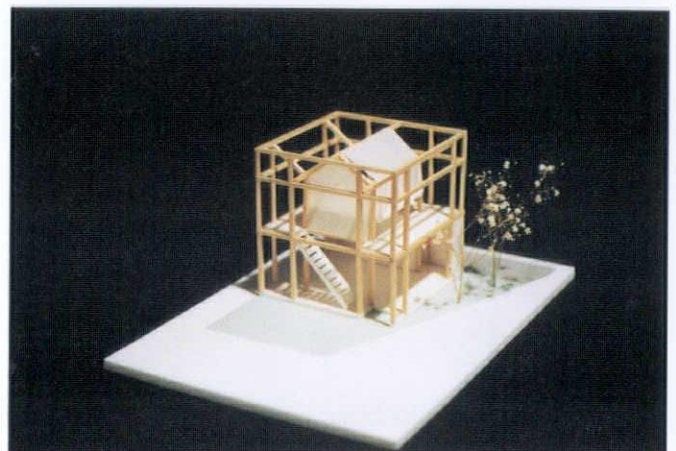
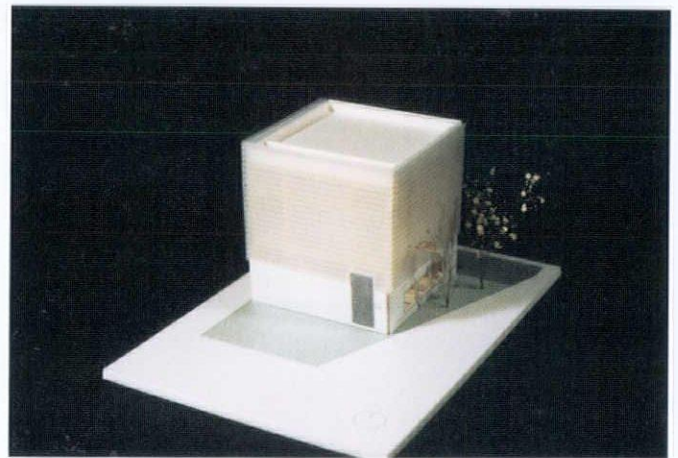
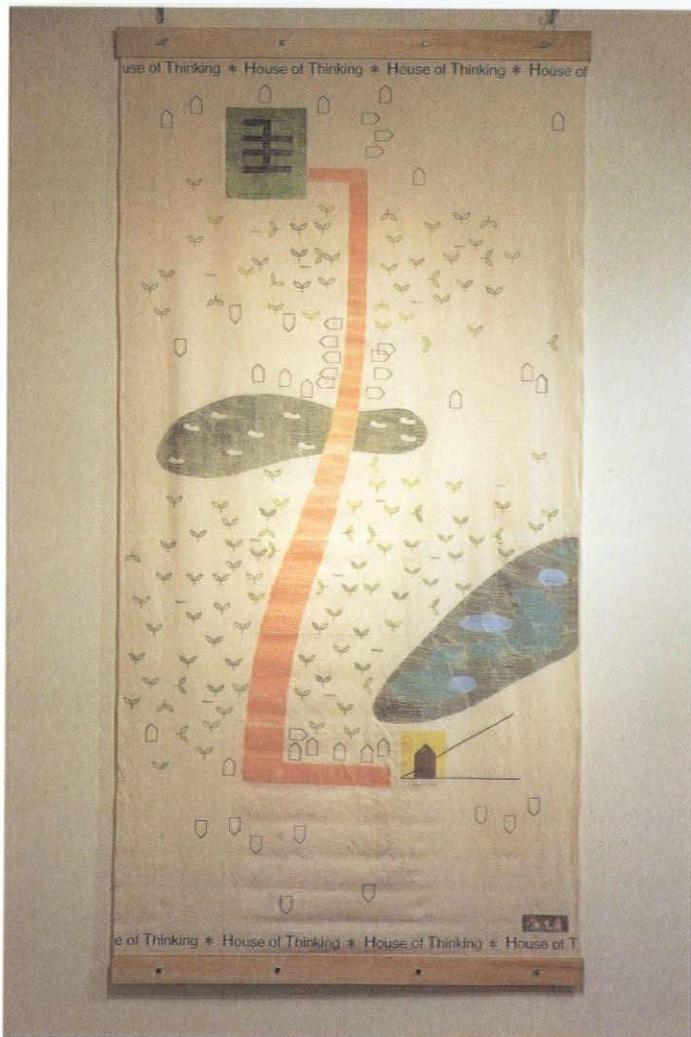
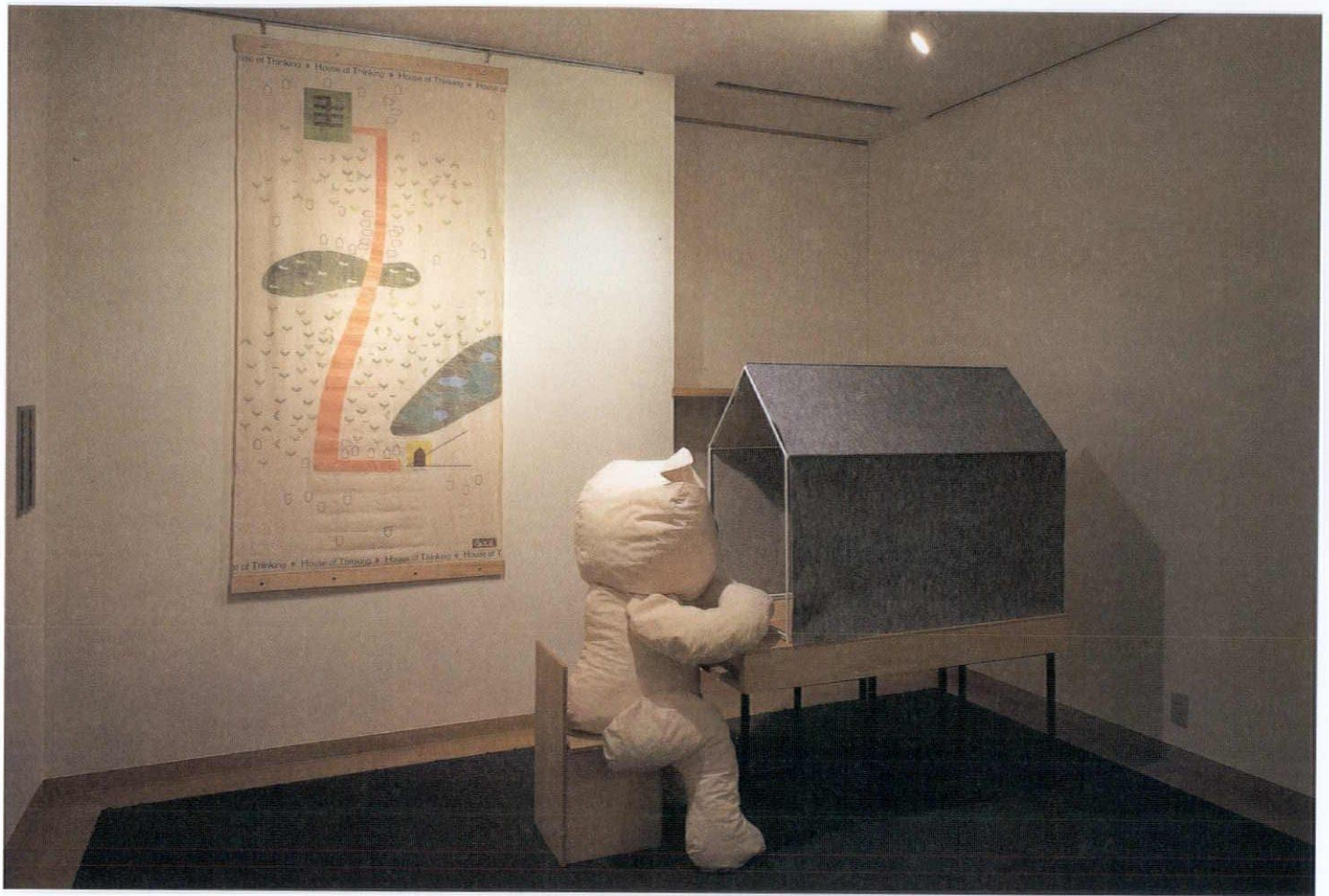
1階平面図 S=1:150



中2階平面図



断面図



海上バナナ (UNAKAMI BANANA)

思索・発見・覚醒のノーマンズランド・海上
バナナ (UNAKAMI BANANA)

形状から海上バナナと名付けた1300m×最大
幅60mの細長い敷地は、高台に降った雨が湧
き水となって現れているが、それを覆い隠す
ようにアシが密生する湿地である。

地図上で町の中央に横たわっているか眠っ
ているようなこの場所を、本当の意味で町の
人々の拠り所となるような、特別な存在とす
ることがこの計画の目的である。多様な利用
者の訪れる場所では、私達自身が主体性を持
った主（あるじ）であるべきと考えている。
そこで、レジャー施設で感じる「ここである
行動をしなくては行けない」という「半強制
な存在」を感じさせない場所＝ノーマンズラ
ンド（主のいない場所）を目指した。

手法として、プロジェクトの段階的な整備
も考慮しながら、7種の点・線・面的な装置を
設定した。それらはふたつの機能を満たすこ
とを条件として計画された。ひとつは特定の
行動にのみ用をなすのではなく、複数の行動を
許容する機能である。もうひとつは、この
環境を再認識する「ものさし」としての機能
である。漠然と自分の隣りにあった自然を、
「ものさし」を挿入することで、特性（この
場所の長さや特殊な形状・水が湧き、湿地で
あること・アシの生命力や光と風など）とそ
の変化を発見してゆける機能である。

ノーマンズランドが環境や自分自身に対し
て、思索・発見・覚醒の場所となるために設
計者が関与できることは、唯一そのふたつの
条件を忠実に満たすことと考えている。

協力：石丸彰子、今川由貴、大鹿智哉、岡野道子、
生地浩子、田中美香、當間一弘、なわけんじ、
藤谷弓子

用途：公園

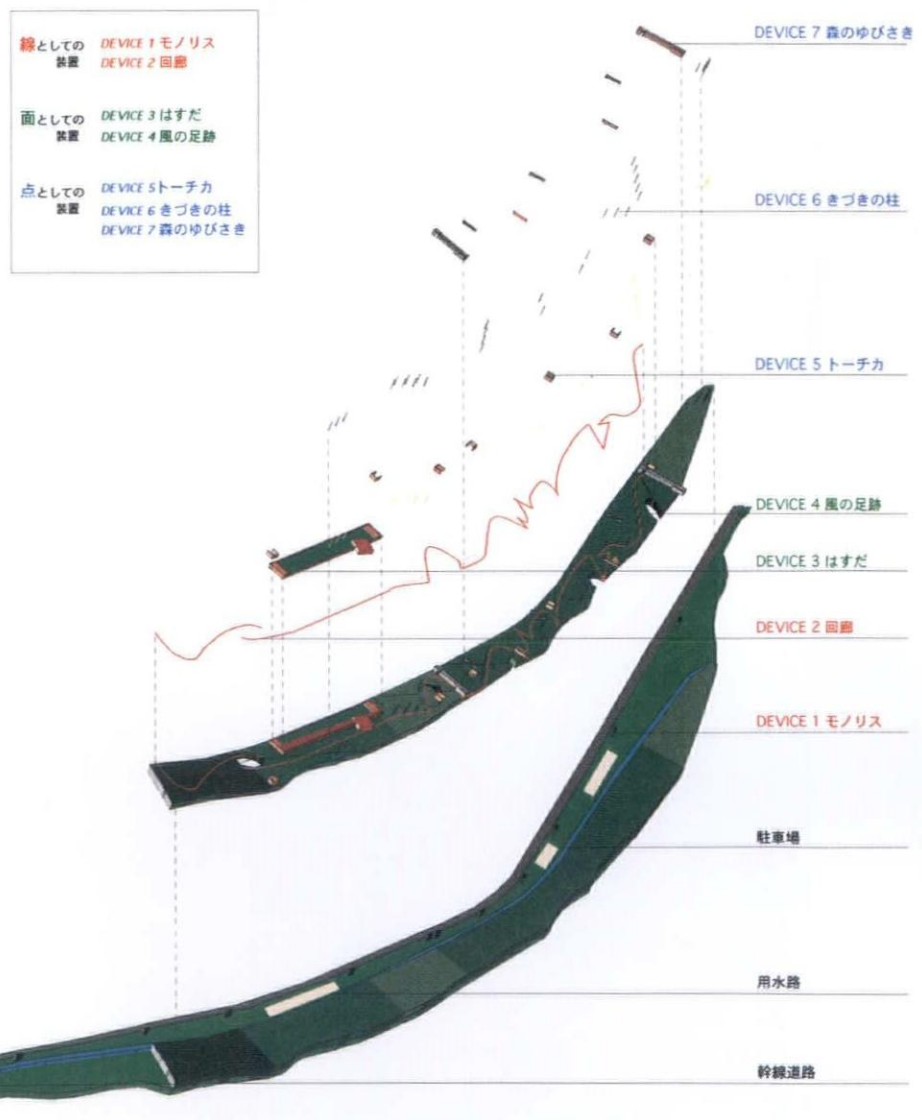
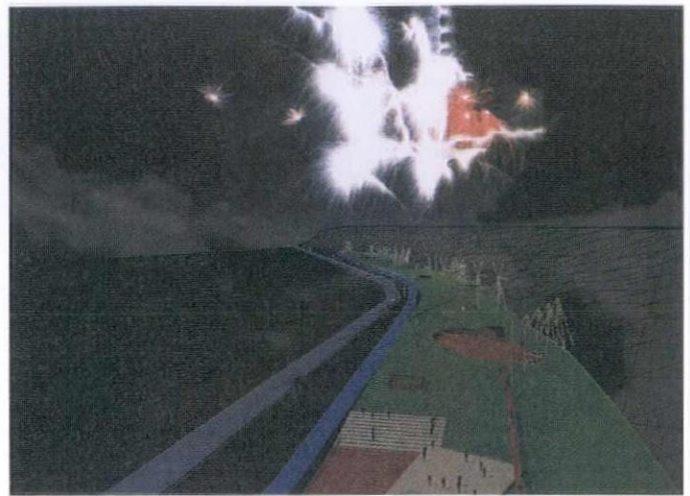
所在地：千葉県海上郡海上町

主要構造：木造、S造、RC造

主要仕上材：杉羽目板貼りなど

敷地面積：6 ha

工事予定期間：1999年～



1
Device

・駐車場の確保・ばなへの通車の入り口の確保・その後に広がる敷地の展開の予感・敷地に沿った幹線道路に配置し、カーブの形状の演出・ばなを流
る水の流れ・敷地境界線の状況・道路の敷設・車の通行からのランドスケープ

?

モノリス

海上
ばな

2
Device

回廊

3
Device

はすだ

4
Device

Unakami
Banana

橋の足跡



トーチカ

Unakami
Banana

5
Device

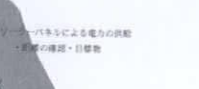
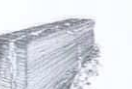
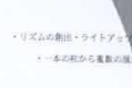
きづきの柱

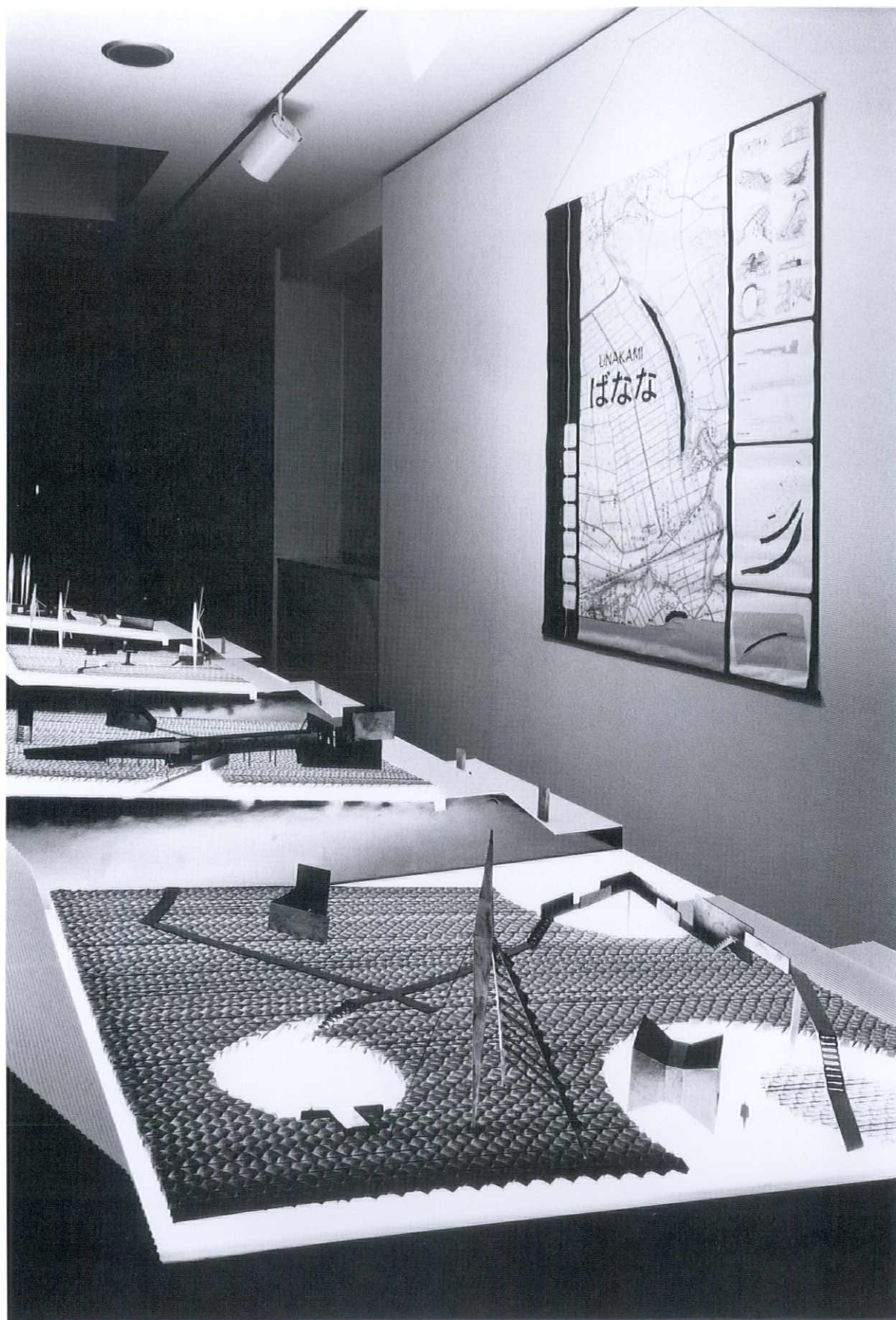
6
Device

橋のゆびさき

7
Device

Unakami
Banana





高安重一

1966年 千葉県生まれ
1989年 東京理科大学理工学部建築学科卒業
1990-95年 東京理科大学理工学部建築学科助手
1995年 建築研究室高安重一事務所設立
1996年 東京理科大学非常勤講師

佐久間達也

1970年 東京都生まれ
1993年 東京理科大学理工学部建築学科卒業
1995年 同大学大学院修士課程修了
1995年 東京理科大学理工学部建築学科助手

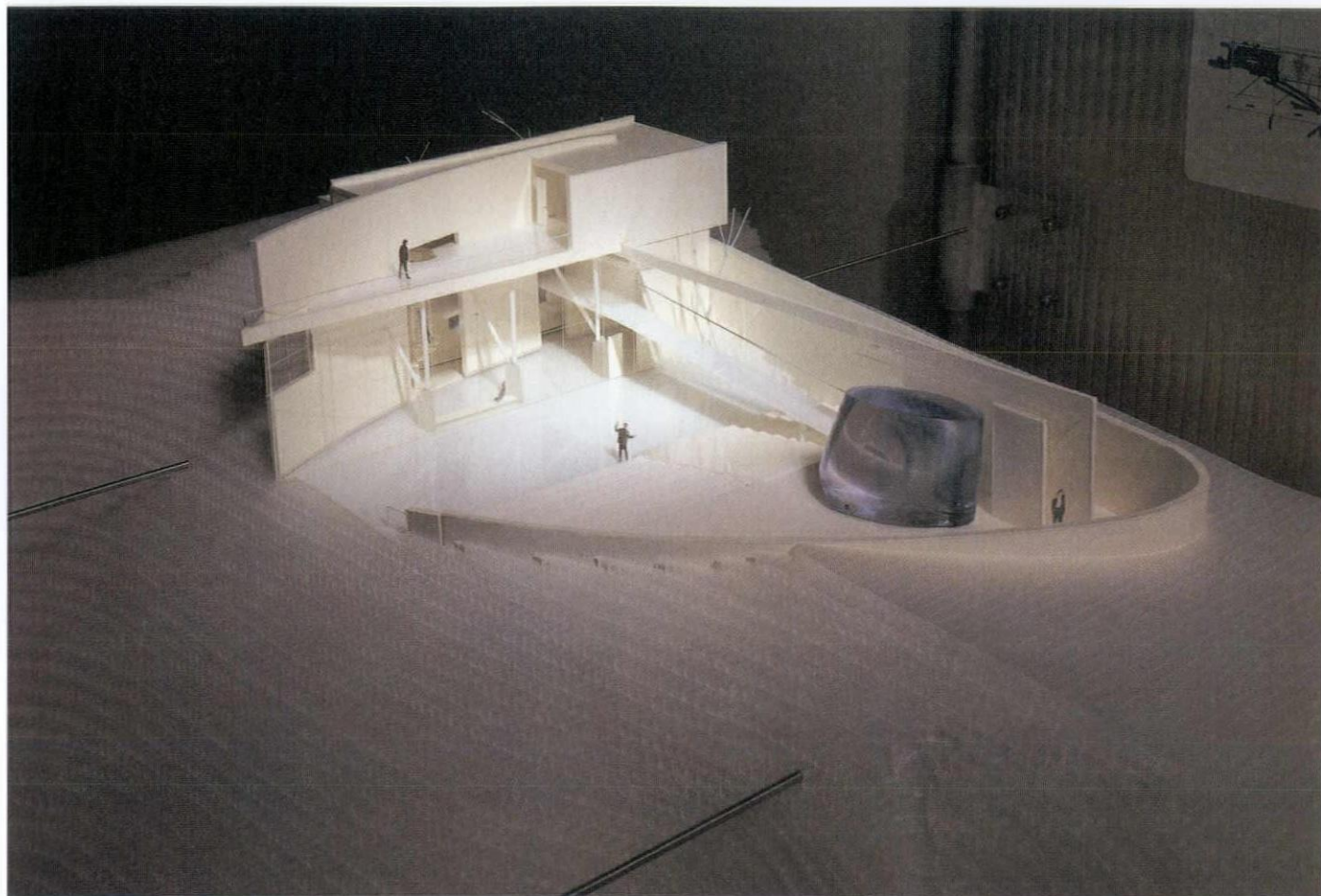
橋爪宏直

1973年 三重県生まれ
1995年 東京理科大学理工学部建築学科卒業
1997年 同大学大学院修士課程修了
1997年 大成建設設計本部勤務

重富博之

1974年 山口県生まれ
1996年 東京理科大学理工学部建築学科卒業
1996年 同大学大学院修士課程在籍

徳島の家(林邸)



敷地：徳島・郊外・山間部尾根

プログラム：住宅70%

写真家の為のスタジオルーム20%

ゲストルーム10%

常時滞在人数2名

ビクチャレスクなサイトに写真家のスタジオを……。

屋外はスタジオとなり、フレームの中に納まるショットは、この空間を、背景を含む。

こんなアプローチが当初よりあった。

与えられた敷地を囲む。

その写真家のアイレベルより得られる視界は区切られた空間から広がりのある空間への被写体深度を数m〜∞にセッティングされる。

そう、尾根の中間を根切ってしまう。

底部は尾根と直角方向に交わる、囲まれた数mから20mの空間。

背景は建物。くぼんだ空間は我々のものだ。

半島のような長い敷地はのびのび泳がすしかない。

自分の手を、伸びきるまで差し出したように。その周りには動きがある。

点として置かれたゲストルームはおまけ。

限りなく基本的な建築の要素からの脱皮。

プラスチックのキャスト、ワイヤーのライン、

構造、照明、逆転されたスペースはショットの中でどう飛び廻るであろう。

共同設計者名：浅井薫／アライ・アーキテクト(意匠)

小川淳也／ジュン・アソシエイツ(構造)

協力：今村壽博、梅崎照輝／アライ・アーキテクト

東田達也、岡大輔、戸田輝／エトス・アソシエイツ

用途：住宅

所在地：徳島県

主体構造：RC造、S造、合成樹脂・メッシュネット合成盤

主要仕上材：外部：壁＝RC打ち放し、合成樹脂、屋根＝アスファルト防水、一部ステンレス板、床＝木製デッキ

内部：壁＝PB AEP、天井 PB AEP、床＝フローリング・タイル

敷地面積：平地841.22㎡ 法地2,359.15㎡ 合計3,200.37㎡

建築面積：182.55㎡

延床面積：248.71㎡ (ガレージ・スタジオ部分54.70㎡、住居部分219.46㎡、ゲストルーム部分22.85㎡)

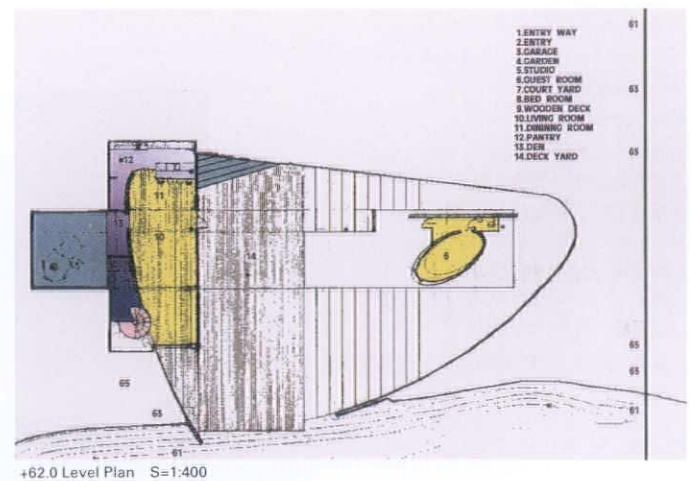
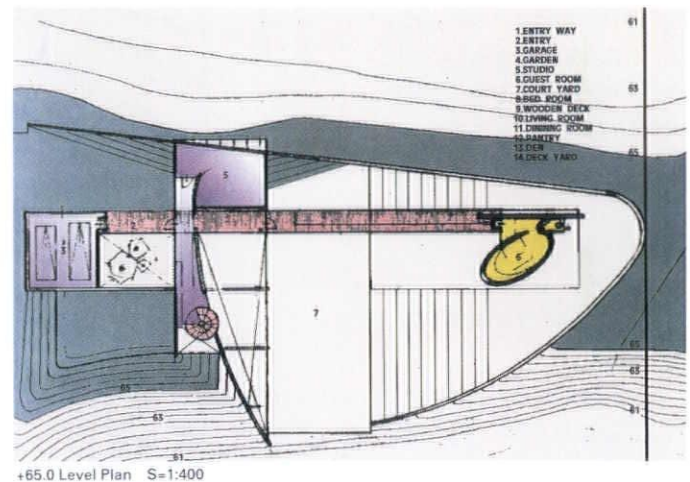
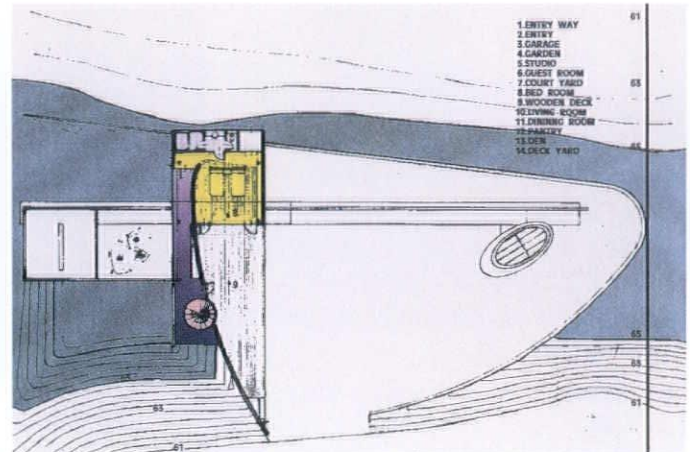
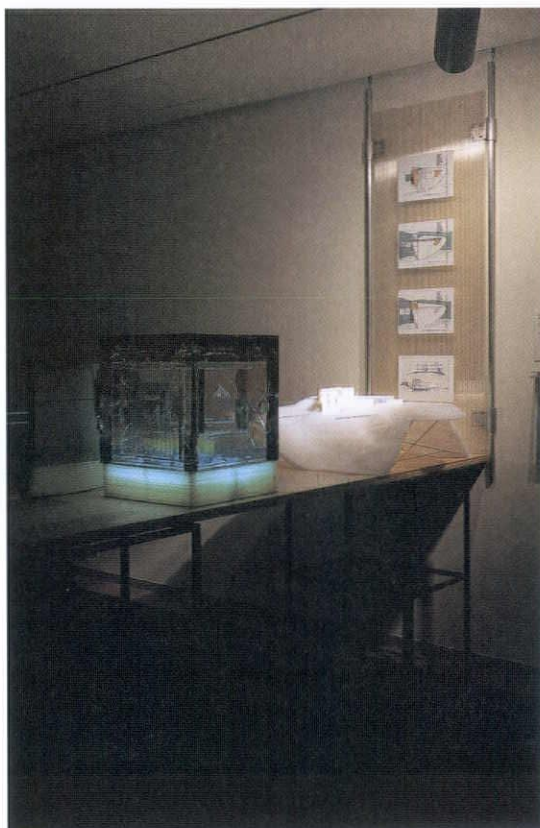
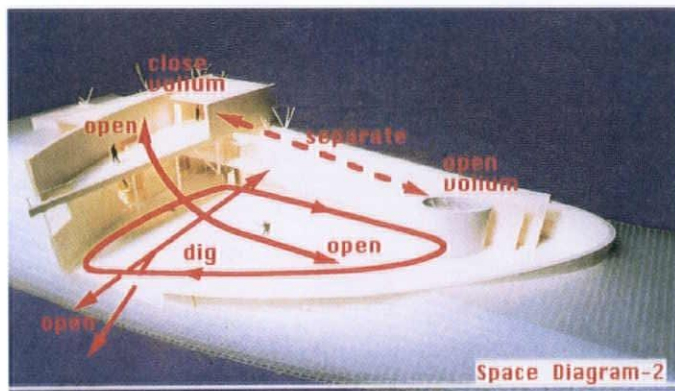
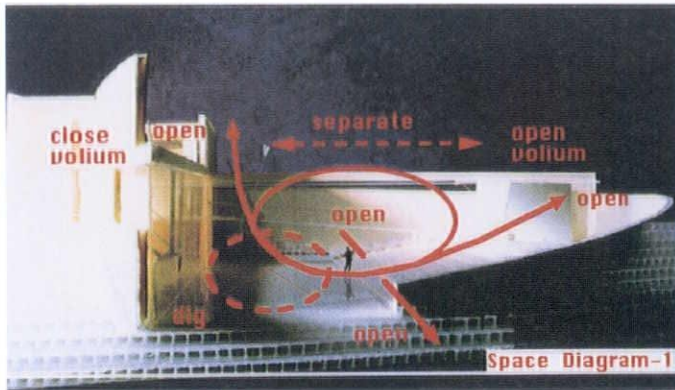
工事予定期間：平成10年4月～

浅野 静

1950年 茨城県生まれ
1973年 日本工業大学工学部建築学科卒業
清家 清+デザインシステム
1978年 米国グローバルリンク社
現在 ETHOS ASSOCIATES, ETHOS L.D.主宰

新井清一

1950年 横浜生まれ
1983年 南カリフォルニア建築大学 (SCI-ARC) 修士修了
1980-91年 MORPHOSIS Architects
1985-91年 SCI-ARCインストラクター
1991年 ARAI・Architects (アライ・アーキテクト) 設立
現在 アライ・アーキテクト代表、京都精華大学助教授



藤本壮介

Sosuke Fujimoto

D-HOSPITAL

140床の精神科病院。全開放型の治療を行う。

理想の精神病院を作ることだった。それは家であり、同時に都市であり、東の間の居場所であり、同時に世界である。機能する箱ではなく、許容する場所である。あらゆる矛盾が共存する場所である。そこでは何より多様性が求められる。さまざまな人々（＝患者）に居場所を与え、彼らの生活を包含しうる空間的多様性、すなわち建築である。

それは本質的に建築であることを求める。敷地は南向きのなだらかな傾斜地。斜面の先には市街地、その向うに海が広がる。雪はなく、北海道の中では例外的に温暖な気候。

斜面に浮く屋根の抑揚が、この恵まれた敷地とその高低差を建築に取り込む。同時に、この屋根の凹凸は内部を適度なスケールの空間に分節する。高低差と小さなスケールの連続が、個々の場所を様々に特徴づけ、多様な空間を可能にする。

周辺の広大な自然に対する人間的スケールの自然として、いくつかの中庭が作られる。それらを取り巻く環状の動線が干涉し合い、多様な動きを生み出す。この動線は脈動し、たくさんの小さな居場所（＝デイルームなど）へと発展する。

前庭は病院外の人にも気軽に立ち寄れる公園のような場所になる。海を見下ろす公園。この前庭には、将来的に病院付属のカフェの増築が計画されている。カフェは一般の人と病院をつなぐ場所となり、この病院に新たな多様性を付加するであろう。

協力：米澤彰子

用途：精神病院

所在地：北海道

主要構造：RC＋木造 平屋（一部2階）

主要仕上材：屋根＝金属板葺、外壁＝ガラス＋木張り

敷地面積：34,856.5㎡

建築面積：4,282.8㎡

延床面積：4,715.0㎡

工事予定期間：1998年4月～1999年4月

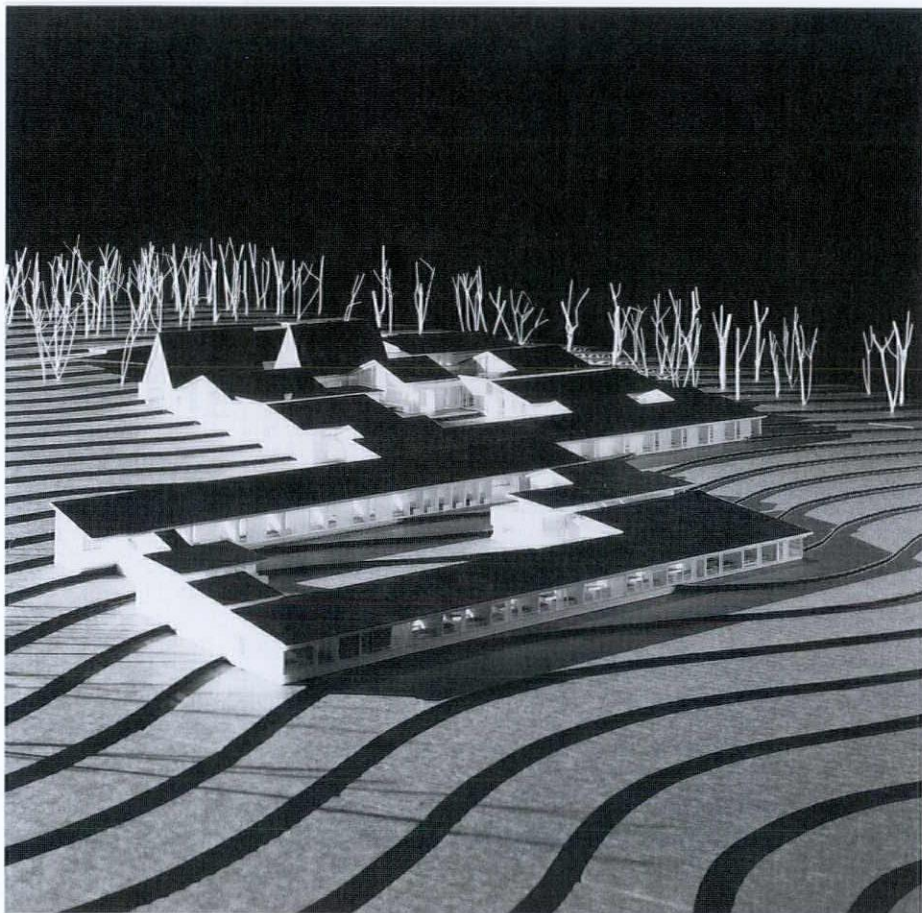
藤本壮介

1971年 北海道生まれ

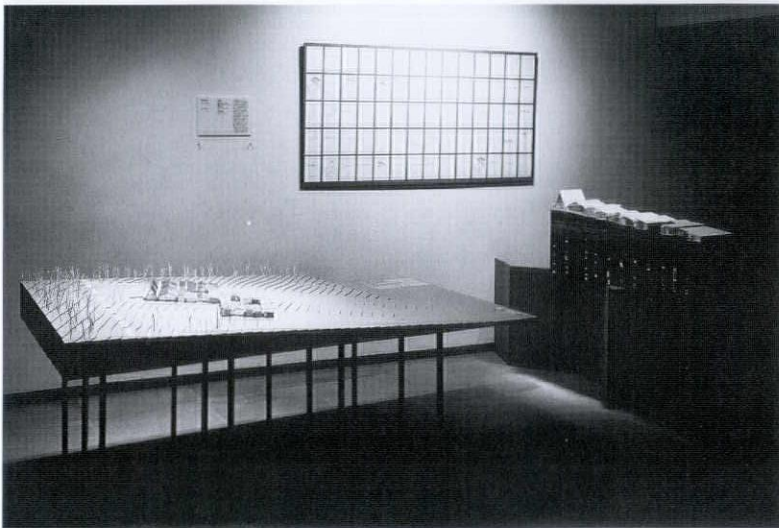
1993年 東京大学卒業

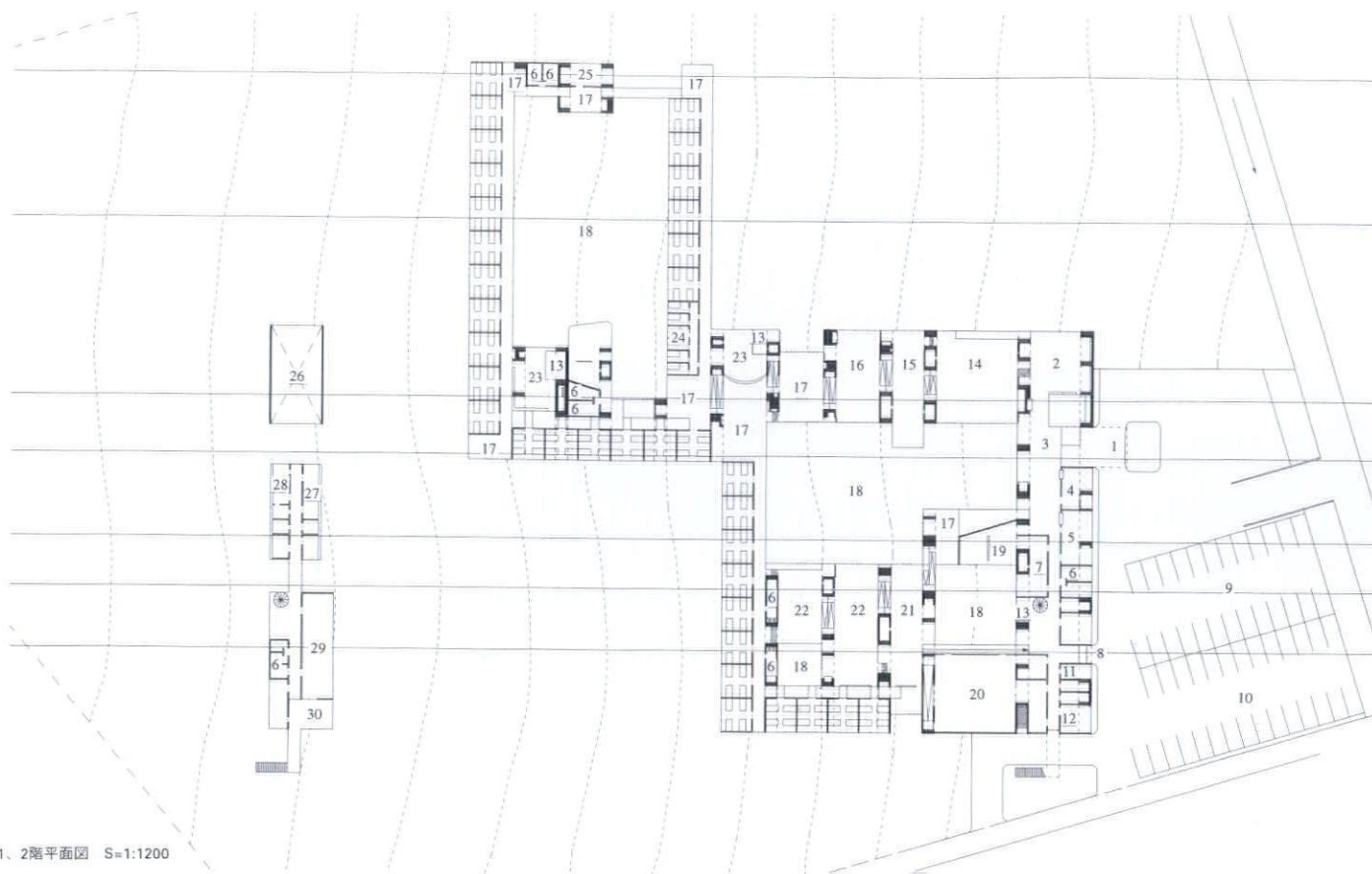
1995年 SDレビュー1995入選

現在、フリーランスのアーキテクト



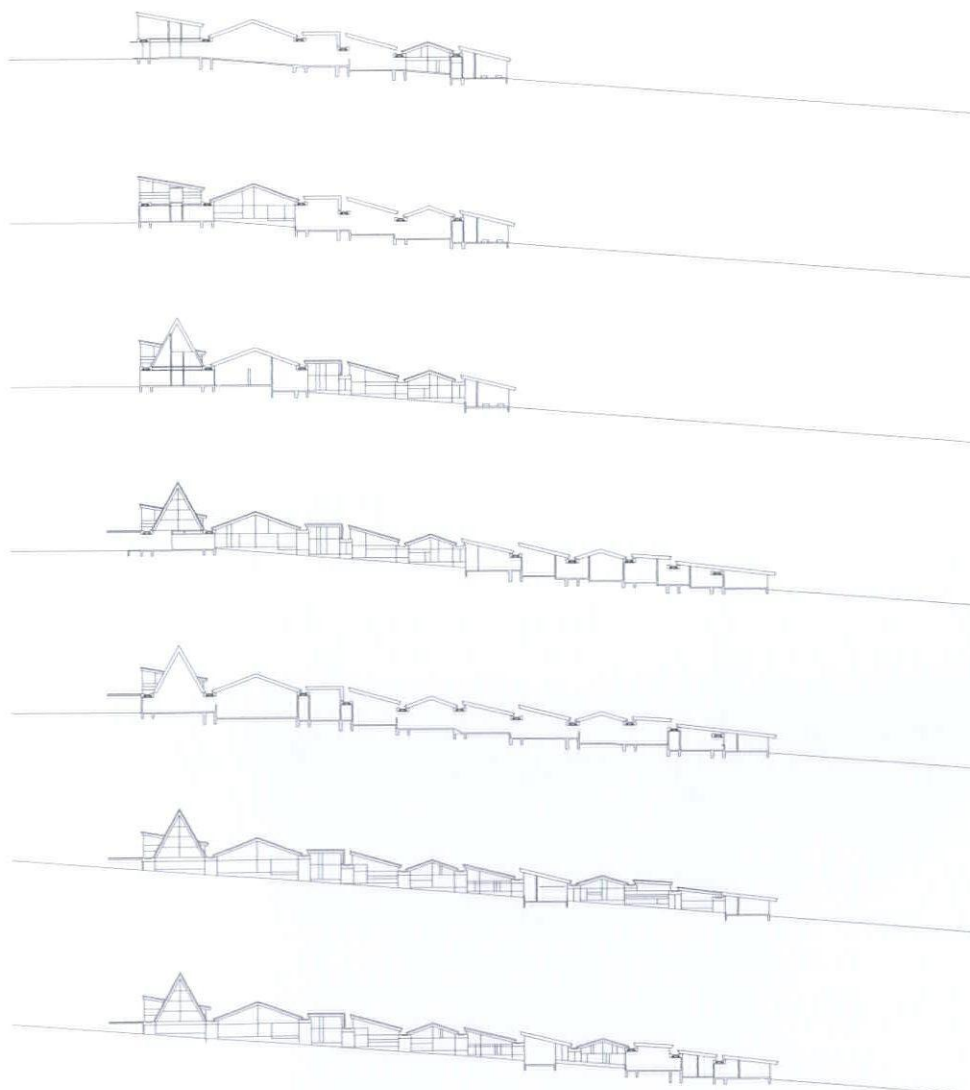
北西立面図



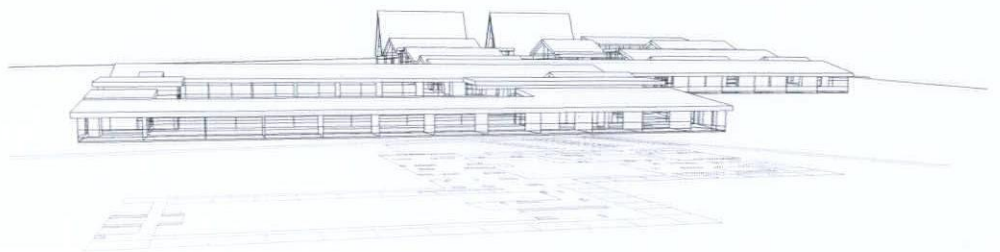
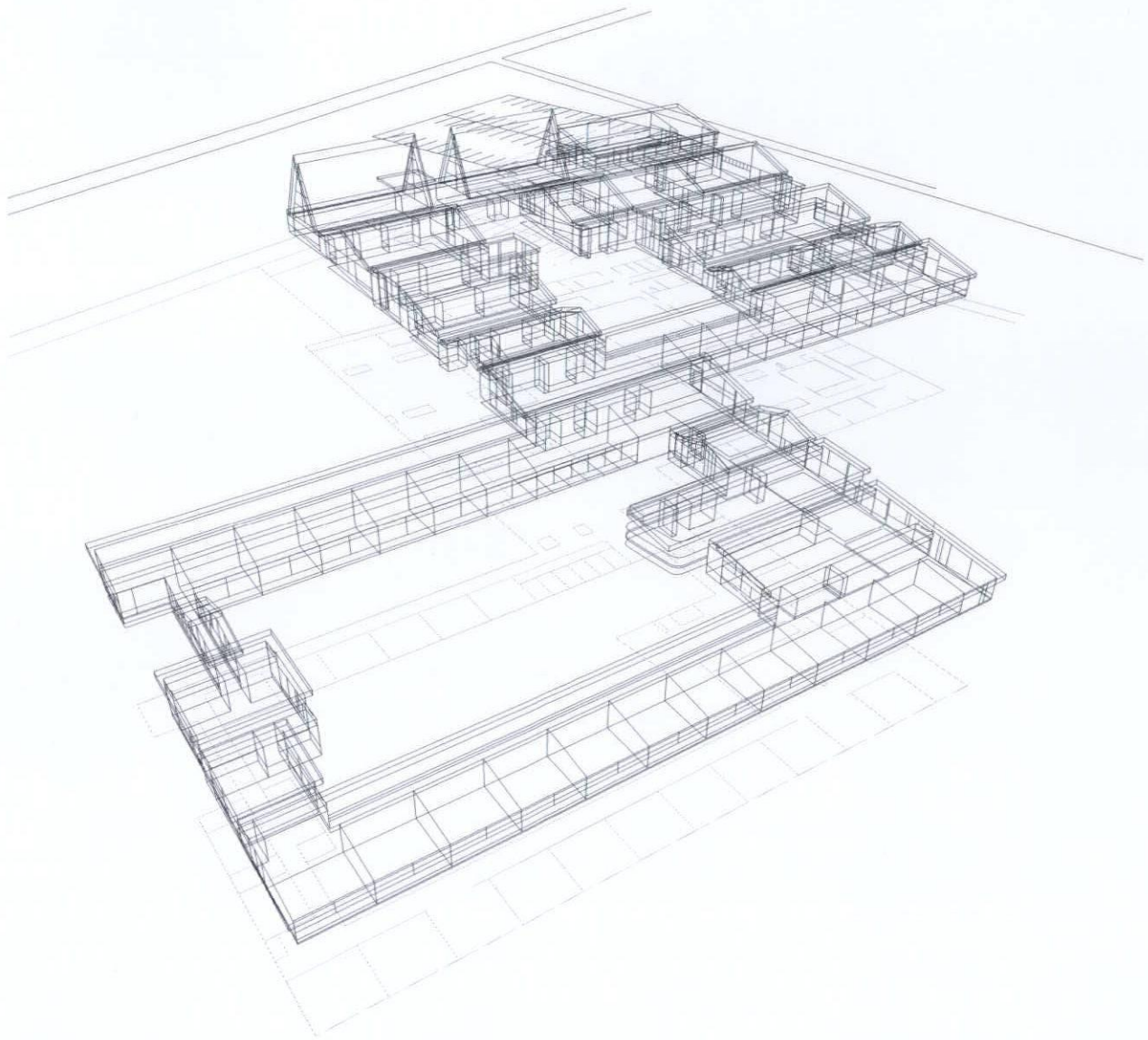


1, 2階平面図 S=1:1200

- 1: エントランス
- 2: 図書室
- 3: 待合ロビー
- 4: 薬局
- 5: 事務
- 6: WC
- 7: レントゲン
- 8: 職員エントランス
- 9: 一般駐車場
- 10: 職員駐車場
- 11: 宿直
- 12: 霊安
- 13: 休憩室
- 14: 作業療法室
- 15: 多目的室
- 16: プレールーム
- 17: リビングスペース
- 18: 中庭
- 19: 診察室
- 20: 厨房
- 21: 食堂(職員)
- 22: 食堂
- 23: 休憩室
- 24: ナースステーション
- 25: 浴室
- 26: 図書室上部
- 27: 院長室
- 28: 応接室
- 29: 医局
- 30: テラス



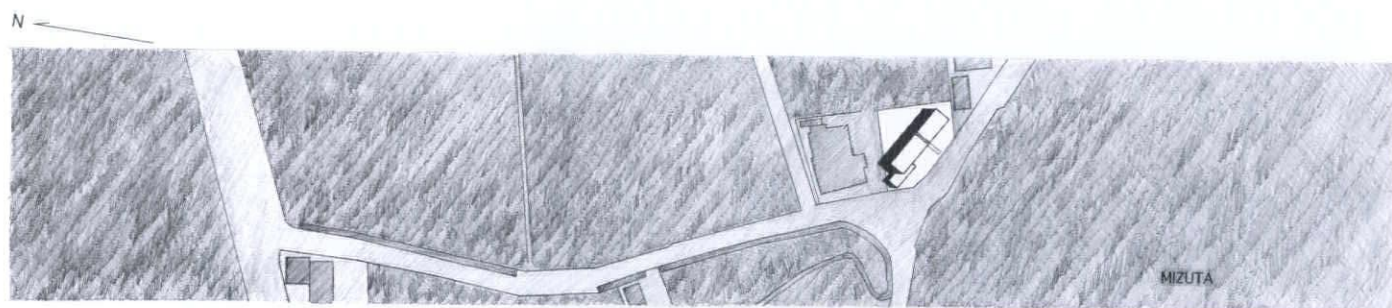
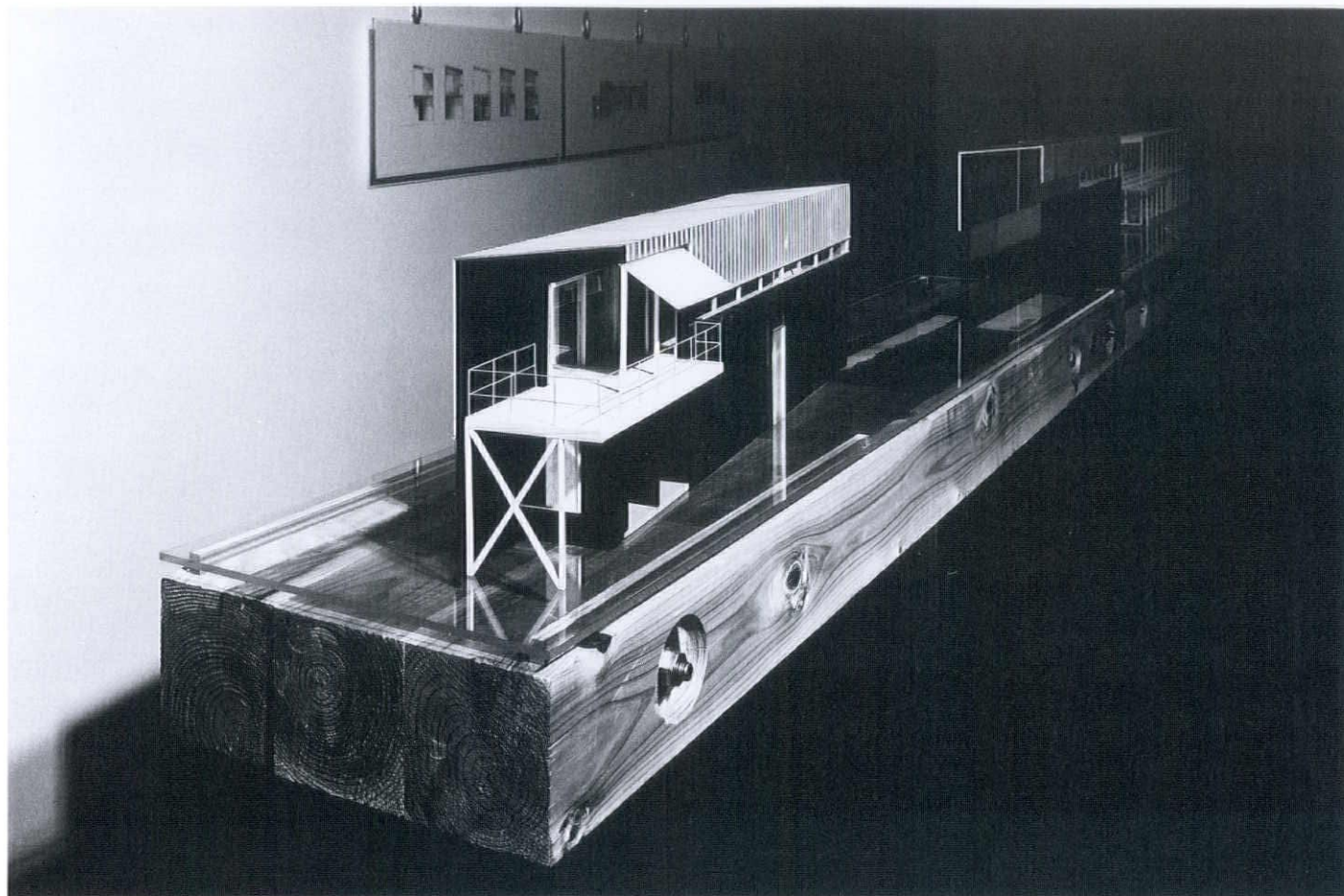
断面図 S=1:1000

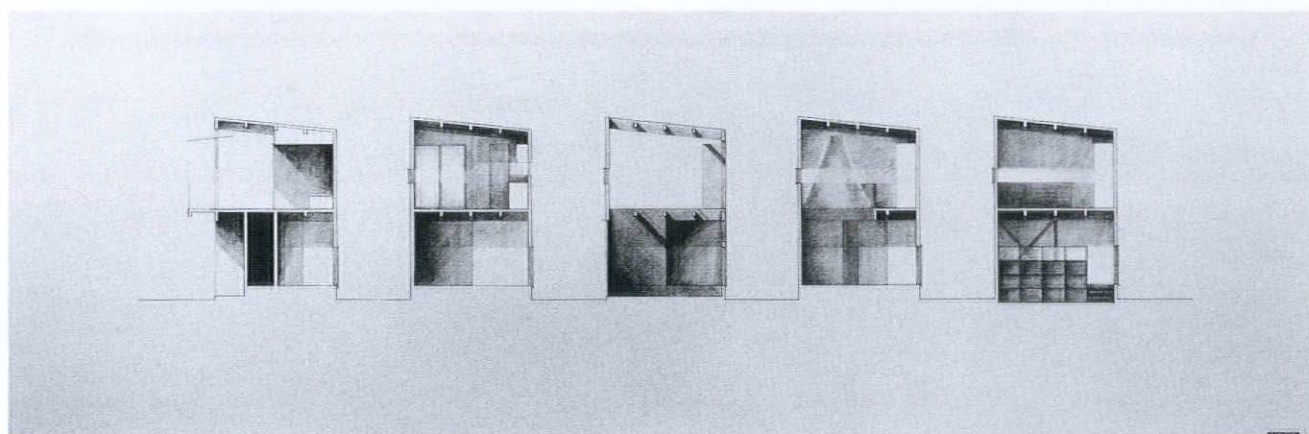
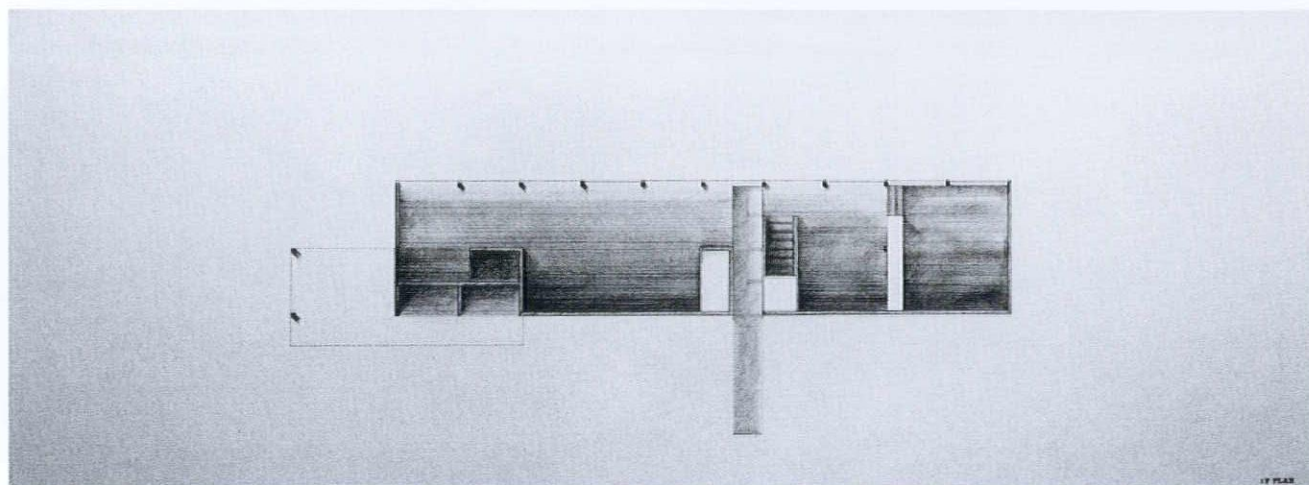
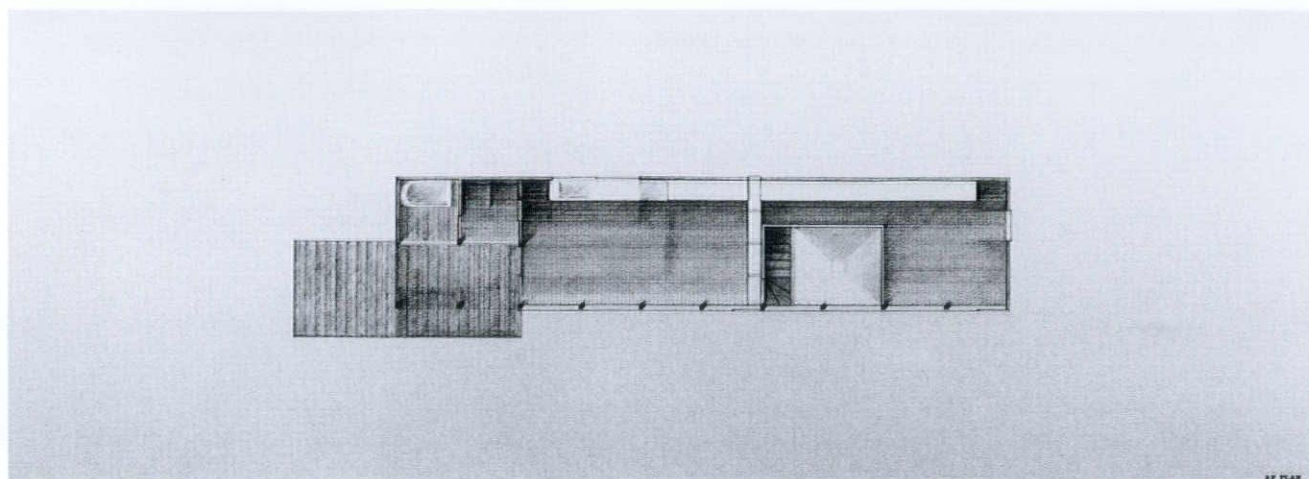


松本 明

Akira Matsumoto

I • HOUSE





香川の水田の風景はとても美しい。

もとより水の少ない土地柄の田に満面の水を張り、瑞穂が育ちゆく風景は、われわれに水の豊かなイメージを十分に与えてくれる。

季節が移り変わるにつれ、水田は様々に変化する。苗を植え、稲の収穫が終わるまで、穂は色を変え土や水、集まる昆虫や動物も変わっていく。

その変化に重ね合わせるように建物の内部は、断面構成と開口部によって様々に光が変化する。

テラスの軒下に反射する光。

水田の色を切り取る水平窓からの光。

スリット状の天空光がポリカーボネートの床を通して玄関におちる光。

吹き抜けた半透明のテントの中に拡散する柔らかな光。

庭を逆光で眺める1階の水平窓からの光。

……建物水田の中に漂うようにして建つ。

共同設計者：平昌子

協力：山隈直人、前田昌ヒロ

用途：専用住宅

所在地：香川県

主要構造：木造

主要仕上材：屋根＝銅板、外壁＝銅板、墨入モルタル

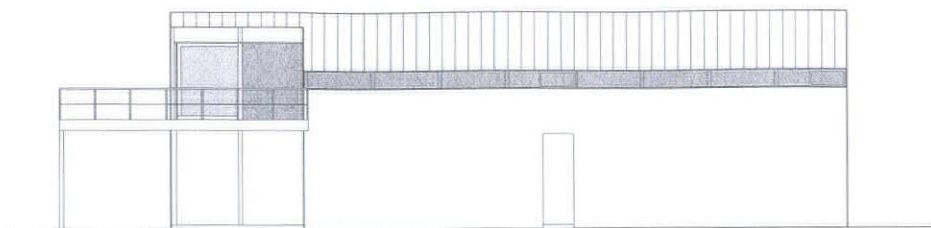
敷地面積：292㎡

建築面積：79㎡

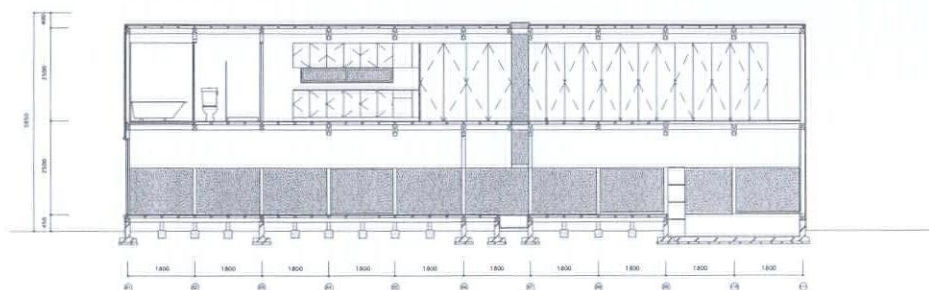
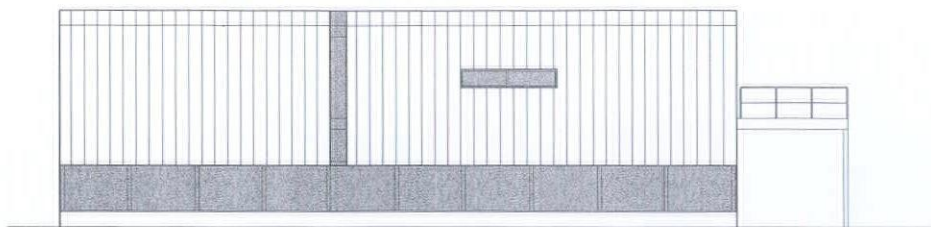
延床面積：123㎡

工事予定期間：1997年5月～9月

南側立面図 S=1:200

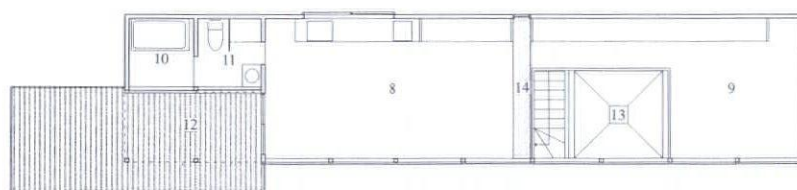


北側立面図 S=1:200

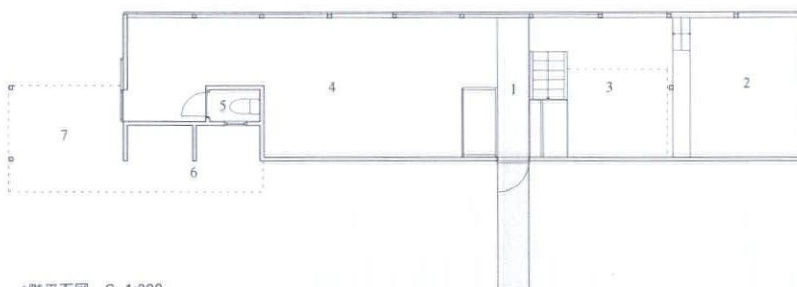


断面図 S=1:200

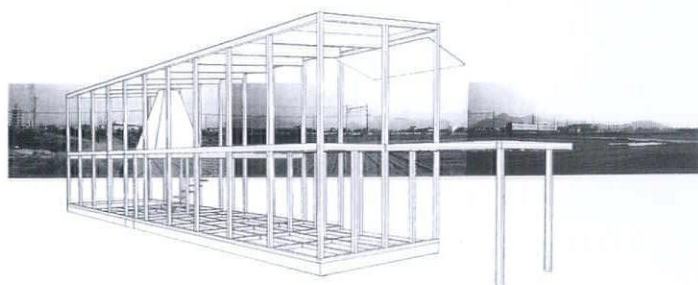
- 1: 玄関
- 2: アトリエ1
- 3: 洋室1
- 4: アトリエ2
- 5: WC
- 6: dogs
- 7: 駐車場
- 8: LDK
- 9: 洋室2
- 10: 浴室
- 11: 洗面
- 12: テラス
- 13: テント
- 14: 光床



2階平面図



1階平面図 S=1:200



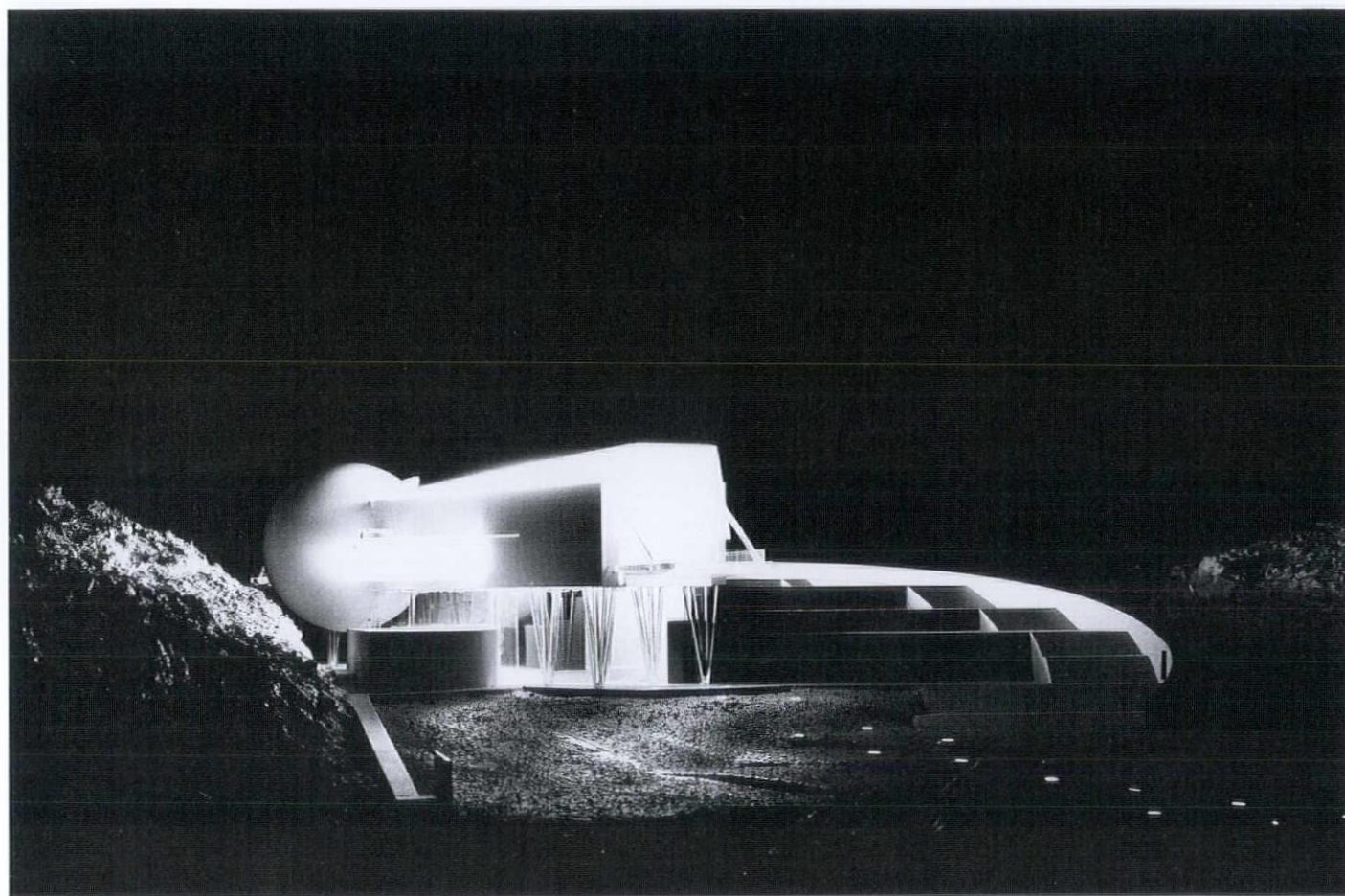
松本 明

1957年 香川県生まれ
 1983年 神戸大学大学院工学研究科修士課程修了
 1983年 小河建築設計事務所勤務
 浅井謙建築研究所勤務
 1994年 松本明建築研究所設立

大野 勝+境 静也+鉾岩 崇/佐藤総合計画

Masaru Ohno+Shizuya Sakai+Takashi Hokoiwa

佐賀県立宇宙科学館(仮称)



「宇宙から地球・佐賀を発見する」「佐賀から地球・宇宙を発見する」をテーマに、未来に向けての発見や創造の扉を開くことを目指した参加・体験型総合科学館である。

敷地は、満々と水をたたえる溜池を前方に望み、野鳥や昆虫の集まる多様な樹木に囲まれた小高い山の中に位置する。

その谷間を直線的に貫き南北の広場を結びつけるパッセージギャラリーは施設へのエントランスホールであるとともに、離着陸を待つスペースシップの滑走路となる。

宇宙展示部門からなるスペースシップは金属質な外皮を纏い、地球と月（プラネタリウ

ムと天文台）を背景にして、細く軽快なリズム感で並ぶ柱によって支えられ浮遊し、滑走路に濃い影を落とす。また、緩やかな弧を描きながら階段状に下りてくるステップギャラリーは、地球・佐賀発見ゾーンの屋根として構成され、その上に植えられた芝とともに新たなコンタを創り出し大地と同化する。

性格の異なるそれぞれの空間は3層吹抜けのスペースジャンクションによって機能的かつ視覚的にインテグレートされ、建物全体があたかも宇宙基地を想起させるほどの近未来的なフォルムとなって存在をアピールする。

協力者名：株式会社 ビュー(CG)、有限会社 ワーク(模型)

用途：科学博物館

所在地：佐賀県武雄市武雄町

主要構造：SRC造+S造

主要仕上材：外壁：VFRC(ビニル繊維補強コンクリート)、アルミスパンドレル、RC打放し/屋根：ステンレス屋根

敷地面積：33,500㎡

建築面積：6,630.33㎡

延床面積：8,294.03㎡

工事予定期間：1997年8月～1999年1月

大野 勝

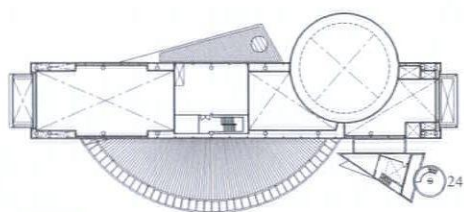
1950年 東京都生まれ
1972年 早稲田大学理工学部建築学科卒業
1974年 同大学大学院修士課程修了
株式会社佐藤総合計画入社
現在、同社取締役、設計技術系群設計担当

境 静也

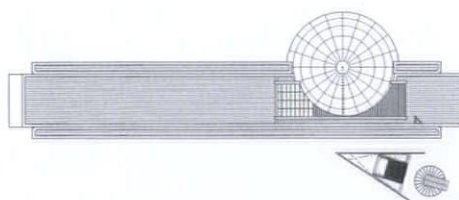
1956年 東京都生まれ
1978年 千葉大学工学部建築学科卒業
1980年 同大学大学院修士課程修了
株式会社佐藤総合計画入社
現在、同社設計技術系群設計部長

鉾岩 崇

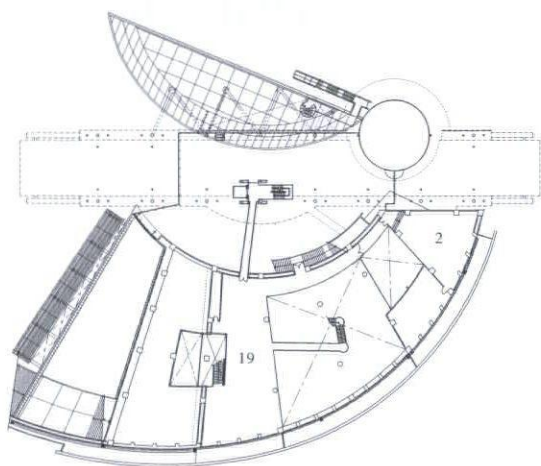
1964年 愛媛県生まれ
1988年 広島大学工学部建築学科卒業
1990年 株式会社佐藤総合計画入社
現在、同社設計技術系群設計主任



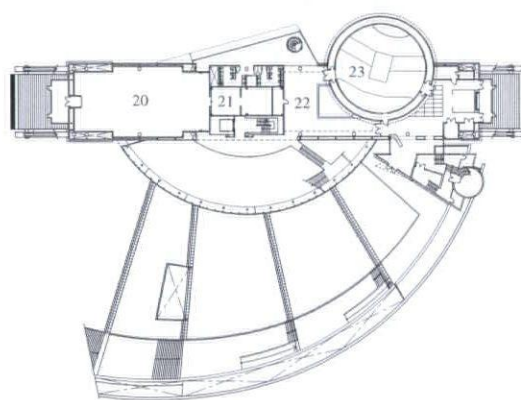
4階平面図



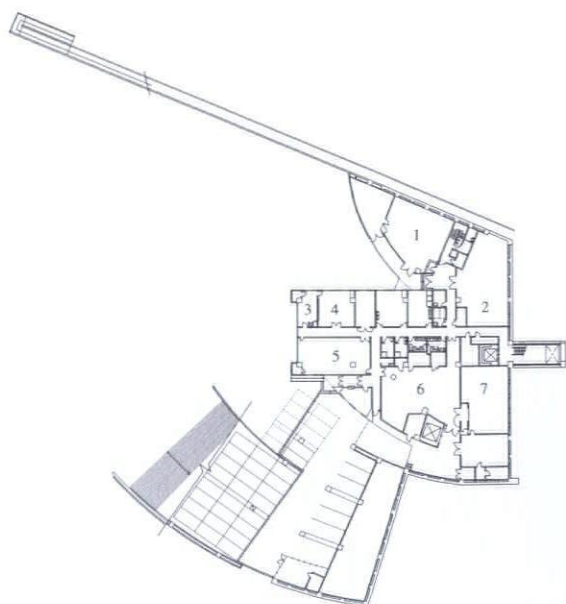
屋根伏図



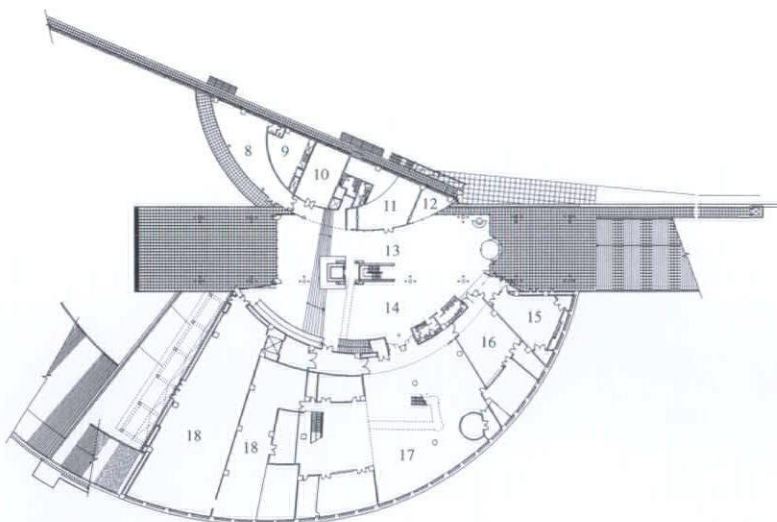
2階平面図



3階平面図



地下1階平面図 S=1:1500



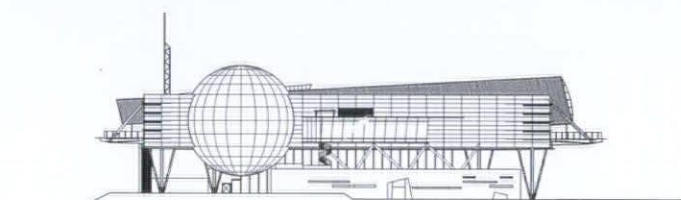
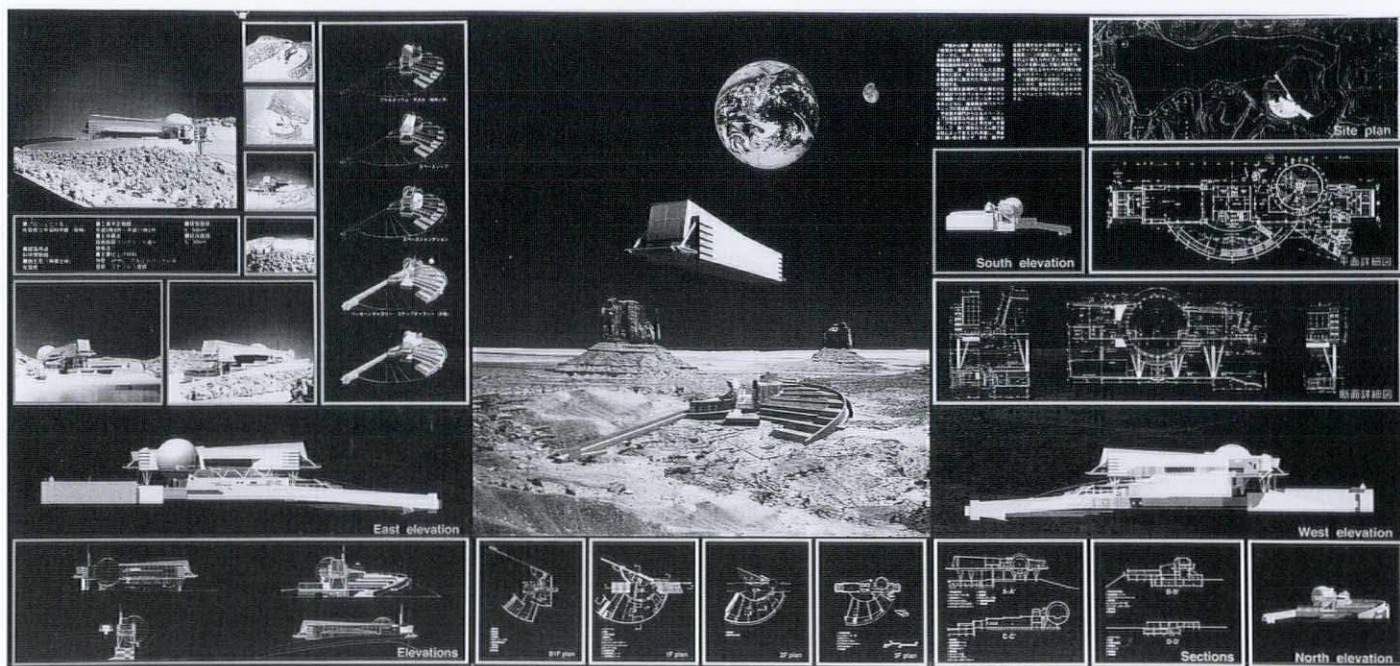
1階平面図

1: 電気室
2: 機械室
3: 館長室
4: 会議室
5: 事務室
6: 研究室

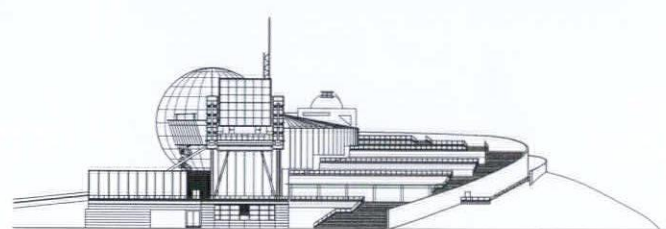
7: 標本庫
8: レストラン
9: 厨房
10: 子供の広場
11: 図書室
12: ショップ

13: パッセージギャラリー
14: スペースジャンクション
15: ガイダンス室
16: 企画展示室
17: 地球発見ゾーン
18: 佐賀発見ゾーン

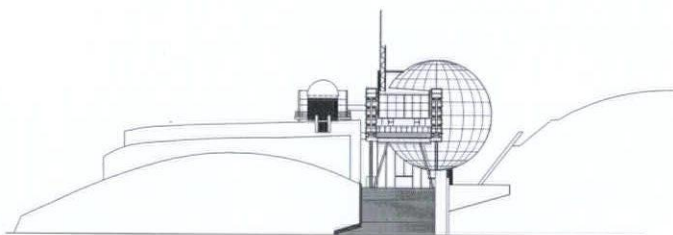
19: 科学の玩具箱
20: 宇宙展示室
21: シミュレーター室
22: 中央ロビー
23: プラネタリウム
24: 天文台



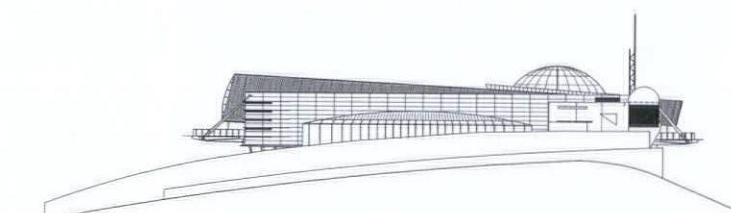
東側立面图



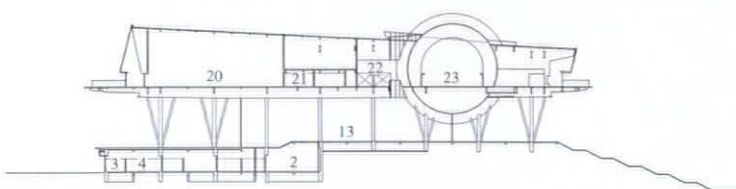
北側立面图



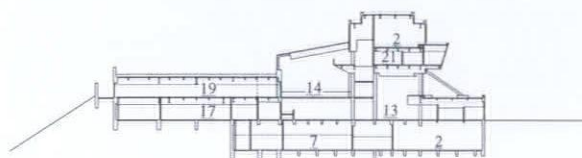
南側立面图



西側立面图



断面图



金子泰洋

Yasuhiro Kaneko

M邸

このプロジェクトは、横浜市郊外にある小高い丘の上に計画されたものである。東面に全面道路をもつ新興住宅の一画で、周辺は隣家に囲まれている。ほぼ12m角の敷地は、東側前面道路から4m、そして西側隣地へ4mと擁壁上に高くなっている。また南北の敷地とはフラットにつながっている。

ここに夫婦のための「生活空間／シェーマ」とアースワークアーティストである御子息のための「活動空間／キャンパス」が要求された。これらをプログラムとし144㎡という平面に展開させていった。

夫婦ふたりが過ごす「生活空間／リビング・ダイニング」とそのプライバシーの確保、そしてアースワークアーティストのための「キャンパス／大地」をいかに構築し、これら異なるプログラムをひとつの気積として共存させるかがテーマであった。

この計画のソリューションとして

現状地盤面である前面道路より4m高いレベルを基準とし、敷地を地下方向に12m掘り下げ、12×12×12mの量塊として新たに敷地を見立てた。その量塊を東西方向に3等分し、中央部を南北方向に伸びたパティオとし、これによりふたつの異なるライフスタイルを断面的に分割した。

これを媒介としたふたつの乖離するミリューが共有し干渉しあう「大地／アースワーク」が創造された。

共同設計者：村上まみ、倉田吉見、沢野誠、野中ツトム

用途：一戸建ての住宅（専用住宅）

所在地：神奈川県横浜市金沢区

主要構造：鉄筋コンクリート造

主要仕上材：5種類の玉砂利を骨材に混入したコンクリート打ち放し、青銅板、アルミカーテンウォール、天然石舗床等

敷地面積：144.5㎡

建築面積：45.5㎡

延床面積：143.8㎡

工事予定期間：1998年8月～1999年5月

金子泰洋

1968年 横浜市生まれ

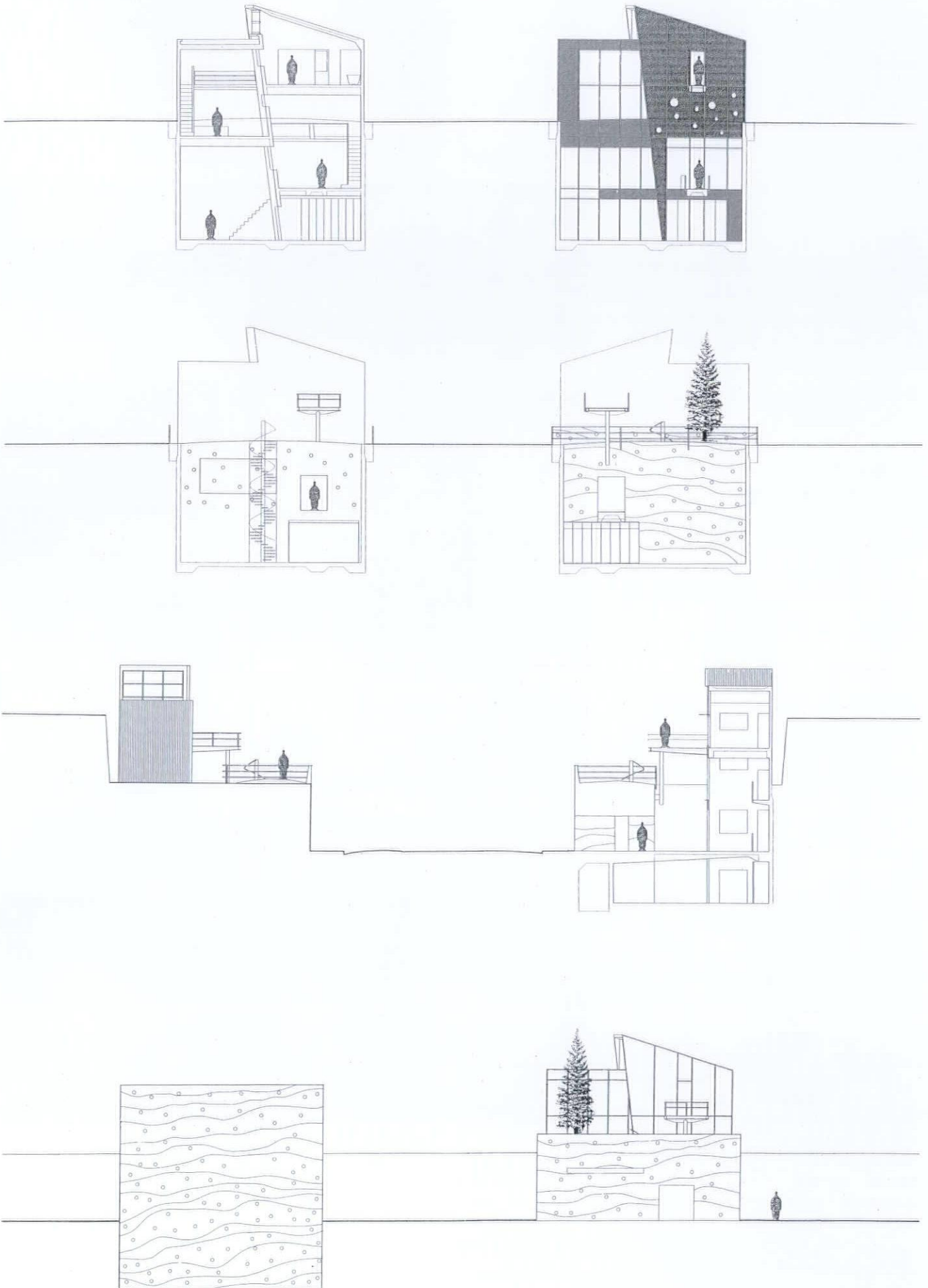
1990年 関東学院大学卒業、関 和明に師事

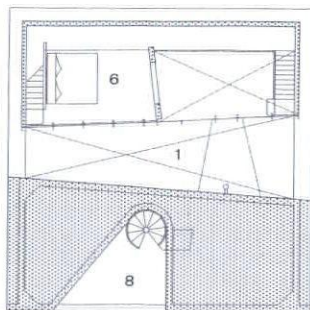
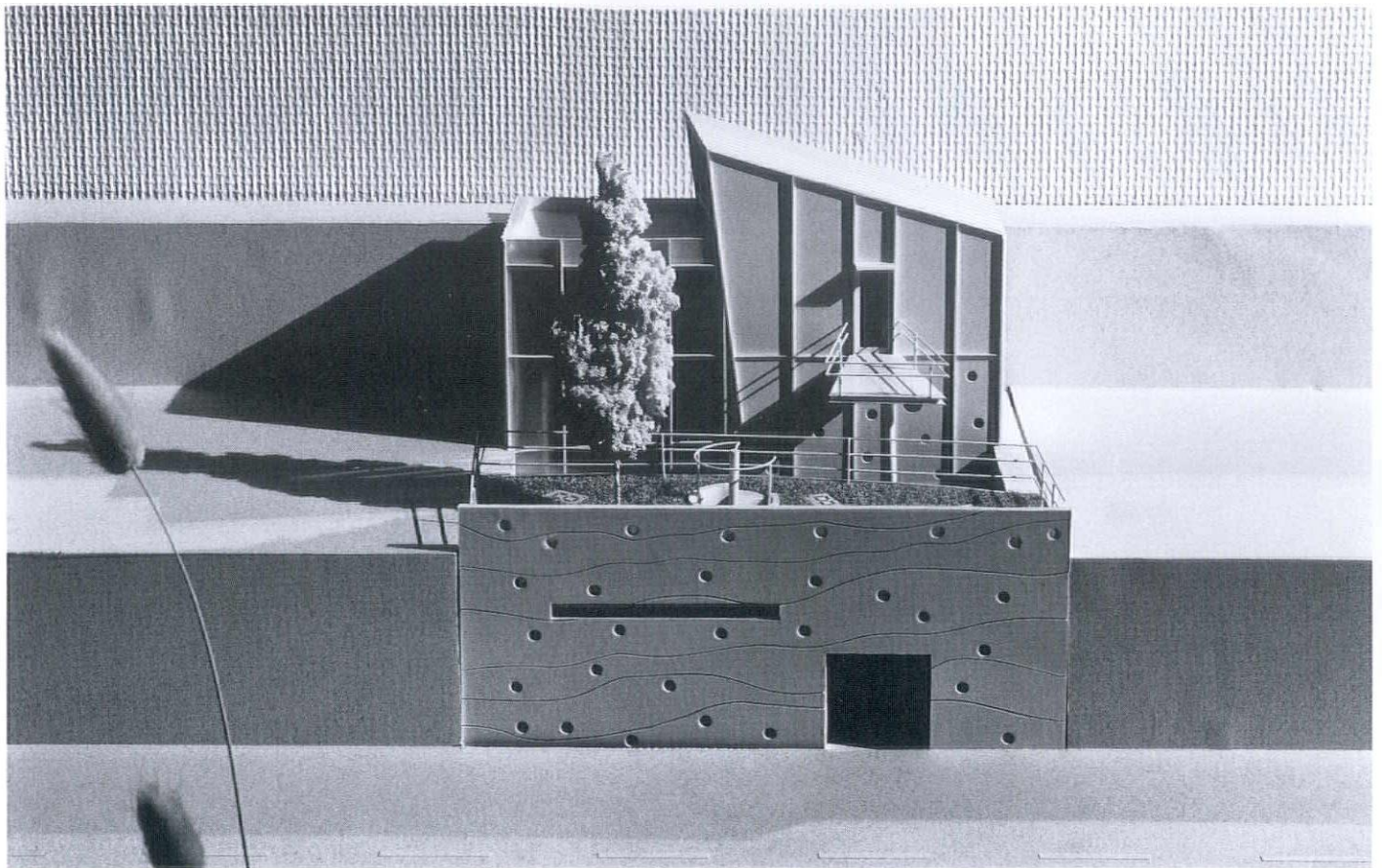
1990-95年 北川原 温建築都市研究所

1996年 Studio K設立

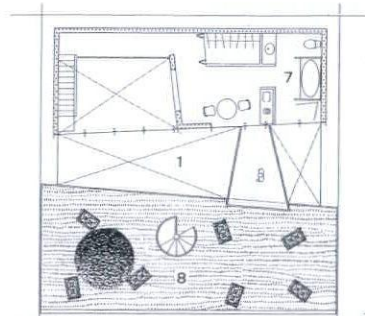
1997年 村上まみ等とSK+BBJ級建築士事務所共同設立



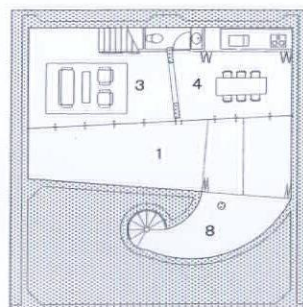
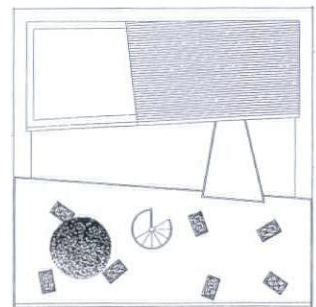




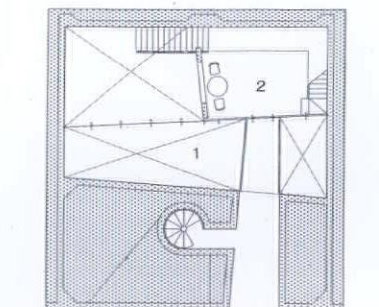
1階平面図



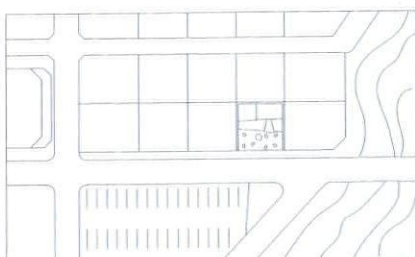
2階平面図



地下2階平面図 S=1:200



地下1階平面図

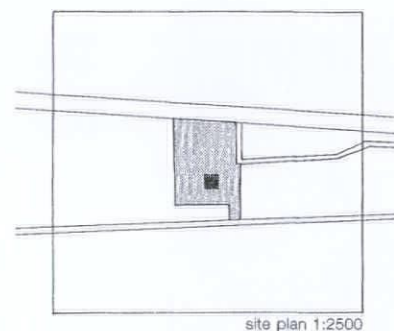
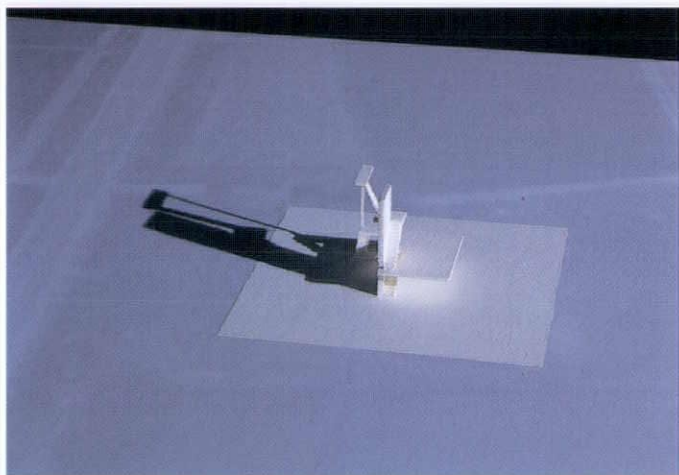
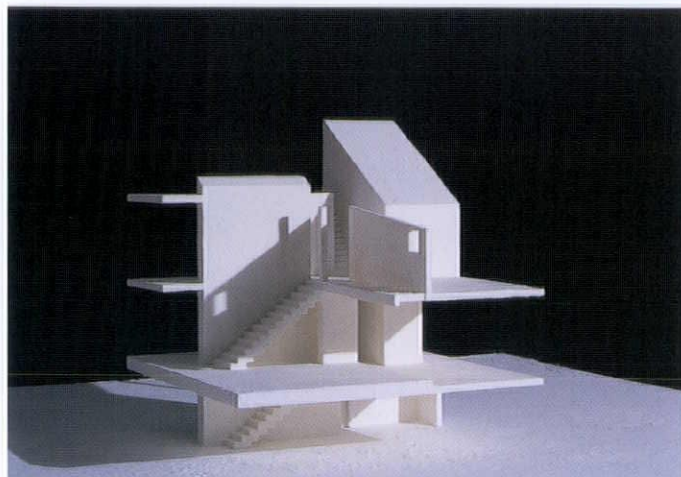
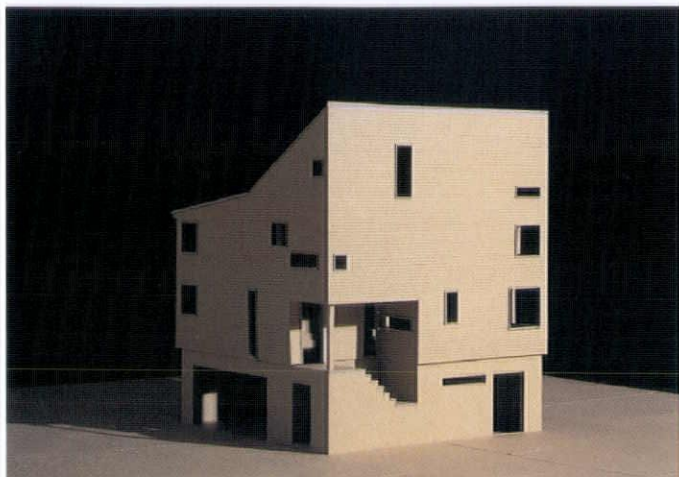


配置図

松澤 穰

Minoru Matsuzawa

衛の家





立面図 S=1:150

きっかけ

遠く大雪山・十勝岳を望む、北海道らしいのびやかで、しかし拠り所のない大柄なここ特有のランドスケープの中、北限の水田に囲まれた敷地。2棟の廃屋と背丈の2倍程の雑木の一叢が残る。

水平に横たわる北海道の大地の面に対して、螺旋を描きながら上昇する垂直性を持つ空間を交点としてここに定め、強い殻ですっぽりと封じる。そして土地と人との営みが対等に語られ始める。

自然条件

年間の気温差が60度を越える。雪は1m程の非常に軽い質のものが積もる程度。冬の季節風、強し。

かたち

雪の白さに負けず、夜、闇に沈み窓々だけが踊るような黒いかたち。落雪型とし、軒の出

を最小限に抑え、凹凸のないコンパクトなたち。

表面積を少なくし、厳しい自然条件に備える。今なお道内に残る屯田兵屋という、明治期の掘建て小屋の孤独なたたずまい。これが模範である。

構成

2台分の駐車および諸設備を1階に、居住空間を2階以上とした。2階には土間を設け、冬期間の貴重な乾いた土地として機能し、夏のための外階段と積雪期のための内階段、そのふたつの動線を導く。

内部

大黒柱を巡る垂直性をそのままに、構成する線の数々を整理し白い面に還元し、他は消え去ってしまう。窓の景色と水平の居場所だけが残る。

共同設計者：柏原和子（構造）、武山倫（設備）

協力：益子義弘、テシコビルネス

用途：専用住宅

所在地：北海道上川群美瑛町

主要構造：RC+木造

主要仕上材：外部：屋根＝金属板、壁＝RC打放、縁甲板下見張、内部：壁・天井＝左官系塗料、床 木質系フローリング

敷地面積：2,561㎡

建築面積：81㎡

延床面積：196㎡

工事予定期間：1997年10月～1998年8月

松澤 稔

1963年 東京都生まれ

1986年 東京芸術大学建築科卒業

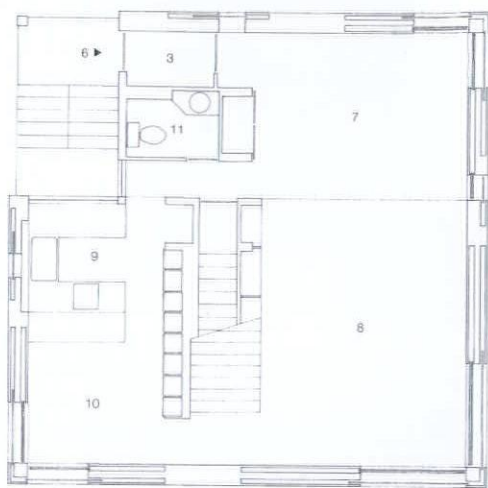
1990年 東京芸術大学建築科大学院卒業

ウィーン応用美術大学留学（オーストリア政府給費生）

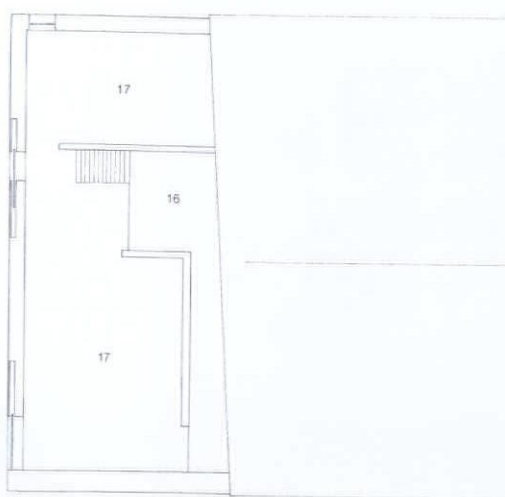
1990-94年 東京芸術大学建築科助手

1994-96年 多摩美術大学建築科非常勤講師

1996年- 同大学専任講師

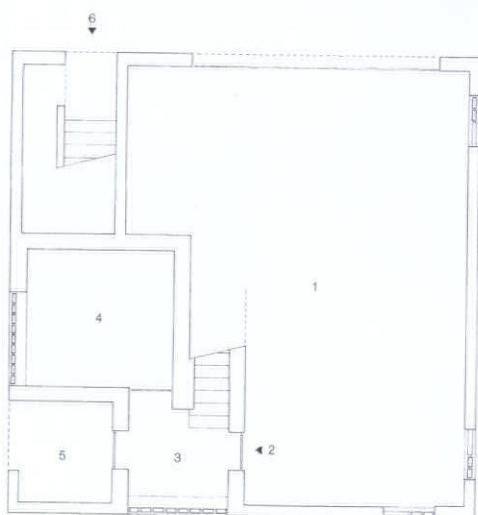


3階平面図

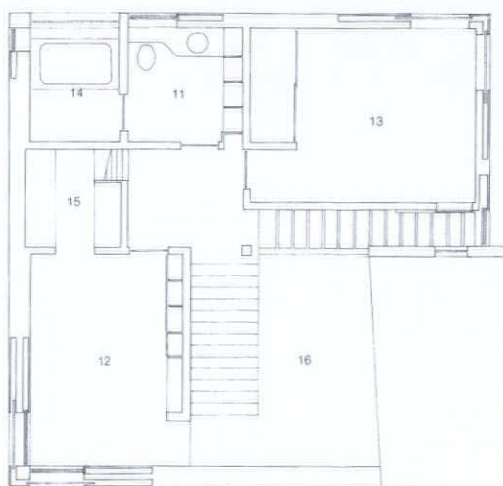


4階平面図

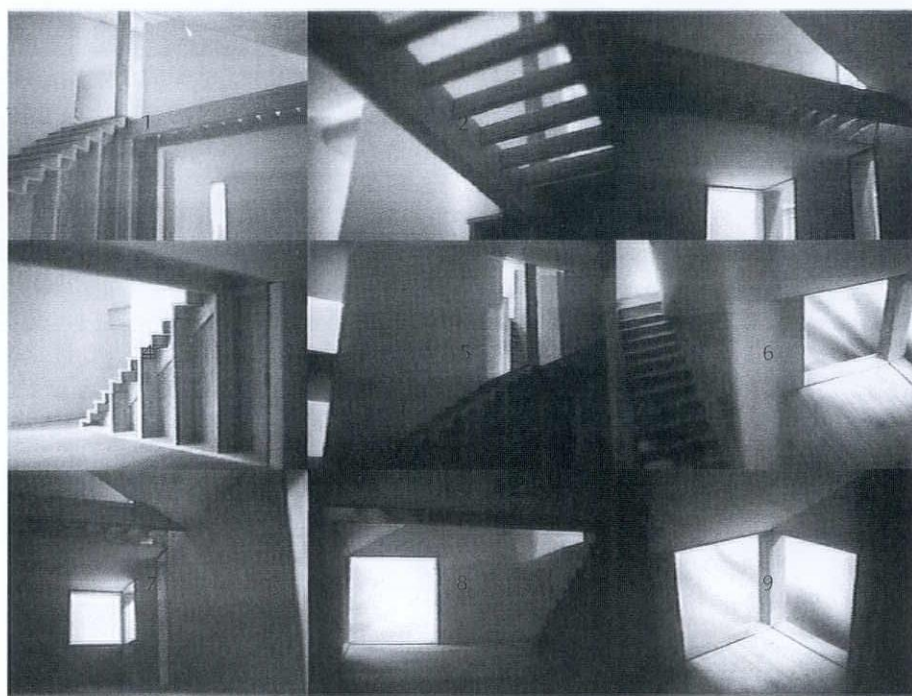
- 1 : Garage
- 2 : Service entrance
- 3 : Wind break room
- 4 : Boiler room, Drying room, Washing room
- 5 : Fuel room
- 6 : Entrance
- 7 : "Doma" space
- 8 : Living room
- 9 : Kitchen
- 10 : Dining
- 11 : Lavatory
- 12 : Master bedroom
- 13 : Bed room
- 14 : Bath room
- 15 : Cloak
- 16 : Void
- 17 : Attic



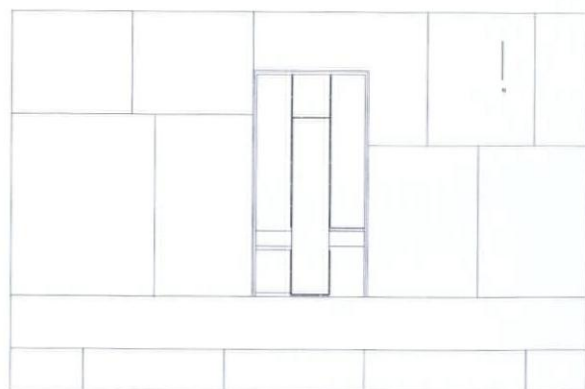
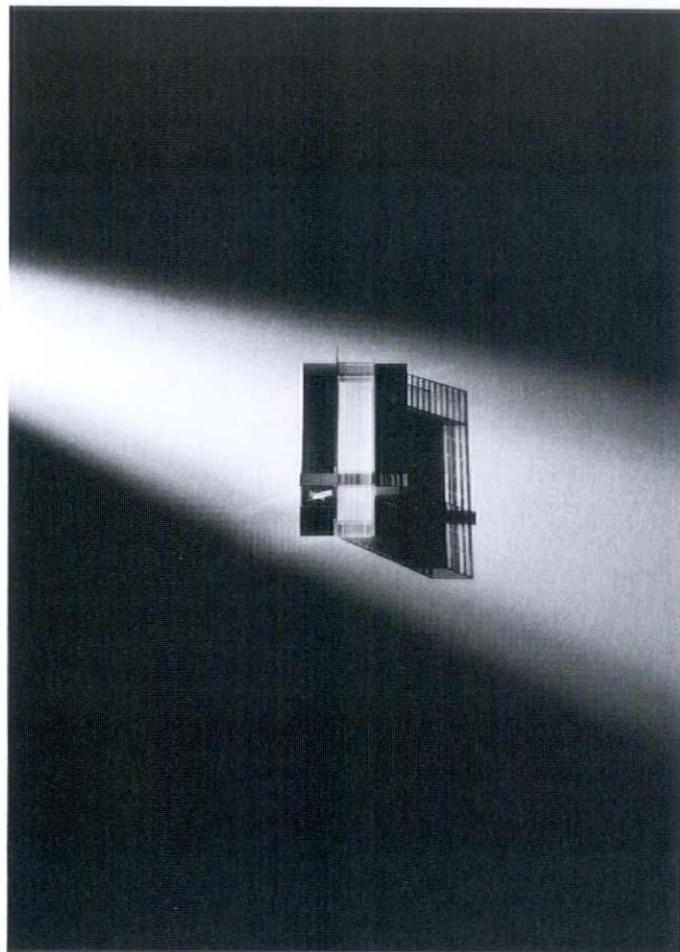
1階平面図 S=1:150



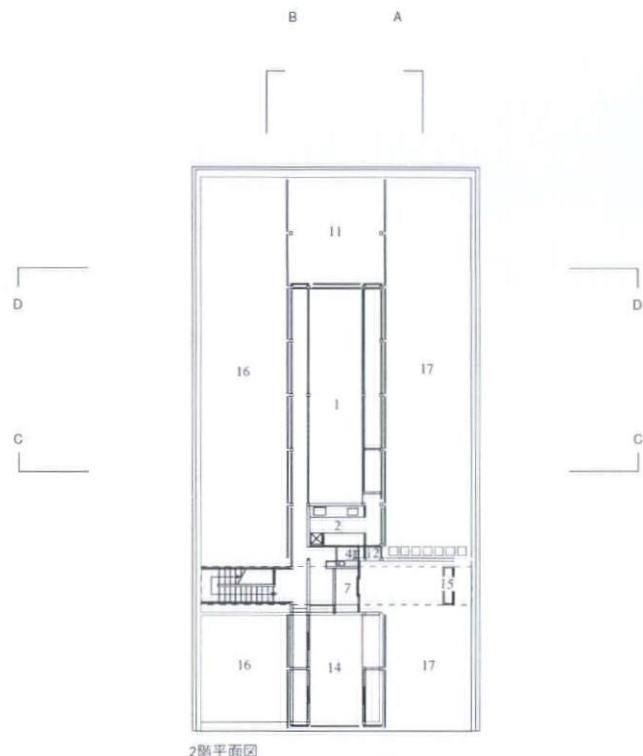
2階平面図



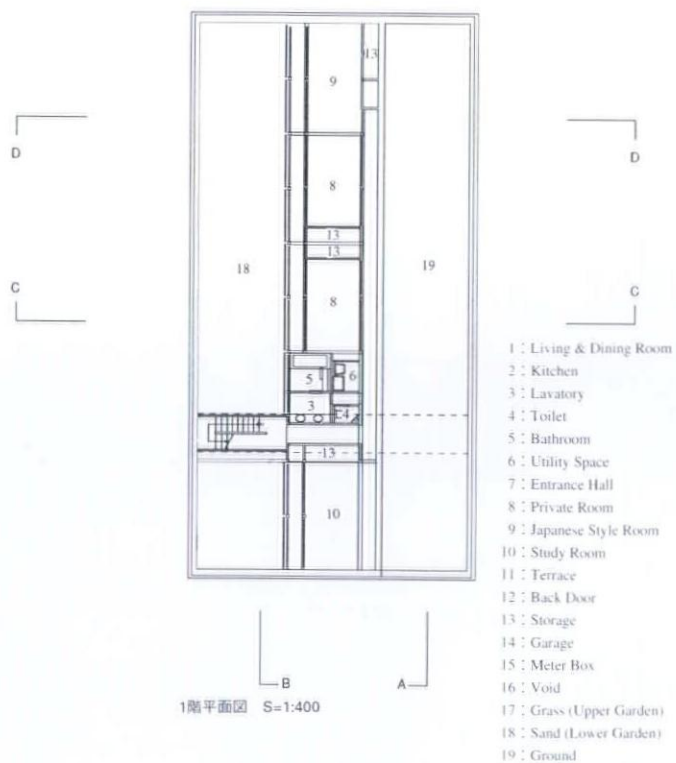
Triplet



配置図 S=1:1000



2階平面図



1階平面図 S=1:400

- 1: Living & Dining Room
- 2: Kitchen
- 3: Lavatory
- 4: Toilet
- 5: Bathroom
- 6: Utility Space
- 7: Entrance Hall
- 8: Private Room
- 9: Japanese Style Room
- 10: Study Room
- 11: Terrace
- 12: Back Door
- 13: Storage
- 14: Garage
- 15: Meter Box
- 16: Void
- 17: Grass (Upper Garden)
- 18: Sand (Lower Garden)
- 19: Ground

Triplet…3で構成された家

提案は、3つの主旨を基として構想されている。

1. 形象が語り過ぎず、単純かつ簡素な構成でありながら豊かな様相を可能とする住居
2. ヴォリュームを強調しない接地性の高い住居
3. 生活に庭が、積極的に取り込まれ、その恵みを本受できる住居

3つのゾーン

敷地は、単純に3等分される。隣地に接するゾーンを庭とし、ふたつの庭の間のゾーンを居住部分とする。このゾーニングは、間口15m×奥行30mのやや細長いプロポーションを持つこの敷地において先述の3つの主旨を最も効果的に具現するものとして選択された。ふたつの庭は、22層からなる住居部分の性格と連動しつつそれぞれ特色ある様相が付与され異なるレベルに配されている。上の庭を草の庭、下の庭を砂の庭とした。(Fig.1)

3つの境界素

庭と住居部を隔てる境界は、3つの境界素からなる。それぞれの境界素は、光のコントロール、機能、材料、開閉方式が異なり、開閉による様々な組み合わせによって、多様な境界が構成される。(Fig.2)

境界素1：殻…光の拡散…侵入者、風雨など
 によ飛来物からの保護…木製ルーバー…突き出し

境界素2：皮…光の透過…防水、遮音、断熱
 …透明フロートガラス入りスチールサッシュ…引き違い

境界素3：膜…光の浸透…視線からの保護、
 および間仕切り…障子…引き違い

協力：模型製作 川人督代(1次)、細田隆之(2次)

用途：個人住宅

所在地：徳島県小松島市

主要構造：S造、一部RC造

主要仕上材：外壁：防腐剤含優木板張の上 可動木製ルーバー／主要開口：透明フロート、ガラス入りスチールサッシュ

敷地面積：450㎡

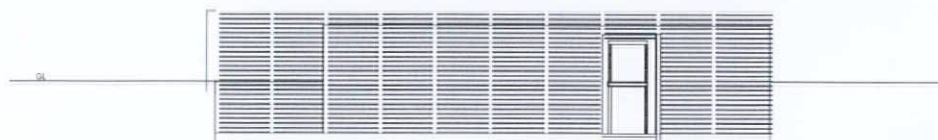
建築面積：195㎡

延床面積：345㎡

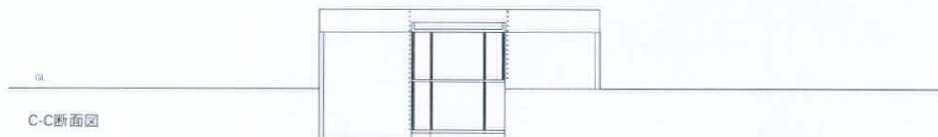
工事予定期間：1998年1月～1998年6月



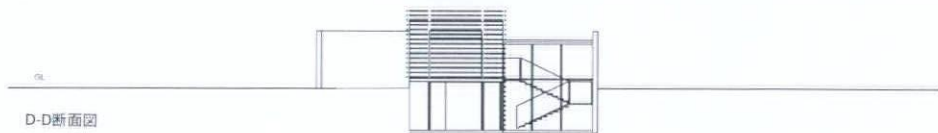
A-A断面図



B-B断面図



C-C断面図



D-D断面図



北側立面図 S=1:400

川人洋志

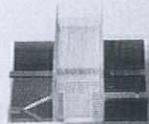
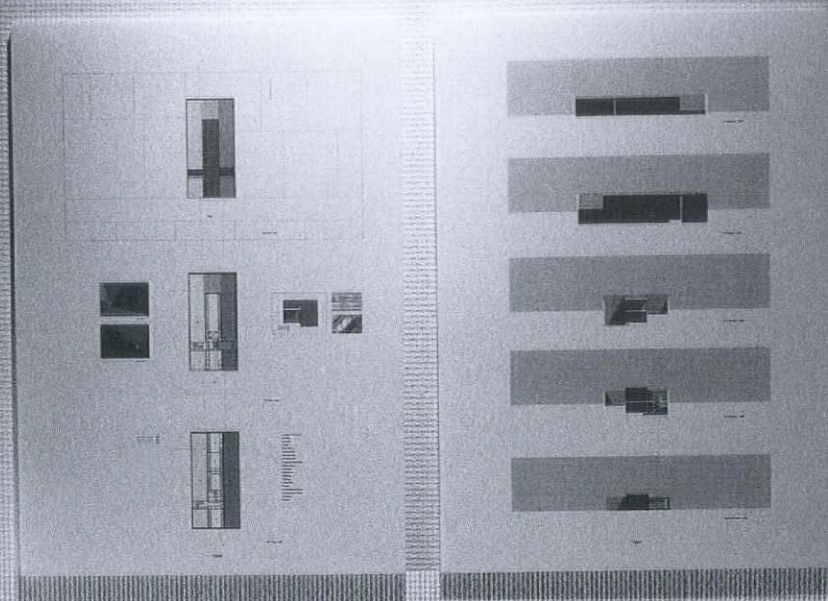
1961年 徳島県生まれ

1984年 京都大学工学部建築学科卒業

1986年 京都大学工学部建築学科修士課程修了

清水建設入社

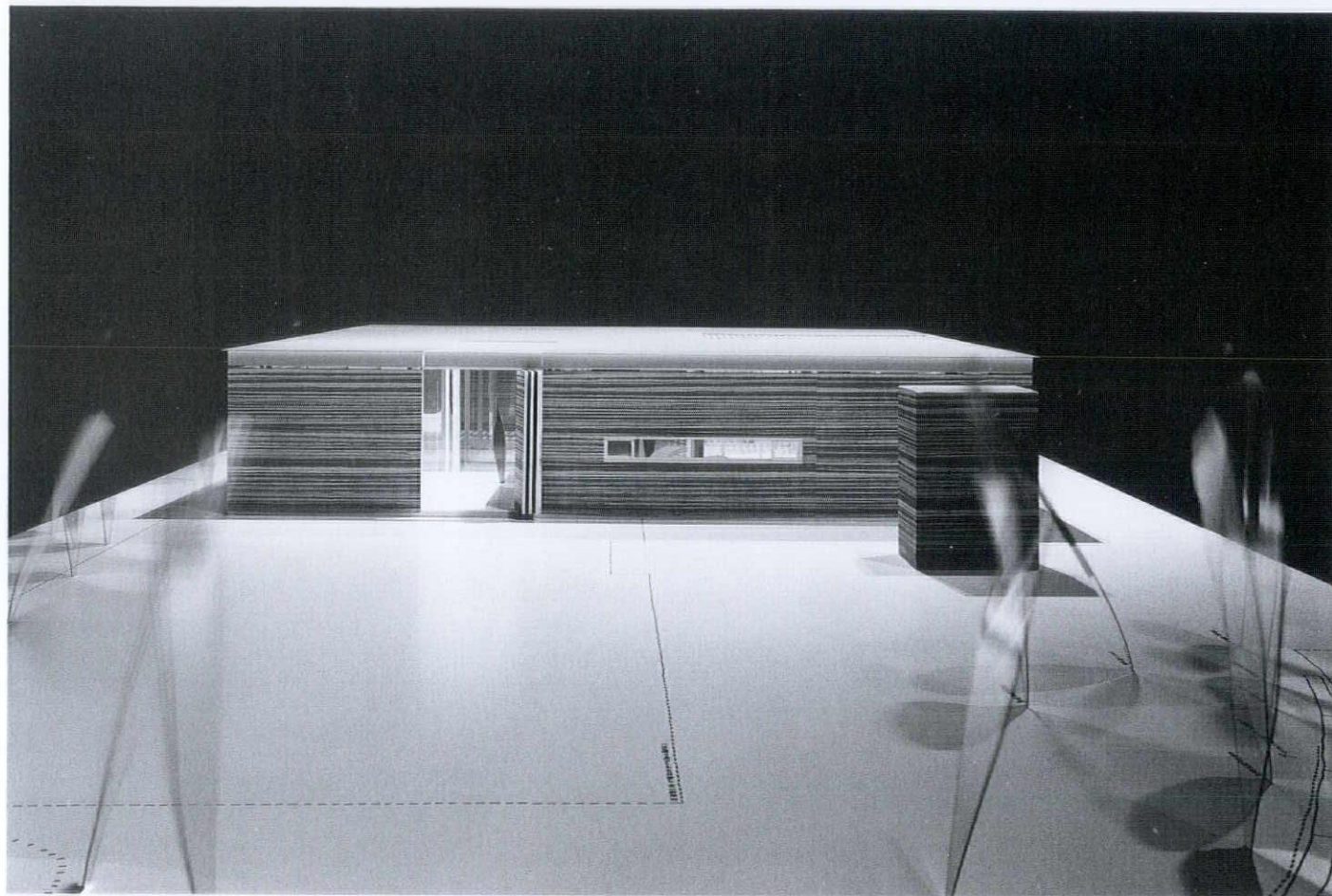
現在、清水建設設計本部勤務



西沢立衛

Ryue Nishizawa

ウィークエンドハウス



立面図 S=1:200

西沢立衛

1966年 東京都生まれ
 1990年 横浜国立大学大学院修了
 1990年 妹島和世建築設計事務所入所
 1995年 妹島和世と共同設計
 1997年 西沢立衛建築設計事務所設立
 1997年 横浜国立大学非常勤講師

本計画は、東京から車で約1時間ほどの地方に建つ、週末住宅である。敷地は、山間を走る高速道路のインター近くの集落の中に位置している。ここはクライアントが生まれ育った地でもあり、彼女は出生地であるこの地で、再び週末を過ごすことができる簡単な住宅を望んだ。要望としては、週末の別荘であると同時に、画家である娘の作品を展示できるような、プライベートなギャラリーにもなるスペースが望まれている。

周辺に人気がないことから、セキュリティ上あまり窓を多く持たない建物を望まれたので、全体の構成としては、窓の少ない正方形平面の低いボリュームを立ち上げ、要求された個室ふたと和室、リビング等を3つの光庭によって分け、室内の各スペースは、この3つの光庭から主な採光を得ている。

平面は、和室や個室、キッチン、暖炉スペース等の各機能を2.4m×2.4mの基本ユニットに対応させて、このユニットが均等に反復して広がってゆくことで、全体が曖昧につながってゆくような、大きなスペースを得ている。人が使用しないときには個室等の建具が開放され、平面全体が住まいのようなギャラリーのようなスペースとして使用できる平面を意図している。

共同設計者：アラン・バーデン(構造設計)、システムデザイン研究所(設備設計)

協力：岡田公彦

用途：週末住宅

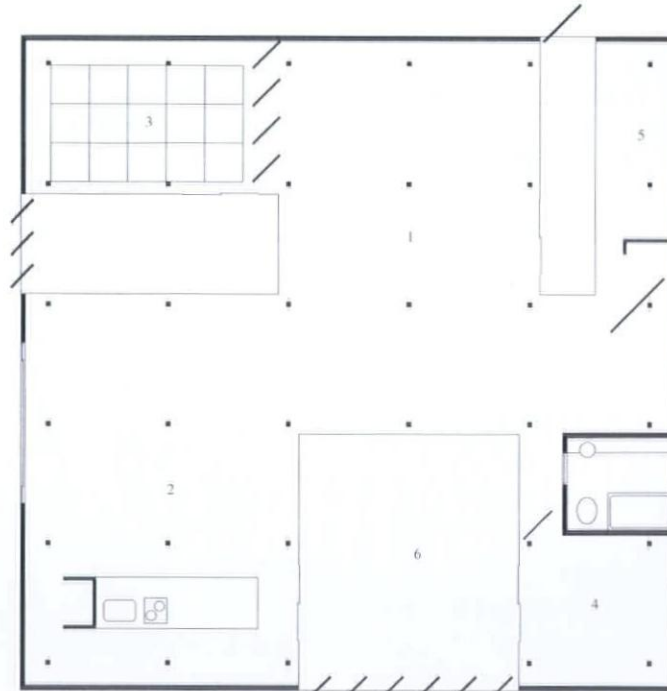
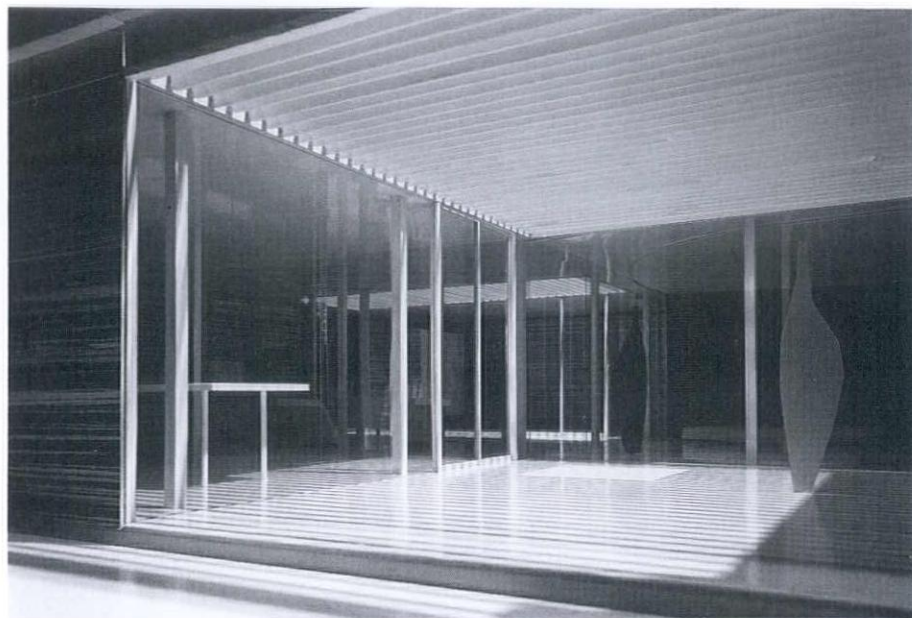
所在地：群馬県碓氷郡

主要構造：木造

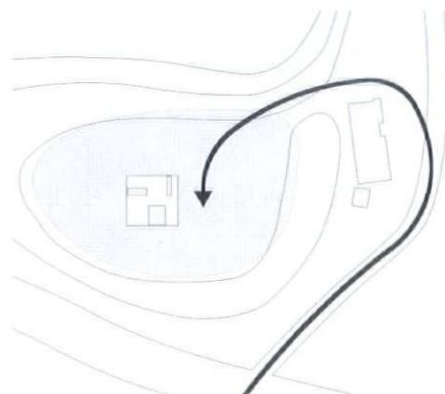
建築面積：134.79㎡

延床面積：134.79㎡

工事予定期間：1997年9月～



- 1: ロビー
- 2: リビング
- 3: 和室
- 4: 個室1
- 5: 個室2
- 6: 光庭

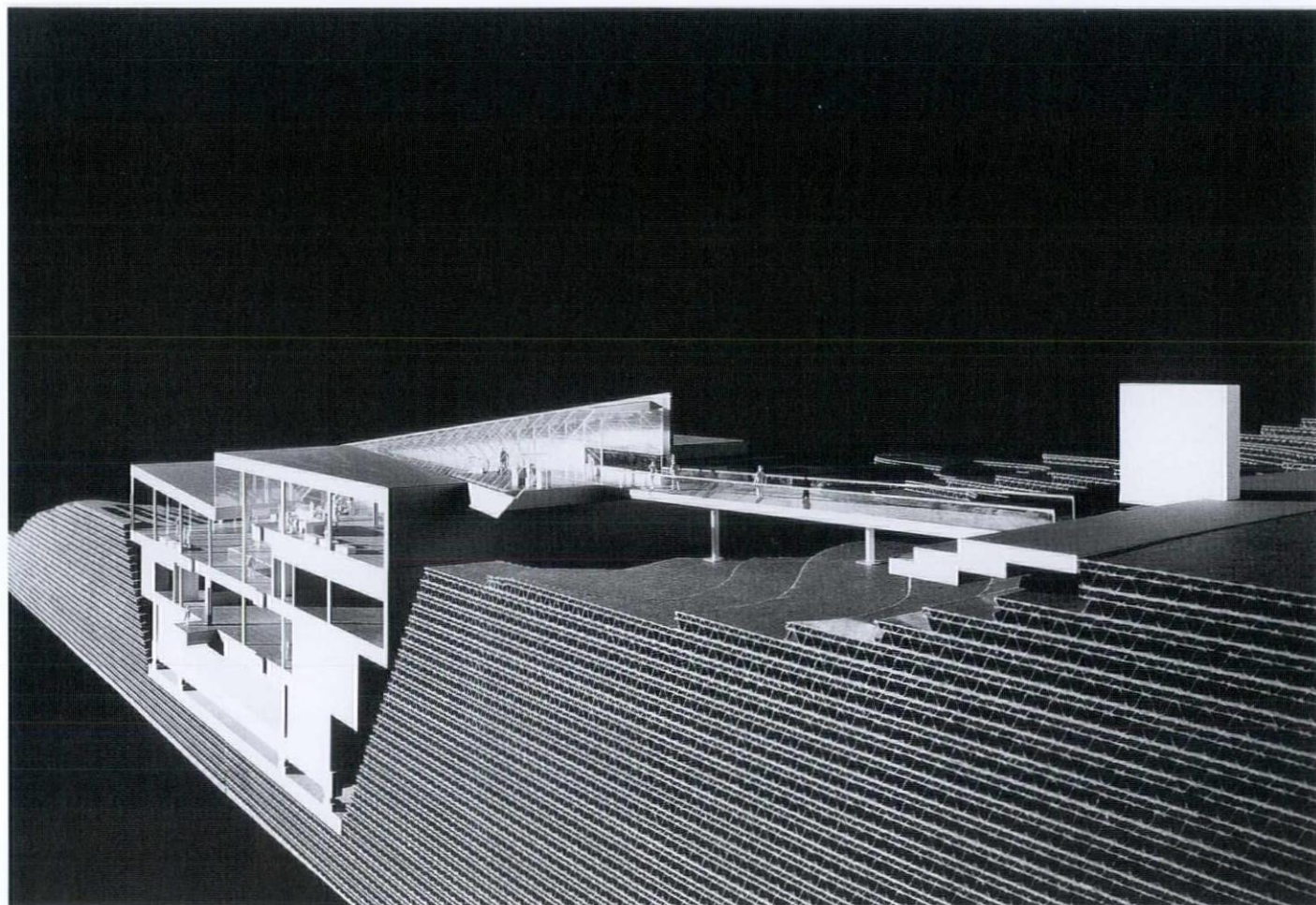


配置図 S=1:2000

三浦明彦＋安田幸一＋神成健＋北川啓一／日建設計

Akihiko Miura + Koichi Yasuda + Ken Kannari + Keiichi Kitagawa / Nikken Sekkei

ポーラ箱根美術館



コレクションは、フランス後期印象派とエコール・ド・パリを中心とした絵画と陶器、工芸品、化粧道具等多岐に渡り、これらと自然とのかかわり合いを設計のテーマとした。

計画地は、国立公園内箱根仙石原の小塚山のふもとに位置し、樹齢300年のブナの巨木やヒメシャラ群生等に特徴づけられる林の中にある。植物生態系を損なうことなく、水みちである谷やブナを保存しながら、自然と建築が共存する様々な手法を試みている。前面道路から40m程離れた位置に直径74mの円形壕を掘り、底盤レベルの免震ゴムによって支持された美術館とした。円形壕は、地下の水脈系を分断せず、また土圧に対して高い安全性を確保する。また免震構造で建築を浮かせるこ

とで、将来に渡ってすべての部位にアクセサブルな永久メンテナンス建築をめざした。緩やかな傾斜地にあって高さを8mに抑えた建物は、高さ約20m程の樹間に隠れ、周囲からはほとんど見えることなく佇んでいる。

来館者は林の中をかけ渡された細く長いアプローチブリッジで、ガラスのエントランスへと導かれ、最上階からエスカレーターでロビーフロア、展示フロアへと順次降りていく。

館の中心を貫く光に包まれた空間は、空の青と森の緑に溢れ、素晴らしい美術品との出会いを予感させる場所でもある。

三浦明彦

1939年 京都府生まれ
1962年 京都工芸繊維大学工学部建築工芸学科卒業
日建設計入社
1983年 同社設計部長
現在、理事、設計室長

安田幸一

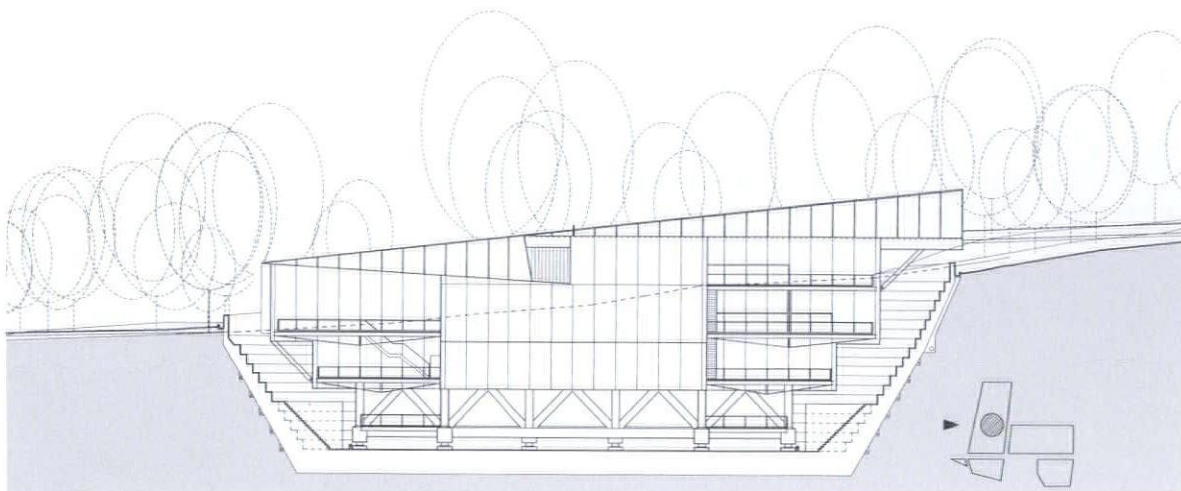
1958年 神奈川県生まれ
1983年 東京工業大学大学院修了
日建設計入社
1987年 バナード・チュミ・アーキテツ勤務
1989年 イェール大学建築学部大学院修了
現在、設計主管

神成健

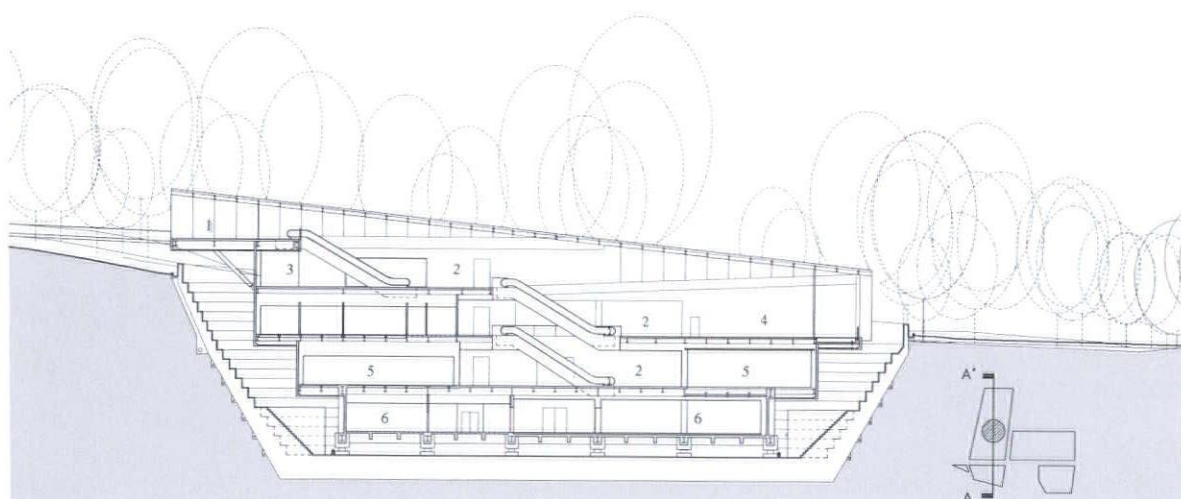
1961年 宮城県生まれ
1986年 東京理科大学大学院修了
日建設計入社

北川啓一

1963年 兵庫県生まれ
1989年 工学院大学大学院修了
日建設計入社

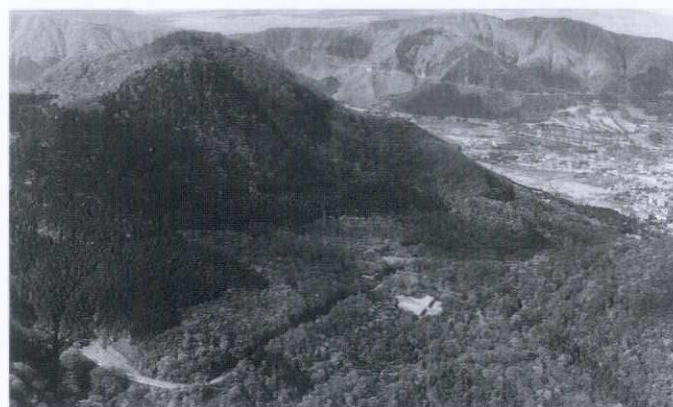


北側立面図 S=1:200

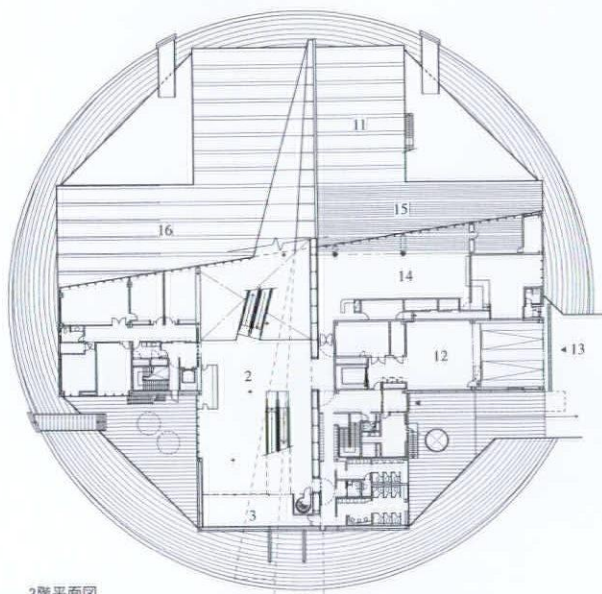


A-A断面図 S=1:800

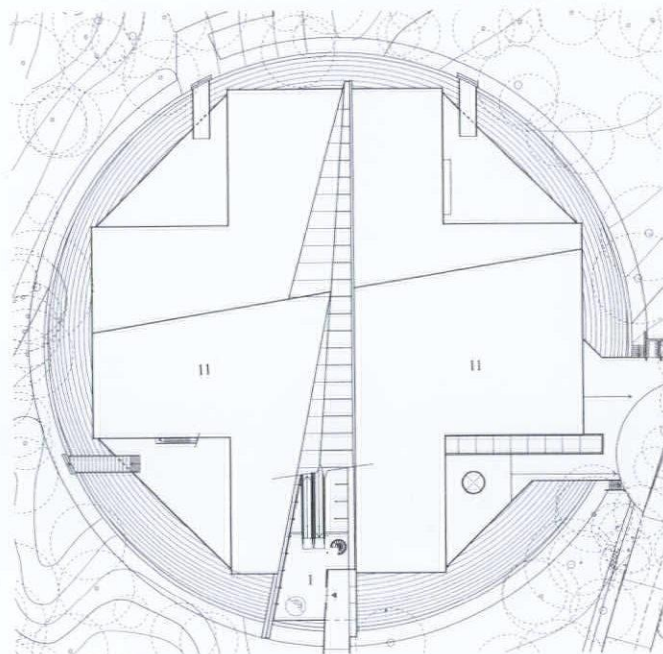
- 1: エントランス
- 2: ロビー
- 3: ミュージアムショップ
- 4: カフェ
- 5: 常設展示室
- 6: 収蔵庫



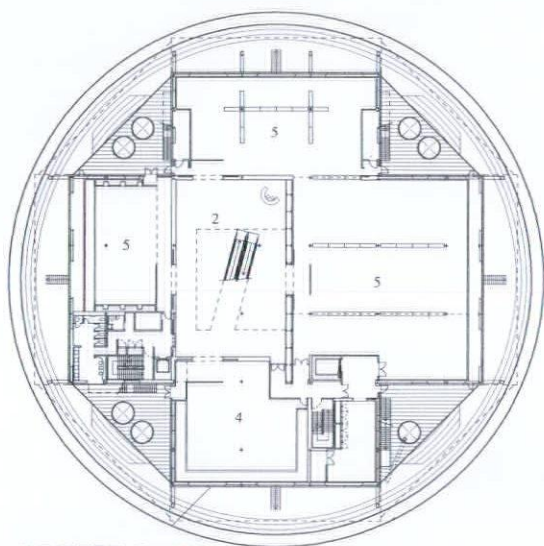
合成写真=山賀孝裕/日建設計



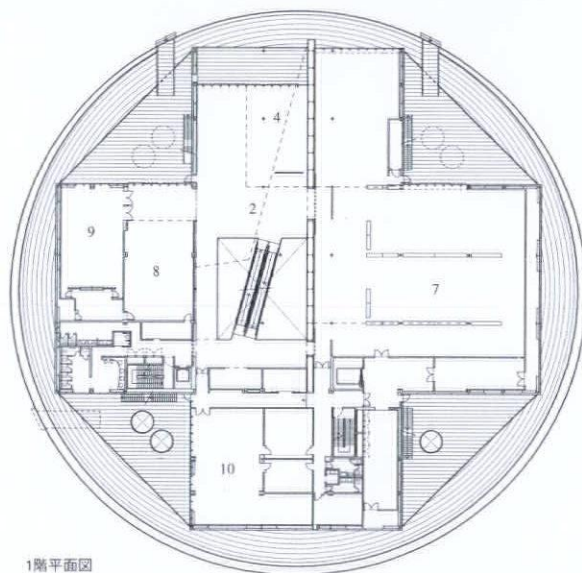
2階平面図



3階平面図

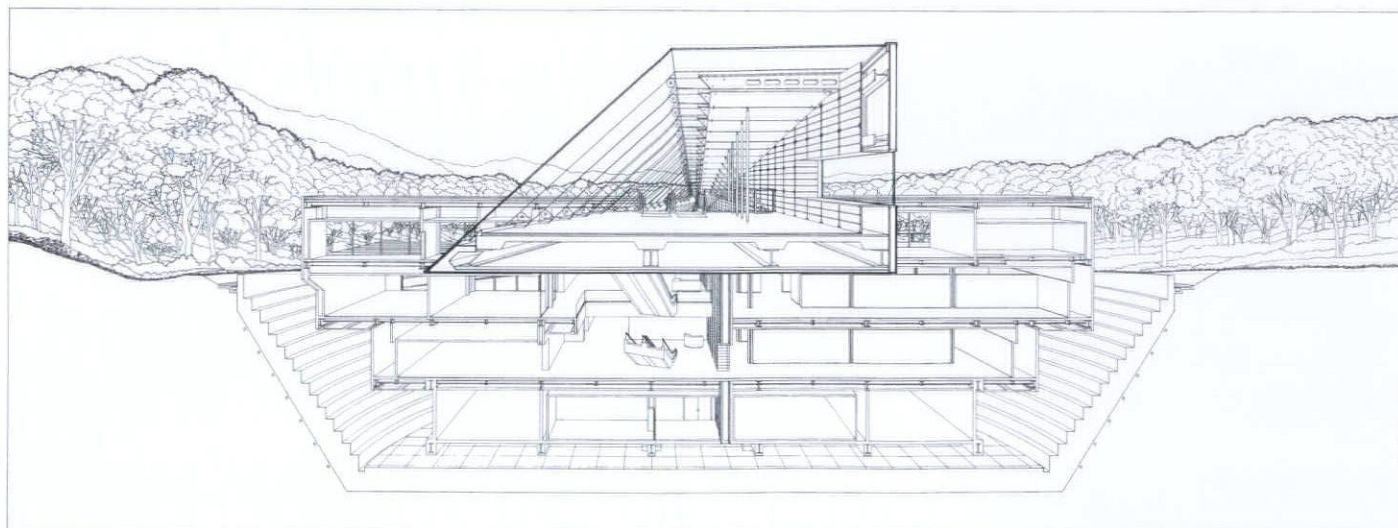


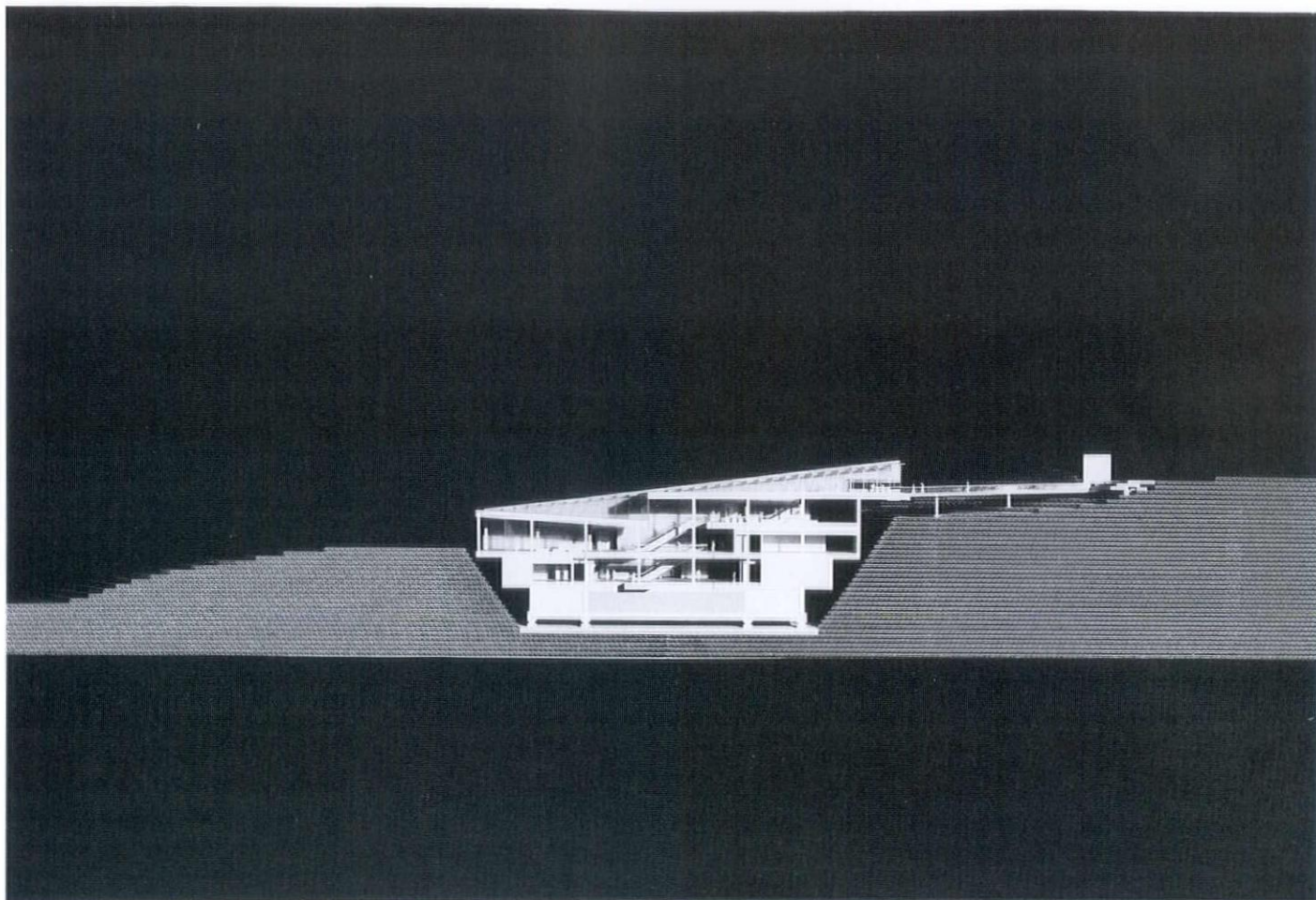
地下1階平面図 S=1:1000



1階平面図

- | | | |
|---------------|-----------|--------------|
| 1: エントランス | 7: 企画展示室 | 13: 搬入口 |
| 2: ロビー | 8: ミュージアム | 14: レストラン |
| 3: ミュージアムショップ | 9: 講義室 | 15: レストランデッキ |
| 4: カフェ | 10: オフィス | 16: 登壇 |
| 5: 常設展示室 | 11: 彫刻広場 | |
| 6: 収蔵庫 | 12: 荷捌室 | |





共同設計者：林昌二（統括）、三浦明彦、安田幸一、
神成健、北川啓一（意匠）、山本裕（構造）伊香賀俊
治、長谷川巖、藤井匡輔（設備）、海宝幸一（照明）、
斎藤洋（環境アセスメント）、松村大吉、野村洋一（土
木）、西田正徳（ランドスケープ）

協力：梅沢建築構造研究所・梅沢良三（基本構造構
想設計）、イーエスアソシエーツ・佐藤英治（基本構
想設備設計）、Hugh Dutton Architect Hugh
Dutton（ロビー廻りデザインコンサルタント）、国際
生態学センター 磯谷達宏（ランドスケープコンサル
タント）、緑生研究所 井上康平（環境アセスメン
トコンサルタント）

用途：美術博物館

所在地：神奈川県足柄下郡箱根町仙石原字小塚山

主要構造：鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造

主要仕上材：屋根 アスファルト防水、押さえコン
クリート花崗岩パネル／外壁 プレキャストコンク
リートカラーコンクリート特殊型枠、樹脂塗装／建
具 木製／軒天 プレキャストコンクリート版

敷地面積：56,919㎡

建築面積：建物本体3,400㎡、付属建物110㎡

合計3,510㎡

延床面積：建物本体8,100㎡、付属建物110㎡

合計8,220㎡

工事予定期間：1998年6月～2000年4月（予定）



写真＝本木誠一

クールとホット

木村博昭

関西地区でのSDレビュー展は、大阪芸術大学で開催された。大阪南東部にあるこの大学と、私の住む阪神間からは幾分距離があり、移動に2時間を要する。電車を乗り継ぎ、遠いと思いつつ会場に向かった。通常は、今回のSDレビュー展のような機会がなければ、非常勤講師であるとか、ゲストクリティックの建築家として呼ばれる以外に、まず外部の者が大学を訪れることはないだろう。そして、SDレビュー展のような催しは、場所の提供並びにサポート体制が無ければ難しく、私学の独自性が生かされたもので、国公立の大学ではあり得ないと思える。これには、市民大学講座のようなユニークな作品展として、大学と実社会との交流の場としての継続と拡がりを期待したい。

大阪芸術大学のキャンパスは、高橋航一氏の設計による。一連の校舎群は、自然の流れに沿うように、そして奥へと引き込まれるように計画され、また、キャンパス入口前の広場に面し、初期校舎群がコンクリート打放しで、低層のピロティーで抜けた、実に軽い校舎と、SDレビュー展会場となった芸術情報センター展示ホールの、マッシブでヴォリューム感のある塚本英世記念館の彫塑的建築という新古の両建築が対照的に建ち並び、その時間的流れの変化にも興味を覚えた。

まずは、勝手な個人的話になるが、SDレビューについての思いを述べておこう。現在参加されている20~30代の方々、そして、それを見ている学生達は、どんな思いがあるのだろうかと考えさせられた。現状を見ると、あまり変わりはないのかなと思いつつも、端的な感じから言えば、クールに受け止めている印象を受けた。私にとってSDレビュー展は、もっと熱いものがあったように思う。それは、新人建築家にとっての登竜門であり、勘違いにしても、無名の入選者が華々しく、前衛作家として社会的認知を受けたように思っていた。ギャラリーの人達も、そう見ていたように思う。毎年、どんな作品が展覧され、どんな表現方法でプレゼンテーションされるのだろうかという期待感と、少々荒っぽいところ

があったにせよ、時代の最も突出した部分を担っていたと思う。そして、これは現在もSDレビュー展の開催される狙いと求めるところであろうし、新人のための数少ない貴重な公募展のひとつである事には違いない。私自身もSDレビューに応募し、1度入選したことがある。今回出展された方々も同じであろうが、作品を制作することに決まると忙しい合間に事務所のスタッフ、そして学生達と周りの多くの人達を巻き込みながら、エネルギーがかけられた展示作品はできあがる。一種のお祭りのようなもので、そういう盛り上がりを楽しむ出来事でもある。

今回の入選作品を通して見ると、突出的印象よりもバリエーションのある選択が行われたように思えた。

会場全体は、全15作品が見やすく適度な間隔でうまく配置されていた。各作品の感想を簡単に述べさせて頂くと、浅野静+新井清一の作品には、やはり、モーフシス風のアクリルでできたコンセプト模型が展示され、その内容は理解できなかったが、ランドスケープを生かした気持ちのいい住宅になるだろうと思えた。大野勝+境静也+鉾岩崇の〈佐賀県宇宙科学館〉は、実施される形が表現され、実際に建設された時のことを考えると、素晴らしいイメージの合成写真と現実とのギャップが気掛かりに思えた。建築研究室高安重一事務所+佐久間達也+橋爪宏直+重富博之のランドスケープの作品は、オブジェ色の強さが気になったが、うまく自然をイメージしている。今村雅樹+佐久間菜穂子の住宅は、単純明快な構成で、ハイセンスなものになるのだろうが、単体からさらに内部と外部の近隣との関係を模型で見たいと思った。金子恭洋の住宅は、アースワーク的な関わり方が、どのようなものになるのだろうかという期待感と、それがファッション的にならないだろうかという思いが交錯した。川人洋志の作品、そして、藤本壮介の作品は、CAD的な特性から生まれ、組み立てられているように思えるクールな空間イメージの計画であるが、実際に使われる材質で空間のテイストが変わるだ

ろうし、今後、どんな選択をするのか興味が保たれる。タカマス・ヨシコの自邸は、女性らしくメルヘン的で、そんなものも伝わってくるのだが、入子状のトリッキーな室内構成の方が、私には興味が湧いた。鈴木エドワードの駅舎は、関西国際空港を見慣れているせいか、形態に新鮮さが無いにしても、これまでのJRにない駅舎ができることに、期待が広がる。松澤稔の住宅は、ドローイングの如く、空間のストーリー性と情緒性が伝わり、単純だが階段空間に住まいの豊かさを覗かせている。三浦明彦+安田幸一+神成健+北川啓一の地中に埋め込まれた美術館は、イメージ的な表現の多いなかで最も忠実なプレゼンテーションで、実際の空間構成の模型から十分に練られた実施案であることは理解できた。佐藤孝秋のまちづくりデザインは難しく、形では語れないものがあるのだろう。西沢立衛のウィークエンドハウスは、実施設計一式が展示され、ディテールの考え方が十分に読み取れた。興味のある空間だが、同名の西沢(文隆)による35年程前に設計された、同じようなコート・ハウスの〈正面のない家〉と印象が重なった。松本明の住宅は、今風の単純な構成だが、ドローイングとプレゼンテーションのような手作りの空間になるだろうと想像できた。

全体を眺めて見ると傾向としても、作者の感情移入した手書きドローイングの類は、年々少なくなっている。CADは、当然ツールとしてあるのだが、建築計画上の捉え方以外に、建築形態自体もデジタルで特色づけられるように思える。それは、コピー・ペーストのように、作図操作上等の容易さ、その必然として均質で繰り返される空間、さらにユーロ・モダンの単純型の建築イメージなどが重なり合い影響している事是否定できないだろう。それらも又、時代性であろうと思える。

気が付くと、時のたつのを忘れ長い間会場にいた。今年もまた、SDレビュー展にはまってしまったようである。

●きむら・ひろあき/建築家

浅野 静／エトスアソシエイツ+新井清一／アライアーキテクト 徳島の家（林郎）

図面の段階でも、また、模型においても、その形態は大いに私の想像力を刺激した。線と面に鋭さと柔らかさがある。交錯している空間にある種の不思議さもある。しかし、大きく示されているプラスチックのオブジェは何なのか。それが楕円形の部屋の壁の一部だとわかるには時間がかかる。そしてその部屋の意味は何なのか。全体との関係はどうなっているのか。そこをもうちょっと、つっこんで欲しかった。（香山）

プランを見るとふたつの空間が相貫しているように見えるのですが、その相貫体としての構造の形式がうまくいってない気がします。模型ではこの黄色の空間があって、それにこの青い空間が単純にくっついている感じ。ここをもうちょっとうまくやれば面白いと思います。（渡辺）

一時選考の段階ではランドスケープと建築とのびやかな関係が印象的な案でした。ところが最終案はその点よりもむしろ素材のプレゼンテーションに主眼があったようで、知りたいことがわからない——例えば、素材のプラスチックもカーテン・ウォールとして使うのか、構造部材でもあるか等、——というもどかしさを感じました。（岸）

全体の線の構成が大変美しく、しかも力強さを持っていた事から、第一次審査では、ほとんど問題なく評価できる案として支持しました。しかし、それぞれの線の意味が、実際の建築としてみた時に、どれだけ強力な役割を持つ事になるかという点に疑問が残った事と、最終的なプレゼンテーションの判りにくさが、全体の印象を弱めてしまったように思います。（團）

今村雅樹+佐久間菜穂子／今村雅樹アーキテクト T-H（奈良の家）

透明な美しい箱が提案されている。第一次の図面の段階からそれははっきり主張されていた。一体この抽象的な立体は、どのような素材と細部と、そして生活行為によって現実のものになるのだろうか。それを第二段階の模型に期待したのだが、残念ながら満たされなかった。依然として抽象的な箱で終わっているように感じた。実物でしか提示し得ないものであるかもしれない。（香山）

仕上げ表を見ると、外壁はスレート板だと書いてあります。スレート板ではこの模型のように半透明にならない、そう思ってあの模型を見るとただの箱のように思えてしまいます。（渡辺）

模型も美しく、プレゼンテーションも非常に現代的に仕上げられていると思うのですが、図面や一時選考時の資料から想像すると、こういうプレゼンテーションをするべきプランなのだろうか、むしろ計画案そのままを素直に表現した方が理解されやすいのではないかと感じました。（岸）

大野 勝+境 静也+鉾岩 崇／佐藤総合計画 佐賀県立宇宙科学館（仮称）

宇宙科学館だから、飛び立つような形、というのはあまりにもストレートで、もうひとつひねり欲しい気もしたが、わかり易いことは確かで、それは第一次のプレゼンテーションでも際立っていた。最終模型は力がこもっているが、よく作られているだけに、飛び立つ力というよりは、地面に縛りつけられているような重さ、あるいは粘着力のようなものが表に出てしまっているような気がした。（香山）

模型を見ていると、空中にふわっと持ち上げようとしているのがわかります。でもその支え方が3本の部材で構成するというのはちょっとナンセンスだと思うんだけど、まん中の柱が効いてないか、両側の斜めのが役に立ってないかどっちかで、だいたいまん中があまり役に立たないでしょうね。たぶん短辺方向でラーメン構造にしているのでしょうか。立方体を浮遊させる支持構造はできるだけ単純化した方がよいのではないかと思います。（渡辺）

最終案のプレゼンテーションを見ると、一時選考の時には疑問に思わなかったことが逆に不思議に思えてきました。例えば、あの強い軸線はいったい何のためにあって、どこを向いているんだろうというような、計画の基本的側面が見えてこないこと、その点がとても気になりました。（岸）

金井謙介+西田勇人 法事の家

美しい模型と図面だ。空間構成も鮮やかだ。確かな感性といったものを感じる。しかし、肝心の「法事の家」という意味がどうもよくわからない。「法事」というのは、本来、時に応じて通常の日常の空間のなかで行われるものなのではないのか、それが固定化されればそれは「仏間」ではないのか。それ以上の考えが作者にはあるような気もしたが、結局最後までわからなかった。（香山）

川の中にわざわざ柱を立てている意味が良くわかりませんね。建物がこの川のブリッジを兼ねているのかもしれませんが。模型はきれいですね。（渡辺）

一時選考の資料では、それを建築と呼べばいいのか、それとも家具なのか、その間をさまよっているような、説明し難い魅力を持った案でした。土地との関係も含めて、そのどこか仮想的なところがその源なのかもしれません。最終案でのきちんとつくり上げられた空間は建築と呼ぶしかなく、あのどこかかなげな魅力は消え失せていたように思います。（岸）

プレゼンテーションとして、とてもきれいだと思いました。しかし、「法事の家」というそのテーマの印象の深さがかえって災いして、このデザインの必然性に審査の議論が移った時に、洗練されたプレゼンテーションということだけでは押し戻せなくなってしまったように思います。（團）

金子泰洋 M邸

何か、とても不思議なつくり方をしている建物で最終模型でそのところをもっと見たいと思ったのだが、結局不可解なままで終わった、というのが正直のところだ。土のかたまりがそのまま建築になることを試みていくのか、あるいは建築をそのままランドスケープとしようとしているのか、「ガーデニング」の不思議な流行で、みじめな緑が建築に付着することが流行している中で、この試みには、共感するのだが。（香山）

土をすばっとくり抜いて敷地と建築との関係が随分ややこしいですね。しかもアプローチは穴を通してからです。こういう片土圧の建物は構造的にも難しいと思いますが、前面の土の重量で押さえようとしているみたいですね。（渡辺）

手前にランドスケープとも建築とも形容し難い空間があり、そこを抜けていくと建築的な空間に出会うという構成だと思うのですが、中間にある中庭を含めてあまりにも建築的なプロポーションが全体を支配しているため、前面の得体の知れない部分とその魅力を半減している点がもったいない、と感じました。（岸）

前面の土地の扱い方が面白く、第一次審査の時の妙に無味無臭なプレゼンテーションと合わせて可能性のある案だと思いました。しかし最終的なプレゼンテーションは、全く意味不明で、計画の可能性を引き出すことに成功していなかったように思います。（團）

川人洋志 Triplet

優れた提案だと感じた。都市の住居単位となる一般性を所有している。すなわち、平面の合理性と対応性が、単純化された抽象的な空間構成のうちに、きちんと実現されている。是非、実現したものを見たいと思った。この形で、周辺も含めて、ひとつの地区が開発されると素晴らしいと感じるのだが、周辺はどうなっているのか。造成された敷地の一角では残念な気がする。(香山)

建築模型がまん中にちょこんとあってね……シンプルですね。アイデアとしては面白い。(渡辺)

古典的な秩序感を持つプランとセクションであると同時に、現代という時代の光と影を持っている建築ではないか、言い換えると建築というものの一番典型的な魅力をそなえ得る可能性がある案ではないかと感じました。出来上がったものをぜひに体験させてもらいたいと感じたプロジェクトです。(岸)

シンプルな構成で、しかもすきの無い計画だという印象を持ちました。(園)

建築研究室高安重一事務所+佐久間達也+橋爪宏直+重富博之 海上ばなな (UNAKAMI BANANA)

地形とのからみあいの中で、造形する魅力には、近頃多くの人に関心を持ち、そうした方向での提案もあるが、中にはしばしば、美しい自然を切り刻んだり、踏みしめたりしている印象を与えるものも多い。しかしこの提案は違う。なにげない自然が、新たな目差しのもとで、爽やかに変容する。美しい好感の持てる作品だ。ただし、模型は下から照らされていて、自然の中の光が感じられないように思われ、そこに不満が残った。(香山)

自然の風景を頭の中に描きながら、置かれている模型の状況を見ていくと非常にシャープですね。なかなか自然と対立的な関係があって良いと思います。しかし、個々の施設の模型そのものを見ていると、ちょっと妙な感じがしますね。(渡辺)

一次選考の時から最も注目していました。人工の構築物を自然を計る「ものさし」とする考え方には、自然と構築物を二元対立的にとらえる考え方を乗り越える可能性と、ナイーブなビジュアル表現もそれを保証してくれるように感じられたからです。しかし最終のプレゼンテーションの模型はそうした自然との関係の可能性を示す要素は少なく、ちょっと残念に思いました。むしろこのプロジェクトの実現した姿を期待しています。(岸)

何でもない湿地帯の場所を生かしながら、構築物と環境とのダイアログが感じられる作品。(園)

佐藤孝秋/フォレストシップ 台北市迪化街歴史地区のまちづくりデザイン

台湾の都市と建築は、私の好きなもののひとつだ。そこに、ていねいに、愛情をもって町づくりの手を差し出すというプロジェクトで、それだけでなく、おおいに好感を持った。崩壊しつつある都市を救いたいという気持はせまってくるものがあるが、現状より悪くならないことはよくわかって、今以上に良いものになるのか、そこは確信が持てない。空間と時間が重なり合うものを、図面で示すことに限界があるのか、どうか。(香山)

台北の町で、しかも台湾当局から発注されて、もしできたならものすごいと思います。今の台北市の建設環境はとてもややこしくて、膨大なエネルギーを注ぎ込まない限り、クリエイティブな活動はできないですよ。特にまちづくりデザインに挑戦する姿勢に敬意を表します。(渡辺)

台北という都市の気分のようなものはとても強く伝わってきます。そして多分都市にとって重要なのはそうした気分のようなものだと思うのです。しかしこのプロジェクトが現実の台北が持つ都市の気分以上のものを提案しているとは逆に思えず、むしろそんな現在の都市の気分をむしろ保つことさえ困難なのだろうという、切羽詰まった状況の方がひしひしと伝わってくるのです。(岸)

タカマスヨシコ 考えごとの家

何か、一生懸命やっているのはよくわかる。従って、こちらも一生懸命見るのだが……。プレゼンテーションのビデオも、繰り返し見たのだが、結局よくわからない。「Thinking, Thinking」と繰り返されるのだが、「何を」ということが説明されずに、思考そのものに一般性は与え得るのか。しかし、自分を包む囲い——それがここでは重ね合わされるわけだが——それは私達の思考を果てしなく刺激するものであることは確かだ。(香山)

住空間というより、概念としてこういうことがあって、この床が多目的に使われているといった、簡単に言ってしまうとそれだけのことなんです。(渡辺)

展示作品のビデオもあんなに抽象化しないでもしっかり建築を見せてほしかったと思いました。(渡辺)

展示会のプレゼンテーションではずっと独り言を聞かされ続けているような、そんな気分を味わいました。一次選考の時にはそこに建築の空間に対する可能性がひびいていたような気がしました。プロジェクトそのものが自分に閉じていくような計画だとしても、そのプレゼンテーションはオープンなものにすべきだと思います。(岸)

西沢立衛 ウィークエンドハウス

単純な組み立てが、どれだけ変化と多様を生むか、そうした試みのように思われ、そこに興味を持った。そしてその空間の中に、住居と展示が同時に含まれると、それは更に複雑な展開を持つだろう。始めのドローイングで与えられた抽象的な空間の印象は、模型になってもあまり変わらない。木の柱や壁が、どういう様相を示すのか。それを見たいと思ったのだが。(香山)

木造なんだけども木造の研究が全然されてない。古い建物の柱を使うからこういうプランにしているんじゃないか。(渡辺)

この案が現実化してゆく過程でいろいろな方向に展開していく可能性が考えられ、そのちょっと想像がつかないある種のあやうさがこのプロジェクトの大きな魅力になっていると感じました。一次の時の案ではインテリアは白かと思いましたが最終案には別の可能性も見え、完成した建物をぜひ見たいと思うプロジェクトのひとつです。(岸)

ウィークエンドハウス シンプルで透明性のある幾何学にやはりシンプルなヴォイドを作りながら、多様に変化に富んだ空間を創り出している。明快な計画のプロセスと空間の洗練度が見事に結びついた数少ない計画ではないでしょうか。(園)

東日本旅客鉄道株式会社+JRE設計+鈴木エドワード建築設計事務所

鉄道駅舎の建築とは、本来駅ビルのことではなくて、プラットフォームと列車を覆う構築体のことであるはずだ。ヨーロッパやアメリカでは19世紀から、そして今日でもそうした建築の傑作があるが、日本では皆無と言っている。それに真正面から取り組んでいることに拍手を送りたい。しかし、終着駅ではなく、通過駅の形を取る日本の場合、駅の端部はどうなるのか。やはり東京という中心に集中する方向性を持つことになるのか。(香山)

柱が開いているんだけど、屋根のラインの全部を支えてない。だから横ザンが実は模型みたいに全部同じではなく、太いのと細いのが出てくるはずだ。だから実際は構造のシステムがちょっと複雑になっている。造形的なデザインと構造とを巧みに合わせるのが設計の重要なところで、駅舎としてのコンセプトに対する構造的な配置がすごく面白いと思ったんですが、模型では屋根の支え方になるほどという点が欠けていると思います。(渡辺)

さいたま新都心駅 (仮称)

変な言い方ですが、安心できる駅というか、ああ、駅なんだ、という建築だと感じました。それは多分、ひとつの基本的な考え方で全体が制御されていることがもたらす印象であると同時に、その基本的には古典的な建築の在り方が、この建築の駅以外の何者でもあり得ないという性格を決定してしまっているように思えます。(岸)

駅という、いわばこれまで保守的な制度のかたまりだったようなジャンルに、新しいデザインの挑戦をしている点は評価できますが、造形の公理というか単一の構造形式によって、すべてを解決しようとしている点に多少の無理があるのでないかと思いました。(團)

藤本杜介 D-HOSPITAL

広々とした北の大地の上に、切妻の屋根が屈折しつつ、徐々に高まっていく。その姿がなんとも美しく感じられた。勿論、これが建てられるべき敷地を私が知っている筈は無いのだが、そう強く感じさせるものをこの作品は持っている。病院と言っても、生活し、作業する施設という性格を持つ精神病院として、平面構成も断面構成も、実にうまく考えられている。是非、実現されることを心から願う。(香山)

以前私が内藤さんとつくった「ちひろ美術館」に構造が似ています。RCの桁構造の上に木造の小屋をのせている点ですね。これはインテリアをどうつくっているのかよくわかりませんが、天井を張ってつるつとした感じにしていますね。(渡辺)

とても建築的な、そして気持ちのいい空間だな、という印象を持ちました。その前提で気になったのは妻面の取り扱い方で、確かにこのプロジェクトのように立ち切るというもひとつの考え方だと思うのですが、ランドスケープの中にのびやかに展開する屋根の連なりという形態が魅力的なだけに、さらに期待してしまいます。このプロジェクトも完成した姿を見てみたいと思わせてくれたもののひとつでした。(岸)

松澤 稔 衛の家

大地があって、空があって、その間に人間が住む——その根本が確固として示されている。素晴らしい住宅だ。こういう家に住みたい。澄んだ秋の日、明るい太陽をいっぱいにあびながら、あるいはやがて来る寒い冬の日、この簡潔な屋根と壁体に覆われながら過ごすのはなんと素晴らしいことだろう。外部と内部とを切り離して提案している模型も、美しく、かつコンセプトを鮮やかに示していて卓抜である。(香山)

今回の全ての模型の中で、この作品が一番リアリティがありました。コンパクトに、中身だけを取り出しているのがすごくきれいでした。特に一番最後の小さい模型がきれいでしたね。

きちんと設計された、気持ちの良い空間が実現されている、と感じました。内部空間を軸として設計された想像され、その空間のシークエンスも魅力的なものに思えます。ただその結果としてでき上がった空間はデザインされ過ぎていようにも思え、建築が原初的に持つ構築性を失いつつあるのではないか、という危惧を持ちました。(岸)

吉村スクールの方向性というか、完成度の高いシンプルな造形を丁寧に仕上げていているという印象を持ちました。(團)

松本 明 I・HOUSE

水田に囲まれて建つ壮快な建築である。日本の美しい風景が、次々とプレハブ住宅によって触まれていくさまを、いつも悲しく思っていることからして、このような住宅を設計する建築家が日本の各地に育って欲しい。簡素でかつ力強いシルエットが美しい。細長い矩形平面も、内部を光と風が通り抜けていくようで、心地よい。図面にも、建物を大切に、そして中に住む人を大切にすることがみえがっている。(香山)

一次審査時のプレゼンテーションに木組みの建設中の写真があったのですが、それには筋違いが入っていません。しかしこの模型を見ると、小屋組みはワンウェイだから、どうしても中間にブレースかなにかバネルが出てくるはずなんですが……どういう考え方なのかよくわかりませんね。(渡辺)

抽象的な空間を指向するプロジェクトが多かった中でこのプロジェクトの持つモノ性はとても魅力的なものにうつりました。徹頭徹尾リアルな建築であるうとすること、その意図はプレゼンテーションから十二分に伝わってきたと思います。ただその配置計画が建物本体の設計と比較するとおざなり過ぎないか、という点が一番気になりました。(岸)

三浦明彦+安田幸一+神成 健+北川啓一/日建設計 ポーラ箱根美術館

地表に掘られた巨大な噴火口のような穴に、建物が周囲に隙間を保ちつつ、すっぽりはまりこんでいる。自然環境に対する配慮や、技術的工夫としては、大変なスタディの結果生み出されたかたちだということとはわかるが、強い閉所恐怖症の私にとっては、この隙間は模型で見ただけで恐ろしい。実際はどうやら見えならしいが。アプローチから、内部に切り込んでいく空間のつくり方は、なかなか見ごたえのあるものだと思った。(香山)

一般的に免震構造の計画上の難しさは免震層と呼ばれる空間をつくって大地と完全に切り離さなければならないことです。この作品では、うまく建物全体を環境との関係で掘り込んだと思うんですが、掘り込んでおいて、完全に大地から切り離して、1本のブリッジだけで繋いでいる。免震の仕組みと建物と地盤との関係がすごく面白いと模型を見ていて思いました。それからダイナミックな貫通したアトリウムもきれいですね。(渡辺)

免震という本来建物と土地を切り離そうという構造概念と、自然の中に建物を埋め込むというそれとは逆の向きの全体構想をどう折り合いつけるのかというのがこのプロジェクトの要なのだろうと思いますが、今の段階ではそのふたつが融合するまでには至っていないと感じました。また一次の時にあったアプローチの壁の多機能性の説明が最終案ではなくなっており、内部の空間についてもう少し知りたいと思っただけに残念な気がします。(岸)

上部の建築物は、巧みな造形的な展開をしているのに、第一段階の土木的な円形の掘り込みと、建築物の造形がどうも一体的に見えない。洗面器の中に大きなカニを無理やり押し込んだような印象を受けました。(團)

1997.05 公募開始

SD9705号にて応募要項を発表し、作品募集開始。

ポスター製作は工藤強勝氏/デザイン実験室

応募要項は以下の通り

応募者の資格：特に必要なし。

プレゼンテーション：

1. 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等特に制約はなく、各自選択すること。

表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査に当たっての主要な評価の対象とはされない。

2. プロジェクト名、建築用途、施主名（事業主体名）、工事予定期間、主体構造、主要仕上り材料、建築面積、延床面積。

3. 400字以内の設計趣旨文（省略してもよい）

以上をA3判用紙（420×297mm）4枚以内にまとめたもの、パネル化は不可（クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します）。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。2、3は添付書類に含めず1と共にA3判用紙に記述することに注意。

添付書類：

プロジェクト名、応募者（＝設計者）名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所（以上、組織の場合は、その担当者について明記）、応募者への連絡先（自宅か勤務先か明記のうえ、郵便番号、住所、電話、FAX番号）、共同設計者名、設計者略歴（入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします）。以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

1997.06.24 作品受付締切

応募総数207点（昨年174点）

1997.07.10 審査

例年通り、鹿島出版会会議室にて行われた。

4人の審査員による審査の結果、入選15点が選ばれる。

1997.07.12 展覧会出展依頼

15組の入選者に入選通知と展覧会の出展依頼をする。出展依頼は以下の通り。

・模型

1つでも、分割されていてもよいが、全体で以下の制限以内とする。

大きさ：幅+奥行+高さ=5m以内

重さ：20kg以内

素材：自由

素材：自由

・ドローイング

枚数：自由。但し、合計の面積が2m²以内。

素材：自由（こわれにくく、なるべく軽量なもの）

・図面

作品の内容を具体的に説明するために必要な、平面

図、立面図、断面図、詳細図等。

大きさ：B4判 枚数：6枚以内

1997年09.08、09 東京展搬入

昨年と同様代官山のヒルサイドフォーラムの3フロアを使用して展示。

東京都立大学の学生のアルバイトと共に搬入および展示作品設置。

例年と同じく、会場構成はスタジオ建築計画。照明計画は角館政英氏/L.F.A.

1997.09.10 東京展開催（～09.21）

会場：ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム
東京都渋谷区猿楽町18-8

ポスター製作は工藤強勝氏/デザイン実験室

1997.09.10 審査員座談会

展覧会場での作品展覧後、審査員の座談会を行う。座談会では各出展作品の講評と共に鹿島賞、朝倉賞、SD賞、そして、今年より新設された新人賞の4賞が選定された。4賞の入選者は以下の通り。

鹿島賞：「海上ばなな」建築研究室高安重一事務所
+佐久間達也+橋爪直直+重富博之

朝倉賞：「Triplet」川人洋志

SD賞：「D-Hospital」藤本壮介

新人賞：「衛の家」松澤 稔

1997.09.10 展覧会レセプション・パーティー

午後6時30分より審査員、出展者を交えてのパーティーが行われた。審査員の総評もあり、盛況の内に終了。

1997.09.21 東京展終了

来場者数1,772人を記録（一日平均147.6人）。

1997.09.24、25 大阪展搬入

大阪芸術大学の学生により搬入および展示作品設置。

1997.09.26 大阪展開催（～10.2）

大阪芸術大学主催により、大阪展が開催される。

会場：大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール
大阪府南河内郡河南町東山

1997.09.27 大阪展レセプションパーティー

電車事故にも関わらず多くの方が出席。新人賞の賞品（大阪芸術大学教授の持田総章氏の作品）がお披露目される。

1997.10.02 大阪展終了

1997.11 4賞入賞者に入賞を通知

SDレビュー1997

第16回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 1997

The 16th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

[主催]

鹿島出版会SD編集部

[大阪展共催]

大阪芸術大学

[後援]

朝倉不動産株式会社

[協賛]

ノールインターナショナルジャパン（SD賞）

大阪芸術大学（新人賞）

[審査員]

香山壽夫（建築家）

渡辺邦夫（構造家）

岸 和郎（建築家、京都工芸繊維大学助教授）

園 紀彦（建築家）

[東京展会場構成]

元倉真琴+スタジオ建築計画（担当：寺内康史）

[東京展会場照明計画]

角館政英/ライト・フィールド・アーキテクト

[大阪展会場構成]

大阪芸術大学建築学科学生

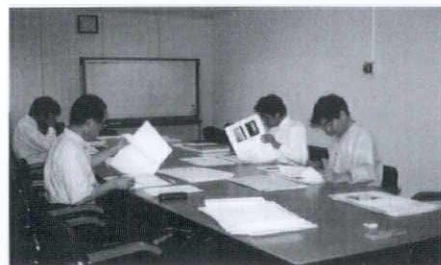
[作品写真撮影]

堀内広治

泉 弘子

金子昌弘

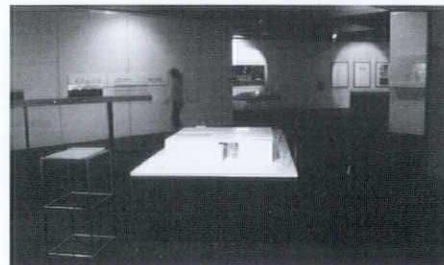
（新写真工房）



一次審査風景

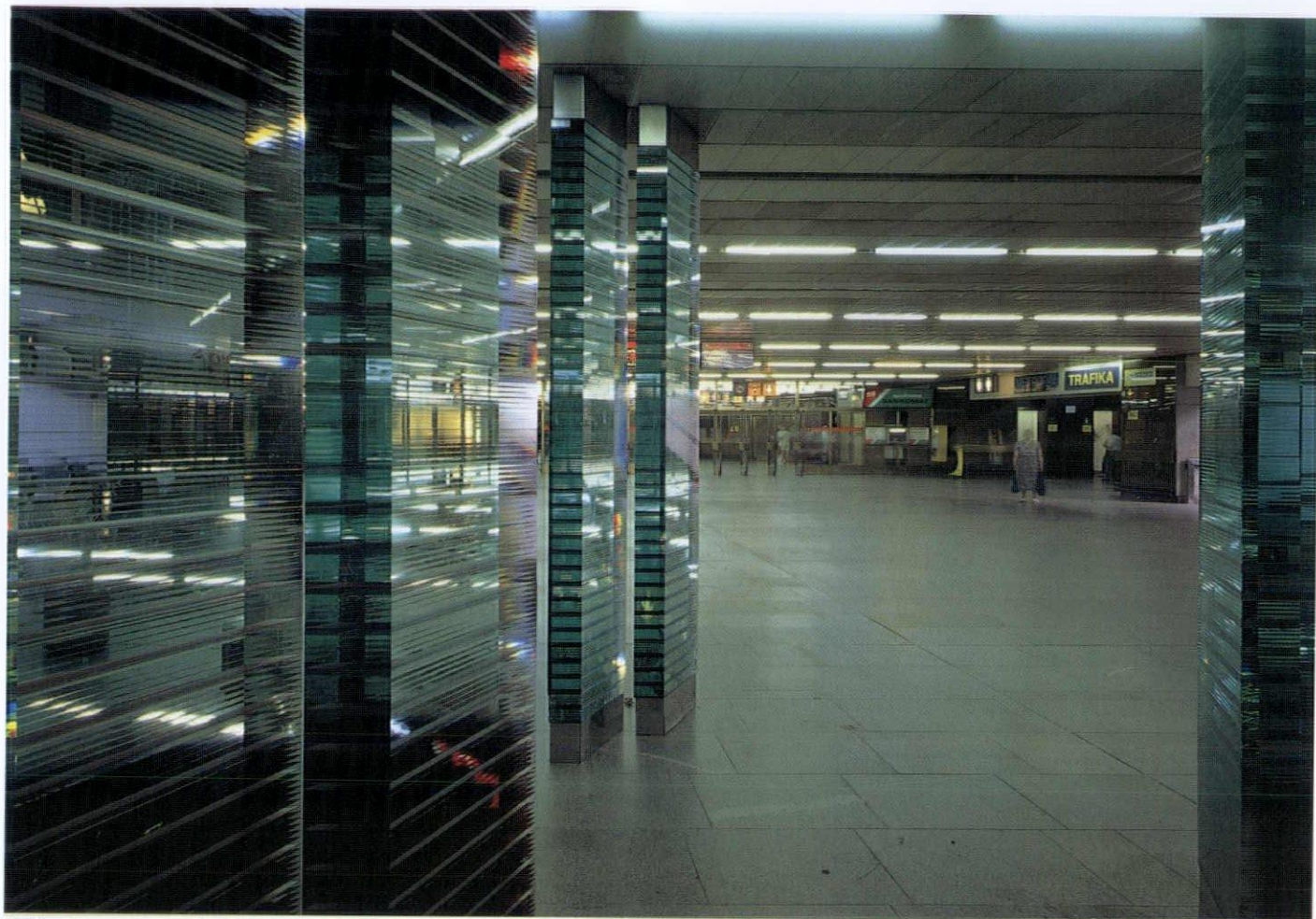


東京展会場風景



大阪展会場風景





地下鉄、ナーメスティ・リバブリキ駅のコンコースに設けられた積層ガラスの柱。角度によってチェコ国旗の三色に見える



ナーメスティ・リパブリキ駅のホーム。凹面のガラス・ブロック壁面



同上



アトリエに飾られていた光学ガラスのキューブ

チェコのガラス芸術

水田順子

「チェコのガラスがこのように発展するとは、本当に誰も予想していなかった。信じられないかもしれないが、それはまったくの偶然だったと言ってもよい」。1996年秋に、ジェレズニ・ブロードの自宅を訪ねたヤロスラヴァ・ブリフトヴァ夫人は感慨深げに語った。スタニスラフ・リベンスキーは黙ってうなずいていた。チェコの現代ガラスの発展に、いや、国際的な現代ガラスの発展に誰よりも貢献してきた他ならぬふたりの、偉大なる芸術家の言葉には複雑な実感と重みがこもっていた。

話は、その時プラハで開催されていた、きわめて質の高い、チェコのシュルレアリスムの展覧会に及んでいた。共産主義体制のもと、同じ視覚芸術の中でも、絵画や彫刻は他の文学や演劇同様、その表現活動は長い間厳しく制圧されていた。フランスをはじめとする中央ヨーロッパと歩調を合わせて展開したこの重要な前衛的芸術思潮を見直すことは、1989年のヴェルヴェット・レヴォリューション以後ようやく実現可能となったのである。展覧会場は、老若男女を問わず長蛇の列で、聞けば、多くの人々が何度も足を運んでいるという。一般には馴染みづらいはずのこの種の展覧会に対する関心の高さは日本では考えられないことだろう。

装飾芸術などという範疇に入れられるばかりに、自由な純粋芸術の一翼を担うことを認知されずに苦しむガラス芸術も、この国では、そのことが逆に功を奏し、期せずして厳しい監視の目を免れて仕事に没頭することができ、時には国の威信を示すための手段として利用されたために、経済的な支援さえ得られたというのである。そのような状況の中で、リベンスキー夫妻をはじめとする才能ある芸術家たちはただ黙々と制作にいそしんだという。体制下ではそうする以外、自分を生かす術はなかったという。そのことが、知らないうちにガラスの可能性を著しく引き上げ、革新的とも言える成果をあげていたというのである。

しかし驚嘆に値するのは、彼らの姿勢は終生変わっていないことである。モントリオールや大阪での万国博覧会という世界の舞台で脚光を浴びたときも、その後、監視の目が強められ、ふたりがともに出国することはできなくなった時代も、民主化が実現し、自由になった現在も。

チェコの強固な現代ガラスの潮流は、もとより、政治的背景によってただ偶然にもたらされたものではなかった。1948年に共産主義体制が敷かれて間もなく、プラハ美術工芸大学の教授に就任したヨセフ・カブリツキーは、権力に屈することなく个性的で幅広い教育を展開し、秘密裏に西側の現代美術の知識を伝え、自由な精神と創造性を育んだという。彼に師事したスタニスラフ・リベンスキーやヴァーツラフ・チグレルは、次の指導者としてそれぞれプラハ美術工芸大学とブラティスラヴァ美術工芸大学でさらに大きな力を発揮するにいたった。

チグレルは建築的ガラスに主眼を置いたガラス・スタジオで、建築学部や産業界を結んだ大胆な創造的ガラス・センターを目指したが、ソ連軍のチェコ侵攻を機にその夢を断念しプラハに戻っている。しかし、彼自身の、人間と空間をテーマとしたさまざまな仮想プロジェクトはひとり群を抜いて際立っている。

ひとりの教育者の個性が若い学生に多大な影響を及ぼし、ひとつの流派に近い強いカラーを生む例はガラスならずとも、他の分野でも、他の国でも見ることができる。が、リベンスキーほどの巨大な存在は希有に違いない。このプラハ美術工芸大学には、すでにガラス専門学校で十分に基礎を身につけた学生が集まる。大学ではむしろ、芸術全般にわたる徹底した理論と実践の幅広い教育が施される。リベンスキーはここで単に生徒と教師という関係を超えて、全人格をかけて数世代にわたる若い学生を指導し、それぞれの個性と自由な発想を最大限に引き出すことに手を差し伸べた。チェコの作家たちの強みは、絵画、彫刻、デザイン、建築に関する幅広い知識と実力を備えていることである。ガラス作家である前に芸術家としての素養がもつとも重視されているのである。

そうした中で何よりも生徒に多大な影響を及ぼしてきたのは、リベンスキー自らが、彫刻家ヤロスラヴァ・ブリフトヴァとともに40年にわたって追求してきた鑄造ガラス*による彫刻的造形であったことは言うまでもない。これが、1960年代初頭以来ガラスによる自由な造形運動を展開したアメリカや、エルヴィン・アイシュという強烈な個性の出現によって新しいガラス芸術の分野で世界的に影響力を持ったドイツが目指そうとした方向に、自由な彫刻的造形が

可能であることをきわめて高い水準で示すことにもなったのである。

宙吹きというホットワークによるパーツによって、ダイナミックな彫刻的世界を構築してきたルネ・ルービチェックのような例外はあるとしても、チェコが、熟考されたコンセプトを形にするのにより適したコールドワークやリベンスキー夫妻が新たに発展させた鑄造を主体とすることは、やはりこの国の伝統に連なるものと言ってもよいだろう。16世紀以来水晶彫りの技術をガラスに応用した、カットやグラヴัวร์の彫刻技法こそ、溶けたガラスを縦横無尽に操る華麗なヴェネツィアン・グラスを脅かし、ついには凌駕する時代もあったボヘミアの真骨頂であったからである。

かつて革命前に出会ったときのガラス作家たちや美術館キュレーター、ジャーナリストたちは内に計り知れないエネルギーを秘めていた。仲間内での情熱的な会話に接したことは、民族闘争やイデオロギーの弾圧に直面したことのない筆者にとっては強烈な体験であった。と同時に、この秘めた強さこそこの国のガラス芸術を他から際立たせる最大の要因に違いないと確信させるものでもあった。

複雑で、時には屈辱に満ちた歴史的背景を持ちながら、この国の自然はこの上なく美しく、そこに生きる人々は情が深く、やさしさと強さを兼ね備え、純粋で、誇り高い自由な精神を持っている。ようやく勝ち取った民主化と自由経済の波が、ある意味で芸術家に試練を与えるものであるとしても、この民族の不屈の精神とエネルギーは、必ずやガラス芸術における膨大な遺産を生かし、乗り越えて、新しい価値観を示してくれるに違いない。その兆しはすでに、革命後プラハ美術工芸大学の教授となったウラジミール・コベツキーとマリアン・カレルの指導のもとで現われは始めている。

●みづた・よりこ／北海道立近代美術館主任学芸員

註

*：チェコの鑄造は溶けたガラスを型に流し込むキャストではなく、ガラスの小さい塊や粒、粉を型に詰めて熱を加え溶かし、その後時間をかけて徐冷するmold-meltingで、広義にキャストと呼ばれている。

スタニスラフ・リベンスキー
& ヤロスラヴァ・ブリフトヴァ

Stanislav Libenský
& Jaroslava Brychtová



「キャスト（鋳造）ガラスの極み」と評される彼らの作品は、夫妻の共同制作から生まれる。リベンスキーがドローイングし、ブリフトヴァが模型を作る。1968年の大阪万博には、武力統治に抗議する作品を発表し、政治的な圧力を受けた。25年にわたりブラハ工芸美術大学で教授を務め、チェコのみならず多くの作家に影響を与えている。

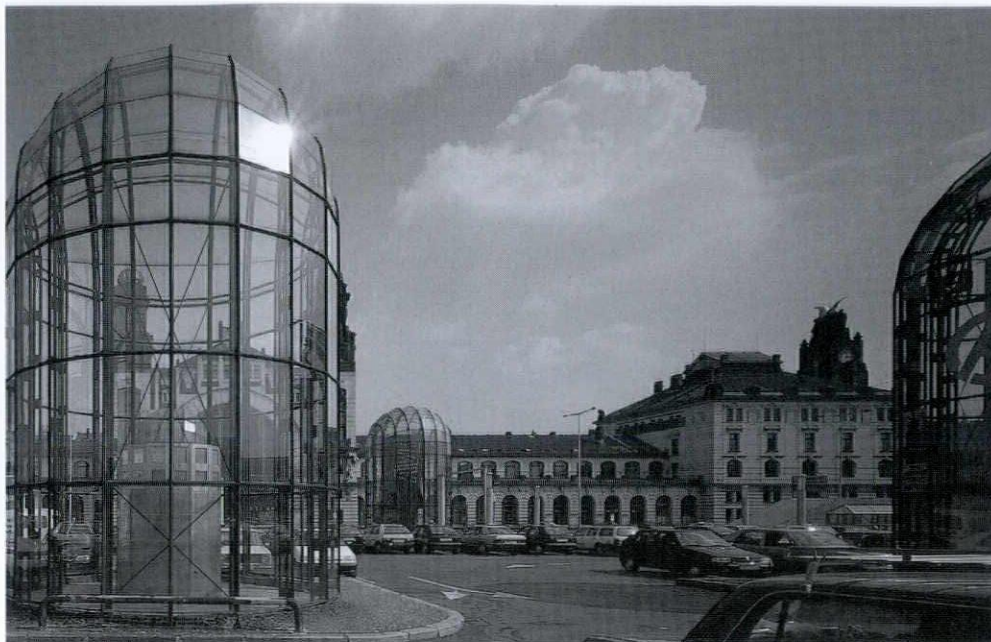


ホルショフスキー・ティンの改築されたゴシック・チャペル。400×70cmのキャスト・ガラス

SD9712



ホルショフスキー・ティン、チャペル。
窓にはめられたキャスト・ガラス。



ブラハ中央駅。機器類のための9×3mのドーム



地下鉄、ナードニー・ツシーダ駅



ラジオ自由ヨーロッパ、エントランス・ホール



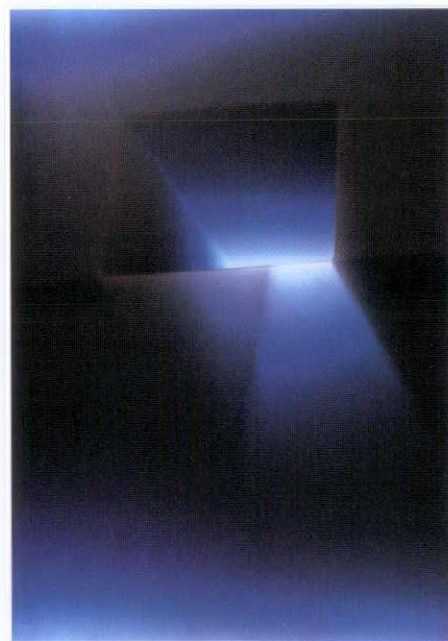
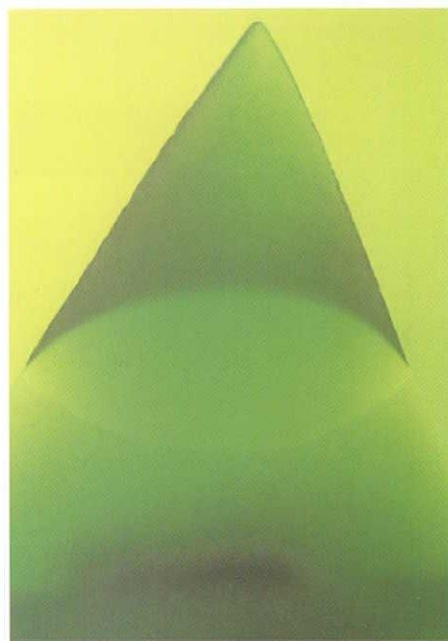
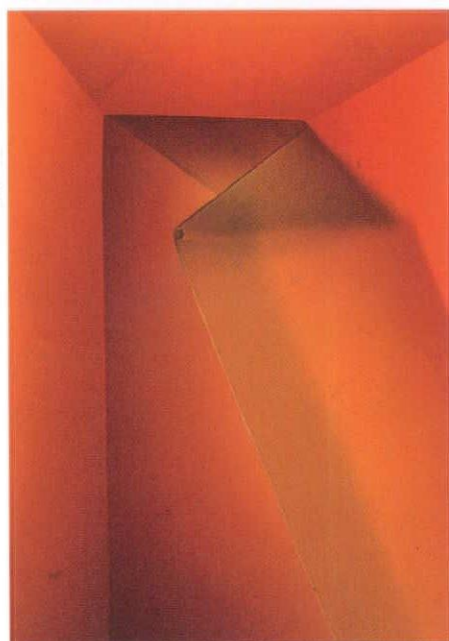
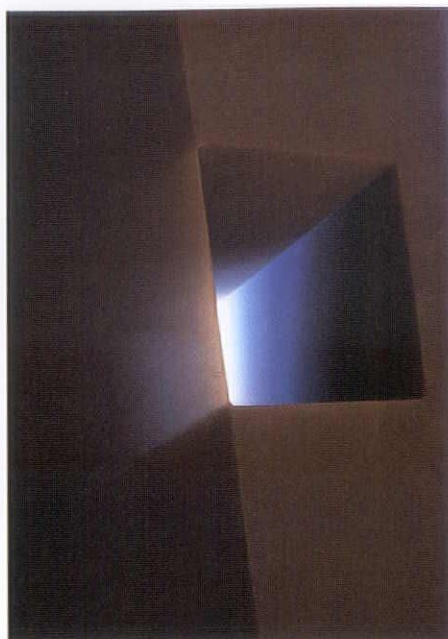
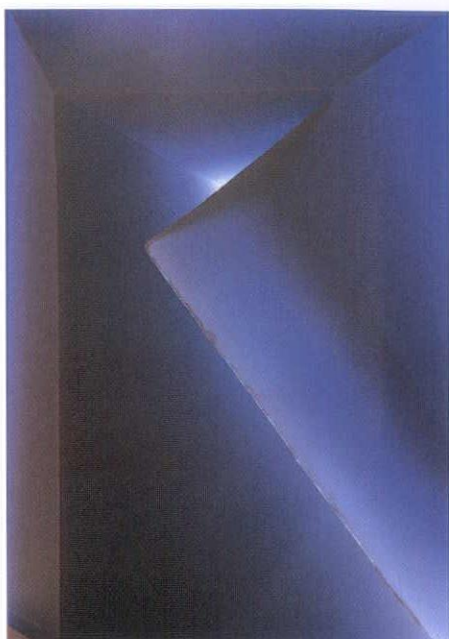
旧市庁舎、階段ホール壁面



БЕНСКИЙ
КРАСНОУД

501
ОПЛОДКА

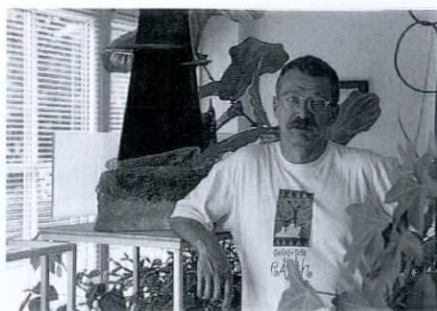
左ページ：聖ピート教会
ヴァーツラフ礼拝堂。
フュージング（融着）ガラス



キャスト・ピース、ディテール（6点共）

ヤロミール・リパーク

Jaromír Rybák



ブラハ工芸美術大学でリベンスキー教授に師事。同期生のG. シャボコヴァと、卒業後一時期、コミッション・ワークを共同で手がけた。建築の仕事では直線的なデザインを多く使い、自身の作品には有機的なモチーフを好んで登場させる。さらに最近ではブロンズとの組み合わせで、細部に至るまで幻想的な世界を築いている。



「Hatteria」

ギゼラ・シャボーコヴァ
Gyza Šabóková



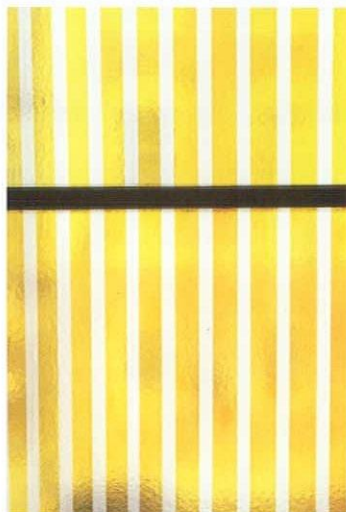
かつての共産政権下において、職業訓練校から美術大学へ進むことは異例であった。その才能を見い出されてアーティストへの道を辿ったシャボコヴァは、「休まずに描け」を信条とする。そこから生まれる板ガラスへのペインティングは力強く生命感に溢れる。昨年ブラハ郊外に自宅兼工房を完成。学生の受け入れを準備中。



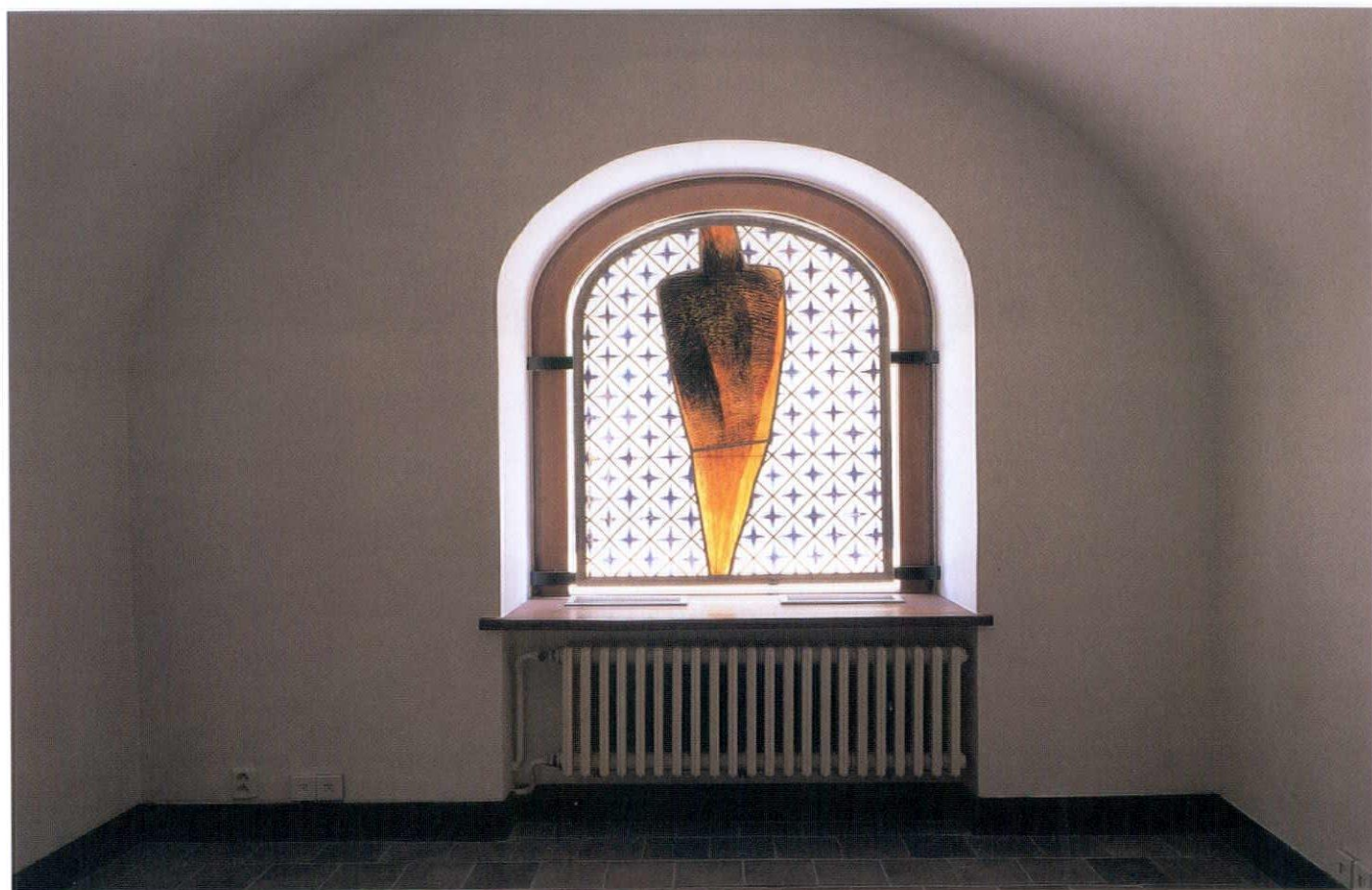
ペインティング・パネル



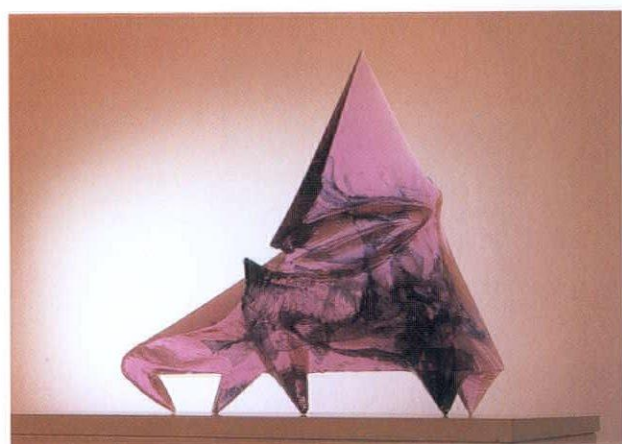
ギゼラ・シャボコヴァ、ヤロミール・リバーク共作。国会議事堂、議員会議場の窓



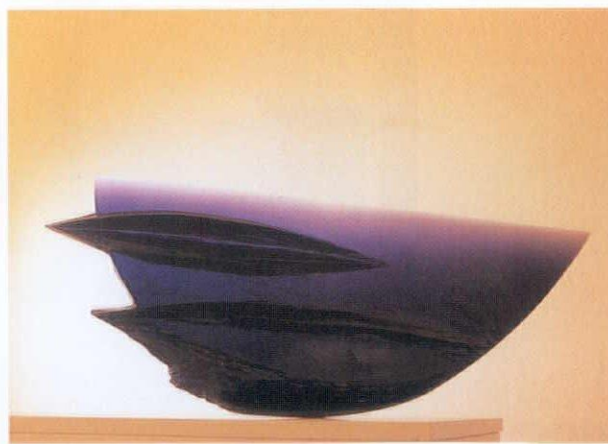
窓のディテール。ラズラ (黨変) 彩



シャポーコヴァ：貸貸オフィスのステンド・グラス・パネル



リパーク：キャスト作品



同左



シャボーコヴァ、リパーク共作：レストランのランプと窓を飾るオブジェ



シャボーコヴァ：ホテル・アリストン、モザイク・パネル



シャボーコヴァ：賃貸オフィス、ステンド・グラス・パネル



リパーク：ブラハ9区役所



シャポーコヴァ：軍病院、待合室の柱

ダナ・ザメチニコヴァ

Dana Zámečnicková



舞台美術を学んだザメチニコヴァは、M. カレルと結婚した後、ガラスで制作を開始。政治、社会、家族といったテーマを人間や動物などのモチーフで表現する。ペイントした何枚もの板ガラスを重ねて遠近感を出す手法はそのまま、初期の箱型の小品から、現在はスケールの大きなインスタレーションに移行している。



自宅アトリエ門扉でのインスタレーション

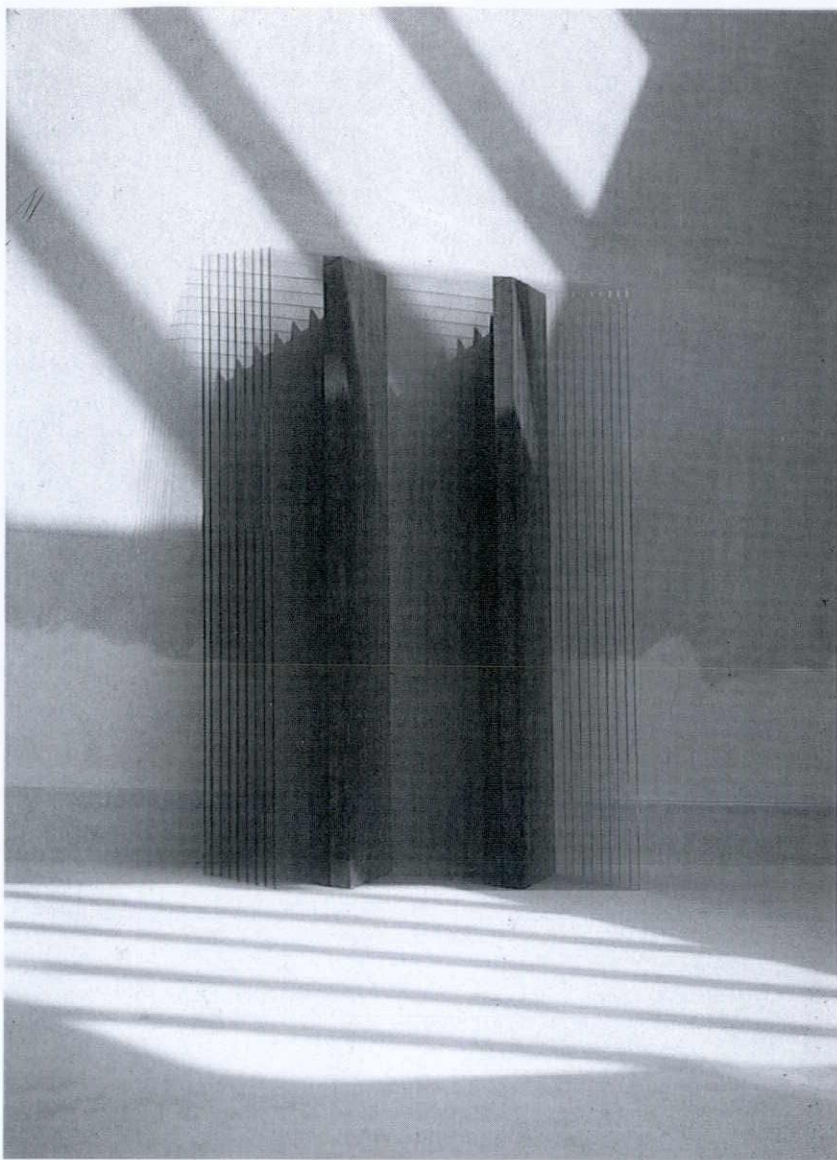
マリアン・カレル
Marian Karel



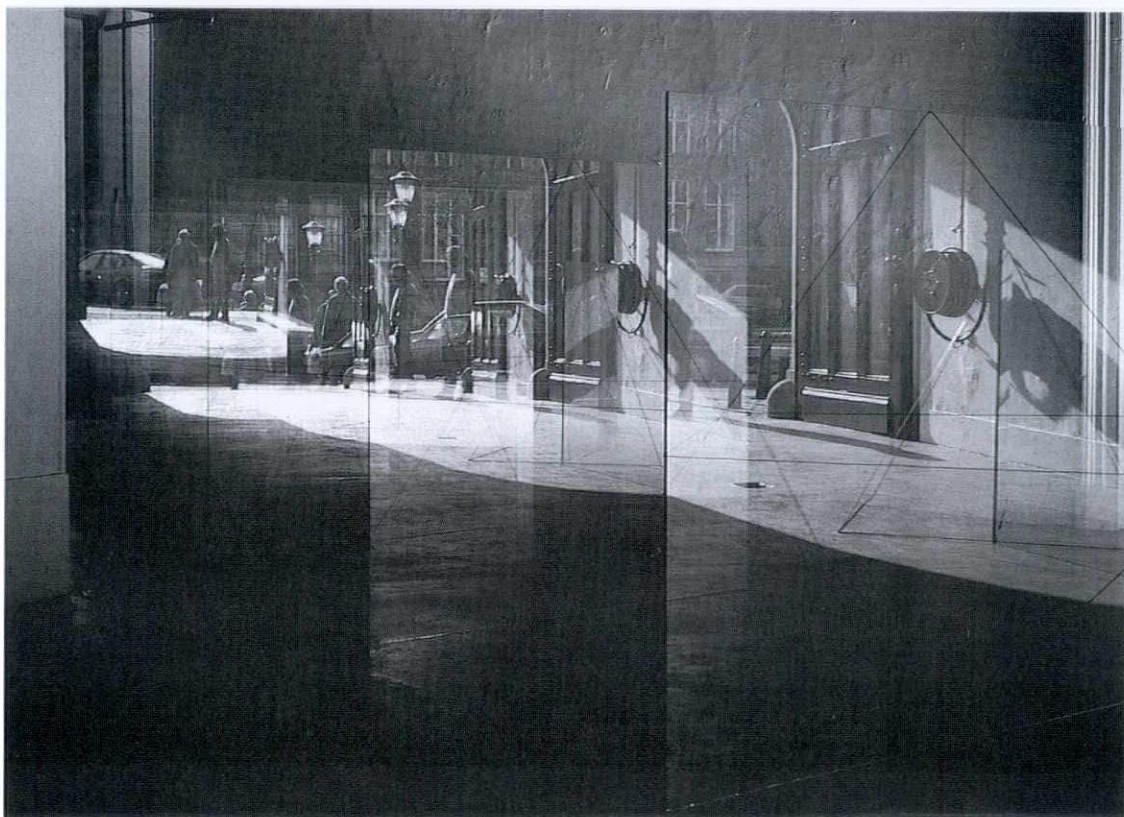
昨年ブラハ城庭園で開催された「光・空間・ガラス」展を企画。タイトルにつけられた3要素がカレルの制作コンセプトを成す。板ガラスによるインスタレーションは、我々の視覚的常識に疑問を投げかけ、虚と実の境界を超えて創り出された次元は、実は全て実像であることを教えてくれる。現在ブラハ工芸美術大学「ガラスと建築科」教授。



「空間・光・ガラス」展でのインスタレーション



パリ個展でのインスタレーション



アムステルダム個展でのインスタレーション

建築におけるガラス

マリアン・カレル／訳＝平野清美

ヴァノッキオ・ビリングッチオ(Vanoccio Biringuccio)*1は1540年に出版した著書のなかでこう書いている。「物事をきちんと思考する人にとって、ガラスは素晴らしい性質を備えている。もろい性質のために、短命に終わる可能性があることを考慮すると、ガラスに過度な愛情を注ぐことはできないし、注いではならない。また、ガラスを使用する際に、常に留意すべきことがある。ガラスは人生の、そして、この世の万物の写し絵である、つまり、美しくも儚くもろい、ということ」。

ガラスは非常に敏感な素材であり、音によってさえ破壊されてしまうが、その一方で、何千年にも渡り風雪に耐えることのできる素材でもある。

ガラスは大量生産が容易で、比較的安価であり、それでいて頑強で、衛生的で、可塑性をもちながら固い、そして、まずはじめに透明で、光を反射する性質がある。その物理的および視覚的特性を考えると、隠喩的なほめかしを目的に創造されたかのようである。たしかにガラスは人類にとって、物質的な、また精神的な意味において非常に強力な隠喩(メタファー)であった。現実をデフォルメしたり、明瞭にしたり、また曖昧にしたり、拡大したりすることもできる。生活環境に生氣を与え、そうすることによって対話を始めるのである。

ガラスの建築、それと色鮮やかな光は、人の心理に作用する表現手段であるということができる。現代ではガラスは、代表的な素材のひとつだが、それは特異な性質により、現代という時間感覚と思考をそれ自体のなかに具現化したからにほかならない。

20世紀になって、ガラスの数千年に渡る歴史を誇示するかのような物理的特性面での使用の発展と、それとともにガラスの美的性質での利用の追求がかなり進められた。この傾向は特に建築界でのガラスの使用において顕著に見られる。建築におけるガラスの特質は、技術的、視覚的、美的といった広い範囲で比較してみても、他の建築素材から優位にあり、したがってガラスは可能性のあるこれからの素材として位置づけられていた。数多くの重要なガラスの建築物を見ればそれが納得できよう。ガラスの建築は、ガラス素材の調和と

反射が引き起こす空間の変化を前提に建てられている。浸透する光の反射と構造が結合するように絶妙なプランをたてることによって、空間内での素材による組織された奇跡を生み出すのである。

建築が空間を扱うことであり、場所あるいは対象とのコミュニケーションによって成り立つのと同様に、私の作品、思考、視覚も、常に空間との対話、建築との対話に根ざしている。私は外的現実を組織された空間として認識する。その空間内では、相互にさまざまな物質の集合体、軽いものと重いもの、固いものともろいもの、空のものと詰まったものが浸透し合い、緊張とコントラストが生まれる。これが私の芸術の方法である。私の目的は空間内に物を創造することではなく、ガラスを使った空間構成によって、空間内の空間、自然内の新たな自然を表現することにある。板ガラスを構築すると幻想的な光の変化が生じる。板ガラスを組み、積み重ねることによって、光を、集中させ、強化させ、屈曲させ、分解させ、あるいは反射させる。慣れた価値観を捨て去ることで、見る者を錯覚に陥れるのである。

私にとって重要なことは、作品の構成と内部・外部空間との間の緊張から生まれる疑問、光の浸透と透過、光と影、現実の隙間と幻想の反映との境界を撤廃することから生じる疑問、などである。

板ガラスは基本的には平板、つまり2次元の平たいものであるが、それが3次元の空間と物質を表現し、さらに幻想を生み出すのである。板ガラスは日常的に生産されるものだが、単なる絵や写真とはそこが違うのである。

建築においてガラスは新たな空間形成に参加し、自らの知覚と認識の更なる可能性を示す。反射性にとりわけ非物体の印象を与える透明性のおかげで、ガラスは空間を超え、森羅万象と融合し、無限に続く像を映しだす。しかも不透明な物体を外見上、突如透明に変えることも厭わないのである。

造形作家としての私に板ガラスは、まず、ひとつの空間と、それぞれの空間との関係において、新たな自己実現の可能性を提供してくれた。平らでほぼ無色のガラスは、さまざまな理念へのニュートラルで不可視な、乱れ

ようなない原点であるといえる。

板ガラスによる構築は、ただ美しいだけでなく、しばしば儚い印象を与え、そのリスクが引き起こす緊張感を見るものに投げかける。

●Marian Karel／プラハ工芸美術大学教授

註

*1: ヴァノッキオ・ビリングッチオ(Vanoccio Biringuccio, 1480-1538頃) イタリアの冶金学者。1540年に鉱山、冶金の百科全書ともいえる「火工術」を著した。

鈴木崇英

空間とガラスのコラボレーションの可能性について考えるとき、日本の現代ガラスワークと欧米のガラスワークの違いについてまず触れなければならない。現代の注目される日本人作家は、いかに陶器に近い肌合いのものをガラスで表現できるかに腐心しているように見える。焼きもので表現すべきものをガラスで表現しようとする。陶器の模倣であり、陶器から抜け出せないのである。欧米のガラス作家はガラスそのものの本質から自分の考える何かをえぐり出して自分独自の表現をしようとする。

日本人の陶器好きは、1万2000年前から始まった縄文時代にしっかりと身に刷り込まれてしまっていることなのである。安田喜憲は「縄文文明の環境」(吉川弘文館)の中で、日本列島は地球上でいち早くブナやナラあるいはクリなどの温帯の広葉樹の森が急速に拡大したが、この森の中で、亜寒帯針葉樹林帯から南下してきた北方系の細石刃文化と、温暖帯常緑広葉樹林帯から北上してきた南方系の細石刃文化が融合したとき、縄文文化が誕生したと言っている。それは縄文文明と言って良い条件を備えていたという。森の中の木の実や山菜、そして猪や鹿の肉、さらには森の中を流れる川や湖に生息する魚、そして海の魚介類をこった煮する道具として土器が発明された。縄文土器は1万年以上にわたって、デザイン、テーマ、スタイル、イメージ等の表現において一貫性を保っており、それはもはや単なる食器や調理具ではなく、高度な精神性、宗教性を持つものとなっていた。縄文人が森や川とどうかわるのか、森や木、水、あるいはすべての生きもの、すべての自然物をどう認識しているのかを土器に表現したのである。すなわち縄文人の美意識を土器を通して定着させたのである。

森や川と共生する生活では、季節の順調な循環が食料を豊かにしてくれる。だから季節の順調な循環のために、季節ごとに祈り、循環を促進する祭りをする。日の出、日の入を繰り返す太陽、冬眠し春に復活する生物、脱皮をしつつ成長する蛇など循環を象徴するものを神と崇める。すなわち「再生」が美意識の原点に据えられたのである。また、このことは人の魂の再生を信ずることへ、さらに人

はいつも元気でいたいという日本人の価値観へとつながっていく。「再生」とともに「玉ふり」(魂振り)も日本人の美意識の原点にあるのである。

森と水にその基礎を置く日本文化は縄文から弥生、古墳、歴史時代へと変わらなれど、土器から陶器へと変わっても、焼きものに対する精神性、美意識は変わらない。それが再生と玉ふりの芸術としての茶の湯を生んだ訳である。胎内に見立てられた茶室に入り、水(茶)で浄められ、再び狭い罫り口から出てくるのは、再生=生まれ変わりの擬きの儀式と理解される。ここにおいて茶碗=焼きものが日本人の美意識の中心におかれ、逆に茶碗=焼きものの持つ美の要素が他の工芸品や美術、芸術にあるか否かが重要となるという逆転現象が起きた。だから、現代の日本人ガラス作家もガラスを素材として陶器をつくらうとするのである。

しかし、ガラスは本来的に透明であり、透明でなくとも少なくとも光を透過させることにその本質がある。光を反射させてガラスを見るのではなく、光を透過させて見たとき、ガラスのほんとうの美が発見できる。欧米の、特にチェコのガラス作家は皆、光の透過によりガラスに潜むガラスの真実を引っぱり出そうとしているのである、これに反して陶器は不透明であり、透過光でなく、反射光により表面の姿、景色を見、そこに神、宇宙を感じとる。ガラスはガラスの中側から透過光により真実が外に浮かび出され、陶器は表面から中に向かう心の光で中に潜む真実を感じ取るということができる。

また、陶器は釉薬を重ねることにより、平安貴族の美の表現法「襲(重ね)」に通じ、これは日本人のもうひとつの美意識、微妙に変化する「ズレの美」を生んでいる。すなわち、日本の陶器は極めてアナログ的な表現をとっており、一方欧米のガラスはカットグラス、ステンドグラスに典型的に表れているように極めてデジタル的な表現であると理解することができる。例えるならTVや液晶ディスプレイをルーペで拡大して見たときの画素がひとつひとつははっきりと存在し、それらが集まって全体としての表現を形作っているのに似ている。この対比は、実は欧米と日本の都市

の成り立ちにまで拡張して考えることができるのである。

ガレ、ドーム兄弟らのアール・ヌーボーのガラスは違うではないかと言われそうだが、これこそ日本の美意識、重ね、ズレ、自然への興味共感(自然の一部分を強調、拡大する表現)をガラスにとり入れたものであり、欧米のガラスの伝統の美とは一線を画するものだと思えるべきなのだ。

さて、空間とガラスのコラボレーションは、焼きものに凝縮された日本人の美意識の縛りがありながらも強いため、日本人のガラス作家がガラス本来の美、ガラスでしか表現し得ない美を創造するのは極めて困難であり、コラボレーション以前であると言わざるを得ない。また、ガラスワークと言うとアール・ヌーボーの作品か教会のステンドグラスしか頭に浮かばない建築家には独立した現代性を持ったアートとしてのガラスと一体となった新しい空間を創り出すのは難しいだろう。

第二次世界大戦後、特異的に発展してきたチェコのスタジオガラス運動は、スタニスラフ・リベンスキー、ヤロスラヴァ・プリフトヴァ夫妻(共同制作)を頂点として、マリアン・カレル、ダナ・ザメチニコヴァ(彼らも夫妻だが独立して制作)ら、幅広い人材、多彩な表現を生み出すに至っている。彼らのガラスの本質的な美を引き出す理知的、論理的な手法、建築空間の大きさに負けない、色、形、大きさの作品を制作する技術、建築空間を理解し、それらと一体となって新しい空間の魅力をつくり出そうとする意欲、経験、能力、これらすべては私の彼らとのコラボレーションの経験からしても驚嘆すべき水準にあり、すでにひとつの領域を形成していると言える。空間とガラスのコラボレーションの可能性はここにのみあるといっても過言ではない。

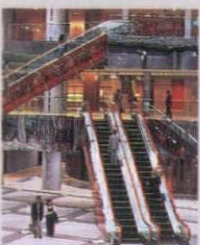
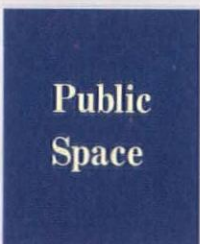
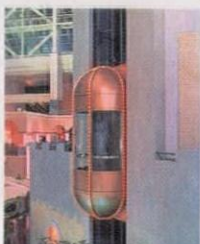
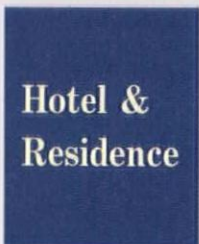
●すずき・たかひで/UG都市設計代表

HITACHI

広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

日立エレベーター・エスカレーター

地上数百メートルの超高層ビルから、戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m/分の「超高速エレベーター」や、身近な暮らしの中で利用される「車いす用ステップ付きエスカレーター」、ホームエレベーターなど、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。



Office Building



Shopping Center

超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。



株式会社 日立製作所

お問い合わせは＝電機システム事業本部 昇降機事業部/電機システム統括営業本部 〒101-10 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地
電話/(03)3258-1111(大代)または最寄りの支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000
北陸(0764)33-8511・中部(052)243-3111・関西(06)616-1111・中国(082)223-4111・四国(0878)31-2111・九州(092)852-1111



トータルインテリアで人を包みます。

サンゲツは、人の暮らしをやさしく美しく包むインテリアを提供する会社。
壁紙、カーテン、床材など、心地よい環境をつくるための商品を創っています。
人と部屋の間の、心地よい空気になること。それが、サンゲツの仕事です。

サンゲツのインテリア

壁装材・カーテン・カーペット・カーペットタイル・クッションフロア・フロアタイル・椅子張地

人と部屋の間に。



株式会社サンゲツ

名古屋市西区幅下1-4-1
TEL.052-564-3111
FAX.052-564-3191

ショールーム

東京	TEL.03-3505-3300	岡山	TEL.086-292-3300
名古屋	TEL.052-564-3225	広島	TEL.082-233-3551
大阪	TEL.06-440-5011	福岡	TEL.092-441-5181

隔月連載

ポーランドのドイツアヴァンギャルド

構成=長谷川 章

第5回(最終回)

表現主義者マックス・ベルクのインスピレーション／イエジ・イルコシュ
マックス・ベルクの〈世紀のホール〉の誕生とその背景／長谷川 章



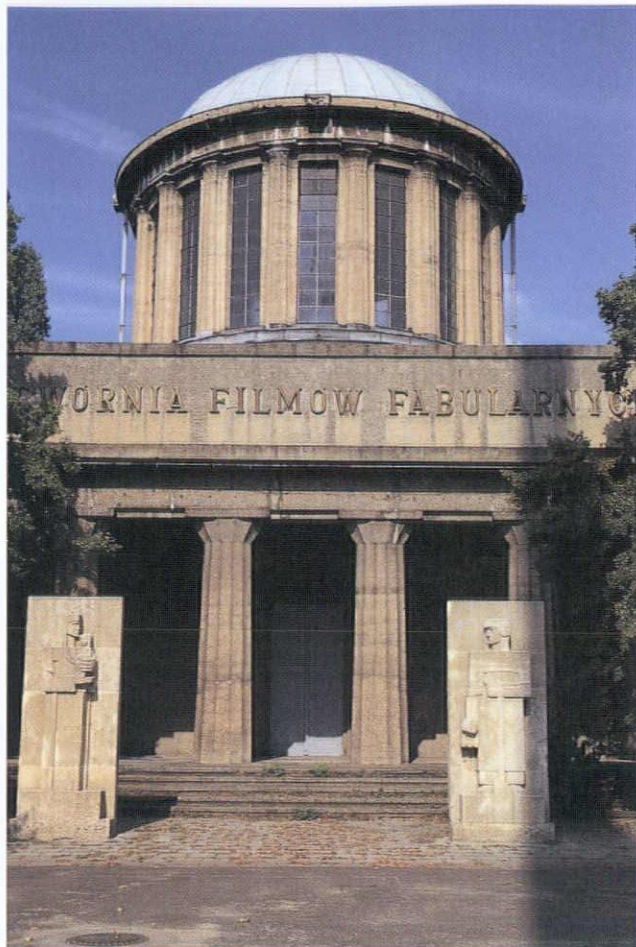
〈世紀のホール〉の現在の外観。設計マックス・ベルク、1913年



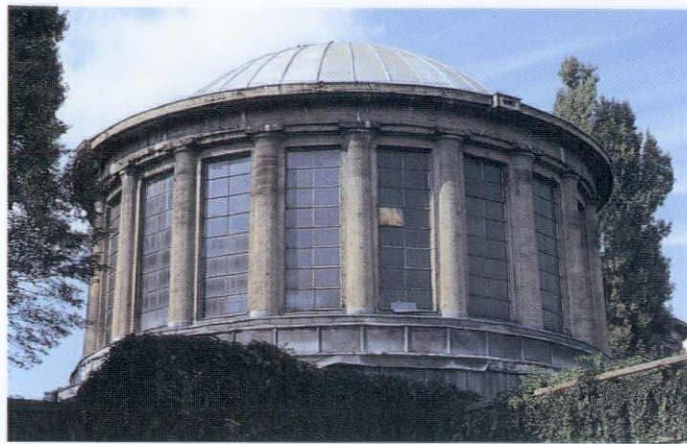
〈世紀のホール〉の竣工当時の内部。設計マックス・ベルク、1913年

マックス・ベルクの建築デザインは、彼の高層建築案でも「世紀のホール」と同様にストイックなまでに簡素、というより単調なリズムの繰り返しである。しかしそれは構造のシステムをそのまま空間に、そして外観に反映した結果としての率直さの表現であり、都市における建築の振る舞い方をわきまえた造形ではないだろうが。

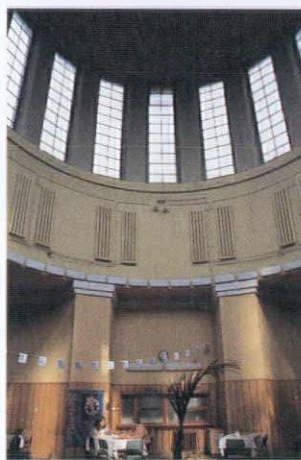
マックス・ベルクの建築の狙いはその内部空間にあった。よって外観は壇状の形態にならうがこだわらなかった。対して内部の放射状の梁とは力の流れをそのまま形態化したものであり、獲得された空間と違和感の無いものとなっている。「世紀のホール」は近代の伽藍であり、そこには北ドイツ生まれのベルクのカトリック精神が感じられる。



〈歴史展示館〉H.ベルツィヒ(1913年) 正面外観

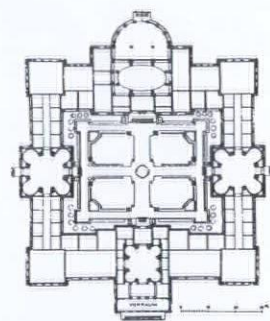


〈歴史展示館〉H.ベルツィヒ(1913年)、楕円の塔部分



〈歴史展示館〉H.ベルツィヒ(1913年)、内部

〈歴史展示館〉
正面に戦後設置された彫刻は
Xawery Dunikowskiによる作品「シレジア動乱
のモニュメント」である。



〈歴史展示館〉H.ベルツィヒ(1913年)、平面図



〈世紀のホール〉M.ベルク(1913年)、正面外観

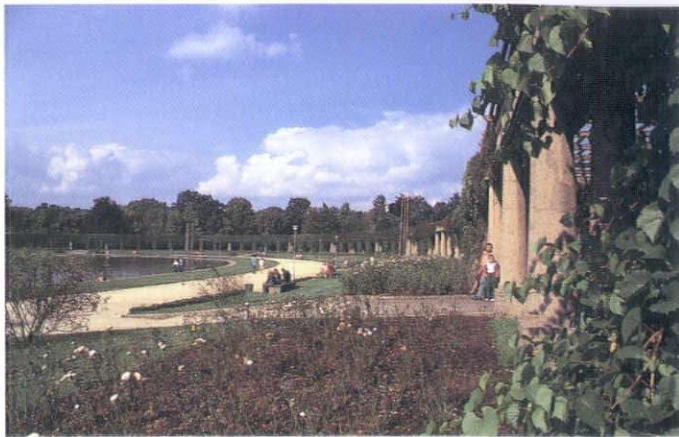


〈世紀のホール〉M.ベルク(1913年)、外観



〈世紀のホール〉M.ベルク(1913年)、内部回廊部分

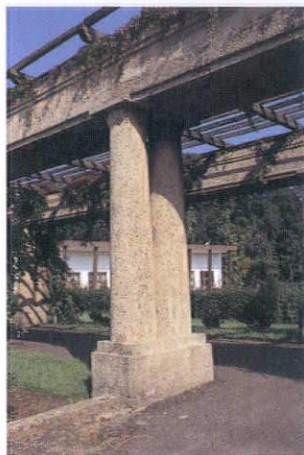
〈世紀のホール〉
この連窓は現在カーテンで遮光されているが、
竣工時は無かった。よって遠方から見ると段状
の水平スラブも見えなくなり、強い西日のもと
ではドーム内部の32本のリブがシルエットとな
って浮かび上がった。この時〈世紀のホール〉
は光に満ち溢れ、骨格だけの透明な世界に包ま
れた。そこには彼が信奉する神知学の世界観が
体现されていた。



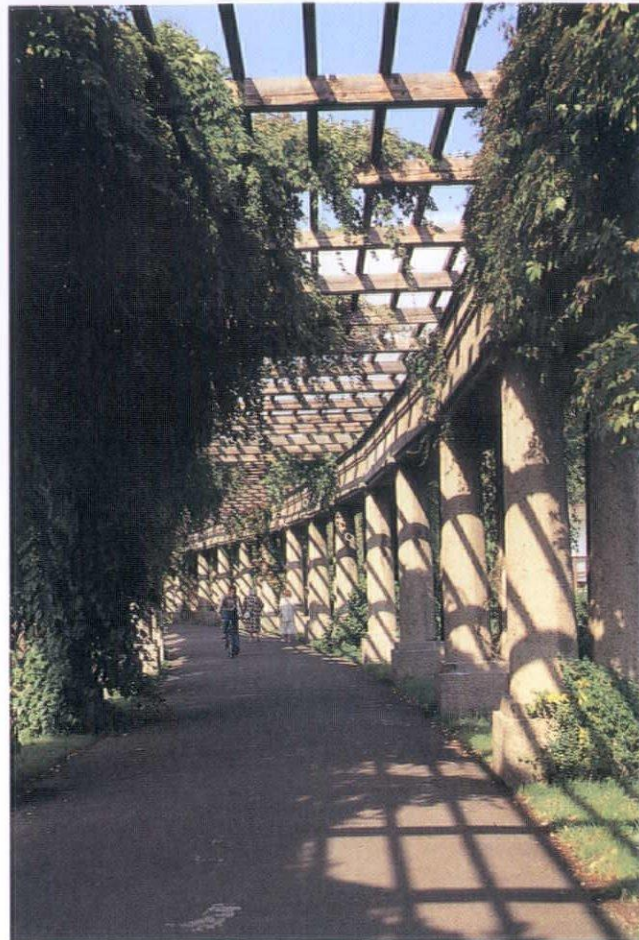
〈パーゴラ〉H.ベルツイヒ(1913年)、池を取巻く全景

〈パーゴラ〉

このパーゴラは何とも心地よく爽快である。花が咲き乱れ、パーゴラの影の織り成す回廊空間を歩いていると、暑さも忘れ心身ともにリラックスさせてくれる。ディテールが素朴でコンクリートの荒い素材感が大地と緑を違和感なく一体化させている。



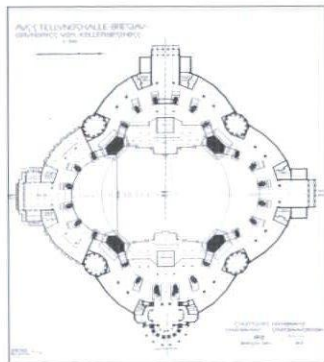
〈パーゴラ〉H.ベルツイヒ(1913年)、柱の詳細部分



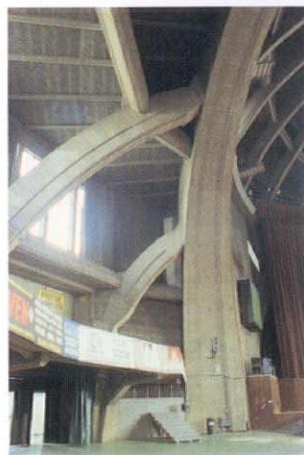
〈パーゴラ〉H.ベルツイヒ(1913年)、回廊部分



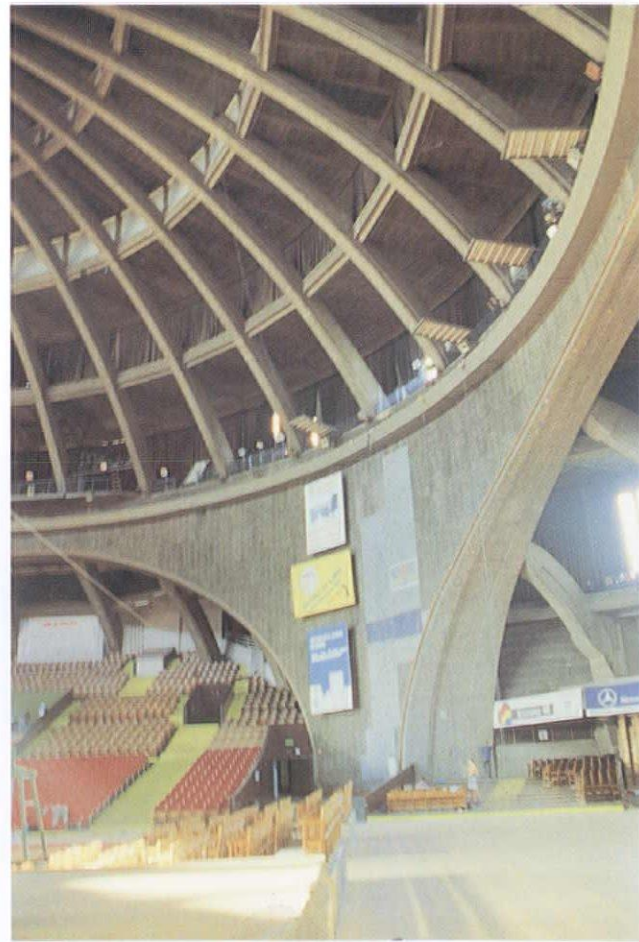
〈世紀のホール〉M.ベルク(1913年)、ドームの天蓋



〈世紀のホール〉M.ベルク(1913年)、平面図



〈世紀のホール〉M.ベルク(1913年)、アルコーブ部分



〈世紀のホール〉M.ベルク(1913年)、アーチの基壇

マックス・ベルクの〈世紀のホール〉の誕生とその背景

長谷川 章

〈世紀のホール〉建設の機運

この〈世紀のホール〉が建っている敷地は、旧市街地を取り囲むように蛇行して流れるオーデル河を東に渡った公園の中に位置する。緑も深い森があったこの周辺には1783年に夏の離宮が建てられていた程度で、まだ自然のままであった。しかし19世紀になると、この辺りをフリードリヒ・ルートヴィヒ皇太子が公園として整備したことから、市民にも親しまれるようになったが、1815年にはこの公園は市に売却された。1833年からはここに競馬場が造られ1906年まで使われたという[図3]。1860年頃に、ベルリンで活躍していた庭園建築家ペテル・ヨゼフ・レネに設計が依頼され、結果として南側の動物園と競馬場と自然公園が一体化されて約40haの規模の公園として整備されたのであった。

1881年ブレスラウでは『シレジア工芸工業博覧会』が開催された。しかしそれは当時のドレスデンやライプチヒあるいはベルリンが巨大な展示ホールの施設を持っていたことに

対して、シレジア州の州都でありながらブレスラウにはそうした施設が全く無いことを関係者にいやおうにも自覚させたのである。こうしてブレスラウ市でも展示ホール建設の問題が俎上にのぼり、その用地として白羽の矢が立ったのが、競馬場として使われていた公園の敷地であったのである。しかし計画は遅々として進まなかった。

1908年になると、こうした経緯の中でブレスラウ工芸博物館館長のカール・マスナーが雑誌『Schlesien』に「ブレスラウに博覧会施設は必要か否か」という小論を寄稿した。彼はこの中で、展覧会ばかりでなくスポーツのイベントにも使用可能な施設の必要性を訴えた。彼がその好例としてあげたのは、当時完成したばかりの〈フランクフルト祝祭会堂〉であった。これは中央にドームを持ち、多様なイベントの使用を想定して設計されたものであった。しかしマスナーが戦略家であったのは、その建設の契機としてドイツ民族の琴線に触れるような提案をしたことにある。す

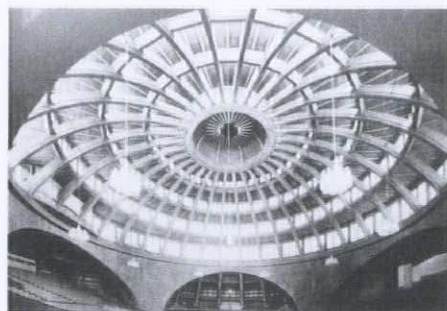


図1 〈世紀のホール〉竣工当時（1913年）の内観。

なわち彼は百年前の史実を持ち出したのだ。18世紀末から始まったナポレオン戦争において、プロシアは1813年ライプチヒにて勝利をおさめたのである。その人民解放戦争の戦勝百周年にあたる1913年に『百周年記念博覧会』をこのブレスラウで開催しようとマスナーは提案したのである。こうして「1913年の百年祭のためのホールの建設」という具体的なタイムスケジュールがまとまった。

マックス・ベルクの提案

ブレスラウでは1909から1912年にかけて展示、スポーツ、コンサート、演劇といった文化イベントを『ブレスラウ祝祭週間』と銘打って開催した。こうした最中の1910年10月24日に、市議会が特別会議としてシレジアの有力者を招集し、旧競馬場跡地に多目的の大ホールを建設することを決議した。

マックス・ベルクが都市建築監督官としてブレスラウに赴任してきたのはまさにこの歴史的瞬間であったのだ。こうして彼は新しい

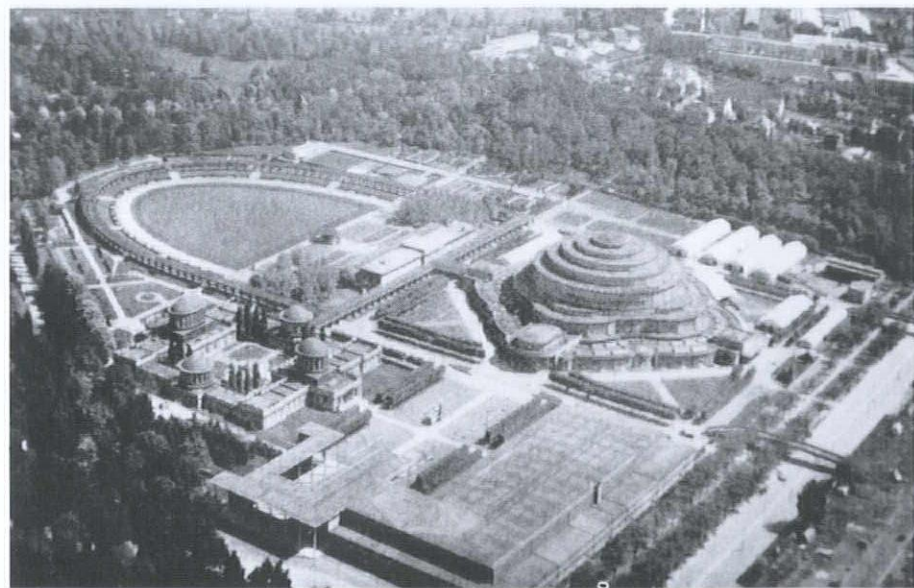


図2 博覧会全景鳥瞰写真、第二次世界大戦前の姿

正面エントランスの木造の屋根がまだ残っている。右手前の四角い展示館は、R.コンヴィアルツが1937年に設計して1939年に完成したものだ。また森を隔てて背後に1929年に開催された「WUWA」住宅展の建築群が見える。



図3 1890年当時の競馬場のあった頃の博覧会敷地周辺の地図。競馬場の南側のオーデル河沿いに皇太子の夏の離宮があった。後にこの周辺は動物園となる。その後ペテル・ヨゼフ・レネが公園として整備した。



図4 プロツワフ都市計画図(1919年) M.ベルク、L.モスハマー、R.コンヴィアルツ
1909年にブレスラウの都市建築監督官に就任したベルクは、エルンスト・マイに習って都市計画を始めた。こうした都市全体の中に、郊外の博覧会用の敷地が位置付けられた。

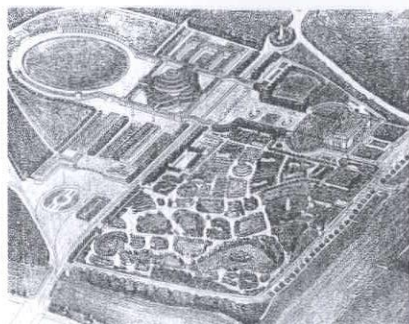


図5 M.ベルクの計画案(1911年)

ベルクの提案は、その視点が都市にあったという意味で根本的に異なる。路面電車の走る中央の通りに直行するような広場の軸を設けて、その中心に〈世紀のホール〉の原形にあたる展示ホールが位置付けられている。まだ競馬場の形跡を読み取ることができる。

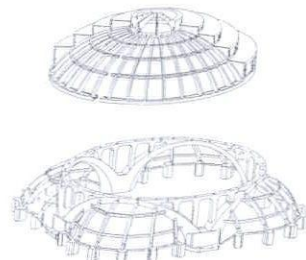


図6 〈世紀のホール〉の構造図

特筆すべきは、ホールのドームは下部の基壇と構造的に分離されていることだ。両者の間にはドームの肋の数と同じ32ヶ所にベアリングが設置されている。また基壇の4つの球状の構造体の肋は、それを受けている基礎とは構造的にはピン構造となっている。

ホールの設計競技を運営することとなったのである。しかし入選したのは軸線がはっきり通った新古典主義的な案であり、新しい時代の到来を期待させるものではなかった。

当選案が決まりながら、一方でベルクは自らスケッチをし始めていた。彼のアプローチはまずブレスラウの都市全体の計画から着手された。この全体像の中でこのホールが計画された公園地区を位置付けたのだ[図4]。ベルクのスケッチは、1911年に市議会に掛けられ、4月に模型が製作された[図5]。その模型は1911年にポーゼンでの『東ドイツ博覧会』の会場で公開された。ベルクの案は博覧会でも評判を呼び、いよいよ同年6月にはそのデザインと予算案が市議会に掛けられた。10日間に渡る審議の結果了承され、こうして〈世紀のホール〉はベルクの設計により実現の運びとなったのである[図1、6]。翌1912年2月には、このホールの建設の契機となったナポレオン戦争戦勝記念の展示施設として〈歴史展示館〉の建設も合意された[図7]。

『百周年記念博覧会』

1912年に〈世紀のホール〉の躯体が完成し、博覧会は開幕に向けて準備が進められた[図8]。1913年5月31日にオープニングのセレモニーがこの〈世紀のホール〉において行われ、続いて1912年にノーベル文学賞を受けたばかりのベルハルト・ハウプトマンの作品が上演された。また〈歴史展示館〉[図9]ではナポレオン戦争関連の展示の他に、画家マックス・ヴィスリツェヌスによるブレスラウのパノラマの風景が描かれた[図2]。

博覧会場ではさらにこの〈世紀のホール〉を囲むように庭園展が企画され、会場は花と緑に包まれた。庭園は歴史の年代順に、カロリング朝、ゴシック、ルネサンス、バロックの庭園がベルツィヒのパーゴラに沿って造られた[図10、11]。しかし唯一例外として東洋の庭園がひとつ造られた。それは日本庭園である。設計は日本の文化や芸術に造詣が深いフリッツ・フォン・ホーホベルクによる。そこには小さな滝や流れや池を配し、鳥居や藤

棚そして茶室が設けられ、そのエキゾチックな雰囲気を訪れる人々を魅了したといわれる。現在もこの日本庭園には金閣寺が水面にその姿を写し込み、小学生の写生する姿が見受けられる[図12]。この造園を手掛けたのは日本人のアライ・マンキチという人物であったといわれる。

こうして『百周年記念博覧会』は結果として約10万人の入場者を迎え、大成功の中で幕を降ろしたのである。

生きられた〈世紀のホール〉

第一次世界大戦の間この〈世紀のホール〉は仮説店舗として利用された。しかし1917年には戦争中ながら最初の工業博覧会が開催された。戦後早々にベルクはこの博覧会会場の拡充に着手した[図13]。彼はこの広い敷地を全て施設で埋め尽くそうとした。また敷地自体も60haへと拡張する計画をたてた。1925年にはまず正面入口部分に巨大な木造のホールがベルクの設計に基づいて建設されたが、これ



図7 〈歴史展示館〉H.ベルツィヒ 竣工当時(1913年)の外観
ハイサイドライトのための小さなドームが4本設けられていたために、通称「4つのドームのパビリオン」といわれた。建設費が厳しく柱梁はRCだが、壁は煉瓦積モルタル仕上げである。

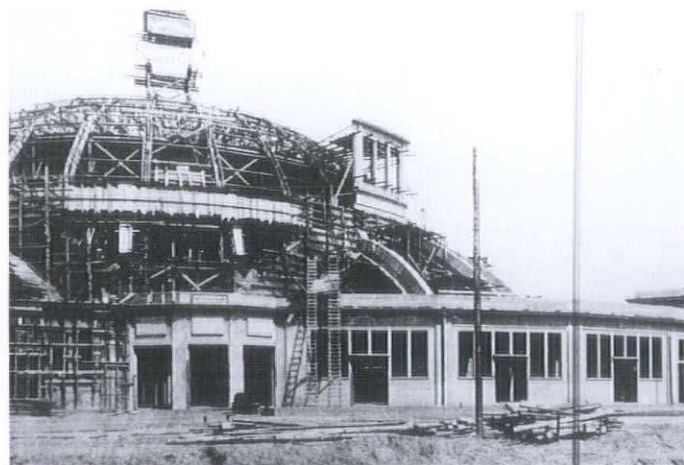


図8 〈世紀のホール〉の工事写真(1912年)

ドームの段状の連窓は、すべてプレキャストコンクリートである。ユニット化されたRCの窓枠がアーチの梁に取り付けられていった。ムテジウスが唱えた建築の工業化はブレスラウでは先駆的に実践されていた。

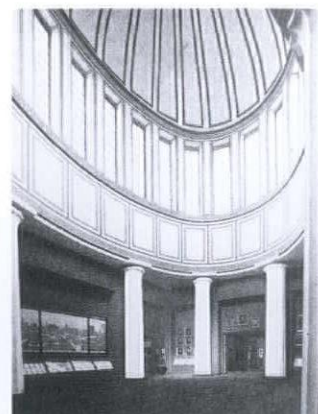


図9 〈歴史展示館〉の竣工当時(1913年)の内観

楕円形のハイサイドライト。内観では窓と窓の間は扁平な壁となっているが、外観ではこの部分には古典的な円柱が並んで楕円ドームを支持しているデザインとなっている。

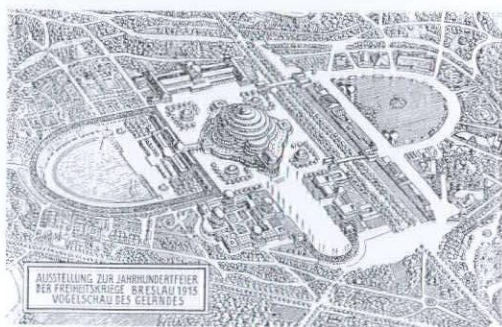


図10 博覧会全員の透視図、H.ベルツィヒ（1913年5月『Deutsche Bauzeitung』）ベルツィヒはベルクのスケッチした池を半円形にして、それと対になるような道路を敷地南側の動物園側に設けて一体化させた。またベルク案ではその池の幅で南側まで広場が連続していたが、ベルツィヒはその広場を建築で埋めて、道路で一巡りするようさせ、人の流れを作り、彼が設計したパーゴラが美質的に使われるように提案している。

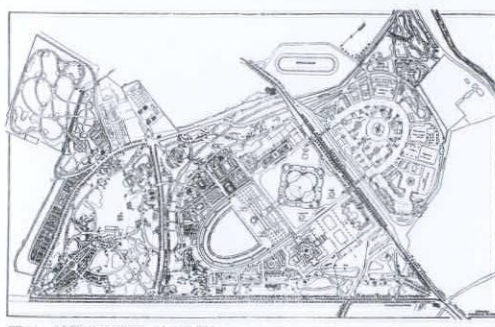


図11 博覧会配置図（1913年）

最終的にまとめられたこの配置図では、ベルツィヒの提案によって、よりダイナミックな、あるいは都市的な空間が生み出された。橋の両端部に水と緑の自然を配置して中央の〈世紀のホール〉を挟み込むように象徴的に配置されている。この配置は1931年にベルリンで予定されていた建築博覧会会場の配置設計では、より大胆に取り入れられた。

は第二次大戦中に焼失した。

一方1925年にブレスラウ芸術アカデミーの校長にオスカー・モルが就任すると、翌年には建築工芸クラスの教授にハンス・シャロウンが招聘された。こうしてH.ラウターバハが中心となってシャロウンとアドルフ・ラーディンクと共に、このブレスラウにドイツ工作連盟シレジア支部が結成された。彼等はこの〈世紀のホール〉の博覧会会場の東側に敷地を求め、1927年にシュトゥットガルトのヴァイセンホフ住宅展に比肩される『生活空間と労働空間展（WUWA）』を1929年6月15日から9月30日まで開催した。

第二次世界大戦中にも大きな損傷を受けることなく、ベルクの〈世紀のホール〉は戦後生き延びた。1945年シレジア地方がポーランドに編入されたが、1948年には博覧会が開催されるようになった。その時にスタニスワフ・ヘンベル教授のデザインした鉄塔が正面入口広場に立てられたが、それは現在記念建

造物として残されている[図14]。1980年には貿易・工業博覧会も再開されて現在に至っている。また隣接する〈歴史展示館〉は映画製作会社にスタジオとして使用されているため一般の人は入れない。一方ベルツィヒのパーゴラは今でも市民の憩いの場所として散歩する市民の姿が絶えない。

ブレスラウの建築博物館では1995年の夏、〈世紀のホール〉の改装設計競技の応募案が展示されていた。建設から80年を経て、内装や設備が老朽化したばかりでなく、機能的にも再検討が必要とされていた。そして時代に即したオーディトリウムとしての再生が適当ということになり、1995年6月オランダの建築家フーベルト・ヤン・ヘンケット氏に審査委員長が依頼されて設計競技が行われたのである。ブレスラウ建築記録保管所所長のイルコシュ氏は、現在のブレスラウ市がもっとこの〈世紀のホール〉の環境を含めて整備すれば「生きられた建築」としてさらに人々に親

しまれ、新たな観光の中心的な場になるであろう、と思いを馳せる。でなければ〈世紀のホール〉は、建築が都市を造ると信じられていた時代を象徴する単なる過去の歴史的遺物と化してしまい、ブレスラウの街全体がドイツ・アヴァンギャルドの息絶えた建築博物館となってしまうのではないだろうか。

●はせがわ・あきら／東京造形大学助教授

参考資料

Jerzy Ilkosz "Expressionist inspiration", the architectural review Jan. 1994, pp.76-81

Jerzy Ilkosz "THE CENTENARY HALL(today's Hala Ludowa)AND EXHIBITION GROUNDS IN SZCZYTNIKI" Wroclaw 1997, City Office of Wroclaw



図12 日本庭園と金閣時の現状（1995年）日本庭園は橋の先端の外側に設けられた。現在は様々な現地の説明書では中国庭園との記載が半々である。入口には東南アジア風の鳥居があり、大きな扁平な石を一面にばらばらに敷いた飛び石が続き、昔は恐らく太鼓橋であったろう、白い手摺りのついた半円の橋が池に架かり、池の中には1階まで黄土色に塗り込められた背の高い金閣時が無数の基礎の上に建っていた。

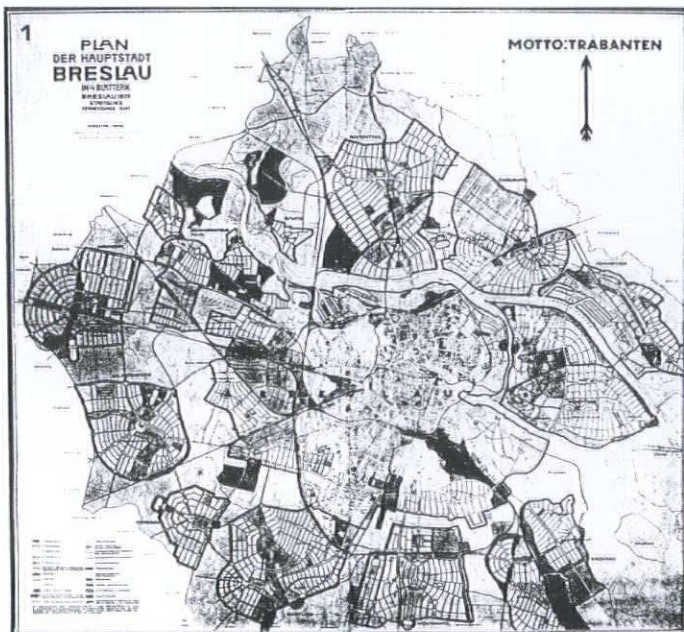


図14 〈記念塔〉スタニスワフ・ヘンベル作（1948年）

第二次世界大戦後に再開された博覧会は、ドイツ人のいないポーランド人によるポーランドのためのものとなった。この正面入口の広場に設置された鉄塔は現在記念建造物として文化財に指定されている。

図13 〈ブレスラウ都市計画設計競技応募案〉エルンスト・マイ+ヘルベルト・ベーム（1920年）

このコンペに関しては詳細不明である。しかしベルクはマイのもとで学んだのであり、この応募案の記号に用いられている「MOTTO: TRABANTEN」でも理解できるように、住宅を中心とした衛星都市を周辺に点在させているのが分かる。西側の衛星都市の中に〈世紀のホール〉が認められる。

表現主義者マックス・ベルクのインスピレーション 〈世紀のホール〉の造形理念

イエジィ・イルコシュ

ブレスラウの郊外、オーデル河沿いに広がる公園に計画された博覧会の敷地には1912年12月に〈世紀のホール〉が完成し、翌年5月に皇太子を迎えて華々しく博覧会が開会された。このホールはドイツの一地方の博覧会の展示ホールという存在を越えて、ドイツにおける第二次世界大戦前夜ながらモダニズムの潮流を方

向づける金字塔となった。その〈世紀のホール〉に隠されたマックス・ベルクの造形理念について、晩年にベルクが知人に宛た手紙を手掛かりにブレスラウ建築記録保管所所長イエジィ・イルコシュ氏が解析する。
(長谷川)

歴史からの模索

この〈世紀のホール〉の設計にマックス・ベルクが取りかかったのは、1909年に彼がブレスラウの都市建築監督官に就任した翌年のことであったと思われる。そのときホールの目的として、展示のための機能とオーディトリウムとしての機能の両方が要求されていた。展示には方形のプランが適当であるが、オーディトリウムには集中型のプランが相応しいと彼は考えた。しかし両者を満たすような妥協案は結果として無意味であることは、フランクフルトの祝祭会堂(1906~9年) [図1] が実証済みであった。こうしてベルクは集中型のプランを提案し、中央のホールを取り囲むように4つの半球が配列された空間構成のホールを提案した [図2]。

このモニュメンタルな〈世紀のホール〉のフォルムをベルクは古典的な建築物からインスピレーションを得たようである。その外観はエジプト建築やバビロニアのジグザットにヒントを得たといえるかもしれない。あるいはフランスの新古典主義の建築家ルドーやブレーのユートピア的なフォルムに通ずるところも否定できない。しかしその空間について着目すれば、ビザンチン教会のイスタンブールのハギヤ・ソフィア [図3] を想起させ

ずにはおかまいだろう。特に中央ドームの長大なスパンを構成するおおらかなアーチは〈世紀のホール〉を暗示させるに十分である。ベルクはこうして歴史の中からモニュメンタルなフォルムを見出したのである。さらにその平面構成を凝視してみれば、〈世紀のホール〉のプランは驚くほどミラノにあるサン・ロレンツォ [図4] に酷似しているではないか。特に中央ホールが4つの半円のアルコーブを従えて広がり、それを取り巻くように回廊状の空間が取り巻いている構成は、瓜ふたつである。

神秘主義からの影響

ところでベルクが当時描いたスケッチの中に興味深いものが1枚ある。これはミュンヘンのドイツ博物館の資料室に保管されていたものだ。そこには〈世紀のホール〉の外観のエスキースを繰り返した様子が交錯した線から読み取れる [図5]。このスケッチは一目見れば判るように、正三角形をふたつ重ねた幾何学的なモジュールの中に、理想的なフォルムとプロポーションが模索されている。こうした幾何学形態の中に建築のフォルムを求めるスケッチからは、当時ドイツに影響をおよぼしていたオランダの神秘主義建築家が思い起こされる。例えばJ.L.M.ラウエリクスは神知学

の信奉者として有名だが、彼はドイツに招かれて幾つかの建築を残している。神知学によれば、建築とは宇宙の秩序を数学的なモデルに置き換えたものとして解釈されていた。宇宙が人間社会の秩序を決定しているように、建築もまたこの秩序のもとに造られねばならないと考えられていた。ベルクの正三角形をふたつ重ねたこの形は錬金術の調和の関係を象徴化したものであり、彼が当時すでに神秘学や神知学に興味を抱いていた証左であろう。それは彼が当時書いた手紙の文面があからさまに物語っている。「私は巨大ドームによって精神世界を象徴化した。ドームの頂部からは父なる精神を表す正義と愛の光が差し込んで人々を照らすのだ。そして内部に露呈したドームの放射状のリップはこの精神世界から放たれる光を表現したもののなのだ。人々は母なる大地、自然の大地に内在された力によって衝き動かされている。このような大地の力は4つの大きな基壇のアーチによって象徴化されている。こうして父なる精神は母なる大地に受精して、その父の意思から発する力と人間の中に潜在していた力が神意となってこのドームが生み出された。精神の光はこうして人類と大地の力を貫くのだ」(1941年2月18日ゼッセルベルク教授に宛てた手紙) [図6]。

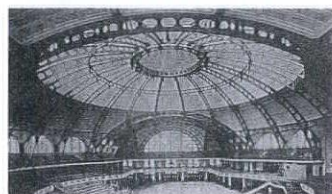


図1 フランクフルトの祝祭会堂(1906~9年)。フリードリヒ・フォン・ティエルシュ
このホールは鉄骨造であり技術的にはすでに完成されていた。ベルクのホールはこうした意味でRC造における最大のホールであり、技術への挑戦であった。ローマのパンテオンの直径が43mであるのに対して67mを誇った。

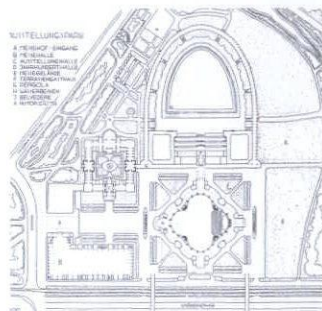


図2 戦勝百年記念博覧会の最終配置図。



図3 ハギヤ・ソフィア教会内部(1852年のリトグラフ)

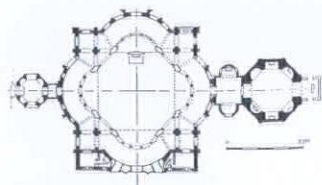


図4 サン・ロレンツォ教会の平面図
中央のホール周辺に4つの半円形のアルコーブが設けられていて、それを取り巻くように巡る回廊という、全体の空間構成が酷似している。

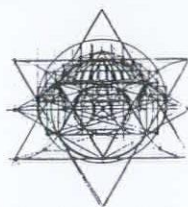


図5 〈世紀のホール〉のスケッチ。ミュンヘンのドイツ博物館蔵
ベルクのスケッチを見ると、三角形を組んだ星型が同心円状に重なり、合計4つの三角形によって〈世紀のホール〉の立面図のプロポーシジョンが決定されている。これは当時の神知学の影響を物語るものである。



図6 〈世紀のホール〉
現在ドームの連窓は、映画館としての使用などもあるようで、基本的に閉鎖されている。訪れたときは東側の開いた窓の一部から強い太陽に日差しが射し込んでいたが、その光景はベルクのいう「父なる精神としての正義と愛の光」を彷彿とさせた。

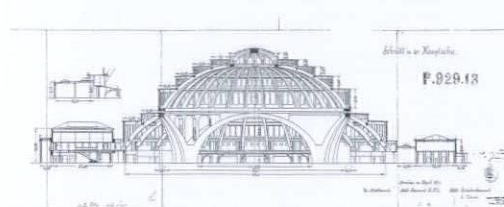


図7 〈世紀のホール〉の断面図。設計図の原図。プロツワフ建築記録保管所蔵。
ベルクはそもそもカール・シェフラーというネオ・ゴシックの建築家に師事していた。ベルク自身もゴシック建築に魅せられていた。この〈世紀のホール〉では後陣ともいえるべき部分がフライングバットレスの役割を果たしてドームからの力を基礎に伝えている。断面図を見ても判るように基壇には実は32ヶ所にベアリングが取り付けられていて、その上にドームが載っている構造となっている。また32本のリブから成るドームは最上部の小さな王冠状の部分で結合されている。

当時のユートピアを語る表現主義者たちは抽象的なフォルムを求めたが、それに対してベルクは、古典的建築からインスピレーションを得て新しいフォルムを生み出したのである。

吹き込まれたゴシック精神

しかし機能主義者がこの〈世紀のホール〉を見ても、そのフォルムに象徴性やイデオロギーといったものの表現を認めることはないであろう。それはしかしベルクにとっても望むところであった。彼が建築に求めていたのは、構造体としてのフォルムではなく「空間の彫刻」にあったからだ。こうした彼の考え方はオランダの建築家ベルラーへの建築理論に出自を求めることができよう。つまりベルラーへは「建築の美しさとは空間をつくることにあるのであって、ファサードをつくることにあるのではない」と述べている。こうしてベルクはアドルフ・ロースと同様に装飾を否定し、この〈世紀のホール〉において鉄筋コンクリートという新しい構造により大胆な空間表現を創り出したのである。

しかしベルクの空間造形にはゴシック建築からの影響が少なくなかったようだ。実はベルク自身、ゴシックの空間こそ空間の正当な造形であるとして評価していたのである〔図7〕。知人への手紙の中でベルクはさらに「私はこの建築を造るときに現代の素材をそれに相応しい空間へと造り上げたが、その空間に

はゴシックの精神が吹き込まれている」と記している。彼の初期のスケッチでは四角いプランの垂直壁に4つのアーチを設けたような典型的な聖堂に見られるような構造であった。しかしその案を捨て去り、彼はドームを描いてみた。ここでは大きなアーチが空間を湾曲させていく。その空間の形に沿ってドームに架かる力が、そのまま四方に設けられた半球状の基壇の梁を経て外部の基礎へと流れていくのだ。それはゴシック建築におけるバットレスと同様の力学的作用を成している。この基壇にあたる半球状のバットレスによって造られた4つのアーチが、中央のドーム全体を支持しているのである。〔図7〕。

こうして彼は新しい建築への可能性を導き出し、構造的秩序と調和的世界の探求によってこの〈世紀のホール〉を生み出したのである。

祝祭劇場としての建築

このブレスラウでの博覧会には多くの施設がありながら、この〈世紀のホール〉は常にその中心的役割を担っていた。1913年5月31日のオープニングのセレモニーはこの〈世紀のホール〉で行われた。ベルクがドイツ劇場のマックス・ラインハルトに演出の依頼をした『世紀の祝祭』によって華やかに執り行われた〔図8〕。続いて上演されたのはゲルハルト・ハウプトマンによる戯曲『Festspiel im Deutschen Reimen (ドイツ詩における祝祭劇)』

である。その舞台セットはハウプトマン自身のデザインによって造られ、作曲はアイナー・ニールセンに依頼された。またベルクはそのステージとオーテリウム（大ホール）の設計を担当した。このハウプトマンによる戯曲の最終シーンでは役者と観客の間に一体感が生まれ大成功を収めた〔図9〕。このことはラインハルトの目指す「5000人劇場」が事実上このブレスラウで確信されたといえよう〔図10〕。それは20年代後半のパウハウスのトータルシアターを予感させるものとなった。

こうしたコンサートはオープニング以外にもこの博覧会の会期中にあと2回行われた。そのひとつはラインハルトが2000人のエキストラを動員して演出した中世の奇跡劇であった。その音楽を担当したのはエンゲルベルト・フンパーディンクであった。さらに百人のオーケストラと1000人の聖歌隊によって、マラーの交響曲第8番の演奏会が行われた。当時のシレジア新聞は「この巨大なホールはまさにマラーの曲にもっとも相応しい場所である」と絶賛している。そして『百周年記念博覧会』は同年10月26日に〈世紀のホール〉で演奏されたベートーベンの交響曲第九番をもって大成功の内に幕が降ろされたのであった。●Jerzy Ilkosz/ブレスラウ建築記録保管所所長



図8 〈世紀のホール〉での博覧会のオープニングセレモニー。
4つ設けられたアルコーブのひとつに仮設ステージを組んで行われたオープニングのセレモニー。アーチがプロセニウムの役割を果たして、そこからステージが迫り出しているような印象をうける。

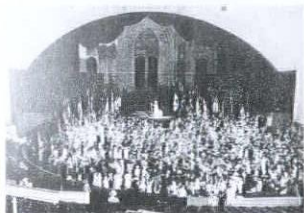


図9 「ドイツ詩における祝祭劇」ゲルハルト・ハウプトマンの戯曲。
ラインハルトによって演出されたこの祝祭劇には舞台セットにもゴシックの聖堂らしきものが見えており、全体として百年前のゲルマン民族の勝利を匂わせている。またベルクのプロセニウムのデザインはいたってシンプルだ。

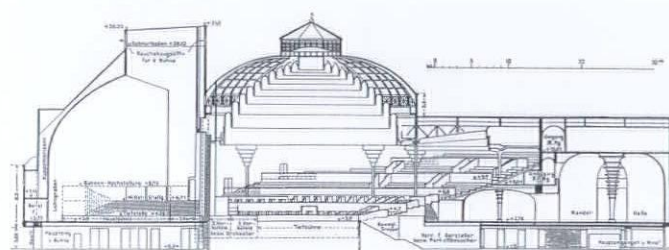


図10 「ベルリン大劇場」1919年、H.ベルツヒ
〈世紀のホール〉の舞台のあり方は、ラインハルトが目指していた「5000人劇場」を実験したものといえよう。それをそのまま展開したのが、6年後にベルリンに造られたラインハルトによる「ベルリン大劇場」なのである。その客席の天蓋を見れば、この〈世紀のホール〉のコピーであることが良く判る。

Public toilet Unit bathroom Tiles Powder room

INAXの
抗菌商品
ぞくぞく
新登場

■「清潔性」と「メンテナンス性」が大きく向上
水まわりの清潔さに対する人々の関心は高く、パブリックスペースをつくるうえでも無視することはできません。また、どうしても汚れがちな水まわりのメンテナンスには大きな負担がかかります。

そこでINAXは、抗菌によって汚れの原因になる細菌の増殖を抑え、施設の衛生環境を向上させます。

■パブリックスペースの水まわりをまるごと抗菌
トイレ、ユニットバス、洗面台のほぼ全ての商品を抗菌化。壁・床タイルも含め、ホテルやレジャー施設、厨房、そして病院や福祉施設など衛生面の配慮が欠かせないパブリックスペースの水まわりをまるごと抗菌にすることが可能です。

さらに、抗菌仕様でも価格は据え置き。より快適な空間づくりに、幅広くお役立ていただけます。



株式会社 INAX

静岡支社 〒420 静岡市追手町2-20 千代田生命静岡ビル ☎054-251-1710

INAXホームページ <http://www.inax.co.jp/>



INAXなら、住まいの水まわりも「まるごと抗菌」

清らか、
爽やか、
和やかな環境づくり。



■空調設備工事 ■給排水衛生設備工事 ■給湯設備工事 ■その他建築付帯設備工事

ヤナセ設備工業

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

株式会社ヤナセ設備工業
〒105 東京都港区芝浦1-11-4
電話(代表)東京(03)3455-8091



隔月連載：ネットワーキングの極意

その4(最終回)

「建物の保存・活用のネットワーキング」

■ 住み継ぎネットワーク

■ たてもの応援団

近代以降、都会の住宅地にあつては、四半世紀にも満たないサイクルで建て替えが行われ、その都度、時間の流れは余りにも簡単に絶たれてしまい、場所の記憶は葬り去られ、繊細な平衡を保っていた住環境は取り返しのつかないダメージを受けてきた。建て替えの要因としては、家屋の老朽化、環境悪化、開発の圧力、相続税の高騰など、さまざまに言われる。どの要因にしても切実で、過酷で、また不可避なものだ。

以下に紹介する野口邸は父子3代に渡り住み継がれてきた希有な事例だが、一般的には、もはや個人の知恵と意志だけではどうにも道が開けない事態に至っている。公的支援にしても、こうしたところまでは目が行き届きにくい。地域住民のネットワーキングによる何らかのサポートが望まれるところだ。

◆3代にわたる住環境保存の姿勢

渋谷区大山町の住宅地。大正時代に新住宅地として開発されたところだが、もちろん今ではマンション、商店などが虫食い状に建ち並び、昔日の面影は失われてしまっている。

過日、その一画にある建築史家、野口昌夫の自邸を見学する機会があった。

敷地の中央には、昭和2年に野口の祖父が建てた洋館がある。当時は人目を引いたに違いないしゃれた2階建てで、設計図も残されている。戦災を免れ、作りも頑丈で今日まで生きながらえ、現在は両親が住んでいる。

次いで昭和46年、庭先に父が茶室を建てた。同時につくばい、灯ろう、踏み石が設置され、植栽も整備された。

長らくその状態が続いた後、今度は野口自身の家族の居住スペースが必要になった。敷地は既に洋館と茶室で大半を占められ、ゆとりはない。通常であれば、唯一の選択肢は既存の家屋の一部を壊すことのように思われる。

しかし彼はそれを避け、既存の環境を最大限に生かす策を講じることにした。北東部のわずかな空隙に、幅3m、長さ15.5m、高さ7.5mという極端に細長いボリュームを挿入



野口邸外観、手前に茶室、その奥、左が昭和初期の洋館、右脇に新築住戸。渋谷区大山町

し、洋館の脇役として仕立て上げ、住居としたのである。平成8年のことだ。

これが親子3世代、計10人からなる同族ネットワークによって保たれてきた住環境の現在の姿である。

ひとつの小さな敷地の中で営まれてきた70年にわたる建設の活動。それは決してドラマティックではなく、むしろ平穏であり、目を見はる新奇さはなく、むしろ凡庸であると言える。しかし、その平穏さ、凡庸さこそ、日常の暮らしを貫く時間の流れの連続性を保とうとする知恵と意志の結果なのである。

◆「住み継ぎ」をめぐる学際ネットワーク

渋谷区広尾の住宅地。大正13年に建設された土岐邸は、木造2階建てのドイツ風の洋館で、マンション建設のために取り壊される予定だったが、ここを生家とする土岐小百合が仲間を募って保存に向けた運動を始めた。幸い縁があって、土岐邸は群馬県沼田市に移築され、郷土人物資料館として保存・活用されることになった。1989年のことである。

庭のけやきの巨木は移植しようもなく、切り倒されることになったが、強い愛着を持つ

人々が集まって「一本の樹プロジェクト」をスタートさせた。樹木を切り分けて希望者に配り、3年後に作品に仕立てて持ち寄り、展示会を開くという壮大な企画で、生い立ちや職業を異にする多数の人々がネットワークを作り、文化庁の芸術文化振興基金の助成も得て、プロジェクトは成功裡に終わった。このネットワークについては当事者による報告が刊行されているので、それを参照していただく。^{*)}

ここで紹介するのは、土岐邸から派生したもうひとつのネットワークである。それは「住み継ぎネットワーク」という奇妙な名前を持つ。

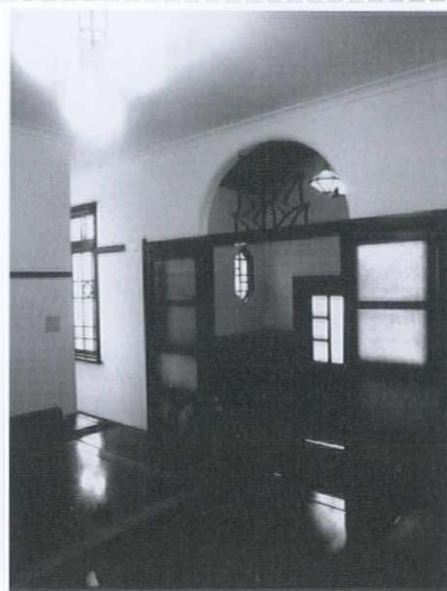
建築史家の藤原恵洋は、歴史的、学術的、文化財的な価値が明瞭に認められる近代建築を研究対象としながらも、その背景をなすアノニマスな建物への関心を日ごとに強めていた。その折に、土岐邸の保存運動にかかわりをもち、建築以外の分野の、それぞれ全く異なる関心をもった人たちとの自由な議論を通して、アノニマスな建物を物理的に保存していくことの是非ではなく、そこで営まれてきた生活全体を語り継ぎ、受け継いでいくこと



新潟県高柳町荻ノ島地区環状集落。日本でもめずらしい茅葺きの民家が環状集落を形成している地域。住み継ぎネットワークのメンバーは、地域住民との交流を図り、茅葺き民家の生活を実体験した



高柳町荻ノ島地区「荻の家・島の家」。茅葺き民家の改修1棟、移築再生1棟、新築の茅葺き2棟、計4棟の設計監理を日影が行った



昭和の洋館。設計＝日影良孝。埼玉県浦和市に建っていた昭和6年の洋館を隣町の与野市に移築再生した。敷地条件が異なることから、移築前の平面や外観はほとんどとめていないが、「空間的復元」に意が注がれている



山中湖の蔵座敷。設計＝日影良孝。石川県の民家を山中湖に週末住宅として移築再生したもの

の大切さに思い至り、それに同調するものが半ば自然発生的に集うかたちで誕生したのが「住み継ぎネットワーク」だった。

建築家日影良孝は民家の再生を多く手がけている。再生の作業は、埃をはたいて右から左へ移せば終わりと言うほど簡明なものではない。古い家屋は傷みが激しく、利用可能な部材を見極めながら解体することも難事であれば、現代の住まいとしての要求を満たしながらそれらの部材を再構築していくのはさらに高度な創造性を必要とする作業に違いない。日影は「住み継ぎネットワーク」での交流を通して、民家の再生利用においては、ものの復元に大きな意味があるのではなく、日常生活の舞台としての空間、その空間に織り

込まれたさまざまな記憶、それらを復元することこそ意味があるという認識を深くしたという。それを「空間的復元」と彼は呼ぶ。

加藤雅久は、普通の住宅建築を対象として、都市あるいは生活の視点から見つめ直す研究を続けている。彼は、建築家が住宅設計を通して施主に提示しようとする生活のイメージの押しつけがましきにも、また一方では商品化住宅に見られるライフスタイルの表層的なカタログ化にも疑わしさを覚え、取り壊される前の調査に参加した同潤会代官山アパートでの、住人たちの自主性に満ちた生活のイメージ、それを実現しようとする強固な意志と実行力に共感を寄せ、そこに、住み継いでいくに足る住宅建築のありうべき姿を見てい

る。彼もまた、「住み継ぎネットワーク」での議論に大きな刺激を受けつつ研究を進めてきたことを否定しない。

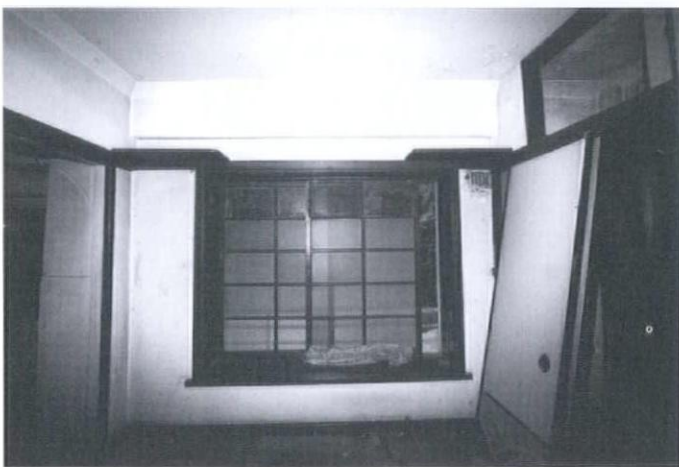
文学の研究に携わる高橋大助は、「住み継ぎネットワーク」に参加し、建築史研究者ではなく一般の通行人の視線でアノニマスな建物を見る藤原の姿勢、建物を全体の茫洋としたイメージに頼らず部品の流通に立ち戻って考察する加藤の方法、何の特徴もない木造アパートの改修を施主とのアドリブの中で楽しげにやりとげる日影の態度を知り、それまで抱いていた建築の専門家のイメージがすっかり変わってしまったという。その彼は逆に、他のメンバーにとっては意外な視点の絶えざる供給源であるようだ。



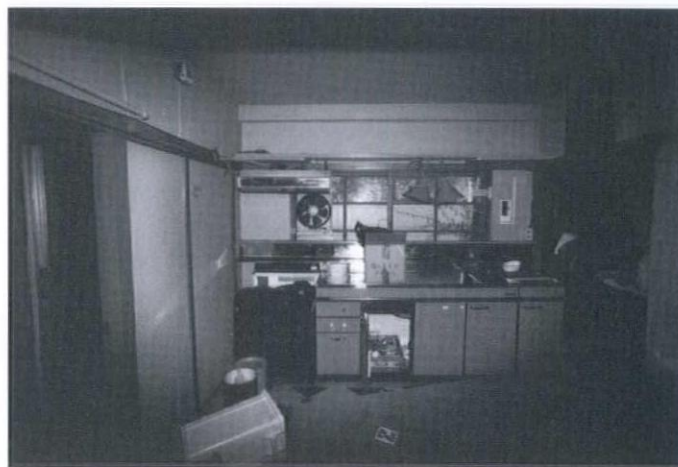
同潤会代官山アパート。3階建。家族向け住棟の外観



3階建住棟の増築の例。3階の窓は当時のまま、2階は出窓が増築され、1階は1室が増築されている



3階建住棟の室内。竣工当時の状態が保たれている



左とまったく同じタイプの室内。ペンキで洋風に塗り替えられ、台所に改造されている。元の狭い台所は浴室に改造されている

メンバー数人を紹介したにすぎないが、それでも「住み継ぎネットワーク」の輪郭は知れよう。普通の建物の普通の生活。その豊かな内実が途切れてしまうことなく受け継がれていくことの重要さを思い、その方法を探ることに関心のある人たちが、それぞれの専門の枠を取り払ったところで議論をし、その成果をまた専門の分野に持ち帰って生かしていく。そのための緩やかなシステムが「住み継ぎネットワーク」に他ならない。

◆地域にねざした保存・活用の運動

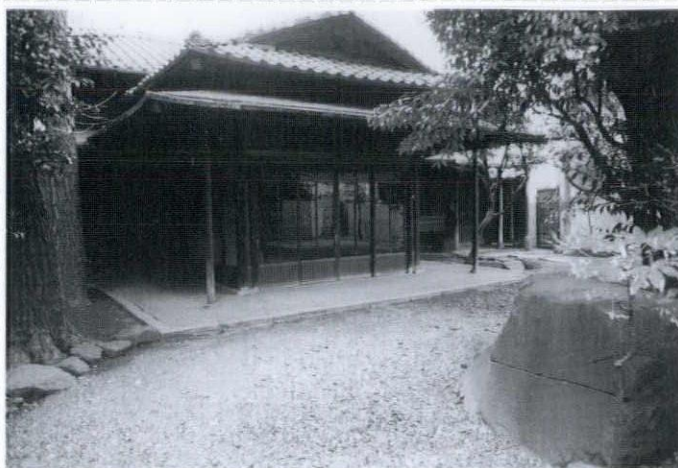
文京区千駄木の住宅地。大正7年に建てられた安田邸は、数寄屋と書院造りの両者を取り入れ、洋風の応接間をもつ大規模な木造2階

建て瓦葺きの邸宅である。地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を編集・発行している谷根千工房の人たち、あるいは近所に住んで建築設計を業とする松塚昇にとって、安田邸はかねて気になる存在だった。千駄木にあっても、大震災や戦災を免れ、大正の頃と変わらぬ佇まいを有する屋敷は珍しく、内部の保存状態や建物を慈しむ住人の姿勢を含め、その全体が「大きなタイムカプセル」のように思われたのである。

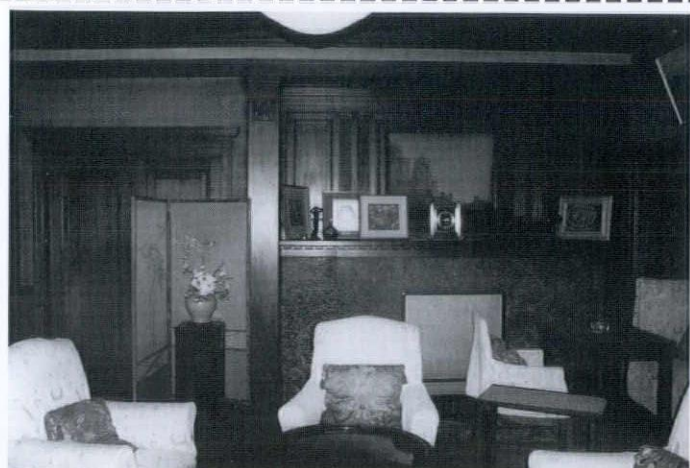
95年11月、御当主が亡くなられ、安田邸の行く末が懸念される事態となった。保存を望む人たちによって、とりあえず建物の実測調査が急がれ、翌年4月に実施されたが、それを機に会が組織された。「文京歴史的建物の

活用を考える会」、通称「たてもの応援団」がそれだ。

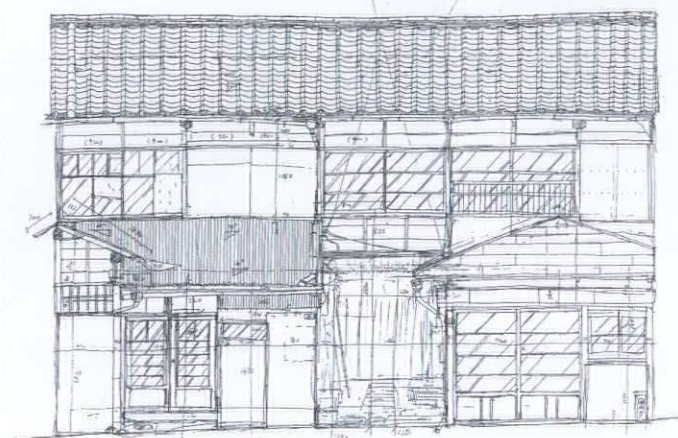
「応援団」は、調査報告書の作成、相続に関する諸条件の情報の収集と提案、財団法人日本ナショナルトラストへの連絡、見学会の実施などを通して未亡人をサポートし続けた。その甲斐あって、「大正時代の近代和風建築として第一級の意匠を備えており、屋敷の環境と共に良好な状態で保存されている極めて稀な存在」（大河直躬）という評価を得た邸宅は、平成8年8月に土地とともにトラストに寄贈され、保護資産となり、今後、専門家による調査を経て、保存・活用が図られる手筈になっている。一般公開は来年夏頃に予定されている。



安田邸の玄関。文京区千駄木



安田邸の応接間



文京区の足軽長屋の立面図。スケッチ=志村直愛



所沢駅前商店街の保存状態の良い蔵造りの町並み

それにしても、事が動き出してからわずか半年余りという異例の短期間での出来事だった。この間の「応援団」の働きはめざましい。しかしそれは決して偶発的なものではなかった。

メンバーはそれぞれに地域に根ざした活動を長年実践し、多くの経験をつんだ強者ぞろいだ。前述の谷根千工房、芸大生や住民とともに町づくりの活動を展開している谷中学校の手嶋尚人や椎原晶子、1992年からミニコミニュースレター「坂まち通信」を発行し、旧小石川消防署の保存を呼びかけた建築家の伊郷吉信、赤レンガの東京駅舎の保存運動を続ける多見貞子。その他、誰もが思考に行動がびたりと伴う人たちであり、ローカルなネットワーク作りにいそしみ、かつ多くの人が複数のネットワークにおいて活動を共にしてきた間柄にある。

中の何人かは、本郷の富士邸の調査やサトウハチロー邸の現地保存運動などに参加し、歴史的な価値をもった住宅建築の保存・活用の難しさを味わい、それを可能にする方途をさがっていた。それには、地域で活動が続いているネットワークを横断する、明確な目的

をもった新たな枠組みが必要とされるという認識でも共通していた。「たてもの応援団」が誕生する素地は十分過ぎるほどあったのである。

「応援団」は毎月1回の例会を開き、不定期に調査や見学会を行っている。最近の大きなトピックスは江戸時代の足軽長屋を発見したことで、その保存に向けて動こうとしている段階にある。

◆野口邸、土岐邸、安田邸

大正末期から昭和初期にかけて建てられた住宅である。どれも建物単体としてというよりは、庭を含めた全体の佇まい、生活のコンテナーとしての環境そのものにこそ価値が認められるものだ。3代に渡る個人的な努力と工夫によって保存・活用されてきた野口邸、本来の場所を奪われながらも移設・転用によって生き延びた土岐邸、住人の英断を得て現地保存に落ち着いた安田邸。結末は三者三様であるにしても、どの邸宅も、それに愛着を持つ人たちのネットワークによってしっかりとサポートされてきた。

野口邸や安田邸をラッキーな例外とみなし

て片付けてしまうのではなく、それらを理想のケースとしながら、これからはさらに多様な保存・活用の道が探られねばならないだろう。それには、ここに紹介したネットワークを一例としつつ、さらに多くの、質を異にするネットワークが形成されることが要請されよう。

文京区の「たてもの応援団」に刺激され、最近、所沢駅近くの商店街の蔵造りの町並みの保存・活用をめざして、「所沢たてもの応援団」が旗揚げされたという。ひとつの輪が複数の輪の重なりを発展していく予感を与える出来事である。

●伊藤公文

*1：土岐小百合『一本の樹からはじまった』アリス館、1994年。プロジェクト達成までの波瀾万丈の様子が軽快なタッチで描かれている。

写真=北田英治 P.117、日影良孝 P.118
加藤雅久 P.119、伊郷吉信 P.120

連載：世界の現代美術館探訪

美術館は生まれ変わる

第 6 回

情報と文化の工場の20年／太田泰人

ボンビドゥ・センター

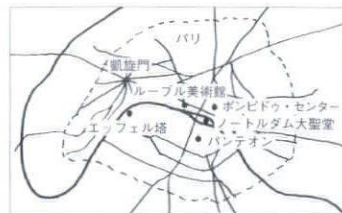
■ W. O. M² (21世紀美術館調査隊)

太田泰人／神奈川県立近代美術館学芸員

水沢 勉／神奈川県立近代美術館学芸員

渡辺真理／建築家、法政大学教授

松岡智子／倉敷芸術大学芸術学部講師



ボンビドゥ・センター外観

1977年に創設されたパリのボンビドゥ・センターが、今年で開館20年を迎えた。建設途中は賛否両論はげしく戦わされたが今ではそれも鎮まり、構造・設備をむき出しにした挑発的な建物もパリの新名所として人びとの生活に馴染んできたようである。1977年から1995年までの入館者は、なんと約1億5千万人。一日平均2万5千人は、予測の5千人を大きく上回る。大成功といってよいだろう。

かくいう私自身、開館直後の1978年にパリに留学した時から、ボンビドゥ・センターのダイナミックな活動に魅了されてきたひとりである。今や伝説的にもなっている初期の「パリーベルリン展」「パリーモスクワ展」「パリーパリ展」「複数のレアリズム展」などの総合的な大展示会や、センターで開かれるさまざまなイベントは、私に美術館の役割、キュレーターの仕事というものを発見させて

くれたといってよい。

そのボンビドゥ・センターが、2000年のリニューアル・オープンを目指して、この10月から大規模な改修工事に入った。そこで今回は、基本設計初期の1974年からレンゾ・ピアノ事務所に加わってボンビドゥ・センター建設の現場に参画し、開館後も現代美術ギャラリー（現在の南ギャラリー）や映画館サル・ガランの増築をはじめ、さまざまな改築、手直し、さらには「前衛の日本展」の展示インスタレーションなどを直接に手がけてこられた建築家の岡部憲明氏にお話を聞きながら、ボンビドゥ・センターの20年を振り返ってみることにした。

はじめにプログラムありき

ボンビドゥ・センターのすばらしいところは、建物よりも前にそれを作って何をやるの

かというプログラムが斬新で徹底して考えられていたことである。岡部氏もいう。

「プログラムがものすごく画期的でした。フレキシブルでああいう形の建築を作り上げたベースにはプログラムがある。たとえば、パブリックに対するサービスひとつとっても、展示会の期間を十分に長く取るとか、夜おそくまで開館するとか、日本の美術館は基本がまだまだ不十分。ボンビドゥ・センターの場合はプログラム自体が最初から夜開けるといいうものになっていた。場所の選定からしてそれを計画している。パリの中心にあってアクセスしやすいし、リアル（中央市場跡地）の再開発との連関プログラムで、夜10時過ぎまでいた人が、郊外電車にのってかならず帰宅できるようにしている。あるいは、水曜日は授業が休みの日なのにあわせて午前中から開館しており、子供達は学校単位で来るわけだし、

非常に基本的なことをきちんと筋を通しています。夜間のオープン、ポンチュス・フルテンがまずストックホルムでやっていたことで、彼が初代の美術館長になったわけです」。

「それからあと、このプログラムを『建物のプログラム』に焼きかえるという仕事があります。これはフランスの場合、プログラマツールというプログラムの専門家がいる。だいたい、建築家上りの人です。コンペをやる时候にも、日本のコンペと違って、プログラムのためにプログラマツールにまずお金を払う。そして、プログラマツールが、ヒアリングをずっとかけていって分析するわけです。分析してその結果をまとめ、場合によっては、プログラマツール自身がプランまで作る。作ったものをコンペのベースにする。それがないと、審査員にどんなに優秀な人が来ても、なにを作りたいかがはっきりしてこないから判断できないわけです。国際コンペでも非常に恣意的に選ぶっていうことになってしまう。ポンピドゥーの場合は、ピアノ&ロジャース、フランキーニの案は、プログラムにぴったり合っていました。広場を正面に大きく取る。内部に関してはすべてフレキシブルにする。これらはプログラムから来ているわけです」。

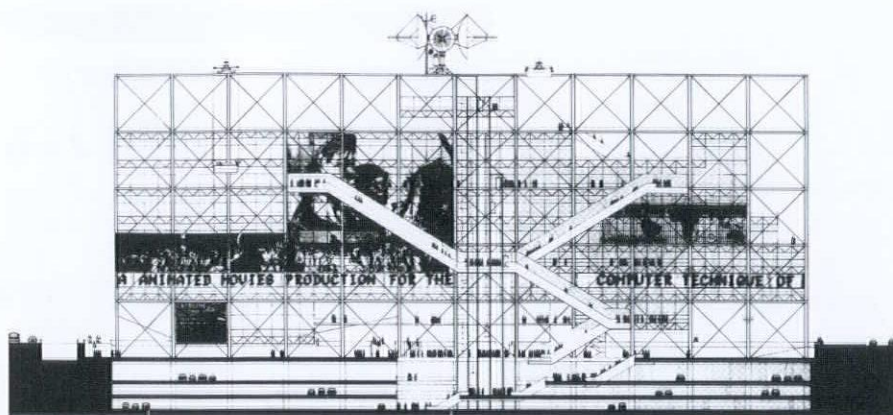
開かれた美術館

さて、このポンピドゥー・センターのプログラムがどのようなものだったかと考えてみると、その基本には、ふたつの考え方がダイナミックな緊張をはらみながら絡み合っていると見る事ができる。

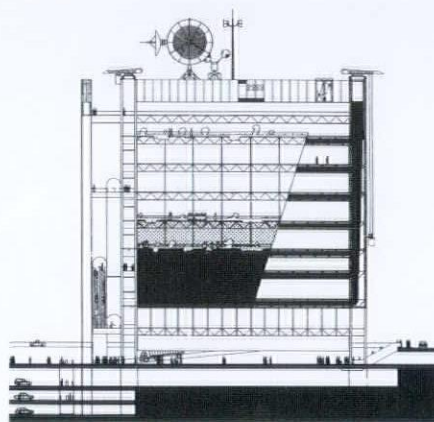
ひとつは、旧来の「美術」だけではなく、映画や建築、デザイン、音楽、パフォーマンス、言語表現など現代世界における多領域の創造活動を取り上げる「総合芸術センター」という発想で、これは国立近代美術館(MNAM)と産業創造センター(CCI)、現代音楽音響研究所(IRCAM)と公共情報図書館(BPI)という4つのセクションを含み込んだポンピドゥー・センターの巨大な組織形態に実現されている(90年代になってMNAMとCCIはひとつの組織に統合されたが、新しく出版やシンポジウムなどを行う文化開発局が作られ、相変わらず4つのセクションになっている)。

一方、もうひとつの考えは、こうした芸術活動をできるかぎりパブリックに対して開放し、アーティストとパブリック、美術の世界と生活のあいだに橋をかけようという「開かれた美術館」という理念である。

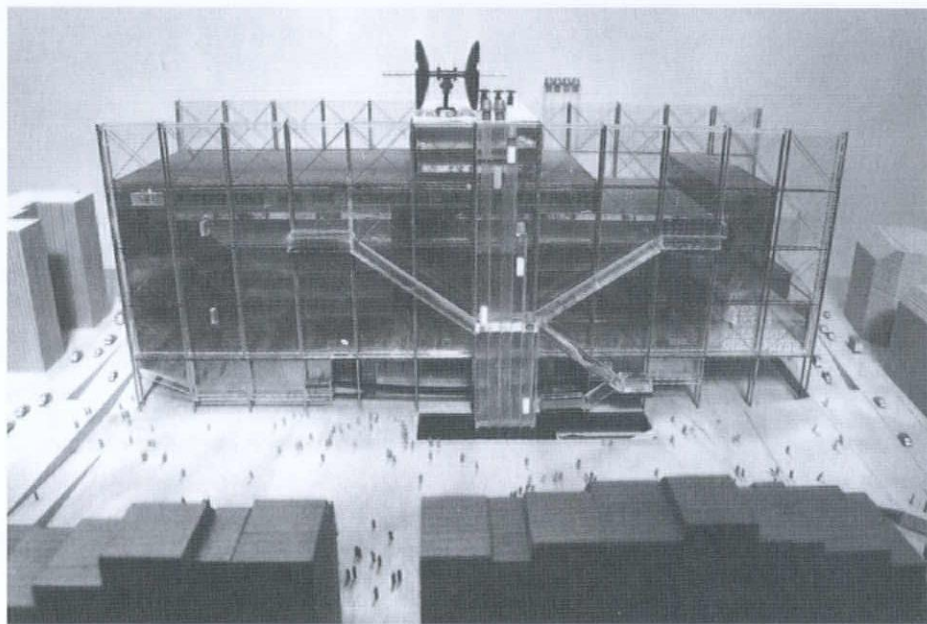
これらの考えは、いずれも、第二次大戦後のヨーロッパのいくつかの美術館で追求されてきてポンピドゥーのプログラム形成に大きな



ポンピドゥー・センター、コンペ案、立面図



コンペ案、断面図

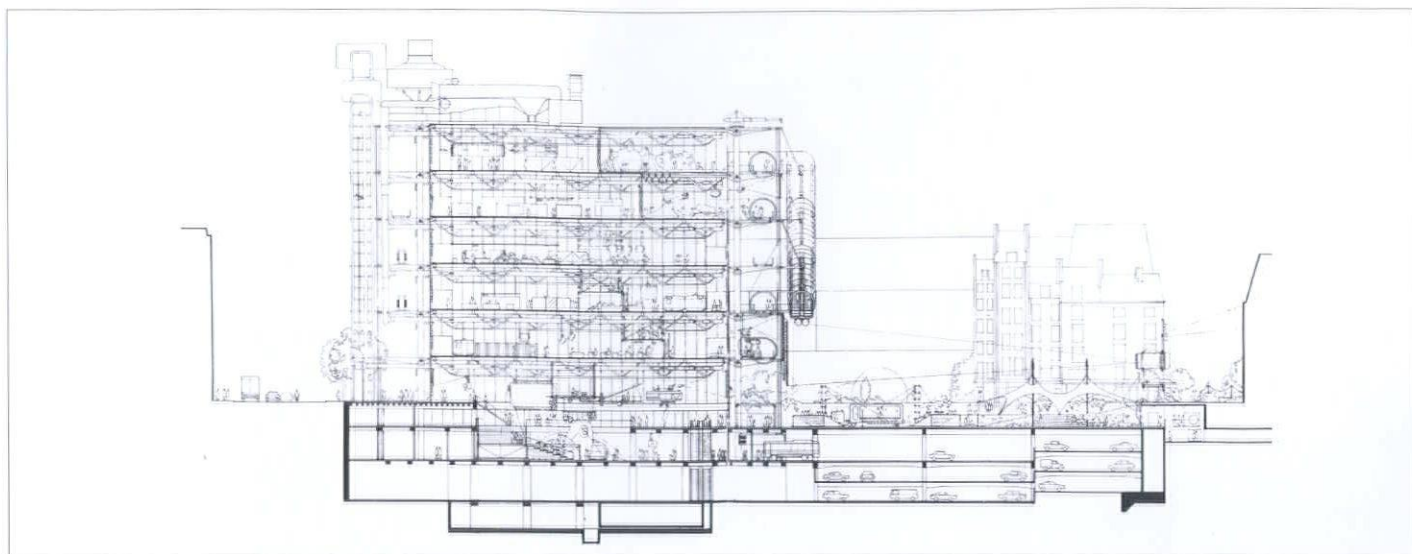


コンペ案、模型

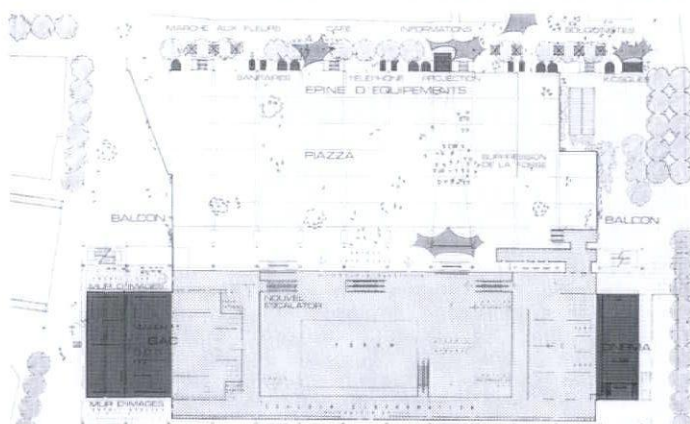
影響を及ぼしているが、もっと遡れば、戦前のヨーロッパの前衛的な芸術建築運動にたどりつくといつてよいであろう。

実際、たとえば、1930年にル・コルビュジエが構想して『カイエ・ダール』誌に発表した現代芸術センター案や1937年のパリ万博の際の計画した現代美術センター案、新時代パヴィリオン案はすでに、人間の多様な活動をばらばらに分離するのではなく、総合的なヴィジョンとして提示しようとしていた。この時のル・コルビュジエの構想はほとんどが

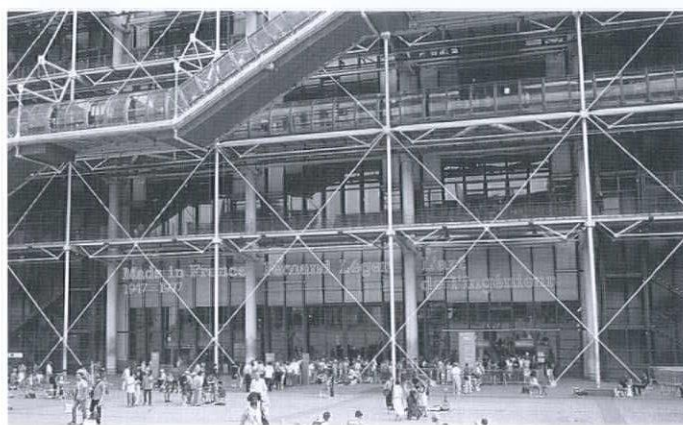
実現せず、1937年には、アカデミックな建築家の手でバレ・ド・トーキョーが建設されてしまっていて、それが1947年以来、最初のパリ国立近代美術館の建物になるわけだが、1960年代になるともう一度ル・コルビュジエの総合的ヴィジョンに注目が集まる。当時、近代美術館長だったジャン・カスーや文化大臣のアンドレ・マルローが、ル・コルビュジエに協力を求めて「20世紀美術館」のプログラムを練り上げさせたのである。1963年にパリ国立近代美術館で開かれたル・コルビュジエ展



実施案、断面図



現代美術ギャラリー・映画館増築案、平面図、1986年



1997年夏、改裝工事に入る直前のポンピドゥ・センター入り口

には、パリ西郊デファンス地区を候補地としたこの計画の図面とマケットが提出されたが、それは展示会の企画によって自由に移動することの出来る可動壁をもった、自在に拡張できる巨大な空間を提案し、なによりも人間の様々な知的、創造的活動を総合する複合文化施設として提言されていたのである。1965年のル・コルビュジエの死によって、この計画案は頓挫するが、それは4年後の1969年、ポンピドゥ・センターの計画として受け継がれることとなった。

一方、「開かれた美術館」の理念について言えば、これは中央集権的な色彩のフランスよりも、アメリカや北ヨーロッパの国々で早くから発達していったと言って良いであろう。とくに、この理念を現代美術の領域で活発に展開していたのが、ヴィレム・サントベルグが館長だったアムステルダム市立美術館、ポンチュス・フルテンのストックホルム近代美術館、それに『態度が形になるとき』という有名な展覧会を1969年に組織したハラルド・ツェーマン率いるベルンのクンストハレなどで、それらの美術館の活動はポンピドゥ・センターの創出に大きな影響を及ぼした。

なかでも、アムステルダム市立美術館のサントベルグは、この考え方を戦後いち早く実践してきたパイオニアであった。彼は、ポンピドゥ・センターのプログラムの基本的なベースを作り、ジャン・ブルーヴェ、フィリップ・ジョンソンなどと並んでポンピドゥ・センターのコンペの審査員にもなった。サントベルグは自らプロのグラフィック・デザイナーで斬新な考えの持ち主で、たとえば、ヨーロッパでは彼が初めて、従来の美術館の中に、建築、デザイン、広告、映画、写真の領域を持ち込んだというし、デモクラティックなオランダのお国柄が、パブリックへのサービスでもはるかに進んでいたのである。

しかも、1960年代を通じて、前衛的なアーティストたちは、美術館という「場所」に対するラディカルな態度の変化を主張していた。そして、先進的なディレクター、キュレーターたちは、この現代アーティストたちの姿勢をすくく美術館プログラムに反映していったのである。このことについて、ポンチュス・フルテンは次のように説明している。「(開かれた美術館とは) アンチ・ミュージアムではなく、もっとも現代的な創造性の諸要素を発展させるな

かでアーティストとパブリックの間の自然な接触が生まれる場所です。そうした美術館は、個人的、社会的、宗教的ないし公共的な機能を完全に失った美術作品を保存する場所であるばかりではありません。そこは、アーティストがパブリックと出会う場所であり、パブリック自身が創造者となる場所なのです」。

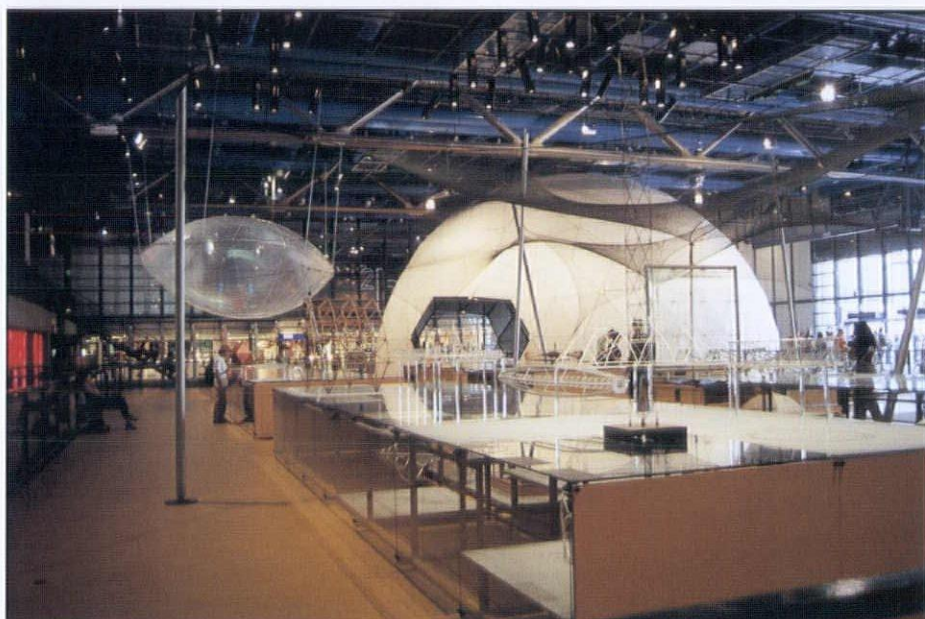
そして、こうした美術館とアーティストの追求が、1960年代末の時代環境のなかで社会の根本的な課題として現れたとき、ポンピドゥ・センターのプログラムは実現への道を歩み始めたといってよい。フルテンは言っている。「私たちは、68年5月革命の本質的な状況、すなわち『街路の状況』のような、そこにすべての人々が、階級や文化や教養の差をこえて、誰ひとり拒否されたと感じる必要なく居られる空間を作ることができないかと思っていました」。

20年間の変貌

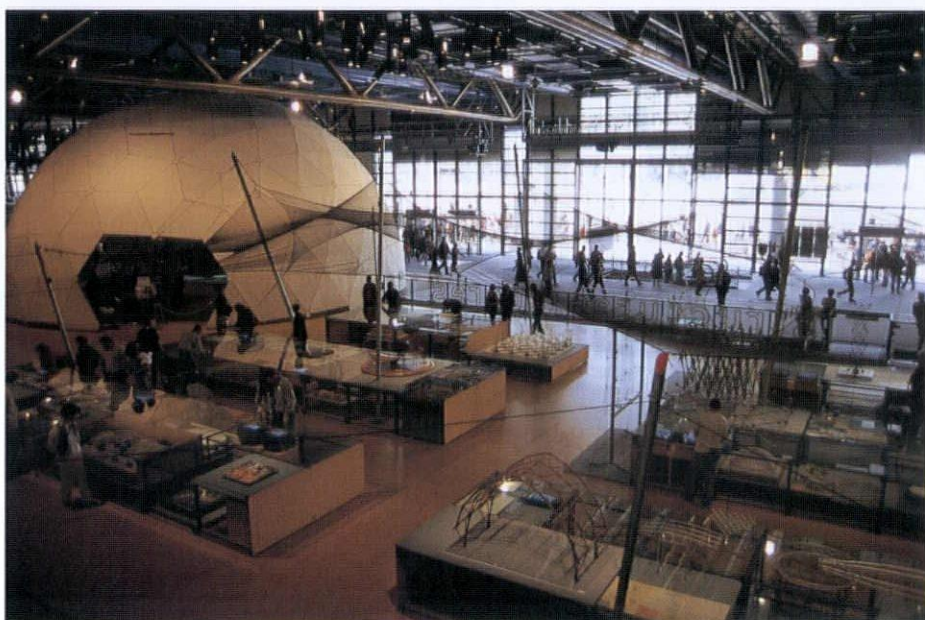
こうして1971年夏、ポンピドゥ・センターのための国際競技設計に、49カ国から681の建築プロジェクトが集まった(そのうち491が海外からの応募)。そして、芸術の都パリ



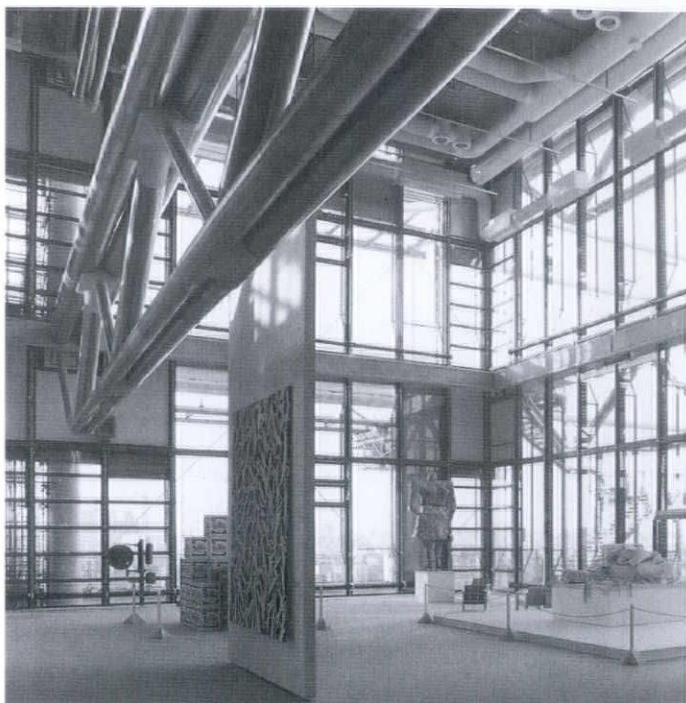
夜のポンピドゥ・センター外観



「エンジニアの芸術」 展会場、1階フォーラム、1997年



「エンジニアの芸術」 展会場、1階フォーラム、1997年



初期の常設展示。巨大な梁もあらわな開放的空間。軽やかな仮設壁



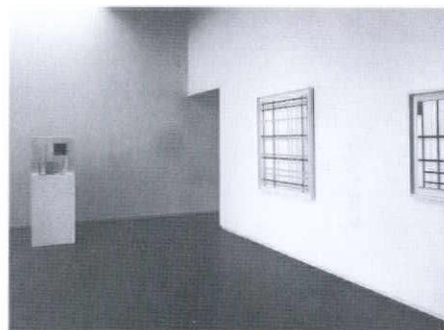
1986年のアウレンティによる改装後の常設展示。固定壁による古典的な空間。



改装後の常設展示。「マティスの部屋」



「ジャコメッティの部屋」。小部屋による展示が鑑賞体験を高める



「抽象の部屋」。コプロの彫刻、モンドリアンの油絵

の新しい芸術センターという大事業コンペの栄冠を手に入れたのは、まだ30代の若いイタリア人とイギリス人のチームだった。

ポンピドゥ・センターにおいて驚くべきことは、それが1977年の開館後も、実は建築家たちの手を離れず、そのダイナミックな活動とともにたえずその姿を更新していることである。それは、かつてル・コルビュジエが構想した「無限成長の美術館」を文字どおり生きているといってもよい。2000年に向けての改築工事もある意味では、その一環、継続に過ぎないのである。

「大きな組織と同時に20年間やりつづけたことの蓄積に意味があります。大展覧会以外にも沢山の小さな展覧会をやった。拡張工事もやった。美術館を何十もつくったようなものです。展覧会ごとに会場をどんどん作りかえていったわけだから。だいたい展覧会は年間3〜4つぐらいあって、そのうち大きいのが2〜3つぐらいですから20年間で60以上の大がかりな展覧会が行われた。そのたびに中を完全に作りかえているわけです。

常設展示のところも、ガエ・アウレンティが入ってやったから、まったく変っている。こんどまた大がかりに変えます。今度の建築家はいい建築家です。ジャン＝フランソワ・ボタンという。パリ市の近代美術館でカルダーやジャコメッティの展覧会をやって、非常に地味というか、だけどすばらしいと評判の人です。ジャコメッティの本質が本当にわかっているという展示でした。ガエ・アウレンティとは全く異なった展示空間を創り出してくれるでしょう。そういう意味で今度は3回目、MNAM／CCIの常設展示と6階の特別展会場、それにドキュメンテーションとBPIの内装をやりなおします。

僕がかかわった拡張工事も結構大規模でした。誰も気がつかないですが、両サイドを広げたのです。1階がピロティになっていた部分を内部化したわけです。ピロティの前には非常階段が降りているから皆気がつかない。階段の裏は空いていて、そこがルンペンのたまり場になっていたりしていた部分をぎりぎりまで拡張したんです。ちょっとセットバック

しているからピロティのままのように見える。若いアーティストのための小回りのきく展示場が必要ということで、南側2スパン延ばして現代美術ギャラリーをつくり、北側1スパン使って250人ぐらい入るサル・ガランズという映画館をひとつ作りました。もともと上の階にも映画館はあったんですが、シネマテークの創始者ラングロウ氏の指示によるラディカルなもので120〜30人入れる程度の小規模なものでした。

IRCAMも最近、拡張しました。管理部門などのためにタワーを建てたのと、その両横の古い建物をすべてIRCAMのためのスペースとして改造しています。タワーの部分はピアノのオフィスで私が担当し、他の部分はフランスの若い建築家グループ、カナルが担当しました。ストラヴィンスキー広場の手前の煉瓦の建物です。そこを全部改造して図書室、データシミュレーションの施設、新しいスタジオなどを入れました。久しぶりに行ったら、昔とすっかり変わってしまっていてびっくりしました。



ブランクーシ自身の撮影したアトリエの写真、1925年頃。このアトリエの中身がそっくり国に遺贈された

管理部などパブリックに関係ないものは、全部、ポンピドゥ・センターから出すということもやっています。まわりの建物を買って、キュレーターの事務所などは、裏の建物に出して、まるで周辺はポンピドゥ村のようになっています。最初は2階の部分に管理系があったんですが、天井高7mはもったいなかったし、壁がなくて話し声が筒抜けで、評判も悪かった。それで、空間的にはパブリックのアクセスする場所を増やそうということになったんです。映像のコレクション、写真のコレクション、図書館の情報など、パブリックが鑑賞し利用する世界が広がっていきます。

しかも、ポンピドゥ・センターのコレクションはあそこだけではないんです。今建築のコレクションを猛烈に始めているんですが、なぜかという倉庫を手に入れたから。むかしからコンピエーニュに大きい倉庫をもっていたんですが、最近、数年前にクレディ・リヨネ（フランスの大手銀行）から大きな倉庫を寄付された。建築の模型や図面のコレクションをストックする場所がこれで出来たと喜んでいいます。メインのコレクションの収蔵庫はもちろんセンターの中にもあるけれど、世界一のコレクションになったから内部だけには収まりません。倉庫を手に入れるのは、センターの予算による買取もあるし寄付もある。今回は寄付。銀行が小切手などの記録が不要になり、小切手を保存しておくための膨大な倉庫が不要になったのを譲り受けたと聞きました。

ユートピアの未来

年間予算100億円、正規職員1000人、膨大な国家予算を消費しながら多方面に文化的創造を展開するポンピドゥ・センターは、フランスの国家的な巨大メディア産業といつてよいだ

ろう。センターの出版部はフランス第4位の出版量を誇り、CD-ROMなどニューメディアへの進出も意欲的である。IRCAMはこれまでに蓄積してきた音楽音響ソースをインターネットで公開し始めたし、「子供のアトリエ」は1994年に始まる「壁を越えて」のプロジェクトにしたがって、同じようなプログラムを目指すヨーロッパ各地に指導に出かけるという形でこれまでのノウハウを広めようとしている。フランスの公立現代美術施設40数館の所蔵作品の画像データベースである「ビデオミュージアム」は、ポンピドゥ・センターをキー・ステーションとして全ヨーロッパの現代美術館所蔵作品のデータベース化を狙っている。

開館後、20年、たしかにポンピドゥ・センターは、公的な力と現代芸術が結びついたときに何が出来るかの輝かしい模範を形成し大きな影響をあたえたといえよう。都市計画的には、沈滞スラム化の一手手前であったボブール地区に対するセンターとその広場による活性化の成功は目覚ましく、そのパターンはバスチユ地区と新オペラ座の関係でも繰り返された。また、フランス以外でも、スペインでは、マドリードのレイナ・ソフィア文化センター、バルセロナの市立現代美術館（MACBA）、そして今年、フランク・ゲーリーの建物でオープンしたビルバオ・グッゲンハイム美術館などが、いずれも都市の貧困な地域、産業の衰退した地域に対する活性化の処方としての現代文化センターを試みている。

けれども最後に、現代美術館という私たちの限定されたテーマに立ち戻れば、初期のポンピドゥ・センターの提示したフレキシブルで開放的な展示空間というあり方は、ただちに批判にさらされたということも確認しておかなくてはならない。岡部氏によれば、サスペンションで仮設壁を吊すという形式は、軽く見せようという若い建築家たちの発案で、ポンチウス・フルテンらは、はじめから批判的だったという。実際、私の体験でも、初期のポンピドゥ・センターで見る作品が、時として以前にバレ・ド・トーキョーで見たときほど感動的に見えないことに失望した記憶がある。これに対して、きわめて刺激的とはいえずすべてが情報化されてしまったような大展示を後にして、センター前の広場の片隅に移築されていたブランクーシのアトリエに入るとき、幾度、私は真正な芸術の「場所」に戻ったと感じたことだろうか。

今日では、ポンピドゥ・センターの常設展示は、1980年代以降の世界的な傾向に従い、固定壁に囲まれた小さな部屋によって、それぞれのアーティストに固有の空間を醸成しようとの配慮がなされている。だが、一方、あの

素晴らしいみずばらしさに包まれていたブランクーシのアトリエはもはやない。かわりに今では、美術史的には忠実だし多数の入館者にも対応できるというレンゾ・ピアノ設計の、ガラス張りの新生児室のような陳列装置が、私たちを彫刻家の残した世界から冷たく隔てているのである。21世紀、ポンピドゥ・センターは、パブリックのためのステージとして、めくるめく活動を繰り広げ続けるのか、それとも芸術のためのオーセンティックな体験の環境を取り戻すことを目指そうとするのか。いずれにしても、現代文化の矛盾を体現したその逆説的な存在は、今後も注目を集め続けるに違いない。

●おおた・やすと／神奈川近代美術館主任学芸員

*本稿を執筆するに当たり、岡部憲明氏には貴重な時間を割いていただきました。記して感謝いたします。本文中の引用はそのときの会話に基づいていますが、文章は筆者の構成に大幅に変えさせていただいています。なお、岡部氏の奥方で長年ポンピドゥ・センターの特別研究員を務められた岡部あおみさんの『ポンピドゥ・センター物語』が最近紀伊国屋書店から出版されました。センターの活動について現場の眼から見た貴重な証言です。あわせてお読みいただければ幸いです。（太田）

写真＝

堀内広治 P.97、P.100上

岡部憲明 P.99下右

松田洋子 P.100中、下

図版出典＝

Renzo Piano Building Workshop P.99上、下左

Richard Rogers+Partners Limited P.98、P.101上左

Collection Musée national d'art moderne, Centre

Georges Pompidou, 1996 P.101上右、下左、下中、

下右

Brancusi, Centre Georges Pompidou, 1996 P.102

建築データ

●ポンピドゥ・センター

（Le Centre national d'art et de culture Georges Pompidou）

竣工年＝1977年1月（増築部分1983年）

設計＝レンゾ・ピアノ、リチャード・ロジャース&ジャンフランコ・フランキーニ（Renzo Piano, Richard Rogers & Gianfranco Franchini）

構造＝オヴ・アラップ&パートナーズ

敷地面積＝2ha

延床面積＝103,305m²

地上6階、地下3階

全長＝166m

幅＝60m

高さ＝45.5m（広場側）

所在地＝95191 Paris, Cedex 04, France

電話＝+33.1-44.78.12.33

ホームページ・アドレス＝

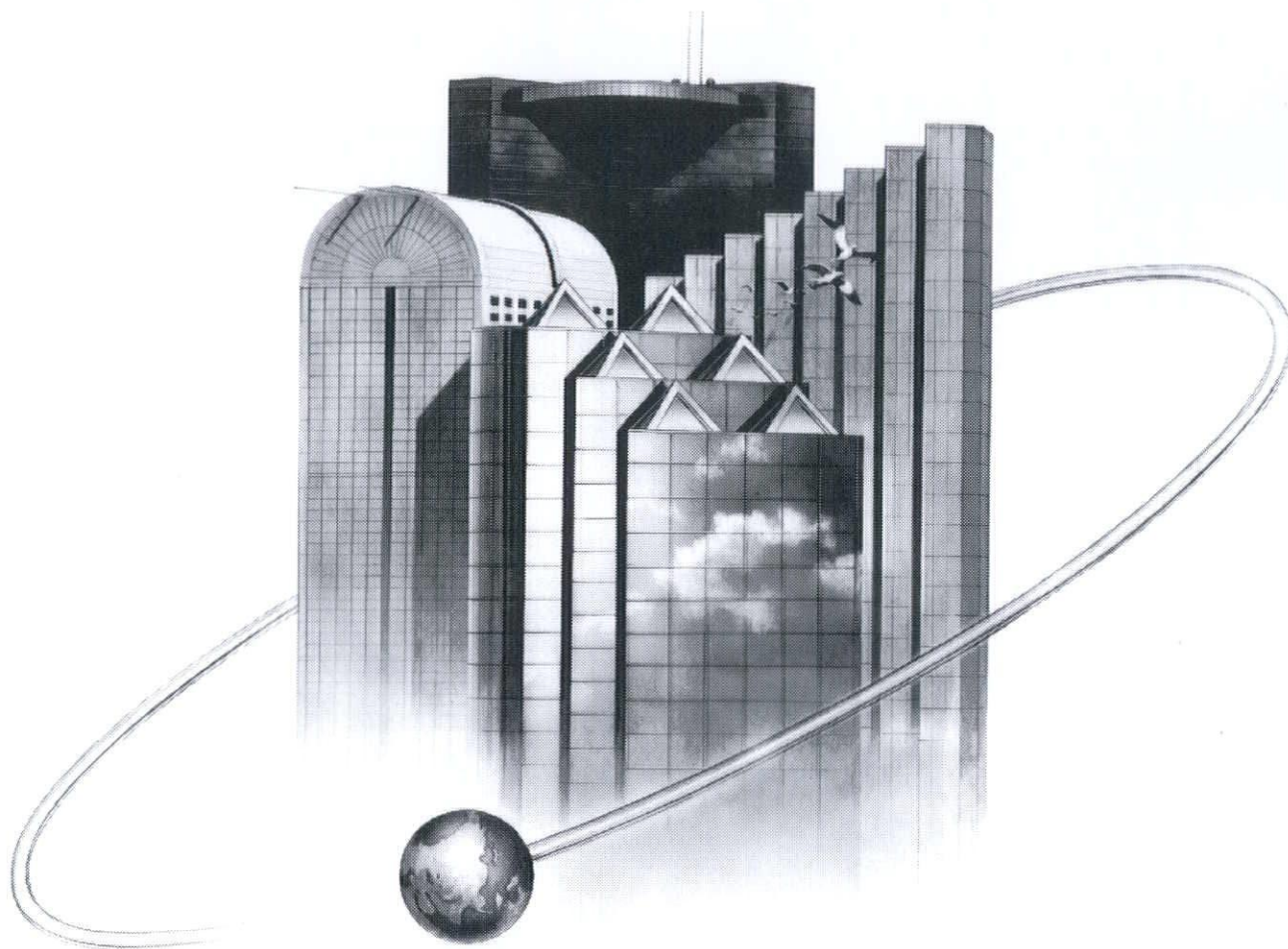
ポンピドゥ・センター <http://www.cnac-gp.fr>.

音楽音響研究所 <http://www.ircam.fr>.

公共情報図書館 <http://www.bpi.fr>.

ビデオミュージアム <http://www.videomuseum.fr>.

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

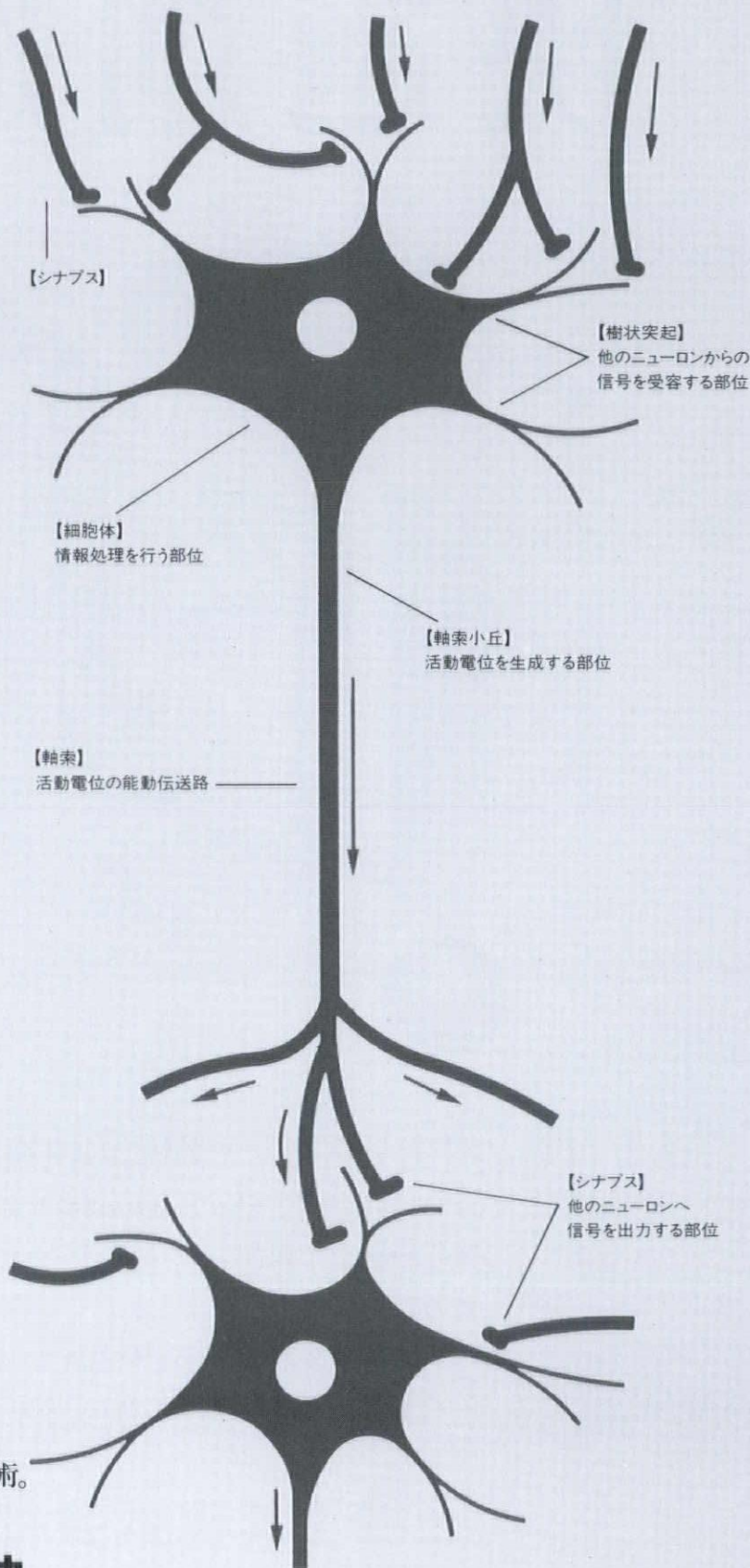
いま、地球環境という視点にたって、素晴らしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03 (3502) 6111

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマにこたえるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-3562-1351

時代の呼吸に応える技術。



東熱

場所の状態日本展 パブリックアートプロジェクトの記録

会期：1997年12月4日(木)～1998年1月31日(土)
毎週月曜、12月27日～1月5日は休館
時間：11:00～19:00
会場：ヒルサイドフォーラム 東京都渋谷区猿楽町
18-8ヒルサイドテラスF棟1階
記念シンポジウム
「都市とアートをめぐる4つの物語」
第1日 12月4日(木)
第1部 13:00～16:00 講演：磯崎 新
報告：クリスティン・マセル+ローラン・ル・ボン
第2部 16:30～18:30 講演：横 文彦、三宅理一
座談会：横 文彦×三宅理一
第2日
第1部 13:00～15:00 講演：安藤忠雄
第2部 15:30～18:30 講演：北川フラム
報告：安斎重男、平良敬一
座談会：北川フラム×安斎重男×平良敬一
会場：ヒルサイドプラザ
入場料：3000円(各日)
定員：150名(各日)要予約
問い合わせ：日本展実行委員会事務局：アートフ
ロントギャラリー Tel：03-3476-4868

村野藤吾賞からのお知らせ

村野藤吾記念会を今後10年を目処に存続させること
を目的とし、募金活動を行うこととなった。
主催：村野藤吾記念会(代表：池原義郎)
個人会員：1口1万円 法人会員：1口5万円
会員には村野藤吾賞候補作品の推薦権があり、毎年
5月15日に開催される授賞式への案内が送られる。
問い合わせ：村野藤吾記念会事務局
Tel：03-3561-4644 建築情報システム研究所内

21世紀美術館のための10のプレゼン テーション——ニューヨーク近代美術 館拡張計画設計案展

会期：1997年11月20日(木)～1998年1月31日(土)
会場：TNブローブ 東京都港区六本木5-14-35
Tel：03-3505-8800
時間：11:00～19:30(最終入場19:00)
日曜、祝日および12月21日～1月6日は休館
入場料：無料
出展建築家：ウィール・アレックス、ヘルツォーク&
ド・ムーロン、ステイブ・ホール、伊東豊雄、
レム・コールハース、ドミニク・ペロー、谷口吉生、
バーナード・チュミ、ラファエル・ヴィニオリ、ト
ッド・ウィリアムズ&ベリーの・ツイン
問い合わせ：TNブローブ 担当：伊藤、栗原
Tel：03-3505-8800

デスティール 1917-1932展 20世紀モダニズムの起源——オランダ 新造形主義の美術と建築

出展作家：モンドリアン、ドゥースブルフ、ファ
ン・デル・レック、ヒュッツアー、ファン・ヘル
ロー、アウト、エーステレン、ファン・トゥッフ、
ウィリス、リートフェルト、など
会期：1997年12月13日(土)～1998年2月15日(日)
時間：10:00～20:00
会場：セゾン美術館 東京都豊島区南池袋1-28-1
Tel：03-5992-0155

インター・イントラスペースデザインセ レクション'97 作品募集

テーマ：共有空間 文化・商業施設のスペースデザ
イン
空間のデザインに限る。旭硝子の建材商品、ガラス
などを使用していること。1997年1月1日～1997年
12月31日の間に竣工した物件に限る。自薦、他薦は
問わない。
対象分野：共有空間を持った建築の空間および文
化、商業施設の内部空間
賞：大賞1点100万円、優秀賞2点30万円、デザイン
賞8～10点10万円、審査委員特別賞若干点10万円、
ショップ・インテリア特別賞若干点10万円
審査委員：鈴木エドワード、松葉一葉、坂井直樹
応募方法：所定の応募カードに必要事項を記入し、
写真を添えて事務局に送付。コンセプトパネル、プ
レゼンテーションパネル、スケッチ等の添付可(サ
イズはA1、1枚に限る)。
応募期間：1998年1月31日(土)当日消印有効
問い合わせ：旭硝子株式会社デザインセレクション
事務局 担当：長橋、亀田 Tel：03-3218-5679

第4回空間デザイン・コンペティション (ガラスブロック)入選者発表

A：提案部門
金賞：田村健一郎(賞金100万円)
銀賞：岡本 浩(賞金50万円)
銅賞：川北亮太郎(賞金30万円)
その他佳作10点(賞金10万円)
B：作品例部門
金賞：室伏次郎(賞金50万円)
銀賞：越川明、渡辺一郎(賞金30万円)
銅賞：森田清逸、安田光雄、渡邊博幸、阪口慶次
(賞金20万円)、その他佳作10点(賞金5万円)
審査委員：香山壽夫(委員長)、岸和郎、針生承一、
古谷誠章、八木幸二、戸谷文隆
問い合わせ：日本電気硝子株式会社宣伝部：長谷川
Tel：06-399-2721

『みみずのつぶやき——無名建築家の生涯』

河野通祐＝著

B6判 192頁

大龍堂書店 1429円

自称「無名の建築家」である著者のエッセイ集。
土浦亀城に師事したこと、戦後の混乱期に戦災孤児
と寝食をともにしたこと、その体験から児童施設を
設計したこと、雑誌『生活と住居』の編集をしたこ
と、などが語られる。現在、建築文化活動を通じて
若手建築の育成に力を注ぐ著者の熱意が伝わる。



『韓国建築史』

尹 張燮＝著

尹 張燮＋柳沢俊彦＝訳

A5判 250頁

丸善 7200円

韓国建築史の邦訳。原始時代から、朝鮮王朝末期に
至るまでの建築様式から庭園様式、また様式の発展
要因など文化的な側面にも言及し、体系的な解説を
加えている。
韓国建築史の入門書として格好の一冊。



『e-space——スペースメディアがつくる、いい空間』

田中俊行＝著

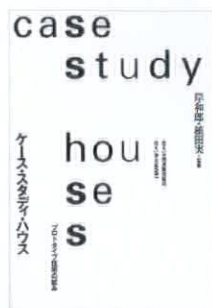
A5判 96頁

六耀社 2300円

空間アートディレクターとして「リビングデザイン
センターOZONE」などを手がけた著者によるス
ペースデザイン論。
自身のデザインのキーワードは「情動である」と言
い、さまざまな場における演出のあり方を、交感、
思考、発信という視点から語る。



『ケース・スタディ・ハウス』
岸 和郎・植田実＝監修
B6判 286頁
住まいの図書館出版局 2500円



評者＝
佐藤俊郎

構成の妙：まさにケース・スタディ

このケース・スタディ・ハウス(CSH)を読み終えて、7年前の記憶が鮮やかに蘇った。1989年から90年にかけてロサンジェルス(MOCA)で目撃したCSHの回顧展。クレグ・ハジェットの構成による展示は、ゲーリーの倉庫を改造したスチールビームむき出しの美術館と相まって刺激的なものだった。そこで初めてCSHプロジェクトの全貌を目の当たりにした。それまで、インダストリアルデザイン事務所の駐在員としてロサンジェルスに赴任していた時期、健在だったレイ・イームズ女史ともお会いし、また、CSH #8として、その後このプロジェクトの代名詞ともなったイームズ邸も何度か見る機会があった。イームズ邸は、記憶の中ではCSHのプロジェクトというよりもむしろ、イームズ夫妻の人柄を伝えるデザインのおもちゃ箱といった印象が強く残っている。

なぜ、今、ケース・スタディ・ハウスなのか。あとがきで、編者のひとり、岸和郎氏はCSHを語るにあたって、現在進行中のモダニズムの神話化に手を貸すつもりはない、とその意図を明確にしている。この本の姿勢の明確さは、その構成にある。ひとりの著者によって書かれた歴史的回想でもなければ、単なる翻訳でもない。これはCSHに関心を寄せる人々の、時としてまったく評価の異なるスタンスから述べられている建築的思考のモザイクである。

7年前の企画展のキュレーター、エリザベス・スミスの論文に始まり、植田実氏による現在の住み手やCSHの建築家へのインタビューなど多角的な視点から全貌を提示し、このモザイクとしての本の構成によってCSHを現在に位置づけている。

本論の中でもさまざまな立場から述べられ

ているように、ケース・スタディ・ハウスは、その成立した条件のどこに重点を置くか、どのようなコンテキストの中に位置付けるかによって評価が分かれる。CSHは、量産化を前提としながらも、1950年代のマスマーケットとして存在したステレオタイプ化した郊外型住宅＝アメリカンドリームの実現という社会的な要求には応えていない。したがって量的な解決というスタンダードには最後までなり得なかった。しかし、このプロジェクトが、ムーブメントとして、特殊解のプロトタイプをつくったのは紛れもない事実であり、あたかも映画のシーンのようなと表現されるCSHの透明感をもったインテリアとその立地は、イメージとして、新しいカリフォルニアのライフスタイルの可能性を具体的に提示していた。

また、建築界のみならず、多様な分野からアプローチが可能なこともCSHのムーブメントとしての重要さではないだろうか。もし、個人的な関心として述べるならば、CSH #23のアルミのドアが航空機メーカーで製作されたように、このCSHプロジェクトと、当時の周辺産業との関連性、さらにイームズに代表されるインダストリアル・デザインやグラフィックなど建築界と交流のあった分野での位置付けなど、周辺領域との関係性をより深く知りたいと思う。述べるまでもなくCSHはロサンジェルスデザインシーン、さらにモダニズム建築の現在を語るに不可欠な深淵なテーマである。この意味からも、この本は、その構成のユニークさ、巧みさと共にCSHの特殊解としての位置付けを現在に伝えようとした好書であり、記録としても極めて重要なものに思える。

●さとう・としろう／環境デザイン機構代表

Metropolitan Library

12月の評者＝
難波和彦

植田実さんが企画編集している「住まい学体系」シリーズから、建築の近代性に関連する興味深い3冊の本が出た。

『ケーススタディ・ハウス』は第二次大戦後にロサンジェルス建築雑誌「アーツ&アーキテクチャ」がアメリカ西海岸において展開した、近代住宅のプロトタイプ開発のプログラムを歴史的に検証したものである。ケーススタディ・ハウス(略称CSH)と呼ばれたこのプログラムは、1945年から1966年まで約20年続けられ、全部で36戸の住宅が企画されている。実現した住宅の中で最も有名なものはチャールズ・イームズが設計したCSH #8(イームズ自邸)であるが、それ以外にもクレイグ・エルウッド、ビエール・コーニグ、エドワード・キリングワースらが記憶に残る住宅をつくっている。どの住宅も鉄骨陸屋根構造で、大部分が平屋である点

に特徴があった。CSHは近代建築の西海岸ヴァージョンであり、ミースに代表される近代建築のスタイルが、どのようにアメリカに根付いていったかを知る上でも興味深い。レイナー・バンハムの視野の広い評論や、写真家ジュリアス・シュルマンのインタビューもポイントを突いている。監修に参加している岸和郎さんも、現在の日本から見たCSHの歴史的意義について論じている。岸さんのデザインの起源がCSHにあることを知ったことも大きな発見だった。小冊子でありながらCSHプログラムを多面的に捉えており、久しぶりに読み応えのある本に出会った。

『個室群住居』は黒沢隆さんが今日まで展開してきた個室群住居に関する理論的研究と、それに基づく設計事例を集約したものである。本書によってこれまで断片的にしか知られていなかった個室群住居

『空間へ』

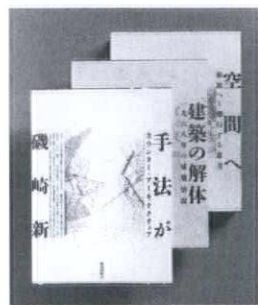
『建築の解体——1968年の建築状況』

『手法が——カウンター・アーキテクチャ』

磯崎 新＝著

各A5判 508頁・456頁・414頁

鹿島出版会 各4600円・4200円・3800円



評者＝

石山修武

古典として、さらに遠征のための地図として

三島由紀夫はかつてその作家論において、創作と批評はコインの表裏一体だが、その関係は決して幸福なものばかりではないと指摘した。明知な批評家でもあった三島自身にも当てはまる至言である。近代の創作は批評精神を抜きにしては成立せず、同時に有り余る程

のそれは、時に創作の主体としての作家そのものを破壊しかねないということだ。

私達に身近な建築の世界にもその典型がある。

1966年『建築の多様性に対立性』、1972年『ラスヴェガスから学ぶこと』、共にロバート・ヴェンチューリの重要な著作だ。特に前者は現代建築論としてはすでに古典としての位置を獲得している。ヴェンチューリはこれらの言説によって世界の現代建築の一時代を画した。しかし、その批評姿勢が彼の創作に輝きを与えていた時代は、それほどに長くはなかった。

磯崎新は1971年『空間へ』を、1975年に『建築の解体』を世に出した。そして『手法が』『建築の修辭』へと続く。これらの言説が世に問われた時、すでにその思考の水準は日本の近代建築の状況が共有する世界をはるかに脱け出ている。それ故に磯崎は前衛として位置付けられることになった。それからの磯崎の建築家としての軌跡は常にふたつの焦点を持つ楕円形運動の形をとり、時に螺旋形を描いて舞った。前衛であり中核でもある。周縁と中心を同時に演じ、さらには解体と成熟さえも自己内に包括し続けてきたのだ。これは日本の近代建築の歴史ではほとんど唯一の形式を示している。ここで言う形式とは建築家が構築しようとする生き方の形というようなことだ。また、日本の近代建築とわざわざ現代と呼ばぬのは、磯崎に倣って1966年までを建築の近代と読んでみたいからでもある。

「建築と都市との関係をもっとも近代的なかたちで捉えたのは、1933年のアテネ憲章であった。この時期では、近代建築の量はまだまだすくなく……」との磯崎の伝を借りるならば、1966年『建築の多様性に対立性』、1971年『空間へ』の時期では、近代建築の量はちょうど、飽和状態そこそこの頃で、だか

ら1968年は世界に蔓延した意義申し立てばかりではない意味があるのかも知れないが、近代と現代の境目の日付に関しては、まだ急ぐことはない。

とにかく、磯崎新はロバート・ヴェンチューリの二の舞を踏むことはなかったのだ。今、再び磯崎の著作が新版として世に出るが、その意味は再びふたつの焦点を持つだろう。

ひとつは古典としての価値。そして、もうひとつは四半世紀を経て再読しても持続する前衛としてのラディカリズムの力である。

つい先日、私共の建築学科での公開講評会でのこと。建築史の教授が学生の作品を巡る議論でこんなことを言った。

「……しかし、歴史の大筋としては我々は建築の解体を是としているわけですから。」学生の作品はいかに今風な何もない状態を表現しようとするものだったけれど、思わずわたしは歴史学の教授の顔をまじまじと見た。古典がこんな風に現実に働きかけることの現場を見たからだ。トム・ヘネガンという建築家がいる。磯崎が「わがスーパースターたちのいえ」1975年コンペで一等にピックアップした男だ。今、日本で活躍している。時々どこかで会う。この長身の男に会うたびに磯崎の持続するラディカリズムを思う。その力はこんな風に一人の人間の生き方にまで力行使するのだという事実に対面するからだ。

ギリギリの世紀末、わたしたちの眼前にはあいかわらず、磯崎の「ヒロシマ」の廃墟が広がっている。少し退屈になるのだろうが、事態はそれほど変わってはいない。若い学生諸君には、この著作群を歴然たる古典として読むことをおすすめする。もう若い建築家諸賢には平成な廃墟を良く生きるためのラディカルなガイドブックとして再読することをすすみたい。

●いしやま・おさむ／建築家

論の全体像を把握することができた。サブタイトルにもあるように、個室群住居の背景には、近代家族の崩壊と個人の自立という社会現象がある。そのことについてはとくに異論はないが、それを直ちに個室に結びつける点には疑問がある。個人の自立イコール個室の確保という図式は、近代的な機能主義そのものである。しかし個人の自立は近代社会の結果であって原因ではないし、個室を確保すれば個人が自立するわけではない。個人が自立すれば、むしろ空間の解釈は多様になり、個人の自立イコール個室の確保という図式は崩れていくというのが、僕の仮説である。それにしても社会学や歴史学だけでなく、進化論や人類学にまで踏み込んで、個の自立を検証しようとする黒沢さんの探求心は驚嘆に値する。

『構造設計の詩法』は日本の構造エンジニアの中で、現在もっとも注目されている佐々木睦朗さんの

構造設計論である。近代建築の巨匠たちを構造設計家の目によって分析してみた第1章は興味深い。なかでもアントニオ・ガウディについての論考は圧巻である。第2章ではこれまでの佐々木さんの仕事、鉄骨構造の例を中心に紹介されている。ここ15年間僕も佐々木さんとパートナーを組んで仕事してきたが、第3章の対談を通じてその経緯を客観的に見ることができた点も収穫だった。第4章に詳しく紹介されている伊東豊雄さんとの共同設計〈せんだいメディアテーク〉の構造システムは、単純明晰なアイデアが現実化されていくプロセスを詳細に描いている。今後、佐々木さんと仕事をしたいと考えている建築家にとっては必読書である。ただし安易に近づいて火傷しないように、老婆心ながら忠告しておきたい。

最近近代建築に関する研究が多面的に展開して

いる。そろそろ近代建築の歴史を冷静に検討できる段階にきたことを感じさせる3冊である。

『ケーススタディ・ハウスプロトタイプ住宅の試み』

岸和郎・植田実＝監修

住まいの図書館出版 ￥2,500＋税

『個室群住居——崩壊する近代家族と建築的課題』

黒沢隆＝著

住まいの図書館出版 ￥2,300＋税

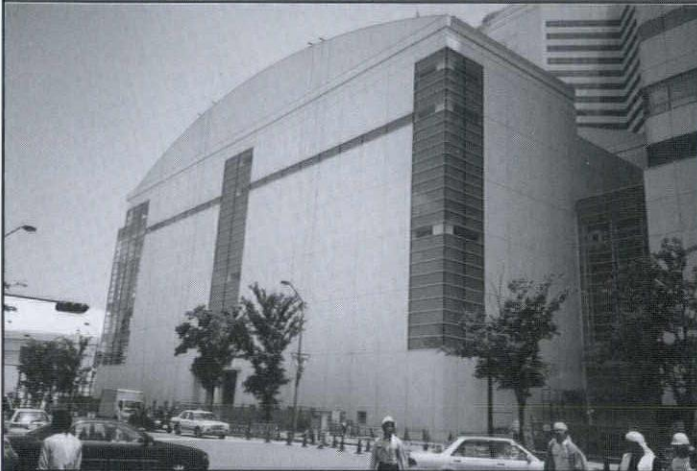
『構造設計の詩法——住宅からスーパーシェッズまで』

佐々木睦朗＝著

住まいの図書館出版 ￥2,300＋税

省資源・省力化

PCカーテンウォール
(オムニアPCF)



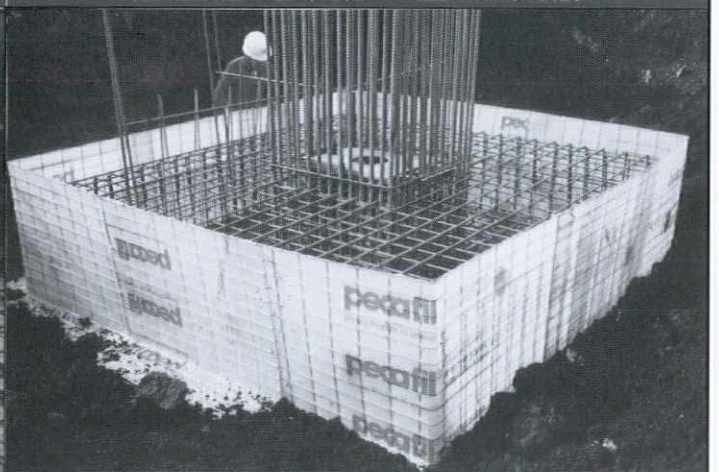
スーパーフォーム型枠
(柱・梁用 t=20mm)



オムニア板
(スラブ・バルコニー・外壁PC用)



ペカ型枠
(独立柱・地中梁・二重ピット用)



業務提携工場

高尾コンクリート株 ☎0166-29-2020	大栄産業株 ☎02579-2-8100	株 鴻 池 組 ☎06 -244-3662
ピーシーコンクリート株 ☎0178-27-5351	新潟高圧工業株 ☎0256-88-7555	泉州コンクリート工業株 ☎0724-79-0043
株不二トコン ☎0229-72-1174	大東プレコン株 ☎0764-64-1513	北岡プレコン株 ☎0883-63-2281
株ショックベトン・ジャパン ☎0492-42-8170	株ティー・オー・シーウォール ☎0776-82-5205	株西田興産 ☎0893-52-3005
株キタハラウォール ☎0296-28-1900	株ナルックス ☎0593-63-3331	ダイフク興産株 ☎0848-66-0304
株フジタ 東京支店PC部 ☎03-3497-0267	株ダイワ ☎0594-77-0821	山陽プレコン株 ☎082-221-9431
高村建材工業株 ☎03-3363-4411	豊田総建株 ☎0565-45-7811	株西日本ピー・シー ☎092-271-1717
タカムラ生コン静岡株 ☎0550-82-3466	オーシー建材工業株 ☎06 -556-2042	株牧港ヒューム管工業所 ☎0988-76-2752

タカムラ建設株式会社

本社・山梨第1工場	山梨県南都留郡山中湖村山中862-1	TEL0555-62-2711 FAX0555-62-1157
山梨第2工場	山梨県都留市境字矢下1514-1	TEL0554-43-7878 FAX0554-43-7814
静岡工場	静岡県御殿場市荻原字永源1549	TEL0550-82-3466 FAX0550-83-8222
埼玉工場	埼玉県北本市朝日2-16	TEL0485-91-4121 FAX0485-91-8522

第5回ジャパン・アート・スカラシップ グランプリ作品発表展覧会

回転する振動体 CONTRARIA SUNT COMPLEMENTA

グランプリ受賞者：松永英伸&松本 大

第5回ジャパン・アート・スカラシップグランプリ作品発表展覧会
会期：1997年11月1(土)～11月9(日)
時間：11:00～20:00(会期中無休)
会場：スパイラルビル1Fスパイラルガーデン
東京都港区南青山5-6-23 (Tel:03-3499-3922)

現代はエレクトロニクスの時代である。そのエレクトロニクスを生み出した量子力学は、その始祖であるボーアの言葉 "CONTRARIA SUNT COMPLEMENTA" 「対立する物は相補的である」という概念に導かれている。対立する物が互いに補い合って生成し、転変する「相補性」という概念は、単純な二元論と違い、互い互いに原因を持ち、互いを生み出すその全体こそが重要であると説いている。物質と人間が、そして客観と主観が出合う「観測」という時点に注目する量子力学、その根本にある「相補性」の概念は、現代都市、ひいては時代を読み解く上で非常に重要な概念であることは間違いない。

我々はこの「対立しながら相補性を持った事物の同時存在」という概念をモデル化することを提案し、その概念によって導き出される「原理」を「体験」することで、現代社会(都市)の「現象」を照射し、体験者がそれに思いを馳せることを意図した。

我々の提案する「回転する振動体」は、中

心を同じくする4重の半円が互いに向き合い、それぞれが反対の往復運動(振動)を行う。この半円を組み合わせた渦巻きの図像は、振動によって周期的に反転し、円内に立ち入った被験者は、全体が回転することで方向感覚を喪失しながら、求心運動と遠心運動を交互に体験する。これが、径路の進行において「相補性を持った対立する運動の同時存在」を表出する。また、回転と振動という「単純系の動き」は、それ自身と人の動きとの組み合わせにより、「複雑系の動き」に転化されることにもなる。

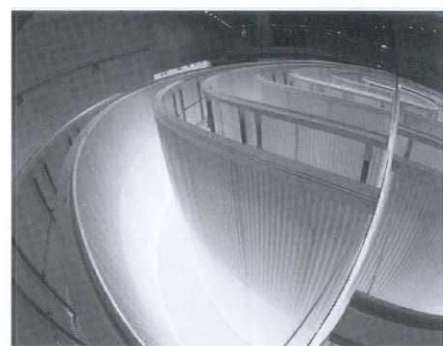
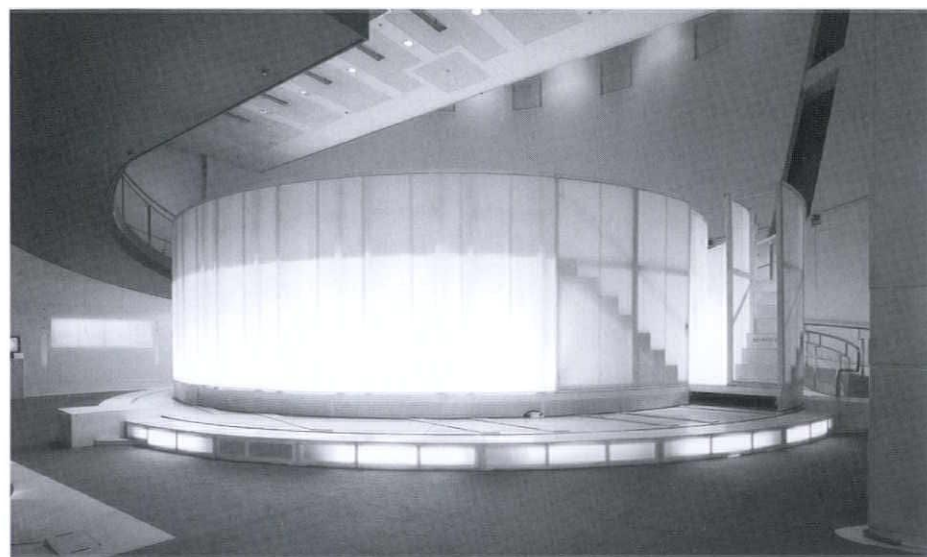
さらに、相反する運動の中をさまよいながら、中心にたどり着いた被験者は、壁の上部へと通ずる階段を見つける。上のレベルに上がった被験者は、自分が通りすぎた通路を見渡し、そこを通る被験者を観測する観測者となる。これはまた、下のレベルの被験者にとって、上のレベルの観測者の中心から外部への運動が、下のレベルの中心への動きを示唆することとなり、「相補性を持った観測者と

被験者」という相反する立場の人間の同時存在」を意味することになる。

そして、このような関係がモデル内の現象とモデルを取り囲むスパイラル本体のスロープの観測者の関係にも成り立ち、現象と観察の三重の相補性が形成されることになる。

現代の情報化社会では、あらゆるものが情報として流出しており、全てが明快に単純に把握できる錯覚に陥る危険性をはらんでいる。しかし、個々の情報の偏差を認識することは非常に困難であろう。これを情報の闇と呼ぶならば、まさしく現代は「白い闇」もしくは「ホワイトノイズ」と言いたい誘惑に駆られる。「回転する振動体」では非常に単純明快な構造を有しているにもかかわらず、中に入った人々は明るく照らし出された壁の中を一樣にさまよいつくことを強いられる。この体験をもって、現代のエレクトロニクスで構成された情報化社会を端的に理解することができたのではないかと考える。

●松永英伸/建築家、一級建築士事務所CLIP



JAPAN ART SCHOLARSHIP

若手アーティストの発掘と育成を目的とした現代アートのコンテストで、シャチハタ工業株式会社の主催により1990年11月よりスタート。35歳以下の若手アーティストを対象に、1000万円の制作費の援助と展覧会の開催という形式をとる。応募総数211点の中から、第一次審査で選ばれた10点によって最終審査が行われ、松永英伸+松本大がグランプリを受賞。審査委員は、福田繁雄(委員長)、隈研吾、立花ハジメ、南條史雄、長谷川裕子。

入賞者略歴

松永英伸

1964年 静岡県静岡市生まれ。1989年 東京電機大学大学院修士課程修了、原広司+アトリエ・ファイ建築研究所入所。1996年 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所退所。1997年 THE 2ND LIVING DESIGN COMPETITION 最優秀賞受賞。

松本 大

1962年 石川県金沢市生まれ。東京芸術大学大学院修士課程修了、菊竹清訓建築設計事務所入所。1990年 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所入所。1997年 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所退所。



KAS NET——京都建築大学ネットワークのシンポジウムとワークショップ

KAS NET—京都建築大学ネットワーク

本年10月末、京都市主催による「国際コンペ/21世紀・京都の未来」が締切られた。これは、「世界の叡智を結集し、50-100年後を目途とした21世紀の京都のあるべき姿と、その実現のために取り組むべき具体的なプロジェクトの想起」を求めるという主旨のもと、日本国内からだけでなく海外からも多数の参加者を募集して開催された国際コンペである。

このコンペを契機に、京都大学の竹山聖氏の呼びかけのもと、京都市内に立地し建築・環境系学科を置く6大学(京都大学、京都工芸繊維大学、京都市立芸術大学、京都精華大学、京都府立大学、京都造形大学)の教官を中心に、京都建築大学ネットワーク(Kyoto Architecture School Network = KAS NET)が本年設立された。建築に関わる活動を通して国際的な視野に立つ文化交流の輪を築いていくことを主たる目的とし、本年度は海外より著名な建築家を招聘して「21世紀の京都/都市生活とコミュニケーション」をテーマとするデザイン・ワークショップ、シンポジウム、展覧会などを行うことを企画した。

我々教官自身、コンペへの参加を含め、京都を深く掘り下げたいと考えていたこともあり、また自身の学生が他大学の学生とふれあい、切磋琢磨し刺激を受けてほしいという希望もあったため、この企画に賛同し、メンバーとして活動を行った。

KAS NETの活動に関しては、竹山氏を通じ、ドイツ席総領事のベルンハルト・ブラウマン氏の強力なサポートがあった。彼は、日本に留学していた頃より日本文化に対する強い関心・理解をもっていた。そして、日本人以上に日本文化への危機感を抱いていた。

本年度のワークショップでは、海外からトム・メイン(ロサンゼルス)、ヴォルフ・ブリックス(ウィーン)、ジャン・スーベル(パリ)、ジャック・ヘルツォーク(バーゼル)、アルベルト・カンボ・バエザ(マドリッド)などの建築家を招聘した。舞台が京都という事で、多くの建築家が関心を示してくれたのであるが、スケジュールの問題などにより、結果的にはトム・メイン、ヴォルフ・ブリックスの2名によつてのワークショップ開催となった。トムのワークショップは9月9日より19日まで京都精華大学・京都大学において、ヴォルフ・ブリックスは9月21日より25日まで京都市立芸術大学・京都大学において行われた。参加大学は、上記3校に京都府立大学を加えた4校であった。

シンポジウム、ワークショップの終了後は、学生達がワークショップをもとに導き出した各提案の展覧会、さらには出版まで持っていくことを考えている。

今後とも、京都の学生と海外の建築家を主体とする、京都に根ざしたワークショップを毎年開催していく予定である。時を経て、京都に対する提案の重なりが京都の再生に結ばれれば、と考えている。

ヴォルフ・ブリックスの遺言

9月19日ヴォルフ・ブリックスは来日した。翌日竹山聖氏のコーディネートによりトム・メインとのシンポジウムが行われ、ヴォルフによるワークショップは実際的には21日より25日までの5日間、京都市立

芸術大学・京都大学を舞台に行われた。

ヴォルフのチームは、京都大学大学院生7人、京都市立芸術大学大学院生5人(オーストリアからの留学生1人を含む)、そして京都精華大学の学部生1人で構成されていた。

今回はヴォルフの滞在日数が限られていたため、来日前より学生間での討論を重ねた。それぞれが京都を読み取るなかで、自主的に各自の提案を準備した。やや統合性にかかる、相互接点の見出しがたい個別の提案をもとに、「KYOTO FUTURE VISION」としての一枚の「布」に織り上げていくことが、ヴォルフを中心とするワークショップの課題であった。

「コープ・ビンメルブラウ」というヴォルフの事務所の名は、「青い空共同体」の意である。CO-OPとは、日本では生協の表示として有名であるが、共同作業こそ彼のもっとも得意とするところであった。彼には数度の京都滞在の記憶があり、あらかじめ京都に対する認識はあったが、来日当初は今回のコンペに対する困惑の様子も見られた。期間中、午前中は京都の町・建築・寺院の探索を行い、午後の4時間をワークショップとした。

ワークショップ第1日目には、学生それぞれが各自の提案をヴォルフに対して説明し、それに対しての示唆が個別に与えられた。翌日には、それに基づいて修正された図面コンセプトが提出された。両日のこういったハードな取組みを通じて、全体の姿が見え始めたのは3日目のことであった。

ヴォルフのチームは、シティプランニングの手法を踏まえながらも、トム・メインのチームとは異なったアプローチを示した。都市計画家としての視座を持つヴォルフは、限られた時間の中で動物的な感覚と全身に張り巡らせた触覚によって「京都」を感じ取っていった。また同時に冷徹な分析も行ない、ワークショップをまとめていったのである。彼は、短期間に京都の都市構造を読み取り、今後の変容の方向性を探った。京都固有のライフスタイルや歴史と文化の特異点に対する深い共感を示した。そして、学生達の多方向な提案にそれらを重ね合わせ、最終的には当初の困惑を乗り越え、学生と共に新たなレベルのFUTURE VISIONを見出したのである。

今回は、ヴォルフの来日に合わせて、彼の大学の助手の一人レイナー氏や、仙台からコープ・ビンメルブラウのロサンゼルス事務所のスタッフであった阿部仁史氏が来京され、彼らの協力により、ヴォルフのさまざまな思いが拡大し、伝えられていった。

彼の人となりから来るさまざまな日本語と英語によるジョークは、学生達を励ました。また、学生だけではなく我々教官も、ゆとりを持って作業に関わる事ができた。

まだ本コンペが審査中であるため、具体的な作業内容を書くことができない事を許していただきたい。

本稿を書いている間も、学生達は引き続き京都大学を拠点にコンペ応募案としてのまとめに勤めている。「NEVER CHANGE」がヴォルフの最後の言葉であった。「案はできた。まっしぐらに進もう。」の意である。学生達は、「WOLFの遺言」と呼び、残された時間を奮闘中である。

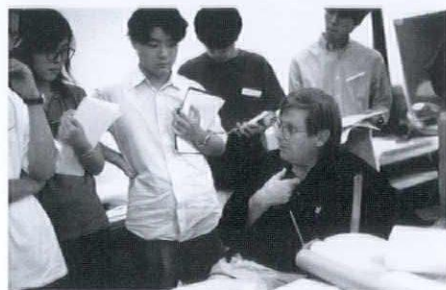
●池上俊郎/建築家、京都市立芸術大学助教授

KAS NET活動概要 —1997年秋

招聘建築家	：トム・メイン/モーフォシス(ロサンゼルス/U.S.A.) ヴォルフ・ブリックス/コープ・ビンメルブラウ(ウィーン/オーストリア)
ワークショップ	：期間 1997年9月8日—26日 会場 京都精華大学、京都市立芸術大学、 ：開催日 1997年9月20日 会場 関西ドイツ文化センター
京都建築大学シンポジウム	：期間 1998年4月以降の1ヶ月を予定 会場 関西ドイツ文化センター
展覧会	：企画進行中
出版	京都大学 竹山 聖 京都市立芸術大学 池上 俊郎 京都精華大学 新井 清一 京都府立大学 河西 立雄 京都工芸繊維大学 岸 和郎 京都造形大学 横内 敏人
京都建築大学ネットワーク	
協賛	：(株)NTTファシリティーズ、Bプレース、日本プロジェクト(株) 松下電器産業(株)、西日本旅客鉄道(株)、JR西日本コンサルタンツ(株) 日本電気硝子(株)、トステム(株)、(社)日本建築協会
後援	：(社)日本建築学会



シンポジウムでのT.メイン(左)とW.ブリックス



W.ブリックスのワークショップ

トム・メインのスタジオ

KAS NET第1回のワークショップは偶然にもモーフィシスのトム・メインとコープヒンメルブラウのヴォルフ・ブリックスと決定した。というのは、トム・メインもヴォルフ・ブリックスも双方ともお互いのホームグラウンド(都市)、ロサンゼルスとウィーンに深く関連しているからである。ヴォルフは以前ロサンゼルスに事務所を構えていたし、トム・メインもウィーンで教えたり、プロジェクトを持っている。親友といえる仲の二人が、京都でお互いのチームに分かれ、コンペティターとしてワークショップを指導し、"FUTURE VISION OF KYOTO"を通して戦うこととなった。

西洋文化の末端ともいえるロサンゼルスとその源でもあるウィーンの二つの都市の特性を体感として持つ両者の指導方針に興味があったのは言うまでもない。トム・メインチームの構成メンバーは京都大学学部生5人、京都府立大学学部生5人、大学院生2人、京都精華大学学部生7人の合計19名であった。(内半数は女性)

9月8日に来日、21日帰国までの約2週間のワークショップの内容を述べてみたい。私自身の所見ではあるが、トム・メインはある一定のレベルに達した(コンセプト、そしてその過程を図や模型を介してビジュアル化し、的確に表現できる)学生との作業に向いていると思われる。来日前、特に彼自身不安に思っていたことは、彼らの考え方を理解する上で言語の問題よりもむしろその進め方についてであった。

まず、彼が持参した参考文献としてO.M.ウングースの"The Dialectic City"/論理的推論の都市の理解を提案している。これはトム・メインの所信表明といって良いだろう。学生は英文であるが故、その翻訳の作業からまず一歩を踏み出したのである。翌朝その訳文を基にアプローチの方法を明らかにした。彼の手法は、都市という表現をできる限り複雑なレイヤーの成果物として理解し、そのレイヤーを解説可能なマテリアル(材料)として析出し、共通した情報として作成することにある。そのマテリアルは歴史的な記述、現在のフィギュアランド(図と地)、インフラストラクチャー、ゾーニングでもあろうし、等高線、緑地、川でもあろう。

この作業を当初コンピューターを使用した作業として提案したが、コンピューターの台数及び作業性の点で問題があったため、まずは関与できる人数の配分を行い手作業で資料を仕上げた。他方、トム・メインはアイデアの提案を学生達に投げかけている。これらの過程を通じ、また提案される一つ一つの案を理解し、批評しながら彼自身の京都という都市の構造、成り立ち等をおぼろげながら、また的確に把握していったのである。更に街を移動することによるフィジカルな感覚が他方にあり、その組み合わせが、学生に接する時の彼自身の言葉として現れていた。

共通するマテリアルを作り、そこから発進することが主な流れにあったように思われる。特に導き出された言葉として、Edge(エッジ) New District(ニューディストリクト)が思い当たる。ヴォルフ・ブリ

ックスはワークショップに費やす時間も少なかったため、直感的なアプローチを取ったが、トム・メインの場合は段階を踏んだマテリアルに基づいたアプローチをしているなど感じる。

帰国直前に行われたパネル・ディスカッションの批評が、以後の作業の指針となっているのは言うまでもないが、この時点ではコンペ案として何点の応募になるかは未定であった。結局、提案された3点の共通点を生かしながら一つの案としての応募となった。19名のそれも学部生4年を主体としたヒエラルキーのないグループ作業は至難の経過をたどっている。

KAS NETの場を介して海外の建築家と接し、また、他の大学の校風、考え方をお互いに感じ、仲間として過ごした一時期は彼らにとって有意義な経験となったであろう。

シンポジウムの記録

今年は2人の海外建築家をワークショップに招いているわけであるが、実際彼らに接することが出来るのは参加する学生のみである。情報の集積地、数多くの展覧会、シンポジウムの行われる東京圏に比べ、京都は人の集まれる機会が少ない。この意味に於いて、彼らを含めたシンポジウムを一般の人々に開くことも、KAS NETの活動の核でもある。

彼らの最新のプロジェクトを彼らのレクチャアを通して見る機会をここに得た。両者ともコンピューターによるCGを駆使したスライドを提示したのが印象に残る。ウィーンとそしてロサンゼルスという地に根を張ったプロジェクトというよりは、機能、コンテキストに特徴を見るプロジェクトであり、アプローチの手法にウエイトがあるのが読みとれた。例えば、ヴォルフ・ブリックスのモニュメンタルなサイロの計画、トム・メインのボモナ高等学校の敷地からの提案等は、その場固有のものである。いず

れの作品も近々、実作として日本の雑誌の紙面を飾ることであろう。

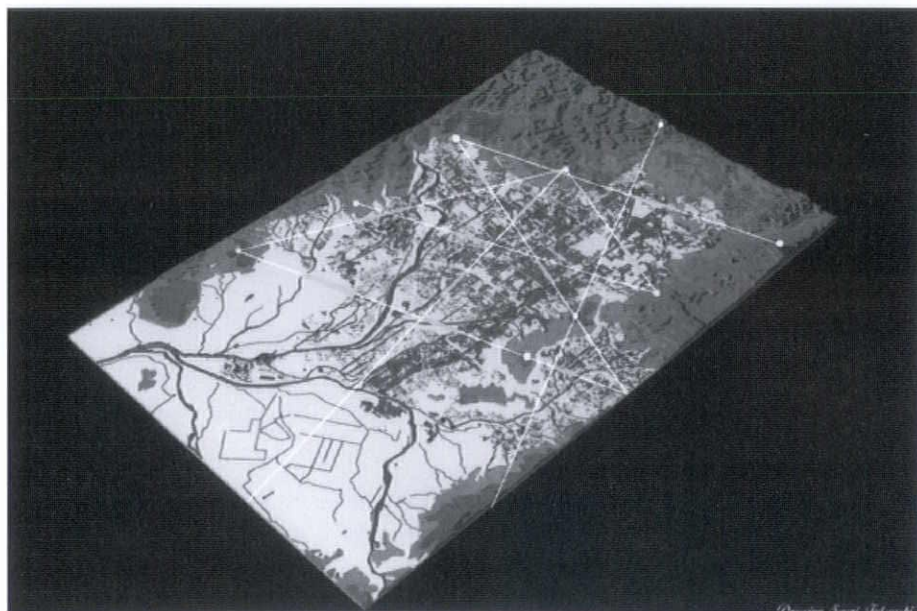
一つだけ決定的な異差を見つけたのは、シンポジウム後の雑談の中であった。ウィーン(ヨーロッパ)で活動するヴォルフ・ブリックスは権力こそ建築家が持たねばならぬものと、……。

何となく理解できる。他方トム・メインは世を変える力を建築を行う課程でも出来得ると……。アメリカ的。お互いをよく理解しての討論があった。実は、その両面性を2人共内部に感じつつも、一方のサイドに立ったスタンスでの話をしているようにも見える。また、余談であるが最高級車は空冷ポルシェ911であるとヴォルフ。新しいポルシェ・ボクサーはいいとトム・メイン。いつも冗談混じりにお互いの意見を言い合っている熱い時間があつた。

●新井清一/建築家、京都精華大学助教授



T.メインのワークショップ



ポインティング・ダイアグラム

資料提供：アーバンガウス研究所、アライ・アーキテクツ

「風景」の溶解へ

モイセン・モスタファヴィ氏との対話をめぐって

うつろいからの誕生

プラトンの『国家』に、「洞窟」の比喩がある。地中の長い洞窟状の場所に幼い時から縛られ、頭もめぐらすことができない囚人達の話である。上座には火が燃えていて、この光と囚人の間には高めに道があり、彼らにはこの洞窟の奥の壁に映る影以外、見えるものはない。一生をその「座」で過ごす彼らにとっての真実性とは影自体であり実在ではない。しかしここでの混乱は、ひとりの囚人が身体の束縛を解かれ、洞窟の間から光の世界に昇ってゆく場合と、逆に光から闇へ移行された場合の認識の偏差にある。

「風景」はこのような内的な認識の転換によって誕生してきた概念である。デカルトの出現を準備していた時代、人間の視覚が台頭しはじめ、ゲオルグ・ジンメルがいうように「特殊な形象としての『風景』に対する感受性だけが後世になって育ってくるのであって、しかもそれは、自然の相対の統一的な感受からの分離」によって「発見」されてきた。つまり、人間の「眼差し」が介入した瞬間に、かつての未分化な状態から「風景」が相対的に人間から乖離し、逃走していったのだ。

この歴史の転換を誘発していった背景には、自然科学主義の復興や近代市民社会の成立、それに伴う都市の成熟、さらに宗教改革運動等、様々な要因が挙げられようが、ここでは特に15世紀のグーテンベルグによる活版印刷の発明を境にした近代への転移に注目したい。この変革による臨界点において、世界と連なっていた全身体的経験から精神／意識が離反していき、それと共に自然が客体に追いやられ「風景」が出現してくる事象との平行関係が見え隠れしているのである。

この発明以前、ヨーロッパ中世の写本における読書は、音読が慣習であった。つまり、この時代の書物は眼を通して理解されるのではなく、むしろ発話される声がリズムとなり、耳を経由しながら身体的に遂行されたのである。そこには意味を逃れ、身体的に想起されてくる詩学が宿っていたのであろう。しかし、黙読が急速に一般化される活版印刷以後、むしろ眼を通して書物が理解され、そこに含まれる「意味」が肥大化していったのである。これと連動した傾向は、文学記述の様態にも

確認できよう。中世文学における経験の把握は、断片的空間を運動する身体に付随して現れてくる遍在する景観であった。しかし近代以降は一変し、普遍的空間を基礎とする風景の客観的記述に移行していく。また別な位相として、中世から近代への過渡期、風景の起源的な絵が中世の写本装飾に出現していたという現象がある。これは写本の余白に、ラテン語のテキストの厳密な言葉への教義的な従属から逃れ、客観的に見え始めた自然との戯れの中で画家達が即興的に描いたものである。

そして、これらを契機とした認識の転換は、後に「風景画」という表象形式を誕生させ、アルビニズム、グランド・ツーリズムといった新たな行為の基礎を用意したのである。

このように、近代への移行期における「風景」の誕生をめぐって浮上してくる地殻変動は、身体性の変位等、複合的要因が人間の内的な認識の転換を引き起こし、それに連鎖して人間に新たな表象が現れ、さらに人間の身体的行為を変容させていくという事象であろう。つまり、人間の「認識」と「表象」、そして「身体」の間には常にうつろう歴史が想定されるのである。さらにその歴史は、絶えず多方向に組み換えられていくリズムとして存立しよう。

「風景」とは、まさにそのようなうつろいの歴史の中から立ち現れてきたものである。そして、柄谷行人が指摘するように、「主観—客観」という近代認識論の構えそのものが、『風景』の中で成立してきたのである。

風景のアクチュアリティ

今、我々の前に何が現れているのであろうか。未だに近代の影しか眼に映っていないのであろうか。現在、我々はどうのよううつろいの中に在るのであろうか。

このような「風景」が包摂する今日の問題をめぐり、先日(10月15～18日)東京のTNブロープにおいて「再発見される風景」と題された国際シンポジウムが開催された。これは私も企画に参加したもののだが、特にその実践において、植栽による美化ではなく、近代の物質的状況に立ち向かい、身体を参加させながら、未知の状況を出現させている傾向が特徴的であった。

ルール工業地帯の廃墟と化した製鉄所を地盤に、その腐朽や自然の治癒力を繊細に感受しながら、廃棄物を再利用した要素を組み換え挿入することで、全く新たな内的関係性を派生させていくP.ラッツ氏。また、国土自体が干拓され、「風景画」を誕生させたオランダという超人工的な土壌と向き合い、そこに生態学的視点や非リジッドな素因を織り込みながら人為的手法により一気に創出していくA.ヒューゼ氏等の現場が提示されている。

一方、AAスクール学長のモイセン・モスタファヴィ氏は、「ランドスケープ」と「アーバニズム」が対立項ではなく、並置され、織物のように複雑に絡み合う共犯関係としての歴史を示し、主体としての建築／都市と客体としての場所／田園という構図自体を飛び越えた地平において、我々の認識を変容させる契機を都市景観の断片群にみる。

ランドスケープとアーバニズムのアレゴリー
それでは、具体的にその変化の兆候がどのような近代的現象に現れているのか。後日、モスタファヴィ氏と対話する機会を得た。

まず、風景によって規定されてきた江戸の都市構造と、表層的に流動する現在との間隙に生じるうつろう現象や認識に触れながら、風景の孕む今日の問題を訊くことから始まった。彼は「ランドスケープはアーバニズムとの重層において考えなければならない」という前提を示す。その基盤上で『「風景」が導引する問題提起は、絶え間なく推移する時間のプロセスであるが、都市的現象においても同様に、都市計画や建築等の行為が施された後に様々なモメントの様態が発生してくる』のであり、「人為的プロジェクトは厳密には常に未完成であり、各経過において異なる位相の終点を有する」という側面に着目する。

このように、人為的行為は制御不可能なファクターを抱えており、「風景」が孕む予測不可能性が近代都市の中で特徴的に露呈している現象として、モスタファヴィ氏はインフラストラクチャーに注目する。「インフラは圧倒的な物質性を有する構築物であるが、それ自体は完結しておらず、その枠組みに寄生する様々な行為を誘発する装置」であり、ここにアーバニズムにおける「暫定的完結性」

のパラドックスを見る。そして、「緩やかなフレームワーク」が要請されてくる。例えば「ベルリンのIBA (国際建築博覧会)では、近代的マスタープランのオルタナティブとなり得る批判的な手法が採られるが、既存の都市と新たな計画の間に複合的な衝突を誘引する、より緩やかなフレームワークが必要とされた」という。つまり、都市には時間の経緯を取り込んでいく「蓄積の複合性」を容認する契機が必要であったことを意味しよう。

またインフラに関連した提起として、「風景」は「関係性の諸相を内包する」ものであるという。「インフラは、作家の顔を持たない純粋に技術的な側面によって成立するプラグマティズムであり、耕作地の風景と同様に、土地所有や政治の状態、そして土壌等の織り込まれた関係をトレースし、体現化したもの」である。そして、今日必要とされているのは「ジル・ドゥルーズのいう『仮想の実現化』という新たな関係性」であり、これを踏まえ「脱フレーム化」という概念を提出する。これは、現状に「穴を開ける」ことである。具体的に彼は、「例えば高速道路や鉄道を新たに敷く場合、既存の都市に呼応するであろうが、それ以後の経過の中で、そのインフラに反応して都市が流動していく」という状況に着目する。しかし、そのふたつの流れには「関係性の隙間」が生起してくる。つまり、そのような場所には「予測不可能な使用法や誤用といった現象」が発生してくるのである。

また、この「脱フレーム化」の別な局面として、モスタファヴィ氏は、作家の主體的な「意図性」の限界にも言及している。「建築の閉ざされたオナニズムは、建築家が市民との接点を方法として受領していくことで開放されていくのではないか」という。そしてその手続きにおいて「リニアではなく、意図性の屈折や偏差、そして誤読を誘引するモメントを受容していくことが可能ではないか」という今日的方法論を提起している。

次に、風景写真は記号のないメッセージでありながら、コード付けがない限り知覚されないというロラン・バルトの「写真の逆説」

を引きながら、「風景」の歴史における記号論的側面について試してみた。まず、16世紀のパラディオの建築において「窓は必ずしも外部に広がる風景に対応してデザインされておらず、むしろ室内の壁に描かれたフレスコ画に理想化された風景が現れていた」という。そこには「形式的な外部の風景」と「変容され、内面化された自然」が並置されているのである。ここに提示されている関係性は、異なる時間を含んだ二項の戯れとして18世紀英国の風景式庭園においても検証されるといえる。「風景式庭園は、16世紀イタリア絵画や文学のナラティブな描写に感化されて造られており、この風景は16世紀との揺らぐ物語性を孕む」のである。そして、当時この風景についてのガイドブックが新たに書かれたが、これを片手に人々が彷徨う時、幾重もの記号の束が派生してくるのであろう。そして、このような風景と絵画との記号論的な戯れは「80年代の建築・都市における記号論的ディスクールと平行関係にある」という、別な側面におけるランドスケープとアーバンイズムの関係性を指摘するものであろう。

最後に、ヴァルター・ベンヤミンにおけるベルリンでの幼年時代とパリでの徘徊技術の重層という粉砕された時空の迷宮の戯れに言及しながら、彼に今日的な多重文化性の問題、場所や非場所の概念についての指針を求めた。彼はまず、マルク・オジェのいう「超近代」的状況に触れ、「現在の我々は移動する旅行者であり、空港、スーパー・マーケット、ホテル等、都市性を有する混成状況の経験が日常化する時、その中に近代を超える意味が沈澱してくるのである」といった可能性を示す。また、今日におけるホームレス化の潮流は「経験に多重な文化が蓄積されていき、人の意識が変革することにより、これまで不動のものと考えられていた地域の固有性が内部から揺り動される」ものとし、このようなねりにおいて「ゲニウス・ロキは、もはや可能でない」という認識を示す。さらに「イタリアの田舎での生活が表層的な時間の連続性を保持しているように、ノマド的な状況に

おいても、例えば世界中にチェーン網を張るファースト・フード店は別な次元の匿名的連続性を与えている」という。このように、超近代的「非場所」が場所性を獲得していき、かつての「場所」も内側から変更されるといって、「場所」と「非場所」が振り子のようにうつろう状況を示唆している。

そしてこれからの課題は、以上のような現状の変位に対し「リジッドでないディヴィアス」をいかに空間に変換していくか」ということであり、「その新たに獲得される空間性によってのみデモクラシーが規定されていく」のであると結論づける。

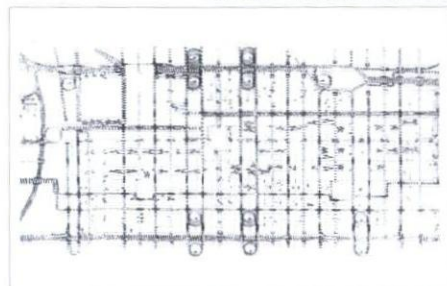
溶解する「風景」、そして身体の詩学へ

我々は、未だ近代的「風景」の影を視ているのだろうか。モスタファヴィ氏にとって「ランドスケープ」と「アーバンイズム」という概念は、倒置され、断片化された様々な比喩の不測の関係性というアレゴリーとして現れており、それらの浸透の末にすでに消滅しているのではないか。そして、近代の記憶が遠方に液化していく様態の具体的な手触りと向かい合っていくことにのみ、その場所からの跳躍が可能なのであろう。つまり、都市の状況に潜む近代性が突出した現象の裂け目に、幻影としての「風景」が、呪縛からその外部へと溶解していくのだ。

その流出において、我々はもはや「風景」に代わる言語の収斂を逃れる神話に遠ざかっていかなければならない。そのような言語の救済において、視ることは劣化し、むしろ囚人が身体拘束を解かれ光に向かっていったように、身体流通というアフォリズムの閃光、つまり、ニーチェ的な外部への力の戯れが再び叫ばれているのだ。それは、場所としての身体を超近代の隙間に埋没させ消尽させること、さらに認識から認識への連続的な流れではなく、むしろ認識の手前にある身体に統合された跳躍力、そして破砕された記憶や場所の交錯、そのような地平に「風景」を超越した詩学が射し込んでくるのだと思う。

●花田和幸／建築家

資料提供=AA School Slide Library



L.I. Kahnのフィラデルフィアのための交通パターン(1952-53年)

Photo=Aero film



ノーザン・アウトフォールの下水処理場

Photo=Sir Owen Williams & Partners



バーミンガムの立体交差

ゴリー・メモリアル・コンペ

第2席に山下秀之氏+アラン・バーデン氏+佐藤慎也氏入選

9月中旬、アフリカ大陸のセネガル、ダカールにて、ゴリー・メモリアル(Goree Memorial)国際設計競技(UIA認定)があり、審査の結果290作品の中から、山下秀之+アラン・バーデン+佐藤慎也のチームが第2席に入選した。第1席にはイタリアの建築家オッタヴィオ・ディ・ブランジが入選している。

このゴリー・メモリアル・コンペのプログラムは、アフリカ人の長年にわたる奴隷としての痛ましい経験からの解放を記念して、アフリカ大陸最先端の大西洋に突き出すダカールの岸壁の敷地に、メモリアル、ミュージアムを建設するという実施コンペである。審査員は、T.カンクラ(スロベニア)、R.ムティ

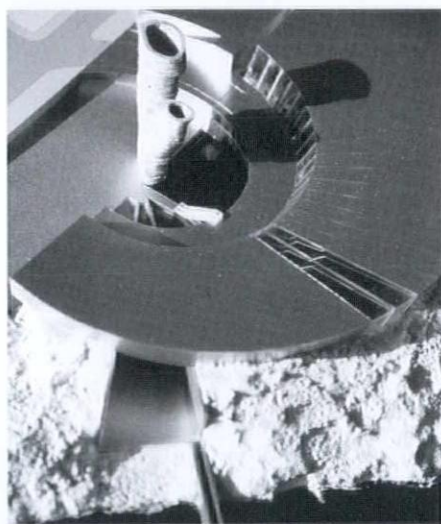
ソ(ケニア)、S-W.カン(韓国)、S.G.サイド(エジプト)、他。

第2席に入選した山下秀之+アラン・バーデン+佐藤慎也のチームは、基本コンセプトとして、自分達自身がアフリカの文化に根付いていないことから、純粋に建築固有の表現や問題意識、構造の特殊性、継続する個人的思考を手掛かりとする。具体的には、この記念館を祝祭の施設として、その強烈な歴史的哲学的背景に応えるために、建築の構成を「祝祭の形式」、つまり象徴的なメモリアルとそのまわりを平面的に取り囲むミュージアムによる祝祭の形式になぞらえることを意識している。その祝祭の形式は、人文的特性のみ

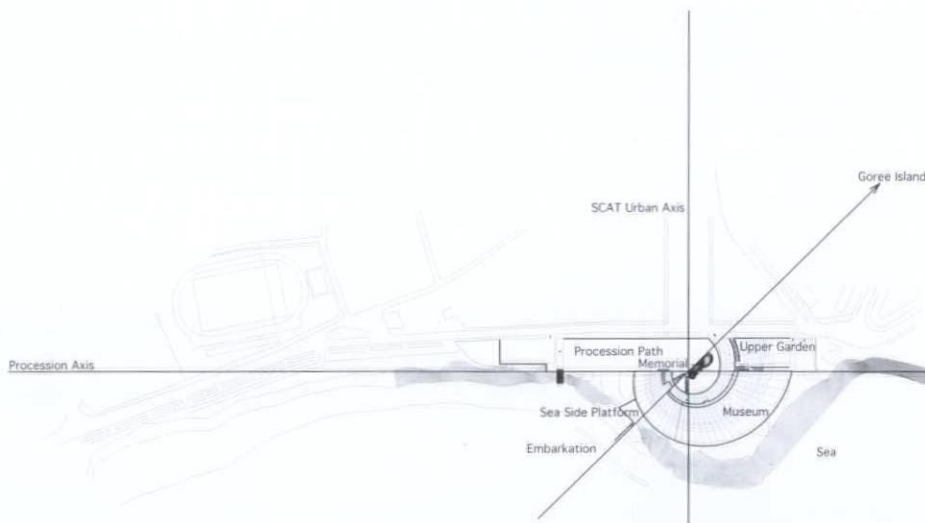
山下秀之：1961年東京都生まれ。東京工業大学大学院修了。日建設計勤務後、1991年にインフォ・アジェンダ・デザイン・オフィス設立。現在、R.ロジャース事務所勤務
アラン・バーデン：1960年イギリス生まれ。1986年ロンドン大学大学院修了。1991年東京大学博士課程修了。1992年よりSDG構造設計集団勤務。1997年より関東学院大学建築学科助教授
佐藤慎也：1968年東京都生まれ。1994年日本大学大学院修了。I.N.A.新建築研究所勤務後、現在日本大学理工学部建築学科助手

ならず、地形的特性、都市的特性、幾何学的特性によって決定された建築的なプランニング・ダイアグラムに基づく。大樹のように立ち上がるメモリアルは、アフリカの「力」、巻貝のように回転しながら拡張するミュージアムは、アフリカの「成長」を意図する。木/貝、垂直性/水平性、動/静、有機的形態/幾何学的形態、象徴的/機能的、木造/RC造、といった表現のコントラストを文脈としながら、自由と共存を視覚的に表現している。

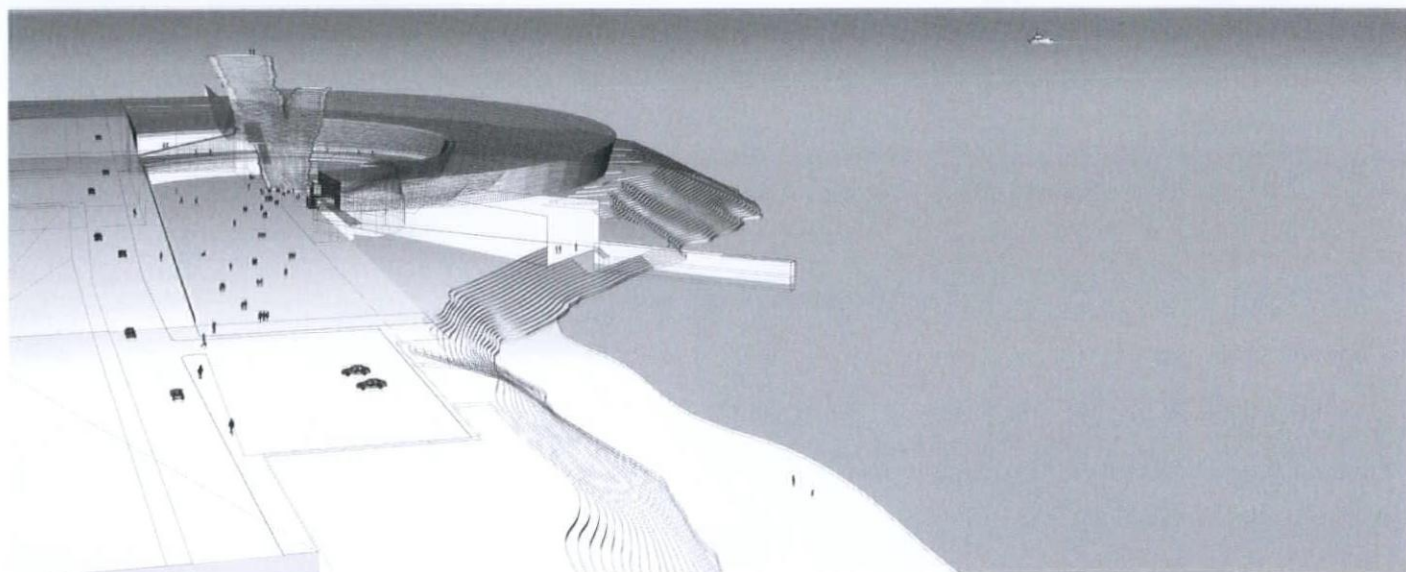
「奴隷解放」というような、歴史的に大きな事実を背景とした国際建築コンペでの建築の可能性に、今後も注目したい(M.T.)。



CG製作=Zy and Partners



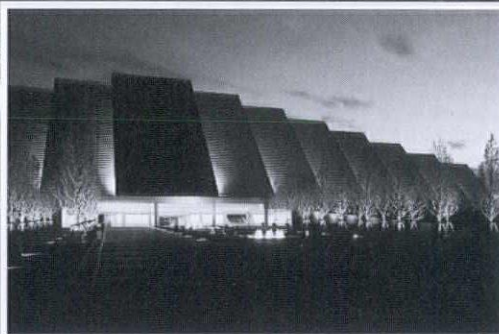
配置図



模型製作=モデック

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい……。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



長野市 エムウェーブ (長野)
設計管理：長野市オリンピック局施設課、久米設計



山田照明株式会社 本社／ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL.03-3253-5161
仙台支社／ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 1-1-11 (ANDOビル) TEL.022-267-1630 横浜支社／ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731

大阪支社 〒542 東大阪市橋本 2-2-6 TEL.06-745-6811	福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL.092-282-7635	札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水七条 2-6-1 TEL.011-811-2215
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL.0273-63-1442	名古屋営業所 〒461 名古屋市中区泉 1-21-35-1102 TEL.052-963-8411	静岡出張所 〒420 静岡市西草深 23-9-502 TEL.054-247-0811
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119	鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (第6相良ビル) TEL.0992-58-0031	宇都宮出張所 〒352 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL.0286-60-1381

製造業



アマノ(株)様
20HP×7台



主な導入理由
GHP採用で特別高圧電力の回避

ガスで冷房 ガスで暖房 ヤマハガスヒートポンプエアコン

SCHOOL大学



静岡産業大学様
20HP×8台、7.5HP×14台、
5HP×11台、3HP×2台

快適空調への多様なニーズに
ヤマハがおこたえしています

ホテル・旅館



八幡屋様(母畑温泉)
20HP×10台、13HP×3台、
10HP×4台



主な導入理由
ランニングコストの削減

Y-HOTシステム搭載。 GHPビル用マルチエアコンMシリーズ



YMCJ280M-B
10HPビル用マルチ
YMCJ355M-B
13HPビル用マルチ



YMCJ450M-A
16HPビル用マルチ
YMCJ560M-A
20HPビル用マルチ

ヤマハ独自の新技术Y-HOTシステムがGHPのメリットを最大限に生かします。

●画期的な暖房能力

外気温度2℃以下時に定格の110%の暖房能力を発揮。
外気温度-20℃まで(寒冷地仕様。標準仕様は-5℃まで)
の広い範囲でパワフルな暖房運転が可能。

●ロング配管長

冷媒配管長は、実長100m相当長125mのロング配管、同一冷媒系統の室内ユニット間高低差が15mと長く、ホテル、病院などの縦配管ニーズに容易に対応。
また室外・室内ユニット間高低差は室外ユニットが下に設置された場合や、室内ユニットの接続容量、運転台数、低外気温冷房による制約を受けず50mと高くとり、設計自由度が格段に向上しています。

●低外気温冷房範囲の拡大

標準仕様で外気温-5℃まで、寒冷地仕様で-10℃まで安定した冷房運転が可能。年間冷房ニーズに対応。

●16台異能力マルチ

異容量・異タイプの室内ユニットを室外ユニット容量の50%から130%の範囲内で、1台から最大16台まで接続し、個別運転が可能です。

●豊富な室内ユニットバリエーション

最小J22形から最大J560形まで、インテリア性を重視した豊富な室内ユニットバリエーションで、さまざまな用途に適した機種を選択できます。

●優遇税制

GHPは「総合エネルギー政策推進投資促進税制」が適用され設置のコストダウンが図れます。
次のどちらかを選択して適用されます。
1. 税額控除(7%) 2. 特別償却(30%)
※詳しくは下記のお問い合わせ先にお尋ねください。



北海道営業部

〒063 北海道札幌市西区二十四軒一条7丁目3番13号
TEL.011-612-6417

東北営業部

〒983 宮城県仙台市宮城野区日の出町3丁目8-36
TEL.022-284-6121

東京営業部

〒331 埼玉県大宮市大成町3丁目311番地1号
TEL.048-653-4325

中部営業部

〒462 愛知県名古屋市中区北通1丁目34番地
TEL.052-917-1555

関西営業部

〒550 大阪府大阪市西区北堀江3丁目6-13
TEL.06-535-5565

中国営業部

〒734 広島県広島市南区東雲3丁目16-8
TEL.082-581-1174

四国営業部

〒760 香川県高松市上福岡町字宮東984-1
TEL.0878-35-2777

九州営業部

〒812 福岡県福岡市博多区上牟田1丁目11-1
TEL.092-411-3618

YAMAHA

ヤマハ発動機株式会社
〒438 静岡県静岡市新井2500
GHP事業部 TEL.0538-37-4455

■西沢立衛

海外建築情報リミックス

「花」

「12Architects」の最終回である今号は、ミース・ファン・デル・ローエの特集である。と同時に、なんと「海外建築情報」の最終回でもある。「建築紹介」

という題で岡田新一氏によって1966年から始まったこのコーナーは、実に32年の歴史を持つことになる。大変な記録である。さらに今回は、ミースの特集であることも重なって、プレ・ミーティングではかなり白熱した議論がなされた。近年のミースブームの源流を測る意味でも、各論の論述には期待したいと思う。

さていきなり本題に入ると、実は私は、今までアメリカに行ったことがなかった。先日初めて、ミースのハイライズビルを見たのである。ミースの建築は、明るい色のビルが密集するシカゴのダウンタウンの中で唯一黒色(正確にはブロンズ色)で、ちょっと異様である。外装は鋼鉄がむき出しで、ガラスというガラスが、全て鋼鉄と同じブロンズ色に統一されている。ミースのビルは建築というよりも、隣のビルの影をそのまま形にしてしまったような不気味さを持っているのである。

12Architects

#12(最終回): Mies van der Rohe

Staff: 太田浩史(東京大学生産技術研究所助手)、小川次郎(東京工業大学坂本研究室)、西沢立衛(妹島和世建築設計事務所)、堀井義博(ユービーエム)、丸橋浩(アーキベルク)

しかしもっとコワイのは、ミースのビルはシカゴではそれこそ山のようにあるが、そのどれもが、ほとんど違いがないのである。もちろん天井の仕上げが違うとか柱カバーが違うとかといった微差はあるものの、ほぼ同じと言っても過言ではない。これがもっとも異様だった。

私はこの一連の黒いビル群を

見ていて、昔読んだ小説を突然思い出したのである。といってもそれはビルについてではなく、花についてである。S.K.パーのSF小説の中に、インドネシアかどこかの宮殿の夜のパーティで、会場を飾る大量の花をめぐって花論議が起こる話がある。パーティの客が、会場の花の美しさをめぐって論争し合っているうちに、ある時ふと、その美しい花についてよりも、むしろその反対の、つまり美しい花以外の「花」のことが、みんなの話題になってゆく。というのも、その「美しい花」なるものが成立するためには、まるで美しくもなくかといって醜くもないような、何の特性も持たない単なる抽象的な「花」なるものがあるかのような気に、みんなほぼ同時になってしまったのである。いかにもB級SF的な話だが、彼らは世界中の全ての花を集合させて、それらの花々が全て異なるように美しいことを確認することによって、

12Architects #12: Mies van der Rohe

グラフィック・ウォール

峯島亜紀子

ヨーロッパ時代末期、〈3つの庭を持つコートハウス計画案〉。外部に対して執拗なまでに閉鎖的なこの建築の内観パースには、洗めな色使いとはいえ、線画で書かれた他の部分からするとあまりに豊かな色彩の広がりを呈した、ジョルジュ・ブラックの絵がコラージュされている。コラージュとはいっても、パースの利いた台形の壁面にきっちりと合わせて貼られているその律儀さが、かえって奇妙な印象を与える。しかも、ざっと3m×8mはある壁面一杯に貼られているその様相は、いくらモダニズム絵画のサイズが全体的に大きめとはいっても、尋常ではない。そう、飾られているというよりは、壁にびったりと貼られたグラフィックという表現がしっくりとくる。では、もとの絵は? そう思ってブラックの画集をめくってみて、このコラージュの特異さに、ますます目を見張ることになった。

画集をめくるうちに、このコラージュは本当にブラックの絵なのだろうか、という疑問が湧いてきた。こんなにメガな骨格をもった大振りな色彩配置の絵を、ブラックは書いていないのだ。もう一度じっと、コラージュを見つめる。しばらくしてこのコラージュが、ブラックが一時期好んで題材としていた、ぶどうとビンの一部をうんと拡大したものらしいことが分かってきた。それにしても、この時期のブラックの作品は全体的に小ぶりで、1mにも満たないものが多い。構図的にもぶどうはぶどう、ピンはピンと分かるようなたくさんの物体が絡み合っては浸食していく、緻密で繊細なものが中心。そんな原画の一部を、ものすごい勢いで拡大してできたこの壁面

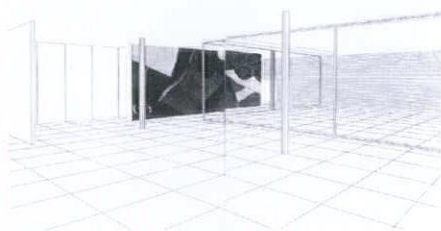
のコラージュには、すでにぶどうやピンは跡形もない。これはもう、面上に色彩がちりばめられたミース・オリジナルのグラフィック・デザインであり、そのグラフィックがびったりと貼られた壁、グラフィック・ウォールなのだ。そしてこのグラフィック・ウォールは、後のガラス・カーテンウォールへと、さらに舞台を進めることになる。

当時、温室や駅以外で、大ガラス面を持つ一般の建築はほとんど存在せず、まして全面フラットなガラスによる壁など、ミースが初めてではなかっただろうか。それならそのガラス壁面は、まぎれもなく「壁」に見えたとはいえない。しかも、今みたいに透かして外が見えているという感覚ではなく、時間とともに変幻するグラフィックが貼りついている、新しい種類の「壁」。コートハウスのコラージュをみると、ミースが素材感を活かした平滑な壁面のみを追及していたとは、とても思えない。ナチス・ドイツ時代、周囲を固いレンガの壁で閉ざした内部に、大切に温存されていたグラフィック・ウォール。それは、平和で開放的なアメリカにおいて、逆に建築の外周を仕切るガラス・カーテンウォールとして実現される。

ガラスが「壁」であればこそ、囲い取られた内部に完結した小宇宙(=ユニバーサル・スペース)を思い描けるのではないだろうか。そして、ガラスが内部に持ち込む風景を、意味を担うことを要求されない色彩の配列=グラフィックに解体すること。それにより、まなざしは風景という正面性から解放され、4面とも等価なガラス壁の発想が生まれ得る。ミース

スのガラス壁は、あのコラージュの壁と同様、色彩のちりばめられた面が貼りついたグラフィック・ウォールなのだ。鉄とガラスによるストイックなたたずまいをみせる、これらの建築。そこに、見目鮮やかなグラフィックによる建築構成の芽生えを、見出すことができる。幕はすでに切って落とされているのだ。(東京都立大小林研究室、mineji@fb3.sonet.or.jp)

図版出典: Wener Blaser, "Ludwig Mies van der Rohe", GG



〈3つの庭を持つコートハウス計画案〉でのブラックのコラージュ

美しくもなく美しくなくもない「花」という抽象物が、単に架空に過ぎないことを例証しようとする。はたして13年後に、世界中の全ての花が13年前と同じ夜の同じ宮殿を埋め尽くすところでこの話は一旦終わるのだが、ここで興味深いのは、この最後の瞬間が、彼らの13年間のゴールであると同時に挫折でもあった点である。その理由はつまり、世界中から集められてきた大量の花々は、確かにどれもみな違ったように美しく、ひとつとして同じ花が存在しない。しかしどれひとつ同じでないこと、つまり花の数だけの差異が存在することを実証したかったはずの彼らは、同一性を少しも共有しない世界中の花をここに集合させてしまったことによって、世界中の花たちが差異というよりはむしろ同一性によって集合し得たという単純な事実に気づいてしまったのである。彼らはもう、あの抽象的な「花」が現実でないとは誰も主張できない。というのも、彼らをして樹木や犬や鳥などを混ぜることなしに花だけを集合させることを可能にさせた「花」の抽象性は、彼らの13年の現実を動かし、かたや彼らの生きる現実の方は、13年もの歳月を費やしてその抽象的な「花」を模倣してしまったからである。

なぜそんな話になるのかと撃感をかいそうだが、つまりミースのつくったビルは、個別の花というよりは「花」という抽象性の方に近いのである。彼は決してIBMビルとかフェデラルセンターとかといった建物はデザインしていない。彼は単に「オフィスビル」なる抽象性を掴もうとしただけで、ミースは個別には何もデザインしていないのだ。普通は、世界中の全てのビルはどれも必ず個別の解である。しかしそ

れらの世界中のオフィスビルが差異であると同時に同一であるならば、そこにはすでにあの「花」と同じような、「オフィスビル」なる抽象性が同時に出現しているのである。彼の中ではもはや敷地形状がどうかとか、クライアントがどうかとかといった個別条件はほとんど意味がない。むしろミースは、そういった個別条件を完全に切り捨てることによって、架空であるはずの「オフィスビル」なる抽象にひとり向かっているのである。そしてあの「花」と全く同じように、ミースのビルはハイライズとして建設される世界中の全ての建築から、かけがえない差異を奪い取ってしまうのだ。ほぼ全ての建築家が優れた個別解をあみだそうと躍起になる中で、ミースは自らの建築をただ「花」たらしめようとしたのである。

ということで、「海外建築情報リミックス——12Architects」は今回のミースをもって終了である。建築家の紹介や掘り出しといった作業を通して、建築の新しい文脈を自由に発見していこうという1年であった。どこまで成功したか心許ないが、プレ・ミーティングも毎回盛り上がり、興味深い論述も多く生まれたと思う。そういう意味では、海外建築情報ならではの自由さを受け継いで議論できた1年だった。1年関わった身としては、いずれまたこういう場がもたれることを願うばかりである。(BXT00214@niftyserve.or.jp)

12Architects #12: Mies van der Rohe

空中の地下室／「斜面」の発見

高橋淳司

チェコ共和国第2の都市であり、モラヴィア地方の中心をなすブルノ市の中心からややはずれた場所、街区型の中層市街地と低層の住宅地との境界(エッジ)に、ミースのアメリカ移住前、ドイツ時代の代表作は建っている。敷地はなだらかな、しかし確かな高低差をもった斜面となっている。ここは地形のエッジがそのまま市街地の境界(エッジ)となっている場所でもある。

トゥーゲンハット邸が、実現された住宅としては、ミース前半の最高傑作であることに恐らく疑いの余地はない。しかし一方で、この住宅の置かれている「場所」は、やや微妙なものでもある。例えば、1972年にスイスのArtemisから出版され、後にバルセロナのGGによって再版されたもっとも手軽な彼の作品集に、この住宅は収められていない。

その理由として、この住宅の文字通りの意味での場所——ブルノという都市——が、1990年の革命まで、東側諸国の一員だったチェコスロヴァキア共和国に属していたことも、当然ながら考えられないわけではない。実際トゥーゲンハット邸は、第二次大戦前における最大の「機能主義」の住宅作品のひとつと見なされていたが、ナチに占拠され、戦禍で破壊され、その後不完全な修復の状態で小児病院のリハビリ施設として使用されるなど、あたかもカフカの「城」のように、高くそびえながらも到達のできない道標であり続けたのである。

しかしながら、もし多少の深読みが許されるならば、先の作品集が、年代記(クロニカル)の形をとらず、作品を分類(カテゴリー)し、その分類ご

とに載せる形をとっていること、そして、それらの分類——「鉄骨構造のコートハウス」や「鉄骨構造のガラスの住宅」——となじまないことが、トゥーゲンハット邸が掲載されない理由かもしれない、とも考えられる。実際「場所を選ばない」他の住宅と比較して、トゥーゲンハット邸はあまりに敷地に依存しているし、水平の空間構成と同じくらいに、垂直方向の展開——断面構成——にも関心が払われているように思われるのである。

この住宅の持つ、モダニズム建築特有の開放的「健全さ」と、他人には見せ得ないプライベートな雰囲気との両立は、あたかも平屋建てであるかのようにして街路に面した閉鎖的な上部階から、磨りガラスで採光された影のないエントランス・ホールを経て、トラバーチンの螺旋階段を下り、そして全く突如として主階の「ガラスの家」に降り立つ、その一連のシーケンシャルな体験によってのみ記述されるものだ。広大な主階のリノリウムの床は、天井とほとんど同色かつ平滑で、まるでここが基壇の上でもなければ地面の下でもない、どこでもない場所であることを示唆しているようだ。

そして、ガラスのスクリーンの向こうに広がる風景は、先に自分がいた街路とは、もはや同じ世界ではない。今や真の外部——「私」には知りえない外部——との間に目に見える境界はなく、そこにはただ、目に見えない「距離」だけがある。真の外部との「距離」によって保証された、彼方まで続くこの新しい「外部」に対しては、唯一のガラスのスクリーンすら床下まで開放して、「私」は全てをさらけ出すことができる。「斜面」のみがこの矛盾したふたつの世界を成立させている。ここは、地下であるにも関わらず接地もしていない「空中の地下室」なのである。

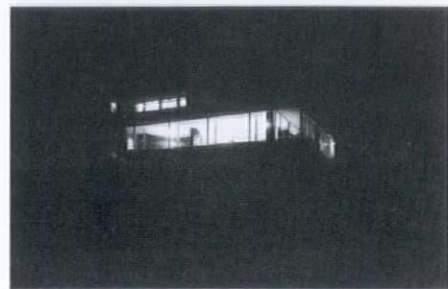
トゥーゲンハット邸の「斜面」は、ミースの世界(ユニバース)と、外部との間に、避けがたい二面性

があることを暴露してしまう。しかしながら、彼のふたつの時代の中間に、奇跡的に生み出されたトゥーゲンハット邸の限りのない魅力は、少なくとも私にとっては、そこに示されたミースの矛盾、あるいはそのような矛盾を彼が「つくり出した」というそのことにこそ内在しているのである。(アブル総合計画事務所、atsushi@mpf.t.u-tokyo.ac.jp)

図版出典：Horáková Maurer, "Büfett Tugendhat", Edition Camera Austria



1955-1969年頃の〈トゥーゲンハット邸〉外観



オリジナルの状態として復元された外観(夜景)

ホンモノのニセモノ

ミースの建築にはいわゆる開口部がない。確かに窓のようなもの、というより窓と同じ働きをする部位はあるが、しかしそれでも「窓」はないのだ。このことは、いわゆるミース・スタイル(ガラスで覆われたがらんだ空間に数本の柱と非耐力壁が配置されるあれ)が確立される以前のごく初期の住宅の時代を除けば、ほとんどの作品についても言える特質である。すなわち「Mies Van der Rohe」とは「開口部なき建築家」の別名であるといつてよい。

「開口部がない」ということは、認識論的には「その地となるはずの壁もない」ということを意味する。確かに初期の「コンクリートのオフィスビルの計画」などには、まだ壁(と窓)の痕跡が見られるが、それでも窓につきものの「枠」という概念は葬り去られようとしている。おそらく、ル・コルビュジェの「横長の連続窓」からの影響があると思われるが、ル・コルビュジェの場合には、「壁」も「窓」も——紙切り細工のように「ペラペラ」ではあるが——まだそれぞれの地位が与えられており、持ち場を失うことはなかった。その「窓」に比べれば、ミースの「横長の連続窓」は、なんと重々しいことだろう。ここ

では、「壁」は、面的な性格よりも、その量塊をこそ主張するよう定義付けられている。このことは、ミースが「壁」という部位から面としての特性を剥ぎ取ろうとしていたか、あるいは「壁」に対してはそのような面的な特性を見い出さなかったか、のどちらかの証と読むこともできる。

「コンクリートのオフィスビルの計画」から「ガラスのスカイスクレイパー」までの飛距離は、遠そうで実はさほど遠くはないと考えた方がいいだろう。「ガラスのスカイスクレイパー」の外表面は、文字通りガラスによって発案されたものだが、一種類の材質から「ビル全体としての仮想の量塊」を構想したという点は全く共通している。ほとんど何のディテールもないラフなスケッチだけで判断するのは危険すぎるかもしれないが、この「ガラスのスカイスクレイパー」の表面は、残された模型写真を見るかぎり、バックマリオンにシール、あるいはシールのみの仕様で施工することが望まれていたと考えられる。ということは、外観的にはガラスのカタマリのようなものが構想されていたわけだが、同時にまたこの発案は「窓」を完全に抹殺する方法を彼に与えた。「壁」と「窓」による地と図の弁証法は、ここでは完全に止揚されている。要するに、「壁」と「窓」とが完全に同義語と化し、この時点で「壁」も「窓」も死滅させられる。かくして開口部は消滅する。が、それに代わって新たに「透明な仮空の面、あるいはヴォリューム」という、実体のない厄介な代物が、その副産物として生み出されたの

12Architects #12: Mies van der Rohe

ヤドカリはサバイバルナイフの夢を見るか?

三村大介・山口由美子

人間は家に住んでいる。当たり前のようにだが、これこそが他の動物と一線を画する所以ともいえる。確かに動物も巣に棲んでいる。彼らの家である巣は、自分たちの世界と外界を隔てる「壁」のようなものであり、外界とは自分の生命さえ脅かす食物連鎖、弱肉強食のことだ。そんな外界と自分たちの世界を隔てる薄い境界、フィルター。しかしそんな薄いフィルターの中であれば、そこは彼らにとっての唯一の安全圏なのだ。

ところが人間の場合、家を一步外に出た途端いきなり身を危険にさらされるということはない。なぜなら家の外も人間の世界だからだ。家族、町、都市……。人間は何重もの制度という殻に囲われ、守られて生きている。しかし、それでもなお、安全な人間の世界からさらに個人の世界を切り取ってまでして、人間は家に住む。そう、それはまるでヤドカリの殻。人間は社会という外界が過酷な環境かのように、硬質なヤドカリの殻の中に住んでいる。それがただの空っぽな空間を切り出しているに過ぎなくて

さて、ここで取り上げたふたつの「殻」。ひとつは巨匠ミースの〈クラウン・ホール〉、もうひとつはヘルツォーク&ド・ムーロンの〈ブーフエンホルツ・スポーツ・センター〉。両者の特徴は「殻」。つまり、がらんとした空っぽな空間をはらむ外皮を持っていること。しかしその殻、作られ方がかなり異なる。

ミースの場合、その内部空間はユニバーサル・スペースと呼ばれ、どのような機能にも対応できる空間であると理解される。しかし、それは同時に、誰のものでもなく、どこでもない建築であった。彼にとって最も重要なこと、それは「内部に何もない」ということだけ。彼はそんな純白の内部を獲得するために、社会性、地域性という外部の問題ばかりでなく、内部に介在してくるものは全て排除したのだ。柱であれ、壁であれ、それらを外部へ追いやることで世界を閉ざし、内部に普遍をつくり出そうとした。そして内包されるべき主体さえも。唯我独尊の空間。こうして外部に追放された要素たちによって形成された殻は、結局、柱は柱、鉄は鉄、ガラスはガラスでしかなく、それ以上の何の価値、意味を有し得ない。それらは、社会という外部において本当にただの殻=空でしかない。

一方、ヘルツォークの殻は、ミース同様、極めて単純な外形をしており、ミースの教えの「レス・イズ・モア」を忠実に守っているようにみえる。しかしそのシンプルな形態には多様な事柄、情報(無理矢理?)詰め込まれている。外装材でありながら開口部、ガラスでありながら断熱材、その建築の輪郭は外部の関係性の束を表出し、統合されている。それは単純かつ多様性のある合理的な方法であり、ミースの殻が排除、削除、断絶によるものとするならば、統合、調停、凝縮によるものと言えるであろう。

様々な潮の流れが渦巻く現代社会、ヤドカリが生きて延びていくのも容易なことでない。「サバイバルのための条件は、7つのナイフがそろったサバイバルナイフよりも、ひとつのナイフを7通りに使いこなすバイタリティだ」とは安部公房の言葉である。ミースとヘルツォーク、まさしく、その時代の寵児たるべき存在である彼らの殻は、もしこれに従うなら

ば、モノがモノとしてバラレる存在していたシンプルなミースの殻は、現代社会をサバイバルするために、徐々に多様性、多義性を兼ね備えて進化していったと理解できるのではないだろうか。何とも賢いヤドカリの処世術である。(東京工業大学坂本研究室)

図版出典: "El Croquis84", L. Hilberseimer, "Mies van der Rohe", Paul Theobald and Company



〈ブーフエンホルツ・スポーツ・センター〉



〈クラウン・ホール〉

である。ほとんど強迫神経症患者が見る夢の産物といってよい「透明な仮空の面、あるいはヴォリューム」は、明らかにミース自身が切望していたものであるにもかかわらず、ミースの建築を内部から喰いつぶしかかるようになる。ミースはこの厄介な代物が、自身の「妄想」の具現そのものであるということに、自分自身では気付かなかったのではないだろうか？ いずれにせよ、それ以降、バックマリオンは、あるときから外部に排出され、外観において1個のclear(=透明/明晰)なカタマリとして考案され続けた時代とは別れを告げ、この「妄想」は文字通り「内面化」する。

しばしばミースは、「ホンモノの」建築家とされる。ここでいう「ホンモノ」とは、「良き趣味」を体現する「玄人の建築家」、「モノの次元において」そのありかたに忠実な使徒としてふるまう「神の声の伝導者」というような意味合いであるが、上記のような流れで考えると、そうした考え方とは著しく違ったミース像が浮かび上がる。「妄想」を文字通りに「内面化」し始めたのは、渡米以降の「外国人・ミース」による仕事であるが、これらの仕事はなにか「セット」を思わせるところがある。というのも、尋常ではない天井高や、全垂直面が「採光部」であるにもかかわらず外部を見ることができないクラウンホール(ガラス)やコンベンションセンター(大理石)の計画などがそうである。あるいは巨大な基壇の上に置かれたガラスのハコ(ベルリン・ナショナルギャラリーとして実現された一連の計画)は、ステージ上と奈落

の関係にある(実際に、その内容もそのような2者の関係にある)。「セット」とは、現実的な何かの模倣であり模型であり、つまりは「ニセモノ」である。しかし考えようによっては、ミースはドイツ時代からそのような症候を見せている。必要以上に引き伸ばされた石の生肌を見せる非耐力壁ほど現実味に乏しいものはない。また、それらを成立させている仕口(納まり)が、過度にモノの事実関係を隠蔽している。ステージと奈落の関係は、トゥーゲンハット邸やバルセロナ・パビリオンでもすでに繰り返されていた。究極はクローラー・ミュラー邸の1/1の模型である。また、蛇足的ではあるが、現存する〈バルセロナ・パビリオン〉は、まぎれもなく「模型」である。ドイツ時代にまだかすかにあった「開口部」に見えていた風景も、実は「はめ込み合成」だったといえる。

昨年の暮れに起こったペルー日本大使公邸占拠事件の武力突入による解決をみるまでの裏舞台に関するドキュメンタリーが、先日NHKで放映されたが、その中には筆者の関心をそそる異様なものが映されていた。政府/軍の重要機密として、事件解決まで完全に極秘にされていたという軍の特別訓練施設は、なんと大使公邸を再現した1/1の「模型」であった。しかも丁寧に、軍が作った地下トンネルまでも再現していたのである。予定通り「現実がかった芝居」は完行された。(sora@tky0.attnet.or.jp)

12Architects #12: Mies van der Rohe

「カメラ」時代のミース

安田博道

建築を見て廻るときにいつも思うのだが、カメラという装置は鬱陶しく思うことがある。建物内部をあちこち見るのに、単にあの重量が鬱陶しく、レンズを覗くために要した時間というものが無駄に思えて鬱陶しい。例えば、ミースによる「フレキシビリティ」はフリースペースが建築の主題としてあるわけで、動き回って体感することでミース的な空間を解読できると思っていた。ただ、今回〈バルセロナ・パビリオン〉を写真に収めてその認識が少し変わった。それはカメラという「装置」が強いある「認識」が、ミースの建築と無関係ではなかったことによる。

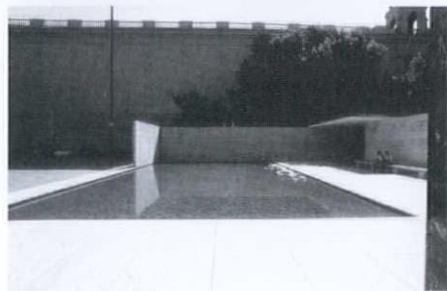
〈バルセロナ・パビリオン〉は、1986年に再建されたことや、ミースのヨーロッパ時代の最高傑作だったという理由で話題になり、その姿は「写真」によって知っていた。僕が撮った写真は、まずファサード「正面」から基壇と水平に浮かんだ屋根を横長にいっぱい収めたのを1枚。続いて中に入ると、カルベの彫刻を「正面」から1枚。ぐるっと回って中庭？に出て、池越しに「正面」壁を1枚。ところがよくよく考えてみると、無数にあるバルセロナ空間の中から、無意識的に自分の「思っていた」ミース的構図ばかりが選択されていた。そして、それがほとんど正確に建築学科で初めて描かれるあの一点透視図になっていることに気がついた。ここに、カメラがもたらした「認識の枠組み」が典型的に露出していたのだ。そして、それはミースの建築観とも多分に関係している。ではその「認識の枠組み」とはいったい何なのか？

ここで重要なのは次の2点。ひとつは、一点透視図法にも関係してくるのだが、カメラ(正しくはカメラオブスキュラ)が、ある「正確さ」を確立したことである。正確といってもいろいろあるが、ここでは、図学による記述の「正確さ」を指している。質の悪い広角レンズは、周囲にいくに従って魚眼レンズのようなゆがみが気になってくるが、高価なレンズではそれがない。歪みが不快なのは、僕たちが認識する世界が幾何学的透視図の世界に依拠しているからであり、高価なカメラはその忠実な再現マシンだからゆえに「高価」なのである。ミースによる「正確な」記述は、実はカメラという装置がもたらした認識論的な布置、つまり図学による正確さに依拠しているのである。事実、〈バルセロナ・パビリオン〉の平面、立面は、バースを描くとき最も典型的にその効果が現れる直交座標軸のなかで描かれている。

もうひとつは、写真が常に部分に分断された描写にも関わらず、それが「典型的」という理由で、その他全体を代表してしまうことだ。つまり、実際には連続した空間である〈バルセロナ・パビリオン〉は、いったんアングルが選択されることでその構図が特権的にミース的なものを代表してしまう。この、カメラの認識が形成されたことは、ミースによって語られた「フレキシブル」という言葉とその果たした効果にも繋がる。カメラの体験は、部分が全体を代表してしまうと言ったが、「フレキシブル」は、無数に存在する問題解決策の中から、彼にとって、もっとも効果的と思われる方法が選択されたわけであり、カメラの体験で言えばひとつのアングルが選択されたわけである。さらに、フレキシブルと言ったシンプルなアイデア(部分)が、全ての建築的解答を代表できるといった認識は、実はカメラの認識によって可能になったのだ。

ミースは、現代建築は最新のテクノロジーで対応

しなければならないと言ったが、当時最新のテクノロジー(カメラ)がもたらした「認識の枠組み」においてもいう意味で、二重に対応していたと言わなければならない。(ワークステーション、yasuda@yyy.or.jp)



撮影＝筆者

特集

- 1●5 葉 祥栄：カリステニクス 柔らかい建築のための12の柔軟体操
 1●6 現象の建築 葉 祥栄
 1●11 自然から新たな生の躍動へ、葉祥栄の軌跡
 グレグ・リン 訳＝松畑 強
 1●16 1：応答する／ふるさとパレス ギャラクシー富山、小田原市総合体育館 プロポーザル、WXYZチェア、0°-90、水の建築展
 1●30 2：かぶせるかひっぱる／内住コミュニティセンター、グラスステーション
 1●40 3：溶解して曲がりくねる／筑穂町高齢者生活福祉センターおよび内野児童館
 1●48 4：身構える／金田町ふれあい塾、三角港フェリーターミナル 海のピラミッド、小国町隣保館、'89海と島の博覧会・広島 メインステージ、筑穂町高齢者生活福祉センター及び内野児童館、他
 1●58 5：歪める／老人保健施設サンダイヤル、ミズレイコTOKYO、筑穂町福祉総合エリア
 1●68 6：浮遊して滑空する／コーヒーショップ インゴット、木下クリニック、野外コンサート場 アスペクタ、小国町交通センター、太閤山ランド展望塔 プロスペクタ、ニューロビン カルチャーセンター、他
 1●84 7：揺らす／海と空の間のガラスの家、ワキタハイテク本社事務所、西部ガスミュージアム 自然現象美術館、松下クリニック
 1●96 8：上下動と旋回／三角港フェリーターミナル 海のピラミッド、太閤山ランド展望塔 プロスペクタ、ラフォーレミュージアム赤坂、ラフォーレ原宿小倉店、岩田屋本部
 1●107 9：潤わせる／太閤山ランド展望塔 プロスペクタ、嵐山ゴルフ倶楽部、'89海と島の博覧会広島 ランドスケーピング基本計画、唐津ゴルフ倶楽部、アクト6
 1●118 10：軽くする 明るくする／時計の家、光格子の家、光の中の6つのキューブ、光十字の家、江上クリニック、アクト6、パビリオン、旭印刷、ジーエータップ、ワイヤレスランプ、ミズレイコ銀座店、他
 1●142 11：緩衝する／小国町民体育館、小国町交通センター、コーヒーショップ インゴット
 1●150 12：逆立ちする／大黒ピアシエティ、横浜アーバンリング展プロポーザル、福岡県県庁跡地 アジアパシフィックゲートウェイプラザプロポーザル、六本木六丁目地区再開発計画プロポーザル、他
 1●164 葉祥栄にとってのリアリティ 土居義岳
 1●166 光の恐怖 飯島洋一
 1●168 建築のリアリティ 松畑 強
 1●170 作品リスト
- 2●5 特集1：木を生かした架構と空間
 2●6 素材が生きる「木の空間」に向けて 今川憲英
 2●10 カルロ・バウムシュラーガー&ディートマール・エベルレ、マルセル・メイリ&マルクス・ペーター、マイケル・ホプキンス&パートナーズ、メカノ、バート・プリンス、ベルマン&ペドロリーニ、エリウス・ナッター、ステイブ・エンリッヒ、アレナ・シュラーム・コーヴァー、サマン&アソシエ
 2●38 木造シェル3例 クラウス・リンクヴィッツ 訳＝川口 衛
 2●40 木のリカバリング・デザインについて 今川憲英
 2●42 益子義弘+浅野 崇+益子アトリエ、石井和紘建築研究所、柴田知彦+柴田いづみ SKM設計計画事務所、伊藤邦明+建築研究所MAIS、内井昭蔵+内井昭蔵建築設計事務所、高崎正治、川口英俊+アーキテクト・キューブ、古橋建築事務所、久米+鹿島+奥村+日産+飯島+高木JV、伊東豊雄建築設計事務所+竹中工務店
 2●62 木造の大空間建築 播 繁+尾崎 勝
 2●66 新木造ジョイント考 中田捷夫
 2●70 木の構造——日本と西欧 川口 衛

- 2●77 特集2：アジアを熱くする新世代建築家たち IAA国際会議より
 2●78 「アジア」は「建築」を超えられるか／村松 伸、アジアの若手建築家の台頭／古市徹雄、沸き立つアジアのナベ／古谷誠章、高層ビルと象使いの少年／渡辺真理、文化的特質という前提／季 鐵男 訳＝櫻井義夫、脱・制度への挑戦／アン・ジン・ワー 訳＝櫻井義夫
 2●80 アン・ジン・ワー、承孝相、ソリ・オードン、高橋 誠一、チラコーン・プラソンキット、ケン・ヤング、R. スンダラム、李祖原、プラババット・ニョム、タン・ケイ・ニー、シン・トンフー、アナスタシア・スリスチャワティ、フランク・リング・リー・ユアット、ツイー・カイ、ロッコ・センキー・イム、エッジ／ゲアリー・チャン+マイケル・チャン、季鐵男、ウルピアーノ・P. イグナシオ、張永和、ジェラール・ダ・クンハ、グエン・チュック・ルーエン
 3●5 ミニマル・スペース・アーキテクチュア
 3●6 マイ・ミニマリズム 丸山洋志
 3●8 ミニマリズム・ミニマリズム 櫻井義夫
 3●13 ジョン・ポーソン自邸、ジグソー、ロスマン・アパートメント、GLASS HOUSE、ISOBE STUDIO & RESIDENCE、日本橋の家、下鴨の家、NOSハウス、F4
 3●23 ジョン・ポーソンインタビュー インタビュアー：丸山洋志
 3●29 小川晋一インタビュー インタビュアー：丸山洋志
 3●39 岸 和郎インタビュー インタビュアー：丸山洋志
 3●45 石田敏明インタビュー インタビュアー：丸山洋志
 3●49 近代日本の「ミニマル」的概念について 松畑 強
 3●53 記憶と忘却の狭間で モートン・フェルドマンのミニマルな世界 柿沼敏江
 ミニマリズムとアーバンイズム Donald Judd in Marfa 大島哲蔵
 4●5 拡張するデジタル・デザイン
 4●6 時代をつき動かす軸対立的構図の溶解 山口重之
 4●8 第1章 サイバースペースの概念
 田島則行、ディラー&スコーフ・ディオ、P. シューニングとディプロマ・ユニット3、ジェフリー・ショウ、藤幡正樹、マコス・ノヴァック、浜田邦裕、マイケル・ベネディクト
 4●42 鼎談 ヴァーチャル・スペースの価値と意味
 浜田邦裕+濱野慶彦+岡 正明
 4●46 第2章 記述される建築・都市
 J. フレーザーとユニット11、山口 隆、渡辺 誠、デヴィッド・ブレア、入江経一+A. シュナイダー、久保田晃弘
 4●64 進化論的形態生成について 山口重之
 4●80 ヴァーチャルとフィジカルを行き交う機械：1
 多次元可視化装置と情報潜望鏡
 4●82 ヴァーチャルとフィジカルを行き交う機械：2
 3次元ソリッドシステム積層造形法
 4●86 第3章 電子メディアへ拡張する都市
 山本精一、北野宏明、坂村 健、奥出直人、桜谷慎一、両角光男、山口重之、仲 隆介、磯崎 新アトリエ、宇野 求 岡河 貢、米田雅子
 4●120 都市論とメディア論の政略結婚 桂 英史
 4●122 ヴァーチャル・スペース：此処ではない何処かの建設にむけて
 パラボリック・ラボラトリ
 4●124 E-メール対談：拡張する実空間——ニール・ディナーリ展での試み
 岡 正明+層本純一
 4●126 第4章 デザイン・スキルの拡張
 佐々木睦朗構造計画研究所、吉松秀樹／アーキプロ、古谷誠章+早稲田大学古谷研究室+スタジオ・ナスカ、(株)遠藤照明、シーラカンズ、プラス・ワン、プランテック、諸岡宜永、鹿島建設設計・エンジニアリング事業部、大成建設、竹中工務店
 5●5 アフラ+トビア・スカルバと「ベネトン」 編集・取材協力＝豊田博之
 5●6 ニット工場およびオフィス社屋、ヴィラ・ミネリ本館の修復および穀物倉庫群の改修、ニット工場およびオフィス社屋の用途変更のための増改築、カーザ・ベネトン、バラツェット・カラジョーレの改修、ヴィラ・リアの改修、生産地域「超自動化倉庫」、生産地域「毛織物工場」、生産地域「ジーンズ・上着工場」、ベネトンショップコンセプト、ユナイテッド・カラーズ・オブ・ベネトン・ロンドン、ユナイテッド・カラー

- ズ・
オブ・ベネトン・東京、マイ・マーケット、メルチェリア、シスレー、
東京、012（ファーストヴァージョン）、012（セカンドヴァージョン）、
ジーンズ・ウエスト、トマト、ティップ・タップ
- 5●28 トビア・スカルバ インタビュー ベネトンとの仕事について
5●30 ルチアーノ・ベネトン会長一問一答 訳＝櫻井義夫
5●47 現代の建築家とパトロン 豊田博之
- 6●5 柳澤孝彦：劇場の空間構成
6●6 新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、埼玉
県立近代文学館（仮称）および桶川市民ホール（仮称）
6●25 都市と劇場のはざま 小倉善明
6●34 ウィーンの平面、ベルリンの断面 本杉省三
6●35 対談：身体性から劇場を語る——新国立劇場の設計コンセプトを中心
に 川向正人×柳澤孝彦
6●45 時が育む文化の場 川村純一
6●47 音楽文化と劇場建築 長友宗茂
6●59 空間のパラメーター：
音のデザイン、光のデザイン、地勢のデザイン、素材のデザイン
- 7●5 加速都市：香港1997
7●6 「香港ゴシック」と「加速都市」 村松伸
7●13 速度の記述 18人の描く香港の可能性
コンテキスト／アラン・チャン、流動性／クライン・ダイサム・アーキテ
クチュア、km/h／江頭 慎、イリーガル／マサイアス・ウー、エッジ／
マイケル・チャン＋ゲーリー・チャン／Edge、帰る／浅川 敏、住宅／木
下 光＋テン・ティンチャイ、密度／エルマン・チュウ、スピード・スト
ラクチュア／ウォーレス・チャン、居住／松原弘典、拡張／貝島桃代、
ウォン・カーウアイ＋速度／アクバー・アバス、ダイナミック／タナカ
ノリユキ、デジタル＋アナログ／アaron・タン、コネクション／チ
ー・ティエナン、交通／曲調英邦、情報／タイクーン・グラフィックス、
上海／ロウ・ツォンショウ
7●16 インタビュー：アラン・チャン デザインの中の香港
インタビュアー：村松伸＋木下 光
7●24 香港の境界 マイケル・チャン
7●30 住宅とアクティビティ 木下 光
7●49 香港から浮かび上がる未来 小嶋一浩
7●51 速度の設計者達：MTRC、アラップ・アソシエイツ、ロッコ・デザイン・
パートナーズ、テリー・ファレル＆パートナーズ、OMA Asia、オブ・ア
ラップ＆パートナーズ
7●59 香港で通用するデザインの意味 木下 光
7●61 空港都市・香港 21世紀のためのブループリント 松田直則
巨利を生む埋め立て事業、付加価値を生む空間、万能のディベロッパー、
空港都市
- 8●5 R. ヴェンチュリー＋D. スコット・ブラウン：90年代の作品
8●6 エレクトロニクス・エイジの建築——過去10年の我々の建築を振り返って
ロバート・ヴェンチュリー 訳＝安山宣之
8●10 建築の意味：R. ヴェンチュリー論 香山壽夫
8●14 メルパルク日光霧降 写真＝堀内広治
8●38 キリフリコウゲンで学ぶこと、は？ 曾我部昌史
8●40 90年代作品 文＝香山壽夫
解説＝ヴェンチュリー、スコット・ブラウン・アンド・アソシエイツ
シアトル美術館、ナショナル・ギャラリー・セインズベリー館、サンデ
イエゴ現代美術館増改築、フィラデルフィア・オーケストラ・ホール計
画、チルドレン・ミュージアム、バード大学チャールズ・P. スティーブ
ンソン・Jr.図書館増築、デラウェア大学トラバント学生センター、ハー
バード大学メモリアルホール保存改修、ホワイトホール・フェリーター
ミナル計画、ペンシルバニア大学パレルマン・クアドラング学生セン
ター、オートガロンヌ県庁舎
8●84 ヴェンチュリーの軌跡：ローマ、ラスベガス、ロンドン、……
安山宣之
- 9●5 駅空間の新局面
9●6 日本の駅デザインの変遷と現況 宮林敬幸
- 9●7 駅空間の構造的再編の時代 窪田陽一
9●8 JR西日本美川駅美川コミュニティプラザ、JR東日本磐城駅、ふるさと
と銀河線本別町コミュニティステーション・ステラプラザ、JR東日本
大曲駅、JR東日本矢吹駅、JR東日本田沢湖駅、JR東日本鳴子駅、JR九
州由布院駅、野岩鉄道川治温泉駅、JR九州西鹿児島駅、東葉高速線船
橋日大前駅西口、船橋日大前駅東口、Min Mプロジェクト 博物館動
物園駅の進化と再生
9●20 今後の駅舎建設に向けて 前田厚雄
9●47 駅は駅舎ではなく都市である 次世代の駅空間を求めて 伊澤 岬
9●53 古く懐かしい駅々 櫻庭孝男
9●57 京都駅ビル 原 広司＋アトリエ・ファイ建築研究所 写真＝大野 繁
9●75 コンコースをアーバン化する 新京都駅について 川崎 清
9●80 対談：駅空間と公共性 京都駅ビルの設計コンセプトを中心に
横尾忠則×原 広司
- 10●5 ガラス建築
10●6 座談会：時流は透明性へ向かうか 伊東豊雄×難波和彦×今川憲英
10●13 Part 1 新たなガラス建築の様相 ヘルツォーク & ド・ムーロン、ベン
テム・クラウエル・アーヒテクテン、スタンリー・サイトウィッツ、
オブイス、アネット・ジゴン＋マイク・グイヤー、ファン・ベルケル
& ボイス、サー・ノーマン・フォスター・アンド・パートナーズ、ヘイ
ッキネン・アンド・コモネン・アーキテクツ、シェ・モレル・アトリ
エ、ニコラス・グリムショー & パートナーズ、オディル・デック & ブ
ノ・コルネット、ギュンター・ザンブ・ケルプ & ユリウス・クラウス／
アルノ・ブランドルファー、マーフィー／ヤーン、ジェームズ・カ
ーペンター・デザイン・アソシエイツ、レンゾ・ピアノ・ワークショ
ップ、小川晋一都市建築設計事務所、村上徹建築設計事務所、隈研吾
建築都市設計事務所、日建設計、谷口建築設計研究所、妹島和世＋西
澤立衛／妹島和世建築設計事務所、伊東豊雄建築設計事務所
10●113 ガラス建築——そのロマンス、ネイチャー、ファンタジーとテクノロ
ジー 安藤正雄
10●121 Part 2 ガラス建築の表現と技術 フォスター・アソシエイツ、日建設
計、葉 祥栄、日本設計、ジョンソン／バーザー・アーキテクツ、ニコラ
ス・グリムショー・アンド・パートナーズ、ベンテム・クラウエル・アー
ヒテクテン、ジャン・ヌーヴェル、I. M. ペイ・アンド・パートナーズ
ズ、イアン・リッチー・アーキテクツ、フォン・ゲルカン・マルク・ア
ンド・パートナーズ
10●145 インタビュー：ガラスメーカー3社に聞く
鈴木俊博、賀井伸一郎、伊勢谷三郎
10●154 Glass Housing——ガラスをテーマにした集合住宅の可能性
小川晋一都市建築設計事務所
10●160 光とガラスの架構とデザイン 今川憲英＋TIS & Partners
10●166 Glass Enclosure——シーザー・ペリの国立国際美術館計画 山下秀之
10●172 テクニカル・ノート 池内清治
10●176 ガラス空間が手づくりだった頃 下村純一
10●181 ガラス建築年表
- 11●5 隈研吾：デジタル・ガーデニング
11●6 デジタル・ガーデニング 隈 研吾
11●10 第1章 慰霊公園、北上運河資料館、ストーンプラザ：那須石蔵博物館、
谷ノスラット、水ノスラット、森ノスラット、淡路サービス・エリア
11●46 点描画法 グレグ・リン
11●48 第2章 森舞台：登米町伝統芸能伝承館、水ノガラス、川ノフィルター、
ガラスノ影：レイクウッドゴルフクラブ富岡コース、亀老山展望台、
枹原町地域交流施設
11●88 透明な死 飯島洋一
11●96 第3章 エコ・パーティクル、ガラスネット：ミラノ・トリエンナーレ
1996展作品、愛知万博2005、国立国会図書館関西館建築設計競技案、
海ノ都市、グラストワー、日本美術館基本構想、長岡文化創造フォー
ラム設計競技案、前橋駅北口整備基本構想、米沢公立大学基本構想、
シンプルガーデン、中原中也記念館設計競技案
11●122 対談：建築の透明性：建築と環境の新たな関係 横 文彦×隈 研吾
11●126 第4章 ヴェニス・ビエンナーレ日本館、オートマチック・ガーデン、
転送の湿度：「トボスの復権」展2005展作品

- 12●5 SDレビュー1997
- 12●6 審査員総評 香山壽夫、渡辺邦夫、岸 和郎、團 紀彦
- 12●10 金井謙介+西田勇人 法事の家、今村雅樹+佐久間菜穂子/今村雅樹アーキテクト T・H (奈良の家)、東日本旅客鉄道株式会社+JRE設計+鈴木エドワード建築設計事務所 さいたま新都心駅 (仮称)、佐藤孝秋/フォレストシップ 台北市迪化街歴史地区のまちづくりデザイン、タカマヨシコ 考えごとの家、建築研究室高安重+事務所+佐久間達也+橋爪宏直+重富博之 海上ばなな (UNAKAMIBANANA)、浅野 静/エトスアソシエイツ+新井清一/アライアーキテクト 徳島の家 (林邸)、藤本壮介 D-HOSPITAL、松本 明 I・HOUSE、大野 勝+境静也+鈴岩崇/佐藤総合計画 佐賀県立宇宙科学館 (仮称)、金子泰洋 M邸、松澤 穰 衛の家、川人洋志 Triplet、西沢立衛 ウィークエンドハウス、三浦明彦+安田幸一+神成 健+北川啓一/日建設計 ポーラ箱根美術館
- 12●52 クールとホット 木村博昭
- 12●53 講評
- 12●56 経過報告
- 作品、その他
- 3●65 東京国際フォーラム 写真=堀内広治、解説=佐藤尚巳
- 3●86 ラファエル・ヴィニョリと私 プロジェクトに参加して 椎名政夫
- 3●87 照明計画 井坂幸恵
- 3●90 ガラスホール、ガラスオブジェクト+有楽町キャノピー、大窓+大エスカレーター、ホールA、Cキャノピー、展示ホール、V字柱、Gギャラリー、インフォメーション・ブース、家具、風景としての現場記録
- 3●102 東京国際フォーラムを見て 柳澤孝彦
- 3●103 建築と美術の格差、あるいは逆転した状況 樋口正一郎
- 4●161 「世界の中のル・コルビュジェ——コルビュジェと日本」国際シンポジウムより
- 4●161 「雲の影」たち 越後島研一
- 4●168 私の中のル・コルビュジェ 阪田誠造
- 5●65 都市ピサとマッシモ・カルマッシの仕事
- 5●66 記憶と現代建築 マッシモ・カルマッシ 訳=黒田泰介
- 5●68 歴史的都市ピサの近代化に挑戦した男 野口昌夫
- 5●70 ピサの都市形成史と歴史的建築 黒田泰介
- 5●73 サン・ミケーレ・イン・ボルゴ地区の再生計画、サン・ピエトロ・ア・グラードの公共墓地拡張計画、チザネッロの集合住宅、ヴェルディ劇場のレストア、ムーティ邸、ピエロツィ邸、ヴィルゴ計画
- 5●87 過去と現代が対話するイタリアの都市づくり 陣内秀信
- 6●81 装飾を排したフォルム・デザイン 「スウェーデンのグッドデザイン」展より
イボンス・ストレム、ピーア・トーネル、ピエテル・ブランド、M. クラエソン E. コイビスト O. ルーネ、ヨーン・カンデル、J. ホエッシュム P. ヒロットローレンセン、M. ヤンソン G. ゴンザレス M. エングブロウ、C. ヨーラン・クラフォード H. ベリクヴィスト、エルゴノミ・デザイングルッペン、ビルギッタ・ハーン、レーナ・ラフォールト、ビルギッタ・ハーン、アンネ・ニルソン、レーナ・ベリストレム、ビョーム・ダルストレム、ボリエ・リンダウ、グニッラ・アラード、アンキ・グネイブ
- 6●82 スウェーデンのデザイン 飾りより実を ウルフ・ベックマン
- 6●92 スウェーデンのグッドデザイン展が教えるもの 川上信二
- 8●93 新たな居住空間への挑戦 岐阜県北方住宅プロジェクト
- 8●94 公共住宅設計の新たなアプローチを求めて 磯崎 新
- 8●96 岐阜北方住宅プロジェクトの経緯 佐藤健司
- 8●98 高橋晶子、クリスティン・ホーレイ、妹島和世、エリザベス・ディラー、マーサ・シュワルツ、福澤エミ、宮脇愛子
- 8●115 メール・ショービニストの妄言 松永安光
- 9●109 バラ色のユートピア ワイセンホーフ・ジードルン住宅展より 長谷川 章

- 12●57 光と空間の色彩——チェコのガラスアーティスト
- 12●58 ヴァーツラフ・チグレル、スタニスラフ・リベンスキー&ヤロスラヴァ・ブリフtova、ヤロミール・リパーク、ギゼラ・シャボーコヴァ、ダナ・ザメチニコヴァ、マリアン・カレル
- 12●63 チェコのガラス芸術 水田順子
- 12●79 建築におけるガラス マリアン・カレル 訳=平野清美
- 12●80 空間とガラスのコラボレーション 鈴木崇英

連載：apple tomology トムの時空形象学 戸村 浩=文

- 1●174 16. STAIR CUBEとCROSS CUBE
- 2●102 17. COLOR MAGIC SQUARE
- 3●62 18. 河図と洛書
- 4●170 19. 魔平面
- 5●94 20. COLOR MAGIC CUBE
- 6●98 21. 100色のタイルを均一に貼るには
- 7●86 22. 完全平面
- 8●90 23. 躍動するポップ・マリー
- 9●90 最終回 MOVING DIMENSION

照明探偵団：連続実践講座レポート 葛西玲子/LPA

- 1●178 10. 景色を創る?——照明デザインってなんだろう
- 2●110 11. 光ではなく影を——地下世界へのお誘い
- 3●106 12. 仮想現実の光——これからの「超」自然光

連載：サイバートーク 電子メディアのフロンティア

- 1●181 1. 創造環境としてのデジタル・スタジオ 渡邊明子
- 2●105 2. 都市としてのネットワーク/ネットワークとしての都市 田島則行
- 3●109 3. リアルとヴァーチャルとドラッグと——電子的身体の拡張 仲 隆介
- 4●173 4. 変貌する境界——電子的身体の拡張 小林 敦
- 5●97 5. SOHOワールドのメガインパクト 馬場正尊
- 6●101 6. 「つながり」のまちづくり 石原弘明
- 7●89 7. (最終回) ヴァーチャルリアリティと建築 岡崎泰之

連載：世界の現代美術館探訪——美術館は生まれ変わる

- 7●104 1. 「コンテナ・コンテンツ」問題 渡辺真理
- 8●121 2. モノの美術館から空間の美術館へ 太田泰人
- 9●107 3. 複合された美術館空間 水沢 勉
- 10●189 4. 200年後の大改造 松岡智子
- 11●137 5. パーマネント・インスタレーション 渡辺真理
- 12●97 6. 情報と文化と工場の20年 太田泰人

隔月連載：ポーランドのアヴァンギャルド 長谷川 章

- 5●101 1. ハンスベルツィヒの工場建築 長谷川 章
ブルーノ・タウトの幻の田園都市 マンフレッド・シュパイデル
- 7●93 2. プレスラウのドイツ近代建築 長谷川 章
マックス・ベルクの高層建築プロジェクト イエジ・イルコシュ
- 9●93 3. プレスラウ美術工芸アカデミー ベトラ・ヘルシャー
- 11●145 4. エーリッヒ・メンデルゾーンの百貨店建築 プレスラウにおけるドイツ工作連盟 長谷川 章
- 12●83 5. マックス・ベルクの〈世紀のホール〉の誕生とその背景 長谷川 章
表現者マックス・ベルクのインスピレーション イエジ・イルコシュ

隔月連載：ネットワークの極意 伊藤公文

- 6●105 その1. オンラインネットワークの理想と現実
- 8●117 その2. 交流のネットワーク
- 10●197 その3. 同世代建築家による発信のネットワーク
- 隔月連載：ネットワークの極意
- 12●93 その4. (最終回) 建物保存・活用のネットワーク

海外情報リミックス：12Arciteicts

- 1●193 1. OMA
- 2●121 2. Peter Zumthor
- 3●121 3. Adriaan Geuze / West 8

- 3●185 4. 伊東豊雄
5●113 5. Archigram
6●119 6. Enric Miralles
7●125 7. Jean Nouvel
8●135 8. Robert Venturi
9●119 9. Philippe Starck
10●211 10. R. Buckminster Fuller
11●189 11. Glehn Murcutt
12●117 12. (最終回) Mies van der Rohe

書評

- 1●188 建築の前夜——前川國男文集
前川國男=著 而立出版 野沢正光=評
- 2●114 カメラマンからカワラマンへ
山田脩二=著 筑摩書房 富田玲子=評
建築意匠講義
香山壽夫=著 東京大学出版会 林昌二=評
数寄屋の美学——待庵から金属の茶屋
出江 寛=著 鹿島出版会 井上章一=評
- 3●114 映画の中の現代建築
飯島洋一=著 彰国社 鶴沢 隆=評
エーロ・サーリネン
穂積信夫=著 鹿島出版会 香山壽夫=評
- 4●180 海を渡った日本人建築家
西澤泰彦=著 彰国社 布野修司=評
「建設業マルチメディア革命——大競争時代のリバウリング戦略」
清水建設アーバンニューウェイブ研究会=編 長谷川文雄=監修
清文社 庄子幹夫=評
- 5●110 デンマークの椅子
織田憲嗣=著 光琳社 羽原康郎=評
ピーター・ライス自伝——あるエンジニアの夢みたこと
ピーター・ライス=著 岡部恵明=監訳 太田佳代子+滝口範子=訳
渡辺邦夫=評
- 6●112 劇場
S. テイドワース=著 白川宣力+石川敏男=訳 早稲田大学出版部
清水裕之=評
住まい方の実践——ある建築家の仕事と暮らし
渡辺武信=著 中央公論社 中村好文=評
- 7●114 生きている住まい——東南アジア建築人類学
ロクサーナ・ウォータリン=著 布野修司=監訳 学芸出版社
八木幸二=評
小建築論——または生活・環境構成論への試み
田中 喬=著 ナカニシヤ出版 松畑 強=評
- 8●130 建築と庭——西澤文隆「実測図」集
西澤文隆実測図集刊行委員会=編 建築資料研究社 宮脇 檀=評
風土・地域・身体と建築思考
川向正人=著 日刊建設通信新聞社 隈 研吾=評
- 9●114 建築の詩人 カルロ・スカルバ
斎藤 裕=著 TOTO出版 長尾重武=評
言葉と建築——建築批評の史的地平と諸概念
土居義岳=著 建築技術社 田中 純=評
- 10●202 見えない庭——アメリカン・ランドスケープのモダニズムを求めて
ピーター・ウォーカー+メラニー・サイモ=著
佐々木葉二+宮城俊作=訳 鹿島出版会 押野見邦英=評
大図解九龍城
九龍城探検隊=著 寺澤一美=絵 可見弘明=監修 岩波書店
柿本照夫=評
- 11●154 建築の地球学
石井和紘=著 TOTO出版 長谷川文雄=評
テレンス・コンラン デザインを語る
テレンス・コンラン=著 リビング・デザインセンター 柏木 博=評
- 12●106 ケース・ステディ・ハウス
岸和郎=著 植田実=監修 住まいの図書館出版局 佐藤俊郎=評
空間へ、建築の解体、手法が
磯崎 新=著 鹿島出版会 石山修武=評

ニュース

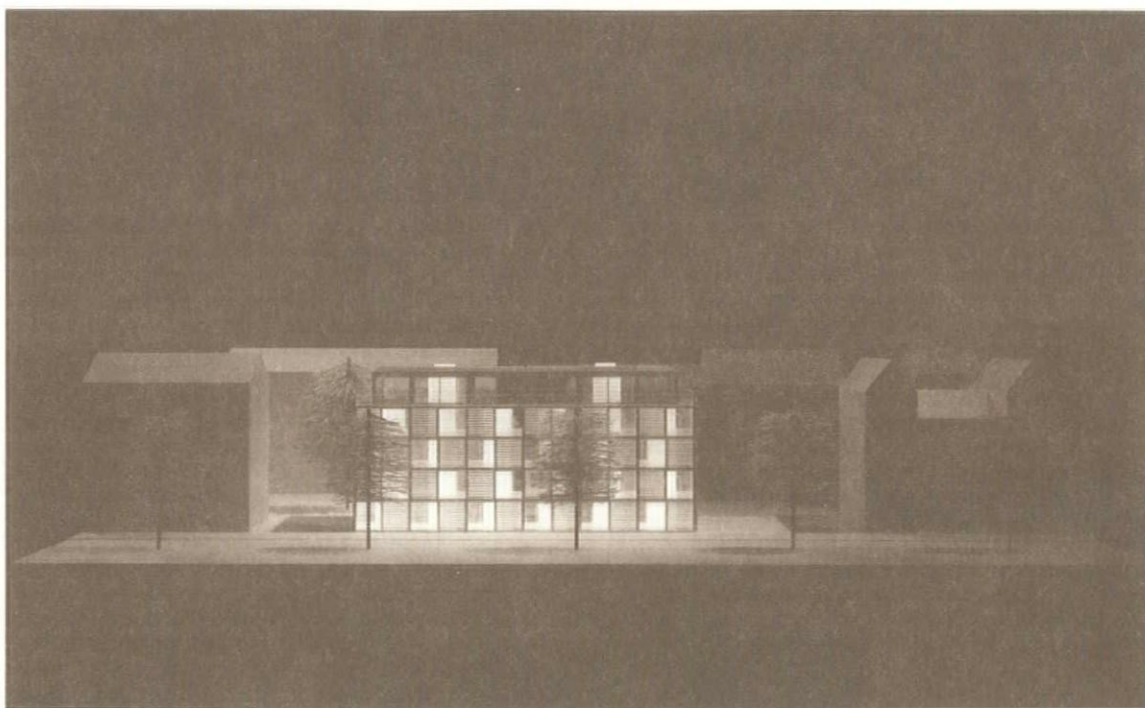
- 1●177 上海からのメッセージ——「上海国際住宅会議2000」に参加して
上野 武
- 5●92 クレーン再生電話ボックス 岡河 貢
- 5●109 第2回リビングデザイン賞「自分で組み立てられる家」グランプリ案：
「TUBE-HOUSE」 松永英伸+棚橋国年彦+金子友美
- 6●114 NTTインターコミュニケーション・センターオープン
- 7●121 パッケージング・リンケージシステム
- 11●159 下北半島に誕生したオリジナルフィンランド・サウナ——東通村ログ
ハウス建設ワークショップ 菊池 誠
- 11●160 建築家とクライアントの橋渡し——資生堂空間プロデュース事業

展覧会レポート

- 1●187 アンドロジナスはメディチ家の夢を見るか——ビエンナーレ・ディ・
フィレンツェ 韓 亜由美
- 2●114 顕在化するアンダーワールド——デヴィッド・リンチ展「DREAMS」
より 磯村昌司
- 3●116 ミステリアスな「圧縮屏風」と生涯年譜
「フランク・ロイド・ライトと日本」展より ワシオ トシヒコ
- 7●118 「都市の詩学」写真展によせて エス・チャング
- 9●117 ジャスパー・ジョーンズ展より
- 10●207 アートまたはゲーム、エネミー・ゼロ展——飯野賢治の世界を見て
岩下 暢男
- 11●163 チャーミングな形と色 エットーレ・ソットサスUnspoken Architecture
展より
- 11●164 ワールドプロセッサー'97——インゴ・ギュンター展
- 11●166 「統一の美」との格闘を演じた建築家谷口吉郎——谷口吉郎展
奥山信一
- 11●169 アルフレッド・ステイグリッツふたつの展覧会
- 11●170 リチャード・プリンス展——Cow boy and Girl Friends 中込 順
- 11●173 アアルトを消化したフィンランド建築のセンス——アアルト生誕100周
年を前にした9つのイベント 植林麻衣
- 11●177 近代エンジニアリング史のダイナミズム——エンジニアリングの芸術
展 吉良森子
- 11●182 「OR」——ダムタイプ=「物言わぬ様式」と明滅する身体 佳手英美
- 12●109 第5回ジャパン・アートスカラシップ グランプリ作品発表展覧会
松永英伸
- 12●110 KASNET——京都建築大学ネットワークのシンポジウムとワークショップ
池上俊郎、新井清一
- 12●112 「風景」の溶解へ——モイセン・モスタファヴィ氏との対話をめぐって
花田和幸
- 12●114 ゴリー・メモリアル・コンペ

Metropolitan Library

- 1●188 橋爪紳也
- 2●114 高島直之
- 3●114 難波和彦
- 4●180 橋爪紳也
- 5●110 高島直之
- 6●112 難波和彦
- 7●114 橋爪紳也
- 8●130 高島直之
- 9●114 橋爪紳也
- 10●202 難波和彦
- 11●202 高島直之
- 12● 難波和彦



96年鹿島賞受賞作品 ユストス・ビザール+ペーター・ルーゲ (Haus Sonne)

9801

特集

SDレビューの15年 SD Review 1982～1996

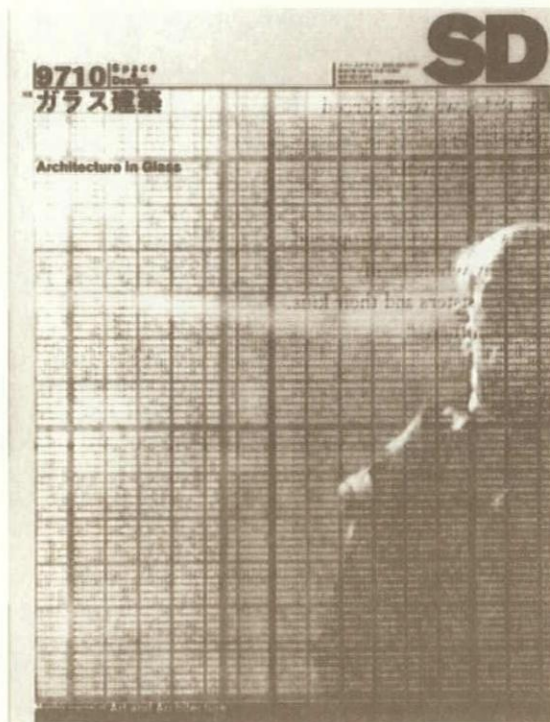
1982年に第1回SDレビューを開催して以来、今年で16年目を迎えた。その間の入選者数は延べ271人、審査員は30人を数えた。初期の各回作品応募数は100に満たなかったが、徐々に増え続け、ここ数年では200～230の間で定着したようだ。また入選者の顔ぶれも多彩で、初期は第一線で活躍中の建築家が大勢を占めていたが、応募総数の増加に伴い若手建築家たちが登場し、SDレビューも若手建築家の登龍門の色合いが出てきたとも言える。本特集は、こうしたSDレビューの15年を一挙に振り返り、実現作を検証し、建築家・建築界との関わりやその意義などを再確認し、今後の方向性をも探ろうとするものである。

文＝横文彦、原広司、飯島洋一、水野一郎、中筋修、奥保多聞

座談会＝元倉眞琴×鈴木了二×栗生明×小嶋一浩



82年SDレビュー第1回の会場風景



9710

特集

ガラス建築

地震国である日本では、ガラスを多用する建築は生まれにくかった。しかし近年、外国のガラス構法、技術の導入に伴い、日本でもガラスを積極的に用いた建築が増え、ひとつのムーヴメントにもなった感がある。本特集では、ガラスの透明性だけではなく、光学的特性や構造的特性など、幅広いガラスの性質を建築に取り入れた作品を紹介し、ガラス建築の今日性と可能性を探る。

作品＝葛西臨海公園展望広場レストハウス／谷口吉生、ホテルP／伊東豊雄、水・ガラス／隈研吾、コナミ那須研修所／日建設計、オフィスD／村上徹、熊野古道なかへち美術館／妹島和世・西沢立衛、ヴィンタートゥア美術館の増築／ジゴン・アンド・グイヤー、ペンテム・ハウス／ペンテム・クラウエル・アーキテクテン、アコム／ベン・ファン・ベルケル、ネアンデルタール美術館／ギンター・ザンブ・ケルプ、ホテル・ケンピンスキー／マーフィー・ヤーン、西部市民銀行オフィス／オディル・デック&ブノ・コルネット、他、23作品

文＝難波和彦、今川憲英、安藤正雄、小川晋一、山下秀之、下村純一、他

座談会：伊東豊雄×難波和彦×今川憲英

ガラスメーカー3社へのインタビュー

インタビュー＝横田輝生

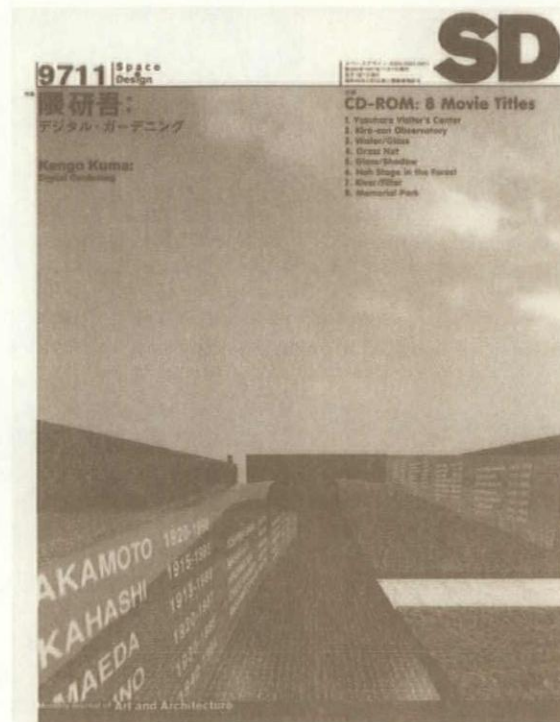
ガラス建築年表

短期隔月連載：ネットワークの極意3／伊藤公文

連載：世界の現代美術館探訪4／松岡智子

連載：海外建築情報リミックス：12 Architects #10「バックミンスター・フラー」

特別定価＝3,000円／本体2,857円



9711

特集

隈研吾：デジタル・ガーデニング

隈研吾はポストモダン以降の建築の言説をアクティブに続けてきた。1986年の『10宅論』（トーソー出版）をはじめ、1989年の対談集『グッドバイ・ポストモダン』（鹿島出版会）、1994年にはベストセラー『新・建築入門』（ちくま新書）他、2冊の書籍を著し、さまざまな議論を呼んだ脱構築的建築作品も残された。そして近年、90年代後半に至って彼の作品は、次世代への提案を含みながら新たな展開を見せる。透明な建築は20世紀文化の視覚の優位性を超えられるか。環境と建築との新たな関係とは？鍵は「デジタル・ガーデニング」が握る。本特集は、今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した隈研吾の近年の主要作品を紹介する。

作品

慰霊公園、北上運河資料館、ストーンプラザ、森舞台、水／ガラス、川／フィルター、エコ・パーティクル、ガラス／ネット：ミラノ・トリエンナーレ1996出展作品、シンブルガーデン、国立国会図書館関西館建築設計競技案、中原中也記念館設計競技案、ベニス・ビエンナーレ日本館、オートマチック・ガーデン、転送の湿度：「トボスの復権展」作品、他

論文＝飯島洋一、グレッグ・リン、隈研吾

対談＝横文彦×隈研吾

短期隔月連載：ポーランドのドイツ・アヴァンギャルド4／長谷川章

連載：世界の現代美術館探訪5／渡辺真理

連載：海外建築情報リミックス：12 Architects #11「グレン・マーカー」

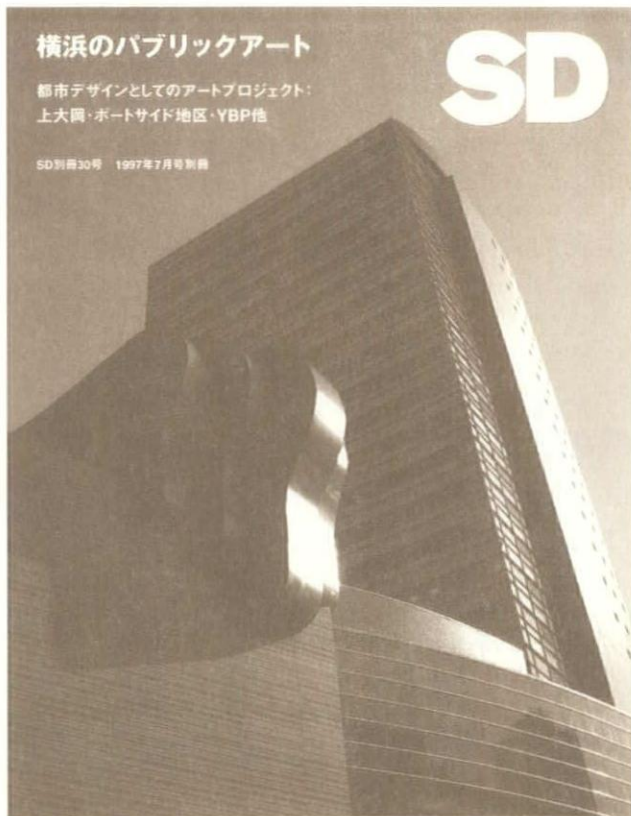
特別定価＝2,800円／本体2,667円

横浜のパブリックアート

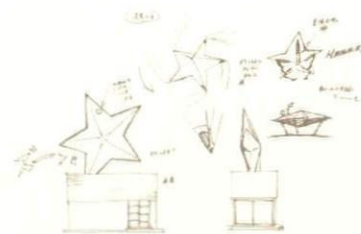
都市デザインとしてのアートプロジェクト：
上大岡・ポートサイド地区・YBP他

SD別冊30号 1997年7月号別冊

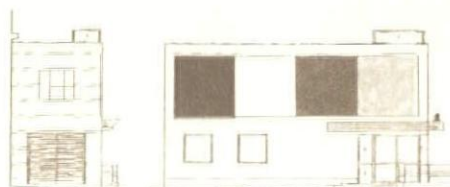
SD



奈良美智の初期スケッチ



文番のプロポーザル



倉重光則の文番のプロポーザル

SD別冊30

横浜のパブリックアート

ー都市デザインとしてのアートプロジェクト：
上大岡・ポートサイド地区・YBP他

判型・体裁：A4 判変形・並製

総頁：132頁

定価：3000円（本体＝2857円）

発売中！！

都市デザインのパイオニアとして、またリーダーとして大きな役割を果たし、常にその動向が注目され続けてきた横浜市。

その活動の歩みは、すでにSD別冊11号「横浜＝都市計画の実践的手法－その都市づくりのあゆみ」と、SD別冊22号「都市デザイン横浜－その発想と展開」にまとめられてきた。

SD別冊30号は、それらに続くものとして、主としてパブリックアートに関わる取り組みを中心に、これまで行われてきた主なプロジェクトを詳細に紹介するものである。

アート、都市計画、都市デザインに関心を持つすべての人を対象に、デザインの意図、事業の内容を詳述し、評価を加え、都市デザインとパブリックアートの向かうべき道を示す。

第1部：ゆめおおおかアートプロジェクト（上大岡駅周辺再開発計画）

座談会／北川フラム、緒川たまき、南條史生

作品／18人の作家による19の作品

奈良美智、平川典俊、村上隆、倉重光則、方振寧、木津文哉、須田悦弘、吉水浩、福田美蘭、長澤伸穂、小沢剛、平林薫、岡崎乾二郎、高柳恵理、PHスタジオ、チェ・ジョンファ、ナウイン・ラワンチャイクン、シムリン・ギル

第2部：横浜市のパブリックアートの展開

座談会：松葉一清、南條史生、木下眞男、国吉直行

ヨコハマ・ビジネスパーク

ポートサイド地区

横浜彫刻展

金沢地区研究所群

麒麟横浜ビアビレッジ

都心部での活動

論文：松葉一清、松井みどり、山東めぐみ、彦坂裕、谷新、他

SD別冊

鹿島出版会 建築図書案内



※表示価格には消費税は含まれておりません。

手法が—カウンター・アーキテクチャ

磯崎 新著 A5・¥3,800

建築の解体—一九六八年の建築情況

磯崎 新著 A5・¥4,200

空間へ—根源へと遡行する思考

磯崎 新著 A5・¥4,600

造物主義論—デミウルゴモルフィスム

磯崎 新著 A5・¥3,800

始源のもどき—ジャパネスキゼーション

磯崎 新著 A5・¥3,800

見立ての手法—日本的空間の読解

磯崎 新著 A5・¥3,400

イメージゲーム—異文化との遭遇

磯崎 新著 A5・¥3,400

建築の世界—意味と場所

C.ノルベルグ=シュルツ著 前川道郎, 前田忠直共訳 B4変・¥8,700

建築の形態言語—デザイン・計算・認知について

W.ミッチェル著 長倉威彦訳 B5・¥6,200

建築理論の創造—環境デザインにおける行動科学の役割

J.ラング著 高橋鷹志監訳, 今井ゆかり訳 A5・¥6,300

建築美論の歩み

井上充夫著 A5・¥4,400

アメリカの機械時代—1918~1941年

R.G.ウィルソン他著 永田 喬訳 A4・¥13,000

世界の高齢者住宅—プライバシーと自立の実現

J.D.ホグランド著 湯川利和, 延藤安弘共訳 A5・¥3,400

記憶に残る場所

D.リンデン他著 有岡 孝訳 A5・¥4,400

アースワークの地平—環境芸術から都市空間まで

J.パーズレイ著 三谷 徹訳 B5・¥7,600

移ろいの風景論—五感・ことば・天気

小林 亨著 A5・¥3,800

劇場—舞台芸術のための建築計画と設計

R.ハム著 劇場技術研究会訳 B5・¥6,200

スウェーデンの住環境計画

S.ティーベイ編著 外山 義訳 A5・¥4,500

仕組まれた意匠—京都空間の研究

川崎 清, 小林正美, 大森正夫共著 A5・¥4,200

ハウジング・デザイン—理論と実践

I.コフーン他共著 湯川利和監訳 B5・¥11,700

驚異の工匠たち—知られざる建築の博物誌

B.ルドフスキー著 渡辺武信訳 A5・¥3,800

人工楽園—19世紀の温室とウインターガーデン

S.コッペルカム著 堀内正昭訳 A4変・¥17,800

アトリウム建築—発展とデザイン

R.サクソン著 古瀬 敏, 荒川豊彦共著 A4・¥5,400

商業空間とアトリウム—室内歩行者空間のデザイン

M.J.ペドナー著 古瀬 敏訳 A4変・¥9,400

新しいガラスアーケード

H&H.K.ニーダーヴェールマイアー共著 青木英明訳 A4変・¥9,515

インテリジェントビルの計画—O.Aオフィスづくりのノウハウ

鹿島出版会編 A5・¥2,700

建築のファシリティ・マネジメント

建築FM研究会編著 A5・¥3,000

音楽のための建築—17世紀から現代にいたる建築家と音楽家と聴衆

M.フォーサイス著 長友宗重, 別宮貞徳共訳 B5・¥12,000

空間音響

J.ブラウエルト, 森本政之, 後藤敏幸編著 A5・¥4,700

室内環境デザインの新しい視点

鹿島昭一著 A5・¥2,800

建物のライフサイクルコスト分析

A.J.デリソツラ, S.J.キルク共著 千住鎮雄訳 B5・¥4,900

都市と建築のパブリックスペース—ヘルツベルハーの建築講義録

H.ヘルツベルハー著 森島清太訳 B5・¥6,700

都市と建築の解剖学—形態分析によって[設計戦略]を読む

J.ベイカー著 富岡義人訳 B5・¥5,800

ビルディング・エンベロブ^[ハイテック・コンストラクション1]

A.ブルックス, C.グレック共著 難波和彦, 佐々木睦朗監訳 B5・¥4,500

コネクションズ^[ハイテック・コンストラクション2]

A.ブルックス, C.グレック共著 難波和彦, 佐々木睦朗監訳 B5・¥4,500

スーパーシェツズ^[ハイテック・コンストラクション3]

C.ウィルキンソン著 難波和彦, 佐々木睦朗監訳 B5・¥4,500

鹿島出版会 インテリア・デザイン書



※表示価格には消費税は含まれておりません。

インテリア関連法規の知識〈インテリアデザイナーのための〉

芝木 達著 四六・¥2,600

内装仕上げのデザインと材料〈インテリアデザイナーのための〉

内堀繁生著 四六・¥2,200

品質管理とコストコントロール〈インテリアデザイナーのための〉

坂本信義著 四六・¥2,300

住空間の収納の基礎〈インテリアデザイナーのための〉

橋本周明著 四六・¥1,800

住宅設備設計の知識〈インテリアデザイナーのための〉

石崎清士著 四六・¥2,200

ファニシングデザイン資料集

内堀繁生著 B5・¥6,500

インテリアと家具の基礎知識

内堀繁生著 A5・¥2,600

建築・室内・人間工学

小原二郎, 内田祥哉, 宇野英隆共編 B5・¥3,600

インテリア・ウォッチング

押野見邦英著 四六・¥2,500

現代の家具と照明—デザイナーズブランドコレクションズ

大廣保行著 A5・¥2,900

続・現代の家具と照明—ニュー・ラテンヨーロッパ・トレンディ

大廣保行著 A5・¥2,500

デザイナーのためのインテリア家具のエッセンス

内堀繁生著 A5・¥1,800

ホームオフィス〔モダンデザイン・カタログ〕

J. マイヤソン, S. カッツ共著 太田佳代子訳 A5・¥2,600

テーブルウェア〔モダンデザイン・カタログ〕

J. マイヤソン, S. カッツ共著 太田佳代子訳 A5・¥2,600

キッチンウェア〔モダンデザイン・カタログ〕

J. マイヤソン, S. カッツ共著 太田佳代子訳 A5・¥2,600

光と照明器具〔モダンデザイン・カタログ〕

J. マイヤソン, S. カッツ共著 太田佳代子訳 A5・¥2,600

インテリア・デザインの美学

S. アパークロンビー著 芦田 智・紀子共訳 A5・¥2,700

インダストリアルデザイン事典

(社)日本インダストリアルデザイナー協会編 A5・¥5,900

機械化の文化史—もののいわぬものの歴史

S. ギーディオン著 GK研究所, 榮久庵祥二共訳 A5・¥9,800

アメリカの機械時代—1918-1941年

R.G. ウィルソン, D.H. ピルグリム他共著 永田 喬訳 A4・¥13,000

高齢化と製品環境

J.A. コンセリック著 清水忠雄・清水純子共訳 A4変・¥6,800

パッケージ・デザイン—夜も地球もパッケージ

金子修也著 A5・¥4,300

立ちどまってデザイン

竹原あき子著 四六・¥2,200

ハイテク時代のデザイン

竹原あき子著 四六・¥1,903

モダニズム以降のデザイン—ものの実体を超えて

J. サッカラ編 奥出直人他訳 四六・¥2,900

欲望のオブジェ—デザインと社会1750-1980

A. フォーティ著 高島平吾訳 A5・¥4,900

絵で見る近代建築とデザインの歩み

B. ライズベロ著 越智卓英, 内田 茂共訳 A5・¥2,600

第一機械時代の理論とデザイン

R. バンナム著 原広司校閲/石原達二, 増成隆士共訳 A5・¥4,800

デザイナーのためのパースの技法

岡村行生著 B5・¥2,900

ブーム—イタリアの企業・デザイン・社会

F. モラーチェ著 鶴沢 隆訳 四六・¥3,200

デザインのモダニズム

P. グリーンハルジュ編 中山修一, 吉村健一他訳 A5・¥4,200

バックミンスター・フラー〔デザイン・ヒーローズ〕

M. ポーリー著 渡辺武信, 相田武文共訳 四六・¥3,200

レイモンド・ローウィ〔デザイン・ヒーローズ〕

P. ジョダード著 高島平吾訳 四六・¥3,200

エットーレ・ソットサス〔デザイン・ヒーローズ〕

J. パーニー著 高島平吾訳 四六・¥3,200

商品とデザイン〔広がるデザイン②〕

榮久庵憲司監修 伊坂正人+榎GK著 四六・¥2,600

デザインの産業パフォーマンス〔広がるデザイン③〕

榮久庵憲司監修 黒田宏治+榎GK著 四六・¥2,600

建築とデザインのフラクタル幾何学

C.ボーヴィル 著

三井直樹 共訳
三井秀樹

A5判 208頁

定価(本体2,900円+税)

本書は、建築とデザインにおける人工的な造形という切口からフラクタルを扱っている貴重な一冊で、一般にはまだなじみの薄いフラクタル幾何学を平易に解説した入門書である。加えてフラクタルと建築・絵画・デザインなどの造形表現との関係を明らかにしようとするもの。建築やデザインを学ぶ学生や若い研究者・設計実務者に格好のテキスト。

【主要内容】

基本的なフラクタル／フラクタル次元／フィードバックと反復法／ランダム・フラクタル、中点変位、凝集／時間、ノイズ、音楽における自然界のゆらぎとフラクタルのゆらぎ／フラクタル概念と建築・デザインの分析・評価／デザインのためのフラクタルの概念

イタリアのヴィラと庭園

P.ファン・デル・レー 他著

野口昌夫 訳

A5判 272頁

定価(本体4,100円+税)

イタリア中・北部の6つの地方にある40余りのヴィラを紹介するガイドブック。昨今の庭園論、コスモロジーの議論につながり、ヴィラを建築物とランドスケープの一体化したコスモスとして、またゲニウス・ロギの表出と捉える視点には、単にイタリアのヴィラを紹介する以上の現代的価値がある。

【主要内容】

序論——ヴィラの分類とタイポロジー／「設計の教科書」としてのヴィラ
理論的再構築——田園生活の文化的理想／ランドスケープの享楽化他

1. トスカーナ——「風景の統合」への導入／ボポリ庭園他／事例9
2. ローマ——都市ランドスケープの統御／事例6
3. ローマ郊外——マニエリスム：移動を引き起こす曖昧性／事例13
4. フラスカーティ——装飾対象としてのヴィラ／事例5
5. ヴェネト：パラディオ——パラディオ：農業のヴィラ／事例7
6. 北イタリア——事例5

建築家の住宅論

富永 譲

富永 譲 著

菊判 128頁

定価(本体2,500円+税)

住宅を中心に設計活動が続けてきた建築家の、その住宅に関する過去から現在までの手法、あるいは構造や材料、または一貫したテーマを、写真と図版で自ら解説する住宅論。本書では、ル・コルビュジエの研究者としても著名な富永譲が、別荘プロジェクトを含む自らの10の作品とル・コルビュジエのエピソードを交えながら住宅について語る。

【主要内容】

住宅論・移住の様相——生活のリズムを生み出す枠組

解題・10の住宅——歩行と経験

小田原の住宅／トボア／武蔵新城の住宅／荏田の住宅／経堂の住宅／大船の住宅／王子の住宅／青山南町の住宅／東大泉の住宅／蕨山の住宅

【以下続刊】 吉田研介：上原邸／チキンハウス／田丸邸／亀井邸／他

鈴木 恂：JOH6504／KAH6606／SAH6801／GAH6812／他

鈴木了二：S邸／H邸／N邸／T邸／U邸計画／杉並の住宅／他



9608 Michael Hopkins and Partners: Introduce the important works by M. Hopkins and Partners. Hopkins House, The Inland Revenue Centre, Bracken House, Schlumberger Cambridge Research Centre, David Mellor Offices and Showroom, New Parliamentary Building, etc. **Visiting Dreams of Light and Space: Donald Judd's and Walter De Maria:** Text: Fumio Nanjo ¥2,447



9609 The Heyday of the Modern House in Denmark: Introduces Danish modern houses of the '50s and '60s: Summer Residence of Niels Bohr, Vilhelm Wohlert; Soholm I, Arne Jacobsen; Kingo Houses, Jorn Utzon; etc. text: L.B.Jorgensen, Riichi Miyake, etc. **Yemen: Mountaintop Villages and Tower Houses:** Photo+Text: Ashikawa Research Institute ¥1,988



9610 Light and Space in the Middle Ages: Romanesque Architecture of Central and Southern France: Introduces Romanesque church and monastery. Abbaye du Thoronet, Abbaye St-Martine de Canigou, etc. Photo: Koji Horiuchi, text: Shuji Hanyu, etc. **Studies of Two Cities:** text: Yoichi Iijima, Minoru Tanokura **Ninety-seven Chairs:** text and photo: The Poor Boys Enterprise ¥1,988



9611 Akira Kuryu: Introduces the works crystalizing the fine collaboration supported by his outstanding direction. Okazaki Art and Historical Museum, Core Yamakuni, Patrie+Kiyosato Museum of Photographic Art, Uemura Naomi Memorial Museum, Carnival Showcase, etc. text: Yoichi Iijima, etc. **Project pour La Chapelle de St. Vigor de Mieux Par Takubo-3** ¥2,548



9612 SD Review 1996: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Justus Pysall and Peter Ruge, Masami Takahashi, Nagisa Kidosaki & Associates. **From the Recent Works of Jun Itami:** Chapel of Stone, Chapel of Wood and Chapel of Earth. ¥1,988



9701 Shoji Yoh: 12 Calisthenics for Architecture: Introduces major works demonstrating the "calisthenics" prescribed for architecture under twelve categories. Uchino Community Center for Seniors and Children, Sundial, Welfare Facility for Seniors, Glass House with Breathing Grating, etc. ¥3,059



9702 Frameworks and Space for Wood: Twenty-five examples of architecture in Japan and Around the world featuring the beauties of wood as architectural material. **The New Generation of Architects Exciting Asia:** Looks at architecture and metropolises in Asia and how they will look in the future. ¥1,988



9703 Minimal Space Architecture: Introduces simple architecture we call 'minimal': John Pawson (John Pawson House, Jigsaw), Shinichi Ogawa (Glass House), Waro Kishi (House in Nipponbashi), Toshiaki Isida (NOS House). Text: Hiroshi Maruyama, Tsuyoshi Matsuhata, etc. **Tokyo International Forum:** Photo: Koji Horiuchi. ¥1,988



9704 Expanding Horizons of Digital Design: introduces projects creating new environment of architecture and city with computer and network technology. Texts: Noriyuki Tajima, Sigeyuki Yamaguchi, Eisi Katsura, Michael Benedikt, Masaki Hujihata, Akihiro Kubota, Ken Sakamura, Naohito Okude, Mitsuo Morozumi, etc. ¥3,059



9705 Afra & Tobia Scarpa and Benetton: They have worked together for about 30 years. Introducing the office building, warehouse, shops etc they designed. Text+Interview: Hiroyuki Toyota. **Pisa and the Works of Massimo Carmassi:** Casa Muti, Restoration of the Teatro G.verdi, etc. ¥2,000



9706 Takahiko Yanagisawa: The Composition of Theatrical Space: Introduces recent works focusing on the elements. New National Theatre, Tokyo Opera City, etc. Text: Muneshige Nagatomo, Yoshiaki Ogura, Shouzo Motosugi, Junichi Kawamura Discussion: Masato Kawamukai and Takahiko Yanagisawa **Swedish Good Design: Undecorated Form Design** ¥2,000



9707 Hong Kong 1997: The Accelerating City Grasping the aspect of Hong Kong through visual works by artists and interview with architects. artists: Alan Chan, Tycoon Graphics, Satoshi Asakawa, Shin Egashira, etc. Supervision: Shin Muramatsu, Kazuhiro Kojima, Hikaru Kinoshita, text: Naonori Matsuda ¥2,000



9708 Venturi, Scott Brown and Associates: 1990's Works: Focuses on the first work in Japan, Mielparque Nikko Kirifuri and introduces 1990's works such as Seattle Art Museum and Additions, Renovations and Restoration, San Diego Museum of Contemporary Art. **Toward a New Living Environments:** Gifu Kitagata Housing Project ¥2,400



9709 A New Phase of Railway Station Space: Introduces Railway Stations having additional value and tie with community such as JR Yabuki and JR Ohmagari. Also Introduces JR Kyoto widely noticed as International Competition. text: Takayuki Miyabayasi etc. Talk: Tadanori Yokoo X Hiroshi Hara ¥2,000



9710 Architecture in Glass: Introducing architectures which adopt the characters of glass in such as optical and structural aspects. Searching for the present situation and possibility in the future: Extension of the Winterthur museum of Art, Hotel P, Konami Nasu Seminar House, etc. text: Kazuhiko Nanba, Masao Ando, etc. ¥3,000



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening. Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Yoichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ¥2,800



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. SD endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of SD is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

断熱サッシ

アルプラ70MW

新日軽株式会社



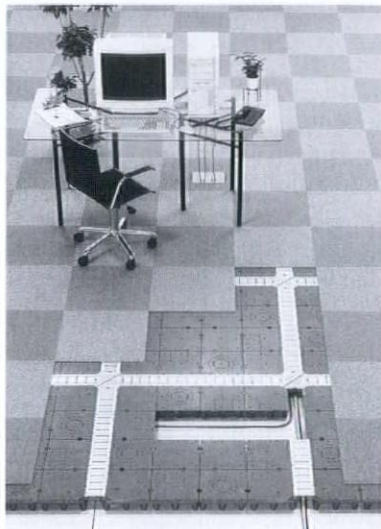
新日軽では、7月より全国発売を開始した、インテリア断熱サッシ、アルプラ70MW（マイルドウッド）が、平成9年度「通商産業省選定グッド・デザイン商品（通称、Gマーク商品）」（工業化住宅・住宅設備部門）として選定され、グッドデザイン賞を受賞した。同製品は、次世代省エネ住宅・性能（良質）住宅にふさわしい性能資材として、性能値を青森県以南の全地域を対象に開発した。また、従来にはない、新しい発想「インテリアまで考えた」断熱サッシである。木粉入り樹脂MW（マイルドウッド）がぬくもりのある木目模様を形成し、室内側・サッシ枠の色・模様がインテリアコーディネート要素の一つとして加えられる。洋室用「MWミディアムオーク」と和室用「MW月ヶ瀬松」の2色がある。構造は、室外側に耐久性に優れたアルミ材を、室内から見える部分を全て木粉入り樹脂の押出材MW（マイルドウッド）を、さらに複層ガラスを採用することにより、断熱性能を一般アルミサッシの約2倍に高め、結露の発生を極力抑えた。（結露の発生は窓辺を不快にし、カビ・ダニの発生源ともなる。）

新日軽株式会社 住宅建材事業本部
東京都江東区木場2丁目7番23号
〒135 Tel 03-3820-2159

置き敷き低床二重床

フロアベース-U

株式会社タジマ



株式会社タジマでは、オフィス環境を素早く、よりスムーズに施工することができる、置き敷き低床二重床、フロアベース-Uを新発売した。

特長

- ①仕上がり高さが、35mm・50mm・70mm・100mmと4タイプ選べる。
- ②トレンチ付とトレンチなしの2タイプで、仕様に合わせて選べる。
- ③16連結一体なので施工が早い。

仕様

基本構成：プラスチックベースを連結し二重床を形成
材 質：特殊樹脂（難燃性、難燃処理の2タイプ）

価格

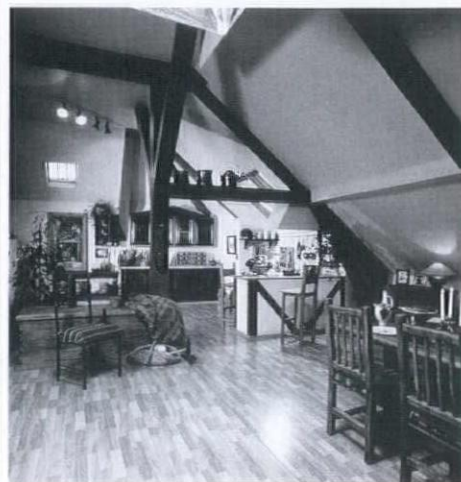
12,000～21,000円/㎡

株式会社タジマ
東京都千代田区岩本町3丁目11番13号
〒101 Tel 03-5821-7731

床材

メラミンウッド

株式会社サンゲツ



株式会社サンゲツでは、塩ビタイル床材（サンゲツフロア）の新商品を収録した見本帳「97-99フロアタイル」を発表した。新見本帳では、従来の商品に加えて、国内で初めてメラミン樹脂系の本質床材、メラミンウッドを新発売した。

特長

- ①タバコのもみ消しや放置に強く、ヒールマークが付きにくい、0.6mmのメラミン樹脂である。また、汚れが簡単に拭き取れる。
- ②耐摩耗性に優れ、歩行量の多い場所に最適である。
- ③長時間の荷重負荷に対して凹みがほとんど残らない。
- ④耐薬品性、防汚性に優れている。
- ⑤メラミン樹脂に抗菌性があり、長期にわたり抗菌効果が保てる。
- ⑥木床よりも施工が容易（全面接着不要）置き敷き感覚に近い簡単施工である。
- ⑦環境にやさしい、リサイクル材料を使用したフェルト製品である。
- ⑧厚さ4mmのアンダーレイが振動を吸収し、衝撃音を緩和する。

価格

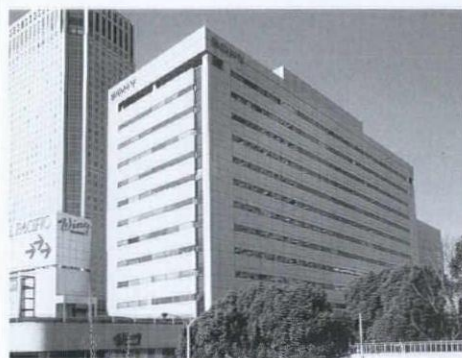
11,250円/㎡

株式会社サンゲツ 業務課
名古屋市中区橋下町1丁目4番1号
〒451 Tel 052-564-3111

● 塗料

Vフロン#200クリーン Vフロン#2000クリーン

● 大日本塗料株式会社



大日本塗料株式会社では、耐候性に優れるふっ素樹脂塗料に塗膜の汚れ防止機能を付与することに成功し、この度、建築外装用として、Vフロン#200クリーン（常温乾燥形）およびVフロン#2000クリーン（中温焼付形）の2種を新発売した。同製品は、いずれも塗膜表面が温度変化の影響を受けにくく、しかも緻密な構造を形成しているため、汚れが浸み込みにくく取れやすい特性を有している。加えて、Vフロン#200クリーンには、特殊な親水性成分を配合して、塗膜表面の帯電性を低下させることで汚れを付きにくくするとともに、塗膜と汚染物質との間に水が入り込みやすくさせて汚れを雨水で流れやすくする特性を持たせている。用途は、外壁コンクリート、モルタル面の新設および塗替え、アルミニウム、亜鉛めっき鋼板などのカーテンウォールの新設および塗替え。なお、同社では、Vフロン#200クリーンを高層ビルの改装向けにも積極展開することで、既に上市済みの集合住宅向けおよび戸建住宅向けと合わせて、幅広い機能とグレードをラインアップした、「DNT外装リフレッシュシステム」が整った。

大日本塗料株式会社
大阪市此花区西九条6丁目1番124号
〒554 Tel 06-466-6661

● 引戸

TSスライド

● 東洋シャッター株式会社



東洋シャッター株式会社では、自動閉鎖機能を備えた軽量引戸、TSスライドを新発売した。高齢化社会が進む昨今、人にやさしい住環境・生活環境づくりは様々な分野で重要なテーマとなっている。同製品は、床にレールや溝を必要としないハンガータイプで、また軽く静かな開閉作りに自動閉鎖機能も備え、主に病院・老人ホーム・身体障害者用トイレでの使用に適している。

- 特長**
- ①高精度ベアリング付きの滑車とガイドローラによる3点支持機構により、ガタツキがなく静かに開閉する。
 - ②内蔵の定荷重バネにより通過後は自動的にゆっくり静かに閉まる。
 - ③ドアが閉まる手前でエアブレーキが作動するので、指をはさむ事故を防げる。
 - ④床にはレールや溝がなく、台車や車椅子、ベッドなどの通行がスムーズにでき、また衛生的である。
 - ⑤開き戸のように開閉スペースを必要とせず、空間を有効利用できる。

価格
有効開口寸法：幅1,200mm×高さ2,000mm、外付けタイプ、片引き、カラー鋼板の時
235,000円（本体価格）

東洋シャッター株式会社 企画室
大阪市中央区南新町1丁目2番10号
〒540 Tel 06-943-6491

● 真空ガラス

スペーシア

● 日本板硝子株式会社

真空ガラス スペーシア



日本板硝子株式会社では、世界で初めて開発に成功した超薄型の高性能断熱・防音ガラス、「真空ガラス スペーシア」を新発売した。同製品は、魔法瓶の原理を応用したもので、厚さ約6mmのガラス内部に0.2mmの真空層を形成した新しい構造のガラスである。真空層の効果により、複層ガラスの倍以上の断熱性能と、防音用合わせガラス並の防音性能を発揮する。さらに総厚味が6mmのため、複層ガラスのような専用サッシを必要とせず従来の単板用サッシにそのまま装着できる。

- 特長**
- ①窓際のひんやり感がなくなり、結露発生が大幅に軽減し、冷暖房効果がよくなる。
 - ②既存住宅では、サッシを取り替えずガラスの交換だけで経済的かつ簡単に窓の断熱・防音ができる。
 - ③新築のマンションでは、薄いガラス厚で窓の断熱・防音が図れ、サッシを含めた窓全体の薄型・軽量化が可能でサッシ込みのトータルコストも削減できる。
 - ④断熱と防音の両方の機能を備えていることから、ホテルの客室や病院の病室、介護施設の居室、学校の教室など住宅以外の分野での使用も期待できる。
 - ⑤スーパーマーケットやコンビニなどで使われている冷凍・冷蔵ショーケースなどへの展開も可能である。

日本板硝子株式会社 硝子建材営業部
東京都港区海岸2丁目1番7号
〒105 Tel 03-5443-9541

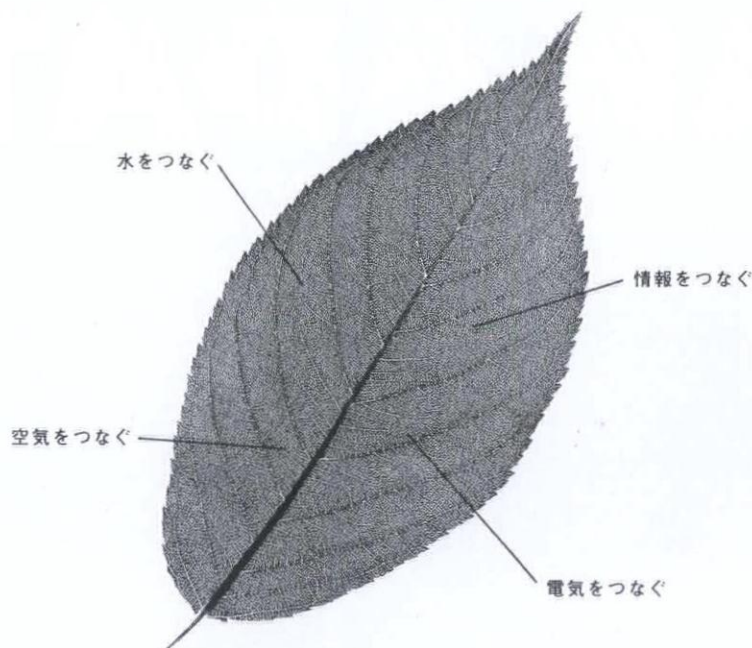
ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06 (537) 3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03 (3454) 7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

あなたのそばに、
私はいます。

HUMAN ELECTRIC ENGINEERING NAKADATE

Type of Operations

● General Electrical Work ● Internal / External Wiring for Lighting & Power ● Electrical Work for Power Stations & Substations ● Design, Execution & Management of Telecommunication Work



テクノロジー&システム

中立電気株式会社

〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号 中立ビル 3F (03)3356-2511 (F)

アクセスドア・VAV・CAV・フローメータ・特殊ダンパ

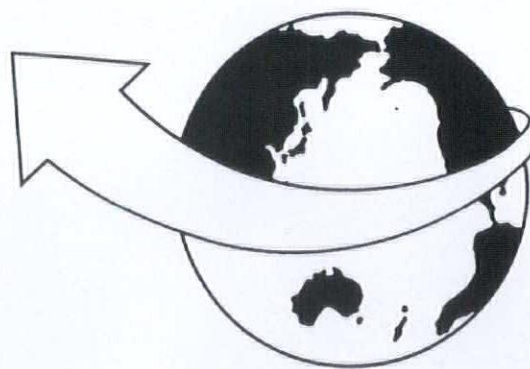
KLIF®

クリフ株式会社

- ☐ 本社 〒188 東京都田無市南町6-7-17
東京工場 TEL 0424-61-2777 FAX 0424-61-4876
- ☐ 営業部 〒160 東京都新宿区大京町23-3 四谷オーキッドビル7階
TEL 03-3225-0911 FAX 03-3225-0912
- ☐ 大阪営業所 〒532 大阪市淀川区西中島5-6-13 新大阪御幸ビル
TEL 06-303-0764 FAX 06-305-1985
- ☐ 山梨工場 〒406 山梨県東八代郡境川村三柵909
TEL 0552-66-4999 FAX 0552-66-4990

未来に向って...

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5 7 1 1
大阪支社 〒532 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2 2 7 3
支店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

日本アス仕様

それぞれの味を生かし

防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ベストロン

NS防水

カナート



総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 ■103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京	☎03(5644)7221 (代表)	福岡	☎092(451)1095 (代表)
千葉	☎043(227)9971 (代表)	札幌	☎011(281)6328 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	仙台	☎022(263)0315 (代表)
大阪	☎048(642)5811 (代表)	広島	☎082(294)6006 (代表)
名古屋	☎06 (533)3191 (代表)	高松	☎0878(34)0336 (代表)
	☎052(933)4761 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)



SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX03(3818)1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

ア	(株)朝日工業社	A21
イ	(株)INAX	91
カ	(株)関電工	A3
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
	川崎電気(株)	A15
ク	栗原工業(株)	A15
	クリフ(株)	A21
コ	(株)弘電社	A12
サ	(株)サンゲツ	82
	三機工業(株)	103
ス	住友電設(株)	A19
タ	高砂熱学工業(株)	表3
	大興物産(株)	A8
	タカムラ建設(株)	108
ト	東陶機器(株)	A1
	(株)トーエネック	A14
	東光電気工事(株)	A10
	(株)東芝	A24
	東洋熱工業(株)	104
ナ	中立電気(株)	A20
ニ	日本電気(株)	A9
	(株)西原衛生工業所	A13
	日新工業(株)	A22
ヒ	(株)日立製作所	81
フ	(株)ブリヂストン	A16
ホ	ホテルイースト21東京	A7
マ	松下電器産業(株)	A2
	松下電工(株)	A14
ミ	三菱電機(株)	表4
ヤ	矢崎総業(株)	表2
	(株)ヤナセ設備工業	92
	山田照明(株)	115
	ヤマハ発動機(株)	116
ロ	ロンシール工業(株)	A11

TOSHIBA



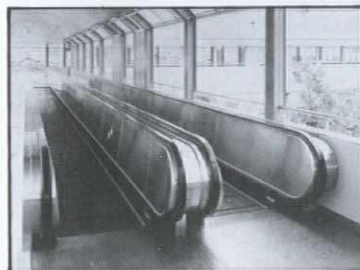
乗る人の気持ちを考える。 そこから始まる技術、 すすめています。

21世紀を生きる、私たちの子供たち、その
また子供たちが安心して利用できるエレベ
ーター・エスカレーターづくりを。

そのために東芝が理想としている技術をひ
と言でいえば、それは、技術を感じさせない
技術こそ、私たちの理想です。

人やモノを運ぶタテの輸送機関から、人の
気持ちを考えたアメニティ空間へ。

私たち東芝は、21世紀を見すえた都市環境
づくりに取り組んでいます。



東芝エレベーター・エスカレーター

株式会社 **東芝** 昇降機事業部

本社 〒105-01 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) TEL(03)3457-4613

暑さも、寒さも、二オイも感じない。
それは、快適を感じているのだ。



(熱学をつきつめると、環境の未来が見えてくる。) 快適とは、人に不快な要素を与えないこと。この実に当たり前のことのために、私たちはさまざまな工夫をしています。たとえば、ドーム球場。大規模空間の温湿度、気流を制御し、快適なコンディションでプレーを演出。その他にも、工場、空港、テーマパークやコンサートホールなど…。オーダーメイドのシステムで、みなさまのニーズにお応えします。

人・空気・未来
高砂熱学工業
本社 〒101 東京都千代田区駿河台4-2-8

MITSUBISHI

SOCIO-TECHの三菱電機

新しい「グランディ」のキーワード集。

三菱乗用エレベーター

「バリアフリー」 普通の人と、子供やお年寄り、障害者との間にある、ふだんの生活で

の不便さなどの壁をバリアをなくそうとする考え方。今回の「グランディ」一新の基本思想です。

「光の質」 無機質で変化のない蛍光灯だけでなく、印象の違うライティングを。かこ内照明に、間接光やダウンライトをはじめ、天井のデザインまで含めた多彩な表情のバリエーションが揃いました。

「ユニバーサルデザイン」 「ユニバーサル」とは、すべてに共通する、一般的な、の意味。バリアフリーの考え方を実際の設計に当てはめ、すべての人が不便なく利用できるようデザインしました。

「クリック」 パソコンのマウスのボタンを押す動作として知られますが、本来はカチツと音をさせること。「グランディ」では操作ボタンを、押した際カチツという感触が伝わるクリックボタンを採用しました。

「抗菌」 今ではあたり前のように使われる言葉ですが、辞書に載るようになったのは最近のこと。「グランディ」

のボタンも、最近の清潔指向に合わせ抗菌仕様もご用意しています。「発音式」 かご内の行先ボタンを押

すと、電子音が鳴ります。操作が耳でも確認できる、ユニバーサルデザインの一例です。「点字名板」 点字

には、左から読むというルールがあります。「グランディ」では点字表示位置をボタンの左側(横配列のボタン

では上側)に統一し、読み取りやすくしました。「横形副操作盤」 かご内の副操作盤には、ボタン

を横配列したタイプもラインナップ。通常の操作盤と合わせて設置すれば、操作がより便利になります。

「ステンレス袖壁」 戸と横の壁にはさまれた、操作盤の取付位置の部分を袖壁と呼びます。「グ

ランディ」ではこの袖壁を、天井から床まで一体となったステンレス仕上にし、グレード感をさらに向上

させました。「化粧鋼板」 金属の板に塗装や装飾を施したもの。かこ室内装用に、新しい柄

の化粧鋼板をラインナップしました。ビルの雰囲気に合わせて、快適な移動空間を演出できます。



カタログ差し上げます。
下記の宛先まで、ハガキか電話で、
お気軽にご請求ください。

NEW

GRANDEE

三菱乗用エレベーター グランディ

もっと、やさしく。もっと、美しく。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料請求は……三菱電機株式会社 〒107東京都港区赤坂5-2-20(赤坂パークビル) ●本社ビル事業部 (03)5573-3747

定価=2000円 本体1905円

雑誌コード 05451-12

T1105451122000

